女子文壇

第三巻第九號

明治四十年七月一日發行（毎月一回一日）
明治卅七年十二月十九日第三種郵便物認可



しんぎく



重松せい子筆



郵便はかき

CARTE POSTALE

宛名差出人住所氏名記載欄

通信文記載欄

毎號 皇太子妃殿下賜上覽

女子文壇

第三巻第九號目次

○乙種一等賞絹張洋傘當選者 敦賀の濱(短文)……宮田はる子

▲水彩畫
○初夏……三宅克己筆
▲繪手本
○しん菊……重松せい子筆
▲繪はがき
○せきちく……長原止水筆
▲寫眞版
○遐羅の音樂
○立教女學校創立紀念會
○越中伏木女子高等補習科生
○跡見女學校の運動會(其一—其三)
◎結髪の實習◎裁縫の實習
○誌友おもかげ(其十三)
◎本西咲子◎中山道江子◎福本保子◎水野筆子◎宮本きみい子◎重山つろ子◎村木富子◎境野茂登子◎佐藤繁子

【女子文壇】 一—一七
◎函入娘とは何ぞや……記者
●女子と修養……島崎藤村
◉作文そのをり〳〵……高須梅溪
◉夢……西村醉夢
◉五首……大塚楠緒子
◉不老の水……池田朝村

【圖畫】 一八
○旅路(二等)伊藤美代子 ○姉と弟(三等)伊藤とし子 ○ふな遊び(四等)加藤よし子 ○社頭(五等)白井津奈子○待つ間(五等)佐野貞子

【叙事文】 一九—三一
○呼び得ぬ母(三等)藤枝子 ○雨あがり(四等)あかつき ○四季をり〳〵(五等)後藤よし子

【新體詩】 三二—四二
○白燈灯をさゝぐとて(二等)山田くに子○土の香(三等)大和田靜子 ○壽美禮(四等)辰井はな子

【短篇小説】 四三—五四
○葉書の繪姿(三等)高屋ちよき ○光子(四等)山下里子 ○磯邊(五等)滿壽美

【和歌】 五五—六八
○(三等)志波梅子 ○(四等)豐間秀影○(五等)失名

【文藝遊戯】 六九—七三
▲百人女▼ ○女學生(一等)服部紫蘭○農女(二等)德久よれ子 ○女俳人(三等)高柴小靜○裁縫師(四等)君子 ○田舍女(五等)南田千代

【抒情文】 七四—八四
○異境の花(二等)有賀まさ子 ○峠茶屋(四等)江副ちかつる ○若僧(五等)華子

【俳句】 八五—八六
○(二等)霞女史 ○(三等)水鳥子○(四等)河井さく子○(五等)高橋?

【書簡文】 八七—九三
○帝都なる父に(三等)梅花女史 ○郡の友に(四等)高橋白ばら ○奉職後友の許に(五等)軒の玉水

【新歌論】 九四—九五
○(二等)巾高よしみ ○(三等)大谷百枝○(四等)美代子 ○(五等)倉橋よしえ

【評論文】 九六—一〇〇
○奮闘(三等)下里翠波女 ○賞罰論(四等)七三子○快樂(五等)道水子

【短文】 一〇一—一一二
○敦賀の濱(一等)宮田はる子 ○養蠶(二等)さき子 ○五つの辨當(三等)濱砂まさよ ○鳥の巣(四等)大沼微音子○花集め(五等)堤登久子

【新笑話】 一一三
○新調の衣服(二等)大谷百枝子 ○老人(三等)ふみ子 ○うんこ(五等)鹽見千代子

【誌友倶樂部】 一一三—一二三
○投書のこゝろえ○文學顧問○詰懷と記者○圖書換讀○寫眞編物交換○繪葉書交換○諸嬢の交際 ○懸賞品發送報告○剽竊詩文の注意

【雜報】 一二四
○涼み會(新課題)○新出版○雜報

【漢文】 一二四
津田梅子閲 河井道子述
○柳○學校の讀書室○講習會

第二十三回年度報告

●貸借對照表

借方

負債ニ屬スル分

一株金	二、〇〇〇、〇〇〇・〇〇〇
一諸積立金	二四三、一九二・二〇〇
一預り金及保信金	三二、〇六三・九三六
一支拂手形及未拂金	七三一、六〇九・三二〇
一非常特別税金	一〇六、〇七三・一五〇
一前季繰越金	二五、五一七・七八二
一當半季利益金	二〇三、四四一・一二四
合計	三、三四一、八九七・五一二

貸方

資産ニ屬スル分

一新株未拂込金	七五〇、〇〇〇・〇〇〇
一不動産機械及什器	一、一三三、三七八・一五三
一需用品及備品在高	四四、四〇四・九二四
一原料仕掛物及屑物在高	五六三、五七五・四四四
一製品及製品送荷在高	二六、八三一・七五〇
一約定濟製品在高	一一一、三八六・一八〇
一得意先未收入金及假拂金	一三三、四七五・四〇五
一職工貸金	二三、五六五・〇三〇
一增設工場假拂金	八五、二二一・六九〇
一銀行當座預ヶ金現金	四七一、〇五八・九三六
合計	三、三四一、八九七・五一二

●利益金處分

一金二十萬三千四百四十一圓十二錢四厘　當半季利益金

一金二萬五千五百十七圓七十八錢二厘　前季繰越利益金

計金二十二萬八千九百五十八圓九十錢六厘

金五萬圓　建物及器械代償却金

金一萬二千圓　法定準備金

金一萬二千圓　役員賞與金

金六萬圓　株主配當金
（舊株一株ニ付金三圓即年一割二分）

金二千五百圓　同上
（新株一株ニ付金十二錢五厘即年一割二分）

金六萬圓　株主特別配當金
（舊株一株ニ付金三圓即年一割二分）

金二千五百圓　同上
（新株一株ニ付金十二錢五厘即年一割二分）

金二萬九千九百五十八圓九十錢六厘　次季へ繰越金

右之通リ候也

明治四十年六月

東京モスリン紡織株式會社

取締役會長　杉村甚兵衛
專務取締役　端　善次郎
取締役　山崎作次郎

右檢査候處相違無之候也

監査役　坂本金之助
監査役　人見新助
監査役　金子良吉

空前の廉賣好機逸す可らず

●博覽會紀念特賣廣告

沼波文學士。佐々木信綱
巖谷小波。河井醉茗　先生序文

（製本既成）

第二 懸賞文集

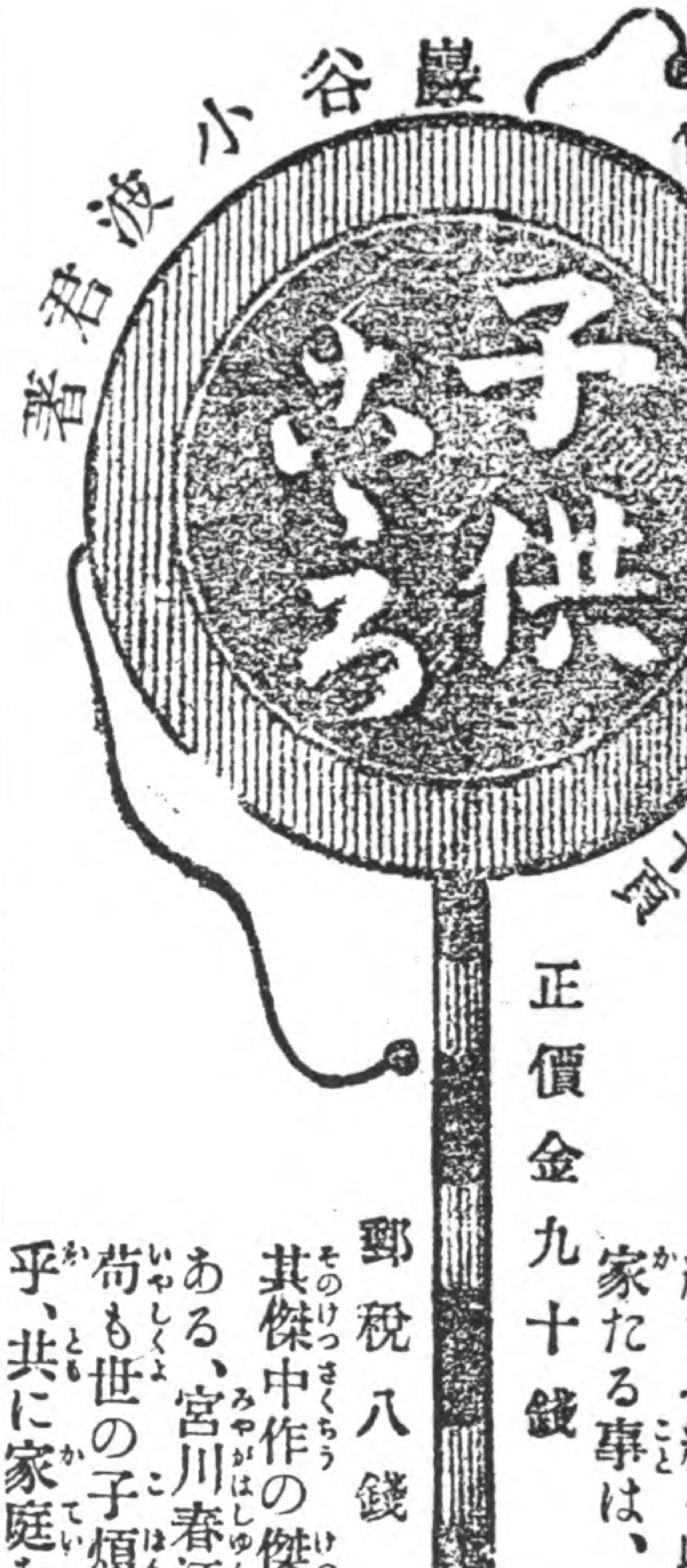
好評再版

▲全一冊 讀切洋裝 五百頁　正價金三拾五錢　特賣價金廿六錢　郵稅六錢

本書第一輯は曩に大好評忽ち數萬部發賣の盛況を呈せしが、今又第二輯成る、滿卷實に奬學五百金餘の重賞を懸けて募れる天下女秀才の金篇玉什明治文壇の珍品なり

出版元　東京京橋區大鋸町　電話本局六〇七番　（郵便振替貯金口座第一七二九番）　女子文壇社

特約元賣捌　○東京堂○東海堂○北隆館○至誠堂○前川文榮閣○上田屋○良明堂



正價金九十錢

郵税八錢

題して『小供心』と云ふ。内容は大方判じ得べし。蓋し子供を主人公としたる、清新高雅なる家庭小説總て七編を收めたるもの是也。著者が當代のお伽作家たる事は、世已に定評あり。而もそれと同時に、巧みに少年少女を寫して、紙上に躍如たらしむる技量も亦文壇の珍とする所とす。本書の如きは、即ち其傑中作の傑作を集め、更に子供畫を以て獨特に妙ある、宮川春汀氏の極彩色挿畫七葉を添えたるもの、苟も世の子煩惱者にして、此書を座右に置かざらん乎、共に家庭を語る可らず、共に兒愛を語る可らず。

木村小舟君著

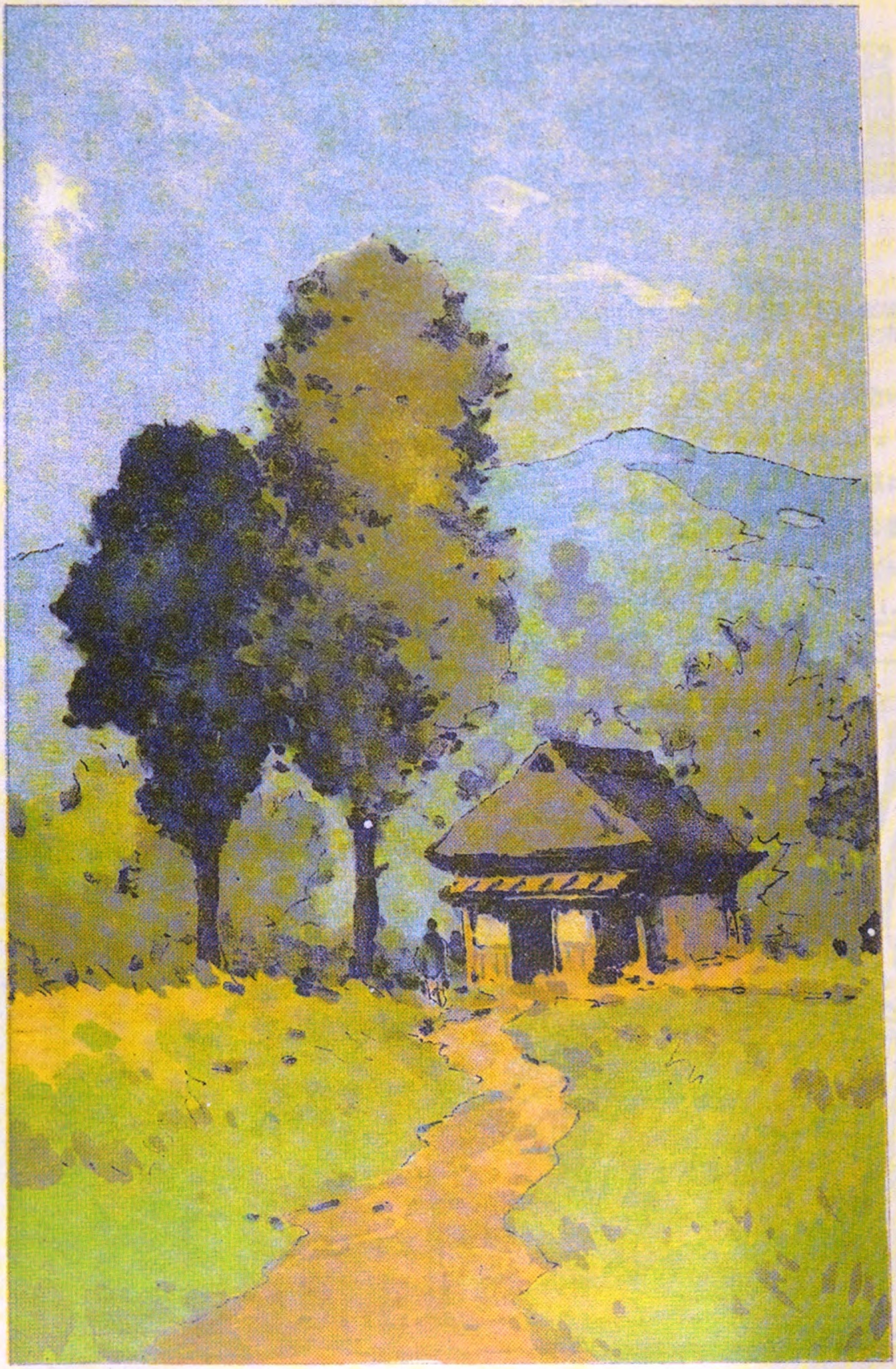
少年訓

全一冊袖珍美本
紙數二百五十頁
寫眞版四葉挿入
正價金貳拾五錢
郵税金四錢
（既刊發行）

講堂に於ける修身教授以外、家庭に於ける趣味豐富なる教材として茲に本書出づ、著者は多年少年教育に經驗ある人、巧みに現代少年社會の風潮を列記したれば、父兄教師は之に由つて、よく修身倫理の大綱を授くるを得べく、少年諸氏は之に由つて、よく品性美心の養成に資するを得ん、加ふるに著者一流の典雅流麗の筆致は、少年文を學ぶ士も、日夕座右の友となさば、得る所決して尠少ならざるべし、戰捷國の少年は須く之を讀め、二十世紀の少年は必ず之を繙け、而して後將來發展の基礎を定めんか、成効の花は正に其頭上に滿開せん。

東京 博文館 本町

初夏



三宅克己先生筆

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

東京高等師範學校教諭光藤泰次郎先生
長野高等女學校教諭手賀貫勝美先生 共編

新刊

中學作文鑑

記事文の部
敘事論說の部

全一冊總クロース美製本紙數八百頁
定價金八拾五錢 郵稅金八錢
壹冊 近刊

作文參考書の巨擘。記事作文の良師友。中學作文鑑世に出でたり。これより中學校。師範學校高等女學校及び中學校程度の各種試驗受驗生は良參考書、良師友なきに苦しまざるべし。今此の書編纂の用意を略述すれば

第一 文題は時世の進步に伴ひ中等の程度に適切なるものを選擇したり。

第二 作例及び參考例は、其の結構其の思想其の行文共に模範たるに足るべきものを選擇するに務めたり。

第三 遂意實用を主とし、文題及び模範文の選定に於ても、常に穩健ならんことを期したり。

第四 文章の結構を明にし、その分段を一目瞭然たらしむるには特に意を用ひたり。

第五 類題は、作例の結構を見て、容易に立案し得らるべきものを撰定し、其の下に必要なる思想と、必要なる語調と、必要なる詩歌格言を集めたり。

第六 附錄として各官立學校の作文科入學試驗問題を附し置き、最近十年間の作文用の趨勢を知らしめんと務めたり。

されば文章を作らんとするもの、此の書を座右に置かば如何なる題目に對しても。其の思想其の結構、其の言語を供給して餘あるべし。遂に一本を購ひて其の便益をうけ給へ。

發行所 東京市京橋區南傳馬町貳丁目 振替貯金口座第二八〇九番 目黑書店



クイーン白粉（おしろい）
クイーン水

本品は我同盟國より輸入せる最新最優の原料に貴重なる芳香を加へ精製したる他に比類なき化粧品なり

本舗 東京日本橋新和泉町 三井花陽堂

空前の特賣



（東京京橋大鋸町十一 振替口座第壹七貳九番） 出版元 女子文壇社 （賣捌全國到る處にあり）

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

法學博士 高田早苗序　阿部長咲著　洋裝三色版入金五拾錢郵稅六錢

過渡時代の女性

本書は著者が穩健周到の見、熱烈流麗の筆を以て過渡時代に於ける女性を解剖し得て餘蘊なく此期の女性の諸般を說き新家庭の良資料たるを缺かず且家庭に於ける嫁姑の同居と別居に關し家庭調和策新家庭に於ける新婦未亡人の離籍及再婚問題女子教育及婦人の修養等を網羅す世の婦人階級を不問必讀書

美術技藝研究會長 梶山彬著　和裝花葉形切圖百九十個五拾錢稅八錢

女子技藝 造花術新書

世の進歩と倶に女子技藝も日に盛ならんとす本書は著者が實地研究と授業上より得たるを世に公にせるもの其內容は學理と實際とを調和し染色鏝當組合せ等懇切に解說し一花一葉ごとに正確なる切圖を附し一度此書を繙く時は千紫萬紅の花卉を自然の儘に造り得べし且手藝科教員及生徒諸孃の參考に適す

東京京橋桶町廿一　振替貯金四六八四　廣文堂 書店發行

秘訣 リウマチス全治

妾儀多年リウマチス病に罹り百方手を盡すも更に効なく困難の處不思議の神藥の奇効に依り忽ち根治全快し喜悅に堪へず依つて人助のため同病者に事實を告げ救濟せんとす御希望の方は郵券二錢封入申込次第詳細に御通知申上可く候間御遠慮なく申込あれ

東京府下大森停車塲東大畑　河奈とめ女

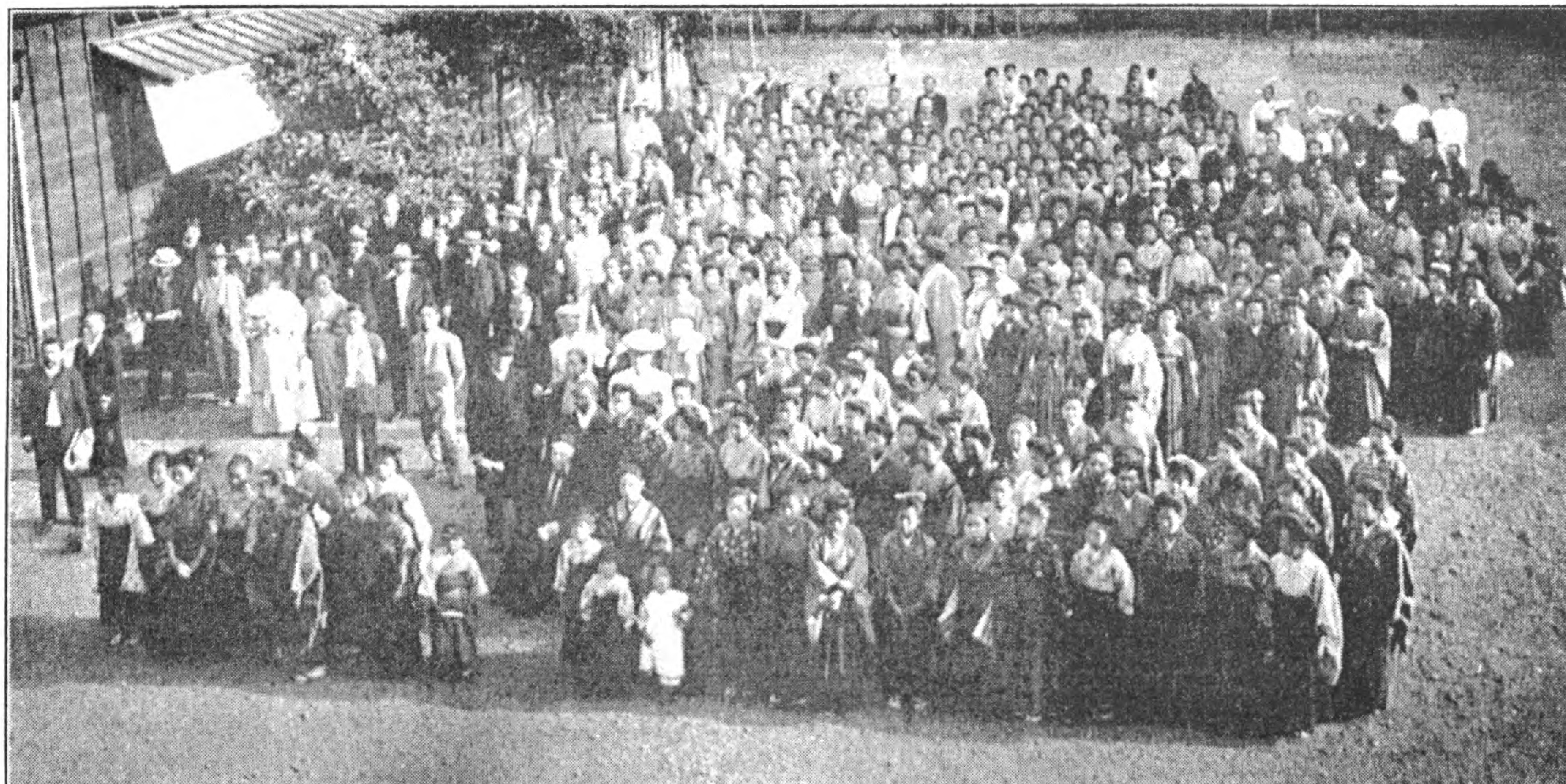
肺病

私儀多年肺病にて九死の際偶々一奇藥發明のため全治せる故世の同病者を救ひたき志願に付望の方は郵券二錢封入にて御照會あれ

東京府下大森入新井　川名助次郎



暹羅の音樂　（中島富子女史寄贈）



立教女學校創立三十年紀念祝賀會（六月三日撮影）

結髪の實習



裁縫の實習



（越中伏木……女子高等補習科寄贈）

誌友おもかげ（十三）



（大阪）本西時子





（筑前）米國出身水野筆子
（石狩）村木富子



（水戸）中山道江子





（越後）宮本きみい子
（埼玉）境野茂登子



（和歌山）福本保子

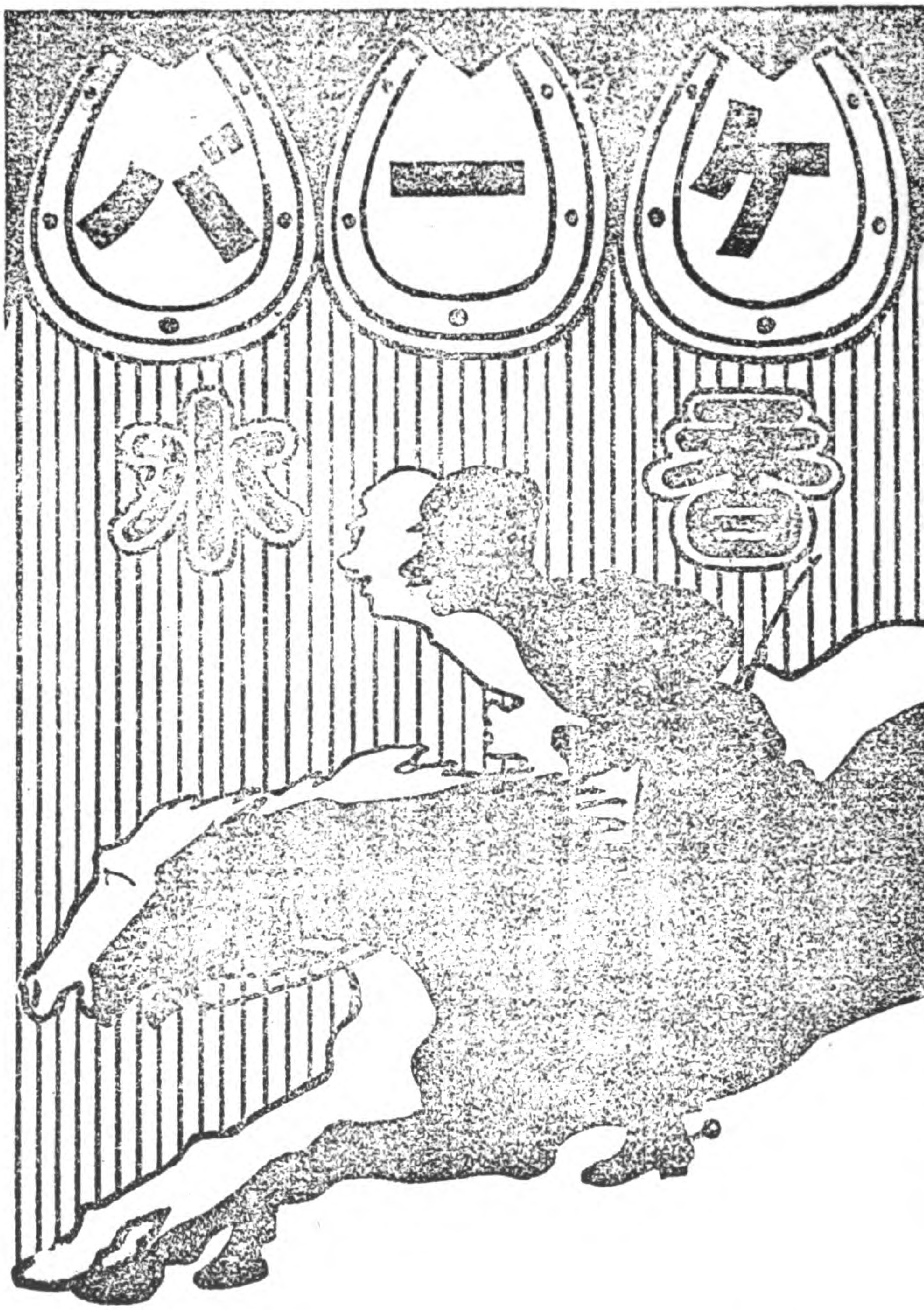




（備後）重山つろ子
（羽後）佐藤繁子

（續々お寫眞を寄贈して下さい都合で返します）

佛國製大高評



上流社會に益々好評

夏季の進物用品

定價　中瓶金壹圓　小瓶金廿五錢

東京市日本橋區橘町

化粧品輸出入商　竹間商店

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

大日本淑女學會

會員募集 規則書進呈す

御自分のお宅に居つて高等女學校の課程を講習しやうとする人は本會におはいりなさい本會は文部省令に據り正則完全なる女學講義錄を發行します講義の親切丁寧な事は固より新式の教授法によつて獨習に最も便利な方法を計ります卒業は貳箇年會費も低廉であります

第四回新學期開始

本會の講義錄

▲大版三百頁優麗なる冊子
▲講義平易にして興味多し
▲各科講義の程度一定せり
▲各科皆聯絡し組織的なり
▲講師は專門女子教育家也
▲科外講師は博士學士卅家
▲毎號科外講話を附錄とす
▲純潔高雅の家庭小說あり
▲會員の質問は直に解答す
▲學期毎に修業證書を與ふ
▲講義錄は貳ヶ年完結とす

◎博覽會開會中入會金**全免**す

▲報知新聞評　本講義錄は高等女學校の全學科を知名の專門女子教育家が講述せる者也平易懇切を主とせるものなれば何人も難解の虞なかるべく各科皆聯絡を保ちて其程度を一にせるなど講述者の苦心を見るに足る且つ有益なる科外講話の外に雜錄五十頁の附錄あり博士學士等の婦人に關する評論史傳衛生家庭等の文字を滿載し卷末更に純潔高雅の小說あり凡そ天下講義錄多しと雖も實益と趣味と併せ有する者斯くの如きは稀也

本會機關雜誌 **姫百合** を發行し會員に限り**進呈**す

◎東京神田南甲賀町（電話本局三千四番）

大日本淑女學會

女子文壇

第三巻　第九號

（明治四十年七月一日發行）

七月（大）
日曜　7　14　21　28
祭日

函入娘とは何ぞや

函入娘とは婦人を人形視した封建時代の死語であつて、今日以後の活動時代には通用しない辭です。辭が通用しないのみならず其意味も亦通用しないやうになるでせう、つゝましやかなる事を以て、婦徳の第一とした時代には、斯う云ふ辭の存在も必要でありましたらうが、只、内氣で、因循で、人形のやうなのを以て、婦德の理想とせず、快活、優美、社交界の花、家庭の慰藉者を以て理想とする時代には、函入娘では困るのです。ですから成丈け函へ入らないやうにせねばなりません、おてんば、はれかへりになつても勿論人困らせですが、息の通ふ人形になつてもつまりません。感情に動かされ易く、又脆い處もあつて女は美くしいのでせうが、別に意志の强い點もあつて欲しいのです、感情に動いても、盲動しては身を誤る外はない、感情の修練さへ足りてあれば、動いても身を誤る程の事は無く、それには何うしても、函入娘では不可のです。矢張半面は世間と接觸しなければ、完全な婦人として立つ事は出來ません。今や學校は夏期の休暇に際し、多くの學生は登山を企て、海水浴を試み、旅行に出やうとする時です、女學生諸孃も亦、世間に接觸する方便として、事情の許す限り、旅行も宜しからうと思ひます。

女子と修養

島崎藤村述

「男といふものは、結婚を申込む時には四月と言ひたいが、結婚して見ると十二月だ」と云ふことがありますが、之はよく家を持つた女の心持を、言ひ表はしてゐると思ひます、所帯を持つと云ふことは、餘程六ケ敷く、且、困難なことでありますから、長い間には疲勞ることもありましやうし、困憊ることもありましやうから、幾ら男でも、さう始終四月のやうな顏ばかりして居ることは出來ますまゐ、矢張苦い十二月面にもなるのでありましやう。

女の方から申しましても、學校に居る時代は丁度四月の樂しい夢で、結婚後は十二月の嚴しい世味を嘗めるやうになるのであります。學校に居る間は、こゝを卒業したならば、自分はどんなにか好い家庭を作らうと思つて、彼れ斯れと自分の家を持つたときの切廻し方や、一家の萬事を學校時代に豫想して、樂んで居つても、扨、自分が實際其事に當つてやつて見るとなると、世の中のことゝいふものは、さう單純のものではありませんから、其間にはいろ／＼の障害も出て來るので、遂知らず／＼行路難を嘆ずるやうになつて、この世の中は、自分が嘗て學校の窓から想像したのと、非常に相違してゐたことを發見するものが、隨分多いだらうと考へます。斯ういふ人々の生涯を想像すると、誠に氣の毒でありまして、私は何うか、多くの家族の爲や、又女の一生の爲に、今の社會がもつと發達し、隨つて家庭の組織がもつと改良されるやうにと願つて居るのであります。

學校時代には秀才といはれて、或は外國語が達者であるとか、又は音樂がよく出來るとか、繪畫の嗜みが深いとか云はれたものも、家を持つやうになると、子供を養育するとか、舅姑に侍へるとか、夫の世話をするとかいふ、いろ／＼の用事が殖えて來て、今日の家庭の狀態として、女は家事に逐はれて、自然に所帶の苦

勞に疲れて、長い間學校生活をしたものも、初めからそれほど學問を修めなかつたものと、殆ど同じやうな無思想の狀態に陷るものが多いのであります。斯うなつて來ますと、女の樂みといふものも、誠に單純なものになりまして、五目鮨でもこしらへたいとか、汁粉でも食つて見たいとか、唯、斯樣な間食の外には、何も樂みが無いやうになつて、折角長い間學校で學んだことも、何の甲斐もなく、終には忘れて了ふやうなことに成るのであります。

私の周圍にも、以前女學生であつて、今家を持つて居るものが、澤山ありますが、其人達は近頃何んな考へを持つて居るかと云ふと、一言にして言へば、ツマラナイ、世の中が思ふやうにいかないと言つたやうな、嘆息に堆もれてゐるものばかりで、折々寄來す手紙抔を見ても、皆一樣に學校時代の愉快であつたことを繰返して、徒に愚癡をこぼすものばかりで、眞に讀書の樂みとか、家庭の趣味とか、或は自然の觀察とか言つたやうな、新しい方面に自分の開拓地を見出して居るものは殆どなく、徒に過ぎ去つた時代の樂みを回想して、現在に不平を抱いてゐるものが多いのであります。

電車に乘つて見てもよく分ります、小供を抱いて、蒼ざめた顏色をして、おばあさんじみて、艷氣も失せ果てた婦人が、今時の女學生と膝を並べて腰を掛けて居りながら、如何にも羨しさうに、愉快氣な、生氣ある若い人達の顏を眺めて、自分等の若かつた時代のことを回想してゐるものを見るごとに、私は誠に氣の毒になつて來まして、同時に女の一生も、若い時の想像どほりに成らないものであらうと云ふことを考へると、家とか、女の一生とか云ふことに就いて、何んとか今少し今日の識者に考へて貰はねば成らぬといふことを感じるのであります。

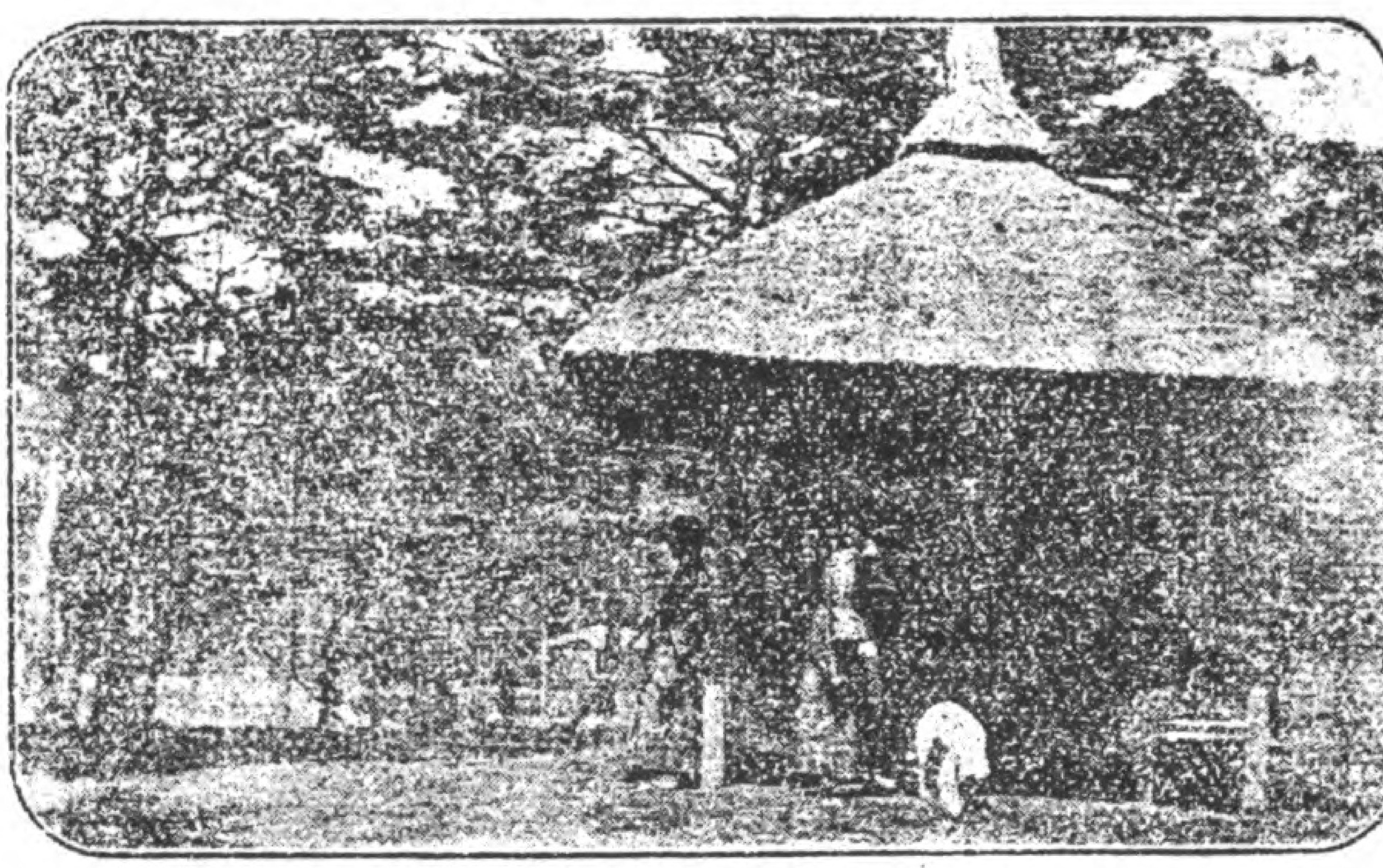
今日では、女の學校は日を逐ふて多くなつて來ましたので、大抵のものは小學校を出て、皆それ／＼其上の學校に入るやうに成りました。斯ういふ無邪氣な、活活とした女學生を敎育して居る先生方は、皆な希望に滿ちた思想で眼前の事業をやつて居らるゝことでしや

うが、然し其先生方が一旦振向いて、前申したやうに生氣の無い顔をしてゐる、若い婦人を見られたならば、何ういふ感じを抱かれるでありましやうか、若し其先生方が、眞實に、自分等が現在敎へつゝある生徒も、此から後家を持つ場合には、斯様な境界になつて、苦勞するのであらうかと云ふことに思ひ至つたならば、更に一層の覺悟と思慮とを要せられるであらうと思ひます。

今日の女子敎育は、あまり學校時代にのみ重きを置いて、女の一生といふことを等閑にするやうな嫌ひはありますまいか、無事に卒業するやうに、怪我人の出來ないやうに、安心な學校と言はれるやうに、とばかりでは、誠に物足りません。學校で敎へることは、女の生涯に關することとであつて、學校を出てから後、役に立つ——所詮一人前になつた時の準備になることを敎へるのでありますから、徒に娘の時代を無事に送らせれば、それでよいと云ふやうな考へでなく、女の生涯の上から考へて、其一生中の仕度をさせるのであると思はなければならないことでしやう。私共から考へると、今の女子敎育は樂な時のことばかり仕込んで、貧乏した時のことは餘り敎へないやうに思はれます。今日の狀態から云ひますれば、學校に通つて居るものが必ずしも、皆富でゐるものばかりでは無く、隨分貧い家庭のものもあるのでありますから、假令今何んなに樂であるにしても、今後どういふことで、貧い境遇に處する場合があつても、其貧いうちに心の動かないところを見つけて、飽く迄も抵抗することが出來るやうに、譬へば、家政によつて深い生活の意味を敎へ、料理によつて「食ふ」といふことの嚴肅な趣致を敎へ、何事も根本から學ばせるといふ風にして、只、指に嵌める指輪のやうに、形式の學問でなく、實際にものを摑むことの出來る手の如く、活用の出來るやうにし、敎育の根本が女子の生活と密接の關係を結んで、何うしたならば生存の苦痛に堪え得るか、何うしたならば年寄達の心を讀まれるか、何うしたならば召使ひの心が解かるであらうか、又、夫の逆境或は苦境の生活に鬪

ふには、何うしたならば宜しからうと云ふことが分るやうに、教育を單に裝飾でなく、實際生活に入る土臺を作るためにさせたいと思ふのであります。

前のやうに云ひましたからとて、單に重きを學校にのみ置いて、學校を卒業してから、銘々が自分で少しも修養に頓着せぬやうでは、何にもならぬのです、學校を出て後も、銘々自分が之から更に修養期に入ると云ふ考へを、一時も忘れずに持つてゐなければなりません、尤も家を持つとなると、無論子供の爲に心を碎くやうになりましやうし、斯う世の中が贅澤になつて來れば、意外なところで苦勞する場合もありましやうし、又一家の取廻しにしても、臺所の世話も爲ねばならず、客人の應接も落度なく扱はねばならず、家内のもの丶着る衣服も、それ／＼時節によつて拵へねばならぬので、それからそれと逐はれて、斯う忙しくてはヤリキレない、どうして修養の時などがあるものかと云へば、それ迄ですが、然し、其處が女の發達するや否やの岐れる、肝腎なところかと思ふのです。男とても家を持つてから後、一事業を爲さうとするのは、なか／＼並大抵の苦勞では無いのでありますから、女も矢張其處を考へねばなりますまい。額に汗の流れることは男も女も同じです。て、隙のある時には務めて、文學の書を見るとか、古人の傳記を讀むとか、或は人生問題に就いて書いた書物を讀んで見るなり、科學の智識を得る爲めの書籍を繙くなり、又、爲めになる人達から、いろ／＼の話を聽くもよし、暇を見附けて旅行する抔も最もよろしい、何うにか工夫して、僅の時間でも利用して、自分の修養の助けになるやうに心掛けねばなりません。どうか



跡見女學校運動會（其一）

家を持つてからも、學校時代と同じ元氣で居て欲しい。いつまでも進まうといふ凛然とした氣慨を失はないやうにしたい。退屈した時に、煎餅でも食べやうといふのは、もとより結構ですが、同じ娛樂の中にも判斷とか、批評とか、趣味とかを含むやうに、折にふれて少しでも自分の一生を養ふといふ考へを持つて欲しいのであります。

家を持てば、それからそれと朝夕の一家の切廻しに追はれて、それ丈けでも疲れて了つて、なか〳〵呑氣に讀書などは出來ぬと云ふものもありましやうが、それは心の持ちやう一つにあるので、自分に何處までも進まうと云ふ心さへあるならば、書物を讀むばかりが修養ではありません。來訪者に應對する間にも充分修養になることがありますし、子供が發達する具合の中にも——いろ〳〵もの事を覺えて行く順序とか、闇を恐れる樣子とか、記憶の進み方とか、話を聞きたがる有樣とか、器物を破壞す塲合とか、いふことに就いても、澤山に學ぶべき事柄があります、之等は皆文字に書かれてゐぬ、生きた書物であります。自分の心掛け次第で、家に居て、隨分立派な書籍を讀むことが幾らも出來ましやう。

外國の婦人などは、或は生活の程度の異つてゐるためもありましやうが、兎に角一般に理性感情共に發達してゐて、婦人として恥かしからぬ性格を備へてゐるものゝ多いのは、彼等は單に女學生時代のみでなく、家を持つてから後も、決して修養を忽諸にせぬからであります。修養は、家が豊なからして出來る、貧しいから出來ぬと云ふ譯のものではありません、夫の地位がなくなり、暮しも自由になり、小供の敎育を濟ましてから後に、それから修養しやうなどゝ思ふ頃には、耳も遠く、腰も曲り勝です。若く、貧く、苦いうちにあつて、怠らず撓まず修養するのが貴いので、よくものゝ憐れの分るのも、其處にあるのであります。

段々時勢が變つて來まして、女にも獨立するもの、勞働するものが出來、新しい進んだ思想を持つものも出て來ました。所謂新派の女が活動を思ふ時です。御承

知の通り、今日は烈しく動搖してゐる時世でありますから、男の方も非常に、決心、奮慨、努力を要することは勿論でありますが、男ばかりでこの處女時代を經營することは、到底出來ません。何處までも女が男を補助て、譬へば、梯子を掛けて高い處へ登るのが男ならば、其梯子を下て抑へるものは女であるやうに、之から先新しい日本を開拓しやうと云ふには、男のみでなく、女も充分其考へを持つて居て、懶惰な習慣を捨て、夫を助け、自分を勵まし、子供を引連れて、從て他をも進歩めると云ふ覺悟で居て欲しいのであります。改革の事業は男にばかり任して置いて可いといふやうな時世は過ぎ去りました。

作文そのをり〱

高須梅溪

一　文章と想像作用

文章を作るには、其調子に注意せなければなりませぬが、それと共に思想の方にも注意せねばなりません。此調子と思想との二つが、巧みに融合せられた所に、一個の完全なる文章が、組織せられるのであります。故に何れとも輕重の差別をつけることは、出來ませぬが、私は今玆に、思想の方面殊に其想像作用について、お話したいと思ひます。

文章の内容即思想は、之を分類すると、色々の作用から成り立てゐるので、

(一)思想の原料となるべきもの
(二)記憶
(三)想像

右の作用を用ゐて此にある纏つた内容を、形作るのです、其中でも此想像作用が、最肝要て、如何なる場合にも之を甘く利用せなければ、豊富なる内容を、得ることが出來ませぬ。勿論、智性、理解等を主とする論文の如きものは、單に、想像のみに、重きを置くとは申されませぬが、記事、敍事等の種類に於ては、主として、此想像作用を善用して、其内容を組織する

のです。

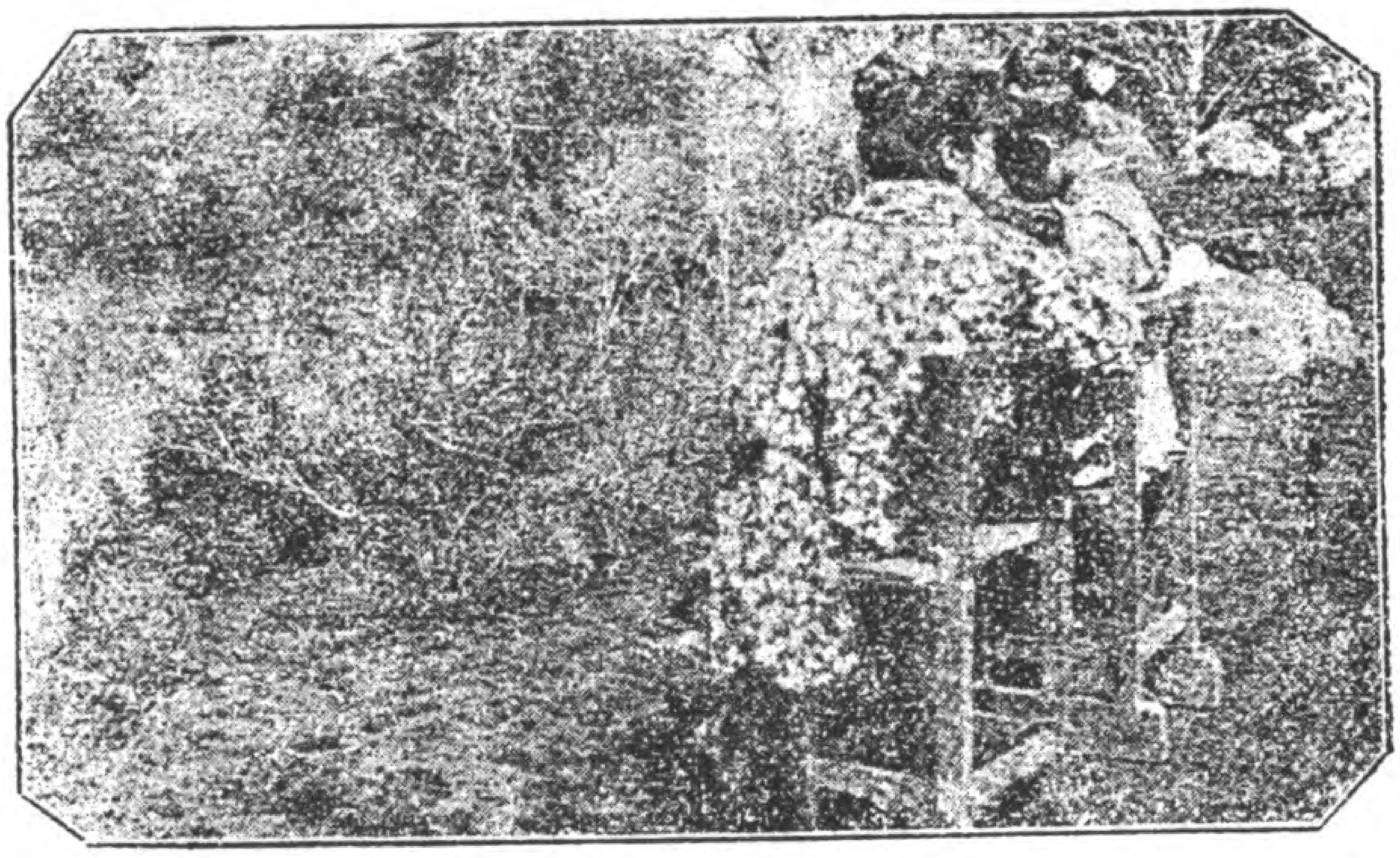
極大まかな分類ではありますが、想像作用には、復歸的と創作的との二種あります。復歸的と申ますのは、皆さんが、過去に於て、遭遇せられた事實を、或作用に由て、思ひ起すことです。創作的と申すのは、現在、目にし耳にする事物に付て、想像力を働かしたり、又は、或一個の暗示から其未來を想像したり、無から有を想像するのです。

（イ）復歸的想像の事實。今實例を擧げて説明致しますと『小川』と言ふ文章の課題を出された時に、皆さんは、必ず小川の景色に付いて、さま〳〵の想像を回らしなさるでしよふ。其想像の中には、必ず、過去に於て、自身が眼のあたり見た小川の景、過去に於て讀んだ、地理、文學などの中にある、有名な小川の有樣、展覽會や掛物の繪などの中にある小川の光景などを、思ひ浮べられるでありましよふ。此想像作用が、文章の內容を作る一個の寶です、今一歩進めて詳しく説明致しますと、或春の日のつれ〴〵に野邊を歩いて菫、

蒲公英などを摘み乍ら道を辿り行くと、いつか、小川の邊に出て、彼方には一竿の釣を試むる人、此方には、土手に蹲まり乍ら、藻の花による手長蝦の姿を指ざす人、之れ等呑氣そうな人を吹く春の風が、かすかに咽ぶ樣にしめやかに囁く樣に、流れ行く小川の、水の面に、細やかな漣を起こして、麗かな日影が、金絲銀絲五色の彩と亂れる光景を、思ひ起こすでしよふ、或は又、青葉若葉の色濃かな、江戸川の邊、夏の夕月が、ぼんやりとして、橋畔に繫がれた小舟二三艘しめつた夜氣が空中に浮動して、對岸の家々にゆらめく燈火の光を、弱くして何となく油繪でも見るやうな、心持ちを起こさせる光景を思ひ浮べるでしよふ。こう言ふ作用を稱して、復歸的想像といふのです。現在の記事文、叙事文、叙情文などが、此作用を利用して、茲に一つの纏つた躰制を形作つて居るのです。

（ロ）創作的想像の事實、此方は、巧みに想像力を、働かすもの、若くは、想像力の極めて强い豐かなものでなければ、餘り大なる功力がありませぬ、今事實を

擧げてお話すれば、皆さんが、『白百合』といふ課題を手にせられた時に 多くの場合に於て復歸的想像を働かせる方もございましよふが、又、一種の連想作用即ち、白百合の氣高い清い姿から、神話的の趣味を、つけ加へて、白百合を人格化して、或天上の乙女が、戀のために身を誤つて、下界へ下り、悲哀に沈んだ其淚の白露が化して此百合の花になつたのではないかと、想像せられるその作用が即ち創作的なのです。又街上を散歩して居られる時に、何となく憂に沈んだ、靑白い顏の、年若かな美人に出合つた場合に、其瘦せ細つた襟元、どんよりとした眼の色から想像して、玆に、一個薄命の佳人を思ひ浮べて、思ふ人に嫁がず、思はぬ人に嫁いだ其日からの煩悶苦惱、時は秋ならぬに身は日一日と、瘦せ衰へ行く境遇に同情して、そこへ樣々の想像をつけ加へて、一篇の小說らしい想像を浮べるとすれば、それが立派な創作的の實例となるのです。



跡見女學校運動會（其二）

以上の想像作用を働かせることが、非常に巧みであればある程、興味の深い內容が出來上るのです。例へば、近松の『女殺油地獄』の中で與兵衛が油屋の女主人お吉を殺して立退く時の心理的描寫は、最も精細を極めて、此文豪が如何ばかり、其創作的想像を働かしたかを思ひやられます。與兵衛が大罪を犯した其行爲から來る良心の苛責、其場の狼籍を極めた悲慘な狀態、それが目に見える樣に描かれて居ります。セークスピーアの『ロメヲ、エンド、ジユリエツト』、の中に相思の男女が忍び忍んで、花園の邊り別れを叙する、其熱烈な可憐な有樣、そゞろにお染久松が藏の場を思ひ出させます、之もやはり西の國の詩聖が、創作的想像力の强烈な

一端を、示して居ります。概して不朽に傳はる文章は此想像作用を巧みに働かしたものです。近來、我國の文壇に名ある人々の有名な傑作も、大低同じ事情から成り立つて居ります。藤村氏の『破戒』の內に現はれた北部信濃の地方的特色なども主として、復歸的想像の作用を借りて居るのです。

そこで、此想像作用を最巧みに働かすには、どうしたらよいかと云ふのが、一つの問題です。しかも最肝要な事です。之を詳しく述べるには、大變長談議をせねばなりませぬから、別にお話することゝして、只旺んに、其働かし方を、練習なさるがよいと申す外は、ありませぬ。それには、銳い觀察、强烈な記憶と印象、眞面目な沈思、冥想などが、何よりも肝心な玉手箱です、此三個の要素について熱中なさることが、やがて想像力練習方の秘訣でありましよふ。

蕎麥（お伽話）

西村醉夢

若し、諸君が、大嵐のあつた後に、蕎麥畑を通つたならば　屹度、蕎麥が火に燒かれたやうに、眞黑焦に成つてゐるのを御覽なさるでしやう。『こんなに成るのは稻妻の爲めです。』と或る百姓は私に申しましたが、何故、稻妻の爲めに此の樣に黑焦に成るのでしやうか。私は、この譯を雀から聞きましたから、皆さんにお話し致しましやう。

けれど、その雀とて、自分で見た譯ではなく、柳の樹から聞いたのだ相です。その柳の木は、蕎麥畑の隣りの畔の上に生えてゐましたが、大變年を老つてゐるので、幹は中程から裂けて、裂け目に色んな草が生えて居りました。のみならずその幹は老人のやうに前へ屈き、枝は恰度人間の髮のやうに、だらりと地上に垂つて居りました。

その野原の中の畑は大變廣う御座ひましたが、小麥、大麥、からす麥などの穀物が、どつさり生えてゐまして、よく熟した時には、恰度カナリヤが枝の上で遊んでゐるやうに見えました。

今年は何時に無き豐年で、大麥も小麥もからす麥も、大變よく實きたものですから、穗の重さに堪へ兼ねて、皆の者は鄭寧にお辭儀して、その頭を下げました。

その麥畑の近所に蕎麥畑がありまして、今申し上げた柳の木と向ひ合せに成つて居りました。而て蕎麥許りは外の穀物が鄭寧に頭を下げて、お辭儀をしてゐるにも拘はらず、意張つてその頭を下げやうとは致しませなんだ、まあ何たる鼻の高い奴でしやう!

『僕も今年は外の穀物のやうに、大出來に出來てゐるのだけれども、不思議にも僕の頭は輕いから、下げないで居ることが出來るし、花とても隨分綺麗て、あの林檎の花に能く似てゐるが、本統に此の花を見さして頂く者は仕合が善いのだ。何うだ、柳君、君は僕の花よりも美くしい花を見たことがあるかい、え丶?』

と、蕎麥は誇らしげに柳の樹に向つて申しました。

すると柳の木は鄭寧にお辭儀をして、『否え、僕は貴君よりもずつと美くしい花を、見たことが度々御座います。』と、優しい聲で申しました。

『馬鹿奴!老耄の貴樣にそんなことが分るものか、貴樣の身躰には草が生えてゐるぢやないか、此の老木奴!。』と、蕎麥は小さい肩を聳らして、自慢たらしく申しました。が、さあ大變!

暫らくすると大嵐が起つて來ました。嵐の吹いてゐる間、野に生えてゐる草花は、皆謙遜して頭を垂れたり、葉を下に俯向けたりして、少しも意張つた樣を見せませなんだが、蕎麥ばかりは例の通り、高く〱その固い首を立て丶、意張つて居りました。

『おい蕎麥君、君も頭を下げたら、何うだい、僕等は皆此の通りにしてゐるよ。』と花共が申しました。

『否や、僕は何もその樣に頭を下げる必要がない、世話を燒かないで打捨置いて呉れ。』と蕎麥は眼を瞬つて花共を見たものですから、此度は穀物が大聲を張り

上げて、

『おい〳〵蕎麥君、君も僕等の樣に頭を下げたら何うだ、あれあの樣な嵐が神樣のお使に成つて、此方へお出でなさるぢやないか、嵐てえものは大きな羽を持つてゐて、其で雲を叩いて天から地上へ降りて來る相だから、君は屹度、引打かれるに相違ない。だから打たれる前に首を下げてお辭儀をしたら何うだい、えゝ蕎麥君！』と穀物は親切に申しました。

けれども蕎麥は平氣なもので『はゝゝゝ要らぬお世話だ、僕は頭を下げなくつても可いのだ。』と申します。

乃て此度は柳の木が『おい蕎麥君！早く頭を下げ給へな。君はまだあの稻妻が、雲の裂け目から。ぴかり〳〵ぴかりと光つてるのを見ないのか。人間でさへも稻妻の光る時には、恐がつてその首を下げるのに蕎麥の身分て、君がその樣に頭を上げてゐるのは失敬ぢやないか、えゝ蕎麥君、早く頭を垂げ給へ。』と忠告しました。

すると蕎麥は『はゝゝゝゝ、君は馬鹿に恐がつてゐるな……僕は今頭を上げて、天を眺めて見る積りだ。』と云つて、誇らしげに空を見渡しますと、稻妻は恰度火が世界中に燃えてゐるかと思はれる程、恐ろしく光りました。

其の後嵐も凪ぎまして、世は又元の靜けさに歸りましたが、草花や穀物やは、雨に沾ほされまして至つて生き返つたやうに、生々と緑の色を染めたり、紅色に匂つたりしてゐました。けれども意張り散らした蕎麥許は、全て唐黍の燃殼のやうに、眞黒焦に成つて野の上に横はつてゐました。

又柳の木は吹く風にその枝を拂はして、さら〳〵さらと鳴つてゐましたが、その枝からは、ぽたり〳〵と露の玉が落ちまして、恰度泪でも流してゐるやうに思はれました。その有樣を雀が見まして、

『あゝ、柳君、何故そのやうに泣いてゐるのだ？見給へ、他の物は皆生々してゐるぢやないか、お日さんはかん〳〵と照り、雲は空を走り、花はぷん〳〵と良い香を放つてゐるぢやないか、それに何故、君はその

やうに泣いてゐるのか？」と、極めて親切に尋ねました。

けれども、古木の柳は默つて、その首を左右に打ち振り、何とも答へません。て、此度は大麥が尋ねました。

「おい、柳君、何も君はそのやうに泣かないでも可いぢやないか、あの傲慢な蕎麥君は、到頭神樣のお使の爲めに滅茶々々にされ、もう憎いと思ふものはなくなつたてはない乎。それよりも君一つ氣を變へて、此の野に咲いてゐる花の香でも嗅がつしやれ、あゝ良い香氣だ、ぷん／＼してゐる。ねえ、雀君、爾うてはありませんか。」と雀の方を向き直します。

「爾うですな、此の可い香を柳君は何故嗅がないのてしやう？……おい柳君、何うしたんだ、君は何故そのやうに女々しく泣いてゐるのだ？」と、雀は又もや柳に問ひかけました。

すると柳は蕎麥が自慢たらしかつたこと剛情であつたこと遂に罰せられたことなどを語りまして「それて、僕は神樣にお禮を云つて、嬉し涙を流してゐるのです。」と申しましたとさ。

私は此のお話を雀から聞いたのですが、餘り面白いから皆樣にお傳へするのです、何でも人は謙下つて、餘り自慢をするものでは有りません。

五首

楠　糟子

春の王　み位すべる王坐より
花はくづれて青葉の世とぞ

青葉道かたりつゝ行くめをと連れ
四つの袖吹く初夏の風

つばめ飛ぶ柳の小道小ばしりに
繪日傘かたげ行く兒美し

春は昔　昔の人を見し夢を
人に語らぬ無言の日かな

右左わかれてゆきぬ人二人
春はむなしき青葉の下を

不老の水（お伽話）

池田朝村

昔西洋に、ハイデッガーと言ふ年寄た不思議な醫學博士がありましたが、此醫者が或時四人の御客を招きました、其御客は此醫者の古い朋友で、三人は男、一人は女で、男の名は、第一がキルグリュー、第二がガスコニー第三がメドボーンで、女客の名はウイッチェリーでありました、四人共若い時は金持で、贅澤三昧に暮して居ましたが、漸々年を取て、最早御墓の下へは入るのも間もなく成て來ましたので、昔は世間の人々からも羨やまれて居ましたが、今では誰一人振返つて見る人もなく、全く世の中の人から捨てられて了つたのです、殊に、ウイッチェリーと言ふ女は、若い時は、實に奇麗で、宛で繪に畫た天人の樣で有たのですが、心懸が惡く、自分の容色の善いのを自慢して居たものですから、遂には世間の、人から惡まれて、御嫁にも行けず、とう／＼皺だらけの御婆さんになる迄、一人法師で淋しく暮して來たのです。又キルグリューと言ふ人は、陸軍の大佐でしたが、若い時餘り道樂をして遊んで計り居たので、年寄てから其酬で、種々の病氣が出て遂々免職されて了つたのです。其他の二人も大低是に似寄た人達で、皆年寄てから始めて若い時の怠けて計り居たとや、贅澤計りして居たとを後悔して居る人達なのでした。

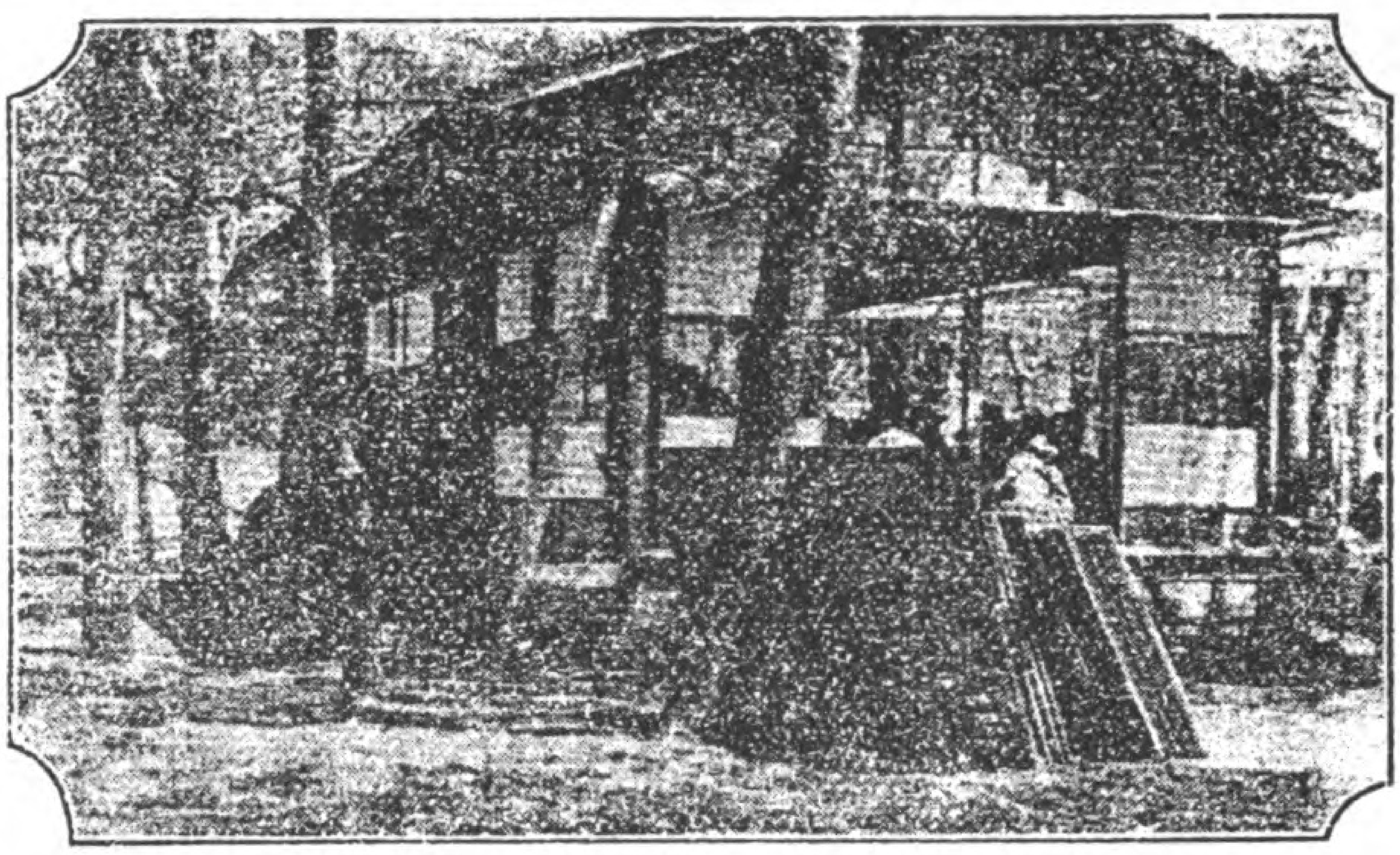
偖ハイデッガーは、此四人の朋友を招接して、自分の書齋に案内しました。所が此書齋と言ふのが頗る奇妙不可思議な書齋で、先づ其樣子を述べて見ますと、部屋の造方は昔風で薄暮く、加之一度も掃除をしたとが無いので塵が二三寸も積つて、窓から天井から蜘蛛の巣だらけで、足も蹈み込めない有樣でした、又四方の壁際には樫の木の本箱が列べて有て、其下の段には四折の魔法の本と古代文字の本とが列べて有て、其次には皮表紙の二折の本が列べてあるし、又中央の本箱の上には、ヒポクレートと言ふ昔の豪い醫者の眞鍮の半身像が安置つて有りました、そして、ハイデッガーが何か困難しい病人にでも療治を頼まれて、何うして善い

か解らない時には何時でも、此半身像に相談をするのです、すると此半身像が何うしたら善いとか、何う言ふ藥を飲ませろとか敎へるのだ相です、又部屋の隅の方に大きな箱が立てゝ有て、其中には人間の骸骨が立て居るし、此方の隅には大きな鏡が有て、見えはしないが、是迄此醫者にかゝつて死だ人の魄が皆此鏡の縁に入て居て、ハイデッガーが此鏡を窺く度に、其顏を見つめた相です、又部屋の正面には、古ぼけた大きな油畫の美人の像がかけて有りました、此美人は、博士の若い時の朋友で、互に夫婦に成る筈で有たのでしたが、或時勃と病氣に成たので、博士から藥を貰つて飲むと其晩に死んで了つたのだ相です、此書齋の中で最も不思議なのは、一冊の黒い皮表紙の、大きな本でした、此本には表紙に何とも書て有りませんてしたから、何と言ふ本だか解りませんが、確かに魔法の本で、容易に開けられない樣に、大きな銀の止金を懸けて有りました。或時のとでしたが、下女が、餘り汚ないので一寸塵を拂はうと思つて、何の氣なしに其本を持上げると、さあ大變!、下女は吃驚仰天腰を拔かして夢中で部屋を飛び出た相です、何故そんなに喫驚したかと言ふと、其筈です、下女が其本を持ち上げると箱の中の骸骨は何かがや〱と辯舌り出したし、美人の畫像は額の中から一歩床の上に歩き出し、ヒポクレートの半身像は眉を顰めて、

『こらつ!』と叫んだからでした。

博士の書齋は先づ簡單と斯んな風で有たのです、何と不思議な書齋ではありませんか。

それで此に述べる話は、丁度夏の午後、に起つた事で、暑い〱太陽の光線が、綾緞子の窓掛の間から其書齋の中に射し込んで、部屋の中央に置てある膝の樣に黒い、小さな圓卓の上にある、恰好の善い、美麗な玻璃瓶に反射して、きら〱と其美しい光を、其卓を取繞いて居る四人の人、即ち博士と三人の客に投げ掛けて居ました。そして四人の前に



跡見女學校運動會（其三）

は、盃が一つ宛列べてありました。其時博士の申しますには、

博士『皆さん、今日は善うこそ御出下さいました。實は今日皆さんを御招き申しましたのは、他でも有りませんが、此頃不思議な物を手に入れましたから、皆さんに御願ひ申して、一つ麼を試驗して戴かうと思ふのですが、如何でしようか』

是を聞いて三人の客は、あゝ成程、醫者の事だから、鼠の腹を割いて腸の檢査をするのか又は、顯微鏡で蜘蛛の巣でも見るのだろう、何だ詰まらない、と斯ふ思ひましたが、博士は皆が何とも言はない中に、椅子を離れて、蹌めきながら、本箱の上の魔術の本を持て來まして、其間から干枯びた薔薇の花を取り出しました、併し何年前の花だか知れませんが、花瓣も葉も鳶色に成て、一寸觸つたら粉に成て了ひそうなものでした。是を指に摘んで博士の言ひますには、

博士『皆さん、此薔薇の花ですね、此花は丁度今から五十五年前、私がシルビア孃、即此畵像の婦人と結婚する晩に、襟に付け樣と思つて居たのでした、所が御存知の通り其晩此婦人は死にましたから、紀念の爲に此本の間に挿んで大切に藏つて置たのですが、何うでしやう皆さん、此花が再び原の通りに美しくなると思ひなさいますか』

すると、ウイッチェリー婆さんの言ひますには、

ウ『何です馬鹿々々しい、それでは貴方年寄た皺だらけの顏が、再び元の樣に奇麗に成るかと御尋ねになるのも同じとです、麼なとが出來て堪るもんですか』

御婆さんは、招ばれて何か御馳走になれるのかと思つて居たら、斯なとを聞かれたので、少し腹を立てました。すると博士は、

博士『御覧なさい！』

と言ひ乍ら、玻璃瓶の蓋を取て、稠んだ薔薇を其中の水に投げ込みました。

けれども最初の中は何の變りもなく、只、水の上に浮て居る斗りでしたが、間も無く漸々樣子が異つて參りました。皆が何うなるだろうと眼を放さず、一生懸命に凝視めて居る中に、灰の樣に干枯びた花瓣に少しづつ震動が見えて來りまして、端の方から、宛て朝日の昇る樣に血の樣な紅が浮んで來ました、それと同時に、葉や莖も青々として來て、一分斗りの間に、今迄死だ樣に成て居た薔薇が、植木屋の店に飾つて有る通

りの、何とも言へない美麗な薔薇に成て了ひました。

此不思議な有樣を見て、客の言ひますには、

客「やあ、中々巧妙い手品だね、一つ其種を明して呉れないか」

客は何も知りませんし、殊に定席で、手品使ひが斯んな手品を遣て見せたとが有たので、此時もやはり、博士が手品を使つたと、思ひました。すると博士の言ひますには

博士「ハヽア、皆さんは未不老の水を御存知ありませんね?、それ、二三百年前にポンス、デ、レオンと言ふ、西班牙の探檢家が索しに出掛けたと言ふ、あの不老の水を……」

すると婆さんが、

婆「それでも、ポンスは遂々それを見付けなかつたと言ふてはありませんか」

と言ひますと、博士は落付き拂つて、

博士「左樣、ポンスは間違つた處を探して居たから、決して見付けるとが出來なかつたのです。本當を御話申すと、其泉は、フロリダ半島の南部、マカコー湖より遠からん處に在るのです、其泉の源は、何千年經たか知れない、大きな木や草で蔽はれて居るのです、けれども此不思議な水の御蔭で、何千年經ても靑々として、冬に成ても枯れもせず、其下は晝でも日が射さない相です、此間私の友人が、私の物好なのを知て居て送つて呉れましたのが即其瓶の中の水です」

斯ふ言はれても「キルグリュー」大佐は未だそれを信じないで言ふには、

キル「エヘン、成程、それはそうとして、其水は人間に何か効能がありますか」

すると博士の答へますには、

博士「それは貴方御自身の御試驗に御委せします、そして皆さん、何卒御遠慮なく此水を充分お飲み下さいまして、一つ昔の通りに、お若く且御奇麗に、お成り下さいまし、何私ですか、いや私は斯ふ年取る迄には種々苦勞も致しましたし、骨も折りましたことですから今更急いで若くなりたいとも思ひません、只、皆さんに飲つて戴いて、其結果を見たいと思ひますのです。」

斯ふ言ひ乍ら、博士は四つの盃に、なみ〳〵其水を注ぎました。

（つゞく）

山中古洞先生選

懸賞當選圖畫（其九）



（1）旅路（二等）東京本鄕區東片町百五十六番地　伊藤美代子

（2）姉と弟（三等）芝區車町三十六番地　伊藤とし子

（3）ふな遊び（四等）三河國豐橋停車場前山中鎌太郎方　加藤よし子

（4）社頭（五等）愛知縣豐橋市中八町戊六九白井龜吉方　白井津奈子

（5）待つ間（五等）牛込區市ヶ谷富久町六〇藤澤方　佐野貞子

叙事文

文學士沼波瓊音先生選評

三等　○呼び得ぬ母

由栗　藤枝子

實のところ私の生母は五年前迄屋敷にをりましたアノ乳母のお房です。此事はつひ先頃迄存じませんで居りましたが、松やがお隣のお竹さんと垣根ごしに話をして居りますのをききまして、初めてそれを知つたのです。「宅のお孃樣ですか妾腹なんですよ、エヽ奥樣にお子樣がないのでお相談の上お房樣を抱へましてね。生れたのがアノお孃樣です。奥樣は賢こいお人ですから吾子の樣に可愛がりますので、誰が見ましても御實子としか思はれませんよその後お房さんは乳母として五年前迄お屋敷に居りましたが、何を感じたのか出家して今は鎌倉在の尼寺にをるさうです。お孃樣はそんな事とは露知らないで、實のお母樣と思つて入らつしやるからおいとしいではありませんか」、等とヒソ〳〵話をして居りますを耳にしました。まさかそんな事がと、初めの中は思つて居りましたが、又氣になつてたまりませんので、雨の降るのを幸ひヒツソリとお祖母樣のお部屋に伺ひまして「先日松やがこんな事を話してをりましたが」とお尋しますと、只孃よそんな事を聞いて何におしですか」とばかり仰るのでした。され共わからぬ事をきかないと何か重い物を胸の上に置るゝやうな氣持がしますので、折にふれてはお祖母樣にたづねました。丁度四五日前の夜でした、お祖母樣は私をよびまして、細かに私の履歴を語られました。最後にいとおごそかな口調で「然しこれは皆過去の事で、孃が未來は、父樣や母樣に孝行するのがお前の義務である、房はそらお前の母ではないお前には立派な母樣があるではないか、家内睦まじく暮してをる事を房がきいたらどれ程悦ぶか知れないそれが又房に取つても孝行ではないか」と、かんでふくめる樣におさとし下さいました。で、此時私は初めて生みの母をおぼえまして又忽ち其母を失つたのです。私には慈愛深い母があります、然るにまだ母をと申ますのは如何にも慾のやうですが、只一度母樣と呼んでですねて見たい、成らう事ならば鎌倉迄尋ねてお

目にかゝりたいと、思ふ事は幾度となく私の胸にくり返さるゝ事ですが、大恩ある母様の手前私として決してこんな事は申されません。殊に乳母も世情を去ッて佛門にある身の、なま中對面して未練の振舞しては却つて双方の爲めにならぬ、第一佛に濟まないと、彼を思ひこれを想ひ實に私は義理と恩愛との別れ路に彳んで知らず泣きました、て私は乳母の事はフッリと思ひ諦めまして、お祖母様のお言葉に從ひ、大恩ある母様に專心孝養し渡邊家の相續人としての私の義務を盡くさうと固く決心しまして、さて暮れゆくおばしまに遠く鎌倉なる空を仰ぎ見た私の眼には確に涙はなかつたてせう、然し果敢ないものは女心で、かくは決心はしたものゝ初めて結びし島田髷の「よく似合ひし」と母様やお祖母様の仰るのを聞きますと、これ迄の決心はもろくもくづれて、例へばなぎさに築きし砂城の寄せくる波にくづれしかのやう、あとかたもなく、アヽどうかして成人した今の姿を只一目、鎌倉在の世捨人に見せたいと思ふ心が頻りに起るのです。

（評）義理と恩愛との二筋路に彳みて人知れぬ涙に袖ぬらす身の、幼きうちに言ふべからざる寂しみある樣、よく描かれたり、結末「母」ともお房とも言ひ得ずして「鎌倉在の世捨人」といへる、評者亦ホロリとしたり。

【四等】

○雨あがり

群馬縣新田郡太田町坂上方　あかつき

四五日降り續いた雨が今朝漸く止んだ、しかしまだ灰色した雲が低く重り合つて居て、如何も晴れそうはない、丁度土藏の中へても押し込められた樣な氣がして、何處となく陰氣臭く、障子の隙から吹き込む風は何んだか薄ら寒い樣だ「もうお蠶が出そうだが此の寒さぢやーあ」、と獨語しながら、お母さんは眞綿に包まつて居る蠶卵紙を穴のあく程見つめて居る、何んだか氣が捻めると云ふ樣な顏付で…………。

私も見樣と思つたけれど、見たつて仕方がないから、其儘自分の居間と定めてある四疊半へ入つた。

お蠶が出るので先日煤拂ひした所爲か、矢つ張り薄暗いけれども又好い心地がする樣だ、文章でも書かうかと思つて机へ倚る、けれども陰氣臭いのは何處迄もやみ相はない二三行書き初めると他のつまらない事が心に浮んで來る、仕方がないから棒を引く、又三四行書く、又棒を引く三十分計り種々と考へたけれども何うしても出來ない。

少し明るく成つた樣だ、障子を開けて外を見る、扉が邪魔して居て太陽は何處らだか分らないが、庭の南天

の影が朧に地へ寫つて居るので太陽の出たのが知れる。生温い風がスーと吹いて來てノートの端をパラ〳〵とめくる、障子を閉めて又考へ初める、何んだか急に暑く成つて來た樣な氣がする、如何しても出來ない、身躰中へ汗がにぢんで來て何んとなく心がそわ〳〵して來る、座り直して見る又棒を引く、もう地烈つたくつて地烈つたくつて文章所の騷ぎではない、雜記帳も鉛筆も見るのもいやに成つて來た仕方ないからよしてしまふ、此度は古雜誌の拾ひ讀みを初める、七入行讀むと如何も氣が重い樣で薩つ張り身が入らぬ。

國子蜂が唸り初めた樣だ。

障子を開けて外へ出た、國子蜂は單調な羽音を殘して何處へか飛んで行つてしまつた、鷄が二羽軒の下で砂をあびて居る、横に成つたり、仰向に成つたり、見て居ると仲々面白い、シイ！と云ひながら、ドタンと一つ足響させると驚いて起き上り、寢恍た樣な顏付で首を細長く延ばして居る、ブル〳〵と身震ひすると砂煙がパッと立つて少し朦朧となる、それがだん〳〵此方へ這入つて來る、仕方ないからあわてゝ障子を閉てる

古巢へ燕が二羽臺所口から威勢好く入つて來て啼き立てる、喧しくつて喧しくつて仕方ないから、はたきて追ふと、ツピイ、ツピイ、と云ひながら外へ出た、それが何か非常號報でもあると見えて少したつと仲間が大分ふえて來て家の廻りて喧しい程啼き立てる。


見はらし　失名

探海燈でも射出したかの樣に家の中が、パッと急に明くなつた、全く晴れきつたんだと見える、と思ふと何んだか急に心地が清々としてくる。

背戸口からお母さんが手を拭きながらは入つて來た、さつきの憂顏は何處へ去つたやら、嬉し相にニコ〳〵して入らつしやる、「此のお天氣ぢやあ、明日は出るだらうと思ふから用意して置きませうねえ」と云ひながら座敷へ上つて來た、又蠶卵紙でも見るのでせう。

（評）寫生文中、一頭地を拔けるもの。

五等

○四季をり〲

青山南町五丁目四十五番地　後藤よし子

四季をり〲のながめこそ、まことをかしきものにて、いづれ劣り勝りのあるべしとも見えねど、彼をよしといひ此をかなしとめづるは、只人々の心しらひを異にすればなるべし。古より物のあはれは秋こそ勝れといひけむこと、げにぞ、紅葉せる木の葉も、やうやうちりかゝりて、いとゞ淋しき夕まぐれ、三日の夜の月の光の西の山邊にほのめきたるほど雁の一つらかこちがほに鳴き渡りたる、さては近き里の砧、をちの野に妻こふる鹿の聲いづれかあはれのたねならざらむ。

見るかげもなき木々の梢に、白がねの花さきあやしき賤が伏家も、玉の臺となり、山々はた、月の都かとうたがはるゝ雪のけしき、いとすてがたきながめなり。さはいへ、柳櫻をこきまぜたる春はやよひの頃、袂そよふく風ゆるう、くまなく晴れわたる空いと長閑にて、野邊には雲雀うたひ、花かげには蝶まひ戯るゝ樣もいとうれしからでやは、まして四方の山々霞たなびき、雲か雪かとあやまたるゝ許り、艶にあでやかなる花の盛りぞいはむ方なき。

卯の花のまがきをおほひて、雪かと見まがはるゝ、咲きにほへる藤なみのゆかりの色深き、これや夏のはじめのしるしなるべき。時はやがて人を待たず、咲き滿てる花すでにちりて、黄金なす山吹いつしか香を失ひ、青葉茂りあふ頃ともなれば、何處を見るも木々の梢みづえさす緑の下、好める文繙くなどぞ、いと心ゆくわざなりける、早く夏休の來よかしと指折り數へつゝ、行李いくたびかくつがへして、心もいそ〲とせる半宵故郷の空夢みるにやあらむ、かたへにふしたる友のうちほゝゑみたる寢顔透間もれくる月影に見たる、人の世の罪もけがれも、のがれたるこゝろしてなむ。

（評）四季中、夏もつとも優れたり。

秀逸

○子守唄

鳥取市　上山千重子

生暖い風が南から吹いて來て、木立の新緑を渡り、紫にほふ藤棚の花房をゆすつたと思ふと、花かげにすやすや眠むる赤樣の乳母車の母衣をひるがへして、芝生を撫でゝ隣へ逃げた、何となく物憂い日。突然夢からさめた赤樣は何に驚いてかわつとなき出す、「オヽよいお子ですこと、ねんね遊ばせや」、抱きあげてすかせど、泣き止まぬ御不機嫌、如何してけふは？とあやしみつゝまた乳母車に移して藤の陰からはなれる、そろ〲と

庭の芝生の上を行き通うて、なれた子守唄一聲は高く一聲はひく〳〵、けふをかぎりと‥‥

オヽねヽしな、ねヽする若樣へ何をあげよう、朝日の旗、いくさ人の黄金の太刀、

私の宅は丁度こヽから半里ばかりはなれた山の一つ家て、鬼のやうな養父とやさしい母と腹違ひの兄とある母は始終私に對つて、父を恨むな、何事も此の母の罪ぜめてお前だけは幸福な運命に終らせたいと‥‥‥、で私は母のすゝめにまかせて其幸福な緒を見出すべく二年前にこのお屋敷に子守として雇はれた、母にわかれたつらさも、父にわかれた嬉しさも、優しい奥樣の手に悉く御まかせ申して、賊幸福だと喜んだ、が之も思へば束の間のはかなき夢、今朝、村の者が兄と共に御屋敷に參つて、母が病氣ゆへ明日にもかへれとの事、寢耳に水とは此事か、おもひがけぬかなしさに、夢か現か、はては腹黑き養父の巧ならずやなとゞ迷へど、とまれ病氣と聞きては母一人鬼の手にまかせん事も心細く、今夜かぎり御暇貰うて下ることにした、ア、可愛い此若主人とも離れねばならぬ、かなしさつらさに氣もそゞろ、はつと我にかへつてまたくりかへすこもり唄、蝶一つ飛び去つた。

ちごよ〳〵、ねむれよちごよ、よくねるちごは蝶々のとぶのを見てねむる、

何ゆめ見てか赤樣は無心の笑顏。

（評）雛子雛親な材料とせるもの叙事文抒情文に少からず、此文亦這の種に屬すと雖も、無心の赤子を點綴して陳套を脫し、可憐の情趣を添へたり。又曰、つまらなく人の實態に訴ふる懸賞式の文は成るべく避けられんことを此作者併に他の諸姉に忠告す。

○あやめの一瓣

長門　孤菫女史

降り續く梅雨若葉を傳うて落つる雫の音のみ切りに、陰氣身を襲うて云ひ知らぬ淋しき夕、好めるふみ繙けど興のらず筆をかめど感來らず、只何となう物のみ思はれて眺めやる眼はいつしかうるみ、遂には流れて頰を傳ふ、そを何の淚と問ふ人あらば、我は只知らずと答へんのみ、雨ふるけふの日が然らしむるとにはあらず、頃日の我は何故かかく淚もろきを、あゝわれはいつの間にか斯かる淚の味を覺えしか。

橘かをる庭の籬に、いためる胸を抱き、身をよせて仰ぐみ空に月澄める夜は、人知らぬ悲愁の身に迫りて少さき胸はかきむしりても見たく、耳をすませど戀しの笛聲なきが怨めしう、寂寞の天地に只獨り、泣きあかせし夜半もありき、思ひ出の糸繰り返さんと、絕えて久しき琴柱立つれば、音はしめり、調はあやしうも亂れて昔の妙音更になく、咽ぶが如き其しらべは徒らに斷腸の種、奏づるにたへて遂に打やりしまゝ、再び塵

の積るに任せき、なくもがなの黒髪は梳るに慵くつげの小櫛は折れしまゝ、是のみは捨つるに忍びで手箱の底に秘め置きしを見る度毎に昔を語る辛さ悲しさ、あゝ此胸此思ひ何處に如何にやるべきか、歡樂永しへにつきて又かへらず恨みはながき情なの世や。苦悶の胸を抱いて、仰げば混濁の空に雨足愈々はやく軒の玉水絶え間もなく、ふと見る前なる小溝の濁流をまひつ淀みつ流れ行く濃紫のあやめの一瓣。

（評）美しき文なり、淡々たる中に多恨の趣見えたり。

○甘藷植の記

下總　神田みち子

夕方叔父さんの家へ人頼に行く途中、鎮守の側で荷馬車を挽いて來た新樣に逢つた。間が惡くつて〳〵默つて通つて了はうとすると、「花さん何處へ？。」ハッと思つて馬の後の方へ隱れて「明日甘藷植しますから誰か來て頂きたいの。」やつと言ひ終ると、「大分手を廻しましたね。……」未だ言葉の終らない中に「お叔父さんに宜敷」元と來た道へ逃げる樣に駈け出すと、「寄つて行きなさい」。と優しい新樣の聲、妾は何だか嬉くつて嬉しくつて莞爾しながら歸つて來た。寢てからも、明日誰が來るだらう、新樣かしら新樣だつたら怎仕樣など、思つて十二時過まで眠らなかつた。

朝飯を食べて居るとお早うつて來たのは確に新樣だ。妾は後一膳食べ殘して脊戸口へ出て終つた。其中にお米（下女）も御飯が濟んだので、二人して納屋へ行く。此處から手拭を被つて鍬を擔ぎ出して、皆には關はず野良は未だ極靜かである。瑞々しい青葉の隙を洩れて露の中を徹して來た朝日の光が、しつとりと濕れて居るに出掛ける麥生の上に七彩の虹を現して居る微風が冷つこい露を懷の中へ流し込むのも、濕地の冷氣が足の裏へスーと浸み込むのも、何れ好い心地である。麥の畝へ肩まで埋つて五畝計り切つた時平爺が來た、少し後れて新樣も甘藷苗を擔いで來る。努めて顏を上げないで居たが何だか氣掛りになるので見るとも無く頭を上げると、恥かしい人が「花さんお早う」つて莞爾り、胸は遽に早鐘の樣耳元からは火の出る樣妾は夢中で鍬を走らせて終つた。何と思つてかお米がエヘンて笑ふ。やがて新樣は苗を一本づゝ切つた畝へ置いてあるく。遠くから漸々近寄つて來るので妾は一生懸命鍬を走らせて居ると平爺が脚で鍬の土を拂ひながら「新樣居るだてお花さア仕事の仕振違ふ」つて何時かの樣に揶揄ひながらハヽヽと笑つた。妾はちよい〳〵と盗む樣に新樣の方を見ると向ふでも時より此處を見るらしい、どうかして視線がばつたり行逢つて終つた其

時の間の惡サ……。お米は新樣の置いて歩いた苗へ土を懸け始めた。そして持前の聲自慢、

二人揃ふてなアーよ麥刈るすーがた、
似合ましたアーよ若夫ー婦ー。

と皮肉らしい唄、夫が妙に嬉しく胸に響く。

太陽が大分高くなつた晝飯は新樣と一緒に食べねばなるまいか。

（評）厭ふべき技巧の跡なく、何處までも處女心を失はざるは嬉し。

○漁夫

筑前　春の女

夕食後足のまに／＼彷徨ひ出て、伊崎の浦に至る。太陽は既に筑紫富士に舂きて博多灣の水面一波をあげず鵜來島は海人がたく夕餉の煙のその末に淡くして夢の如し。

あゝ平和なる夕の海、而してこの平和を破るものは、餘韻嫋々たる欸乃の聲。

舟の上右に左に動ける影の次第に濃くなる程に濱邊に佇める女の、子等と共にその影を打守るは夫や待てる父や戀へる。



魚釣り　後志　工藤すゑ子

やがて舟はつきぬ。子等は「父よ」と前後よりその毛脛を抱きぬ父は銅の如き顔に笑をたゝへつゝ子等と打連れて家に入りぬ。妻は甲斐々々しく獲物を家にと運びつ。かくて夕の暮は全く天地を覆ひぬ、半ば破れし漁夫の家にはいと心よげなる笑ひ聲高し。

汀に石の如く立てる我が胸は富を捨て慾を抛ち只愛のみなぎるを覺えぬ。

（評）平和なる漁村の夕を描いて、簡潔。

○勤務の一日

備後　中山八千代

此處○○郵便局の、會計課の一椅子を占めて、電報料の計算をして居るのは、妾なのである、餘り熱心に事務を執つた爲か、腦が痛んで來たので、電報料の通知書を押しやつて室内を見まはした、大きな簿記臺の前に、河田さんが頬杖をして、窓外を眺めて入らつしやる、金縁眼鏡が妙に光つて見える、いつも聞き取れぬ位早い、高根さんの何十何錢也の讀聲が、今日はねむそうに聞えた、課長の呼鈴がなると軍人を書い

て遊んで居た給仕が飛んで行く、同時に柱時計がチンチンと、二時を報じた、頭は益々痛んで來る、顏はあつくなる、隣の高野さんが「お顏が眞赤ですよ」と、仰るのでつと立つて、窓の側へ來て外を眺めると先刻まで降つて居た雨はやんで日がキラ〳〵と照つて居る前の柳の葉の間から、風が起つて妾の顏を、スーッと吹いて、商人風の人の前掛をバッとはねて行つた、恰度前の電線を、雨の滴が西の方へ流れた、見て居る中に幾つも幾つも、東の方から西へ、線を傳つては走つて行く、西の方が下つてるのか知ら、人の目が惡い爲に分らないのかと考へて見る、又三つ四つ西へ走る、それが何だか水滴と電流とが、馳けくらべをしてる樣にも思はれた、前の川を巡航船が走つて居たが、停留所から約三十間程の處まで來ると不意に船が停つた、煙が眞黑に澤山出る、機械の廻る音が、ガタ〳〵する、けれども中中動かぬ、船員は皆裸躰になつて、河の中へ入つて船を押す、一人は、竿を以てこぐ、それでも動かぬ乘客は窓から顏を出して船員の手元を、見つめて居る、其中に小さい渡舟が來て乘客を乘替さして陸に着けた、後には煙もはかぬ空船が殘つた、ふと時計を見れば二時半、まあ半時間も遊んだ、電報料の一日分以上計算して仕舞へる位!!!、あゝ頭痛もいつの間にか治つた。

（評）平凡なる景を捕へてかくまで書きこなしたるは才筆と謂ふべし

○暮春

鉛川靜子

日がボンヤリかすんで、床掛の拳大の字もよくは分らなくなつて來た前の障子をガラリと開いて、仰ぎ見る檐端の蜘蛛の巣には、萎れた櫻の花片がヒラ〳〵と夕風に戰いで居る。行く春だなと、何となく一種の感に打たれて、自分は目的もなく家を出た、やがてうか〳〵と辿り着いたのは大川の堤である。兩側の並木は芽ばかりの若葉して、長い淋しい堤を新來の燕が時々矢の樣に横ぎつて行く、菜の花は黄粉褪せて、しどろ〳〵に小町の末路もかくや、麥は四寸ばかりも青々と延びて、國司の館の址かとも思はれる、ソッと腰をかゞめた足許には、紫雲英蒲公英菫などが縱に横に線を作つて末の一群は頭を振つて何事か小川のせゝらぎと、私語いて居るやうである。夕日はあから〳〵と霞を通して沈んでしまふた。過ぎ去つた列車のとどろ〳〵の餘響が尚耳を去り敢へず、ボーと紡績所の汽笛がなり出した、向の平野街道を但馬在の者が、コッリンガッリンと車を挽いて歸る、西の空橙紅の雲は次第々々に拭ひ消されて一帯水の如く白く、中天の瑠璃色に接せる所明星の一點燦として現れた夕の色は遠近濃淡の差別なく林野村落凡て一丸の裡に葬り去て、畷道に續く古寺の壁が朧氣に見える計り「花は實に、なる實は粉な

になる、母チャン私は何になる　闇を傳うて來る聲の主は今土橋を渡つた少女であらう、そこゝから遠攻でもする樣に蛙の聲が高く低く斷續として聞える。

（評）「花は實になる」の俗謠多少の詩趣を添ふ。

○迷ひ路

熊本　江副らかつる

破れ籠に松茸二つ、このために路迷うた私等四人はかれシダに足痛めながらも松と松との間をぬうて、路ならぬ路を麓へたどるのである。

「どうしたらいゝでせうねえ」と思はず口に出してためらふと、先なる友はふりかへつて「何がですのよ」「何がつて、あなた餘つ程お氣樂ねえ、道は分らず方角は知らず、どうしたらいゝでせうつてこと」「驚いちまふわあなたの氣の弱いにも」「だつてあなた、もう三時過ぎてるぢやありませんか、山の中で日が暮れでもしてご覽なさい」「ホヽ、何ぼ短氣な秋の日だつてよもや三時に暮れもすまいし、ねえ須川さん、たかゞ知れた龍田山位大丈夫ですわねえ」と勝氣に云つて右なる二人の友を見た。柔しい二人は笑ひながら「さうですともさうですともよ」と云ふ。かくて又四人は洋傘を杖に枯れシダを麓へと分けた。

ほう〳〵の躰でやつと下りついて時計を見るともう四時下りつきはしたものゝさて「此處はどこ？」と私と外二人は申し合せたやうに云つて勝氣な友の顏をのぞいたさすがの友も之には少しよわつたらしかつたが、それでも勝氣は相かはらず「此處？こゝは矢張り龍田の麓よ」はよく出來た、私等三人はあきれもならず、無言で顏を見合すうちに、四方を見廻してゐた友は忽ち右方を指して「ほら、あそこが回春病院よその向うの松林が高等學校ね」と得たりがほ、成程あれは回春病院であらう、之で方角も分つたと力づいて足の痛みも打忘れ、田末の夕陽をまともに受けながら三尺路をひた急ぎ。

回春病院へさしかゝると四人の足は不思議に止まつたといふのは妙なる讃美歌がもれたからで、人に捨てられ世に捨てられ、僅に神の惠の下に建てられたこの病院を、已むなく自分の天地として甲斐なき命を保つて居る人達に、どうしてあんな晴れやかな美しい聲が出せるのかと我先きにと門の内をのぞいて見ると……おやの聲は思はず四人の口に登つた。

一人はもう皮膚が紫で眉もぬけ口はふくれ上りて左につり、それはもう一見打戰かるゝ重躰の患者、今一人のその人！見なりも卑しくないが又その夕日にそむけた横顏の美しさ、たしかに今の聲の主であらう、友も驚くはず、私はたふれるほど驚いた、實に其美しい横顏は私の一等仲のいゝ君子さんにそつくり、たしかに君子さんである、と云つて君子さんがこんな所へ來るてもあるまいに、ましてこの廿日はいよ〳〵兄さんと

の御結婚と聞いてるものを、人違てあらうか、それとも、否全く君子さん……と、「あれ君子さんぢやなくつて」と勝氣な友は云ひ出した「えゝほんに君子さん」「君子さんこんな所へ？どうしたんでせう」と柔しい二人まで云ふのである。私もたしかにさう思ひはするものゝ、さすがにさうと云はせたくはなし、思はせたくはなし「ちがつてよ、君子さんこゝへ來るわけがないんですもの」と打消して見るけれども、用捨なき友はますます聲高に「いゝえ全くよ、今ほらこちら向いて、それ、それ」私はたまらなく思ふので「よして頂戴よ宇地野さん、そんな聲高は、もしか人にでも聞かれたらどうします」「でもあなた全くですもの、それに私、君子さんが系だつてことは、もう疾うから聞いてましたつけ」仕方がないから私も一寸我を折て「さう？私ちつとも知りませんでしたの、何しろもういゝでせう、よしんば君子さんでないまでも何れ可愛相な方ですわねえ、それでも人の上ですもの、今日は歸りませうや、ねえ宇地野さん」と言葉もあとやさきに友の氣をとつて、よそ／＼しく私は此所を立去つた。が、道は云はずもがな家についてからも種々に思ひまどうたのである。

翌日私は此度は一人で再び回春病院へ行つて、花島君子といふ人が居るかを事務員に問ふたら、たしかに居ると答へた。それで私は刺を通じて面會を求めたが、君子さんは私を知らぬと云つたさうで面會を謝絶された。あゝ君子さんはなぜ私に逢てくれないでせう、私までも宇地野さんと同じに思つて居らつしやるのであらうか、逢つてさへ下すつたら私の心も分らうものを、と私は一人心で泣いてすご／＼と門を立ち出てたが、何だか名殘惜しく思はれるので、ふり返つて見たら、いついらしつたのか門側に美しい君子さんが立つて居らつしやる。引きかへさうか、行かうかと思ひなやんだが、私は斷然歸路を急いだのであつた。

あとで君子さんは私を恨みはしなかつたらうか？

（評）世にも人にも捨てられたる可憐の少女が胸中を側面より寫し出したる手腕は稱するに足るものあれど、前半茸狩の歸路を叙したるあたり、冗長に流れすぎたり。

◎電車　壽女

三田の車庫から上野ゆきに乗つた時は、私の外に五六人、しばらくしてもう出そうなものと思つて居ると、がや／＼とさわがしく來た事／＼、皆んな乗りかへて、ボギー車でない車はもう大方一ぱいになつた、やうや く ピーと笛がなつて電車は動き出した、程なく四國町停留場、乗り手は可愛らしい二人の子供を連れた奥様風、動きますチン／＼、すわる場所がないのでつり皮につかまつて居られるおつ母さんの兩の袖を、しつかり子供達は握つて身躰をふらり／＼、私は洋傘を引きよせて、少しゆとりが出きたので、さあお坊ちやんも

お孃さんもこゝへ入らしやいと云ふと、二人は嬉しそうに、おつ母さんのおかほをながめて居られる、まあ有りがたう御座います、ぢや二人とも掛けさしてお貰ひなさい、二人はそわ〳〵と、其れから電車唱歌や軍歌やらで、中々の賑ひ、時々母御がちつと靜になさい、と仰つても、しばらくの間、又元の賑はひ、芝園橋から乘つた田舍ものらしい親父さんとお店風の其の息子らしいのが二人皮にぶらさがりながら、息子らしいのがしきりと山内の内を説明して居る、博覽會見物かた〴〵奉公先の息子をたづねて來たのであらう、親父さんの顏には嬉しそうな笑がたゞようて居る、向ふのすみには私と一緒に乘つた袴に一本すじのある女學生のかみが、其は〳〵二百〇三高地はおろか五百高地もあらうと思ふ位束髮のまげが、つつたつてゐるので、皆がながめてゐる、其のとなりのお神さんらしい人が三人、しきりと博らん會の話、きつと御亭主に一日のひまを貰つて氣の合つたどうし見物に行くのであらう、中々さわがしく話し最中、今泣て氣が付かなかつたが前の方に此も地方の人らしい四十位なおぢいさんが、しきりにゐねむり、まあ其に



兄弟　若代 稚名 てい子

不用心なふところ、ぴろうどの、大きな紙入が半分ばかり、はみ出して今にも落ちそう、ふととなりを見ると目つきの恐しい、怜悧すりと云ふものはこんな顏かと思ふ樣な、いやな人がじろ〳〵見てゐる、時々車掌が御懐中もの御用心をねがひまあす、といつてもおぢいさんは一向平氣で相變らずこくりこくり、若しやぢいさんは探偵とやら云ふものではないだらうか、わざと表面ではゆだんして心の内では、大きな目をあいて氣を付けてゐるのではあるまいかと、思ふと車中で何事もない樣にと氣がかゝつてたまらない、あとの人達は大てい博らん會へ行く樣な人ばかり、前のすみつこにゐたおばあさんが、小風呂敷の包を大切そうにして、區役所はこゝでと云つておりたあとへ、二人の子供の母御はやつと腰をかけて、手の信玄袋をひざの上に、とつぜん坊ちやんが、母あさんお父樣の處へお參りいつた返りに廣瀬中佐のお墓へもお參りしようね、此度はお孃さんが、母あさん今日もやつぱり日比谷で乘りかへるのねー、あゝ僕知つてるよ青山行きに乘るんだ、ねえ母あさん、母御の婦

人は淋しい笑がほにうなづいてお目が何んだかしめつた樣な、私ははつと思つて、やつぱり名譽の戰死をとげられた遺族の方であらうかと思ふとお氣の毒でく／＼我が身にも引きくらべて、目がうるんで來た樣な心持ち、あゝ人は博らん會や遊山に行く此のにぎやかな電車の中にもこんな悲しい乘り人もあるのである。

やうやく日比谷公園について私は奧樣に一禮して降りた、あの不用心なおぢいさんはどうしたであらうあやしい人はわしや善人だつたら、一寸でもうたがつた我が罪も淺くない、お氣の毒な人達は有樂町で青山ゆきに乘りかへて、淋しい墓地に行かれるのかなどゝ、思ひながら電車はもう見えなくなつて、急にがつかりして、急ぎ足に胃腸病院を淋しく見上げて、入院して入らしやる、お母あ樣を今日もお見まひすべく門をくゞつた。

（評）温き同情溢れる上に、思のまゝに筆の動けるは、作者が實地の見聞を寫したるものなればなるべし。

○汽車旅行の一節

愛知縣　近田みつ子

彼の驛を過ぎてより、乘合の人々、頓に減りたれば、室いとう廣うなりて、外のながめの、面白きまゝに、先程の暑さ全く忘れて、外方の景色に見惚るゝなりき、溪の聲瀧の音、水は美に風は淸く、青苔深く氈を爲す樹陰、冷氣四邊に浮動す、瀧隱るれば岩現はれ、溪去れば峰起りて刹那に變り行く、眼前の光景、少しなりとも自然の趣味を解する人は誰れか此美に醉はざらむ、室の彼方には胸くつろげて語り合ふ二人の旅商人らしき人、一人は小楊子にて、黄色な齒をせゝりつ大聲にて語る、いとうるさし。そのこちらには、薄羽織きたる翁、白き扇子をぱち／＼と音立てつ外方をしきりにながめて、時々ほゝえむ樣、いとゞ趣味あり。其こちらには、眉太くして色黑く口のほとりに大なる黑子ある若き男、たくましき體を窓に倚せて、うまゐし居れり。たどる夢路も緑ならむよ。短き隧道經てまもなく、ぱつと開けし右手の眼界青々と、あな、廣し、あな涼しやと思ふまもなく、ふき入る煙に室中一時に窓を閉ぢぬ。

「小田さん！あなたの御家が、あの御藏の壁が森の横から光つて見えます」「あ、妾の家も見え初めてよ、あの松の樹も」と優しの聲にうしろふりむけば、左手の窓によりて外方をながめ居るゑがほ嬉しき二人の女學生なりけり。暑中休暇にて、歸省の途中ならむ、各自、旅鞄を持ちて、百頃の田を亘り來る青嵐に、蜻蛉とや見る夏りぼんをひるがへして、青田の彼方、一本杉の右手に當りて、奇しき夏雲の麓のあたりに、こんもりとせる青葉のはざまに、ほの見ゆる白き壁を、彼等は視つめてあるなり。

勉學のためにたゞ苦るしみし都を去つて、戀しの父母にや早く逢はん、懐しの弟妹に土産見せて喜ぶ顔を早く見むと、樂しみ多き故里に歸る彼等の想や、妾如きは一度も都に遊びし事なき田舍娘の想ふも及ばざるうれしさならむよ。速力頓に緩うなりて止まりぬ。彼等二人はそは〳〵と降りゆきぬ。

（評）趣味ある汽車の旅なるかな。

○たちぎゝ　軒の玉水

中門開きてカラコロと下駄の音するに誰かと思つて耳をすまして居ると、御免下されと、又昨日の叔父樣がいらつしやつたらうか、自分はよみかけの雜誌をもつたまゝ、そつと唐紙をあけて次の間へ逃げる、やがてつか〳〵と坐敷に上つて、煙草一服話を始めたらしい、けれども聲がちひさいので、何をいつて居るのかわからない、唐紙に耳をよせてきかうとすると、その隙間から顔が見える、氣のせいか此方を見て居る樣で氣味が惡るい、そつと後によらうとすると、あれにくらしい、たゝみがギク〳〵なる、手に汗を握り乍らいよ〳〵耳をすませる、聲は少し高くなつて折々きこゆるは彼の人の名！自分の名！あたりに人もないのに何だひとり顔が赤くなつて。あゝ自分の娘時代もいよ〳〵去るのか知ら？一度奧樣とよばれてはもう〳〵お孃樣と云はるゝ事も出來ない！一生出來ない！また一度奧樣となつた以上は再びお孃樣とよばれたくない、あゝどうしよう、どうしよう、身躰は大きくても心は幼いのだもの、と波うつ胸の皷動をおさへながら思つて居る、話は暫時とぎれたらしい、やがてポンとキセルをたゝく音して「そして明日はお孃さんの學校からお歸りを本人が拜見したいと云つて居ますが」、おもはず胸がどきつく、定めて自分は不在であるとおもつて居るだらう、あゝもし私だつたら其話をきいた時ふき出すかも知れない、流石お母樣はお雜煮のかず多いだけつゝしみ深く、只ホヽとばかり、何かわからないがお返して居らつしやる、折柄裏門をガチャ〳〵あけて、腕白盛りの弟、遊びから歸つたらしい、あゝどうしようか知ら、此處は弟の居間、きつと此處へ來るだらう、來たら姉さんと云ふだらう、云つたら自分がかくれて居た事がわかるだらう、どうか彼方にいつてくれゝばいゝがと思うてモヂ〳〵して居ると、果して廊下づたひにドヤ〳〵と、此方へ來る樣子、もう仕方がない、自分はコロリ横になつてねたまねをする、やがて襖をさらりあけて聲も大きくあッ姉さん！私はおどろいた樣なまねして、お政さん何時お歸り、姉さんねて居たよといふと、蒲團もきないてと、怪訝なかほつき、ます〳〵返事にこまつて、只ねとぼけた樣なまねして居ると、客は挨拶もそこ〳〵辭じ去つた樣子。あゝあの叔父さんはどう思つてお歸り遊したどらう心配でならない。それにしても明日の學校歸り、私は道よりしておそく歸らうかしら。

（評）月下氷神と後姿を拜みやしつらん。

新體詩

河井醉茗先生選評

二等

○白蠟灯たさゝぐとて

長野縣諏訪郡下諏訪　山田くに子

悟る日の冷さ夕よ、
聖壇に白蠟灯さゝぐと、
朽はてし信の階、
恐怖に登りゆく我が
罪の手に捧持し白蠟灯の、
烽の光は立ちつ沈みつ、
一階毎に強く戰悸き、
（聖の燃火を胸に受け得て、
なほ憧憬ふ罪世の虚榮の、
魂ぐもり＝人の命の、
短かきを永劫さけがれに、
埋め行く我が行く手を）
聖靈の如憂げに射しぬ――。

罪の手に持ちし白蠟の火のゆらぎは、微かながらも强き印象を與へる詩材でした、進境躍如、近來の傑作と信じます（醉茗）

三等

○土の香

土佐國長岡郡新改村東川　大和田靜子

土の香は煤烟黒ふ
黄昏るゝ鈍色に
夜走り來る如も
うらぶれの身に逼る

貪亂の魂か
西東はせめぐる
折々にうちあひて
ほの青き火を見する

深夜なりもつれそひ
傷を負ふひた寒むの
胸の野に黑々と
翼を交む影法師

毳けたる腕あげ
そを捕へうちすえて
圓華の夢みんと
焰はあれどあゝ弱き

いづくにか脈の音
するらしもさながらに
龜裂るゝ旱魃地の
惱みがち生靈眠る

土の香、よろしい、能く採りました、はッきりと説明は出來ないにしても、清新の氣が身に滲むやうです（醉茗）

四等

○壽美禮

近江甲賀郡柏木村泉　辰井はな子

蜘蛛我領と綱張れる、
裏のむしろ戸夢の如、
小山に暮の雲垂れて、
こは目にあまる若草や。

一人の母のめぐし子に、
縋り給へる山の家、
我れゆきて後草生ゆと
便りありしはいつなりし。

かの分水の嶺を越え、
思ひ繁きは歸り來て、
紫深くうなだるゝ、
雨洩る家のかたはらに
あゝ咲き充てる美しさ。

梨地模樣をとざしたる、
榮燦爛の紫の、
星の雫の地に落ちて、
甘露にそだつ花かこれ。

見よ、今花に飾られて、
藁の庇も破れ壁も、
家聖堂の浮彫の、
光を帶びてたゞよへり。

皆、能く言ふ事ですが「あたま」をお養ひなさいと、あなたにも言ひます、詩語の美くしい派手やかな處をよりどりにして、御作になる聖堂浮彫の如く輝かすのも結構ですが、內が、がらんだうでは、見物人も感心しません、斯くあなたに苦言を呈するのも、御熱心と、詩才の好い處を認めて居るからです、道は幽つてはいけません一筋です（醉茗）

秀逸

誰故泣きし一人子ぞ、
今、日をうつす草の原。

床かしき花の壺菫、

雙樂　八王子　乙羽もん子



戀しき妹に離るゝとて

名古屋市　内藤てつ子

世を咀ふ神のし業か　吹き起る旋風に捲かれ
別れゆく人の運命を
今更に恨み哭くなり
海越ゑて鳥の行く如
新潮の落ちて去るごと
「南」に君はかへらむ
哭き沈む我や忘れじ。

おほわだに吾や浮舟
詩の神の情けもうすく
打ちよする浪にまかれて
明日知らぬ命の終り。

うらやまし父に逢ふとや
現世のすべてを忘れ
今日よりぞいつきまつれや　我願ひ君にこれのみ。
されど君、君ゆく方は　毒多き國ぞと聞くに
朝北に肌さらすな　又逢はん時をたのしみ。

いざさらば君と別れん　今よりは永き別れと
知るからに憂をすてゝ　しらべずや小琴抱きて。

少し引しめると良い詩になつたでせう(醉茗)

○はふり子

埼玉縣　遠藤勝子

神代がたりに夜は更けぬ、梅が香せまる白几帳、
御あかし今やきえ〳〵に、月廣前に雪のごと、
老しはふりはまどろみに、天地の闇ほの〳〵と、
開けし神夢や、迴るらん、若きはふりは神籬の、
白梅かざし、甕の腹、うちて興ずる太古振、
瓶子こぼるゝ酒淡く、白梅淡き朧ろ夜を、
緋袴ふみて檜扇に、舞ふ兒もあらばと冷えし酒、
また土器に注げるとき、誰ぞや几帳にうつる影、
少女姿のかぐはしや、白梅の魄やぬけいでし、
少女清らの白綾に、月も照りそう緋の袴、
神の御前にかしこみて、瓶子捧ぐるやさしさよ。

變つた材料です、人も景色も此位ならば善く表はれて居ます、はふり子、八少女、何れも神樂を舞ふ少女の事です(醉茗)

○恐怖

土佐　石川一菫女

けら〳〵と巫女の笑らびに似たる音に
小田の蛙は鳴けり雨を呼ばひて
薄雲の日光かくせる頃より
生温るく風はゆるぎぬ
もの思ふ甲斐なき悶への
想の「ひこばえ」一つ一つ
もぎてちぎりてはたと地に
なげてすてゝ足駄にふみにじる
疎らに透ける胸の分子隙
空虚もとめて色なき煙とざすか
魂は去にし藻ぬけのから
形骸のみ野にたち空を仰げる
若草のそよぎ
さら〳〵と微弱の葉ずれの音
むぐらもち根もとにせめぐか
草むらに蚯蚓なく
つと母鷄の翼にかくれし雛の
親鳥したふそれにもまして
心餓えたる病める子の
南の天に極彩の「こけら」の如き雲を見き
現なる心に何を見て何を思ひて

さは驚くや恐怖よせ來し
石の上草の上どこともゆはず轉ろびつ
色うしなひて走せてもかへれ

ふすま引き椅子にもたれぬ眼閉ぢて
胸の上に手をのせて見る
若かりし紅き血凍りて
石のごと凝りぬ冷めたく――

恐怖には相違ありませんけれど、其恐怖の根拠から恐怖らしく歌ひ表はされて居ません、技巧も常ほどはツきりしないやうです、光るやうな句も二ツ三ツはありますけれど（醉茗）

○春さん

日本橋　坂本愛子

春さんは七歳の少女、　此の夏を薄衣着た
其色は眞白野の百合、　其の姿よ天使とも見え
鈴はつた目元かはゆく、　乳色の絹なす額
淡紅の林檎の頬肉、　下げた髮なびく海草
夕暮は打ち水滴る　無花果の廣葉のかくれ
燈籠に灯いるゝと、　いたいけのあゆみをそよろ
あつき日を日曜なれば、　わが森の家に訪ひ來て
夏草の花の木戸より、　「姉さん」と親しみ呼んで
繁り葉の樹がくれ、　春さんは斜にうつむき
われはまたまともに座り、　歌つたは「少女の歌」よ
此の歌は兄なる人が、　近江より送り寄越した
薄葉にやさしき調べ　男文字情のこもれる

多少の用意を以て、現代の口語を詩に入れやうとする努力、健氣てすが、此れては未だ／＼熟しません（醉茗）

○春の輿

赤阪　齋藤茂子

み空に高き鳥の歌　花にかくるゝ蝶の舞
かげらふもゆる野邊にして　佐保姫君が御輿を
女子なれば箏すてゝ　いさゝ小川に衣そゝぐ
花の木蔭にたゞづめば　薄紅のハラ／＼と
淸き流に音たつる　白き水泡にちりながら
春の香高う山吹の　枝折れしかげに消えてゆく
春日かゞやくほゝの色　かいなにふくや春の風
女子なれど衣すてゝ　詩口づさむ春の輿

遠慮なく言ひますと、詩語は未だ舊套を繰返しておいでになりますが、何處か新しいにほひがあるのです、此れから先の進みやう次第です（醉茗）

○牡丹

露花

春を薫ずる星の世に　小蜂眞晝をわかやぎの
天女が夢の溫かさ　讃歌こゝに糧を覓め
精か――薄靄香にゆれて　羽衣かろら紅蝶が

粧なりし花牡丹。　快樂舞ひくる何の興。
光めぐるや紅玉の　たとへば戀にたぎる血の
綾羅につゝむ盃と　零れて地に花と生れ
甘露匂ふ底にして　ちひさき花よよき蟲の
摩尼よきらゝの蘂の彩　司ぶりなる花の由緒。
詩歌の宮をかざるべき　靈花なれや、籠りたる
眩き生命招ずべう　さりや、金皷に愛でむ哉。

詩歌の宮をかざるべき――一聯は想像もあり、技巧もあり、確かに好い句です(醉茗)

○ゆく春

長野市　安孫子美子

花を榮を誘ひて　春葬りの鐘の音に
小さき怨は負はさねど　感得云はじ何となく
寂寥と人のやさ肩に　拗ねて泣きたい春の暮。
ひやひやと迫り來や
寂寥は吾を屠る。
行衛やいづら夕暮の　一條白き野の道に
ふと行づりの麗人が　白粉はげしさらばひの
形姿いぢらしう見返りて　冷たき微笑に別れたる
淡れ行く春の影
朧ろかに――凄婉に――

後半、ゆく春の感情は表はれて居ます、前半は未だ力が足りないやうです(醉茗)

○紅薔薇の君へ

四谷　櫻子

例へなばみじかくて、　いと細き糸の身を、
君が魂のいと宏に、　まかむとしたるおろかさよ。

もろきさがは現はれて、　音もなく糸はきれぬ、
さなくともみじかきを、　つなぎなば君が魂に、
まくには丈の足らざらむ。

さらばとてきれしまゝ、　袖に秘めてひとゝせ、
おもひ出の紅涙に、　染まりたる紅の糸、
今更にとりいだして、　つなぎても見る追想の夜や。

比喩はなかなかうまいものです、少しわざとらしくなりましたけれど(醉茗)

○雷

麹町　山下里子

恐ろしや、　雷の音
魔はおそひ、　せまりきぬ
椽に立てば、　いなづまの
ひかりいと、　するどかり
頰に袖あて、　しばしがほど
目もあけず、　かけこみぬ
母がひざ、　稚兒のごと
すがりては、　身のふるへ

さゝめきの、
おぼろげに、
云ふだにも、
妹は、
側にゐて
みよちやんと
もろともに笑はれぬ

聲さへも
やみぬとぞ
驚きぬ
香たきし
となりごの
弱きよと

なかしい作ですが、雷を恐るゝ感情をもつと直截に表はして欲しかつた（評者）

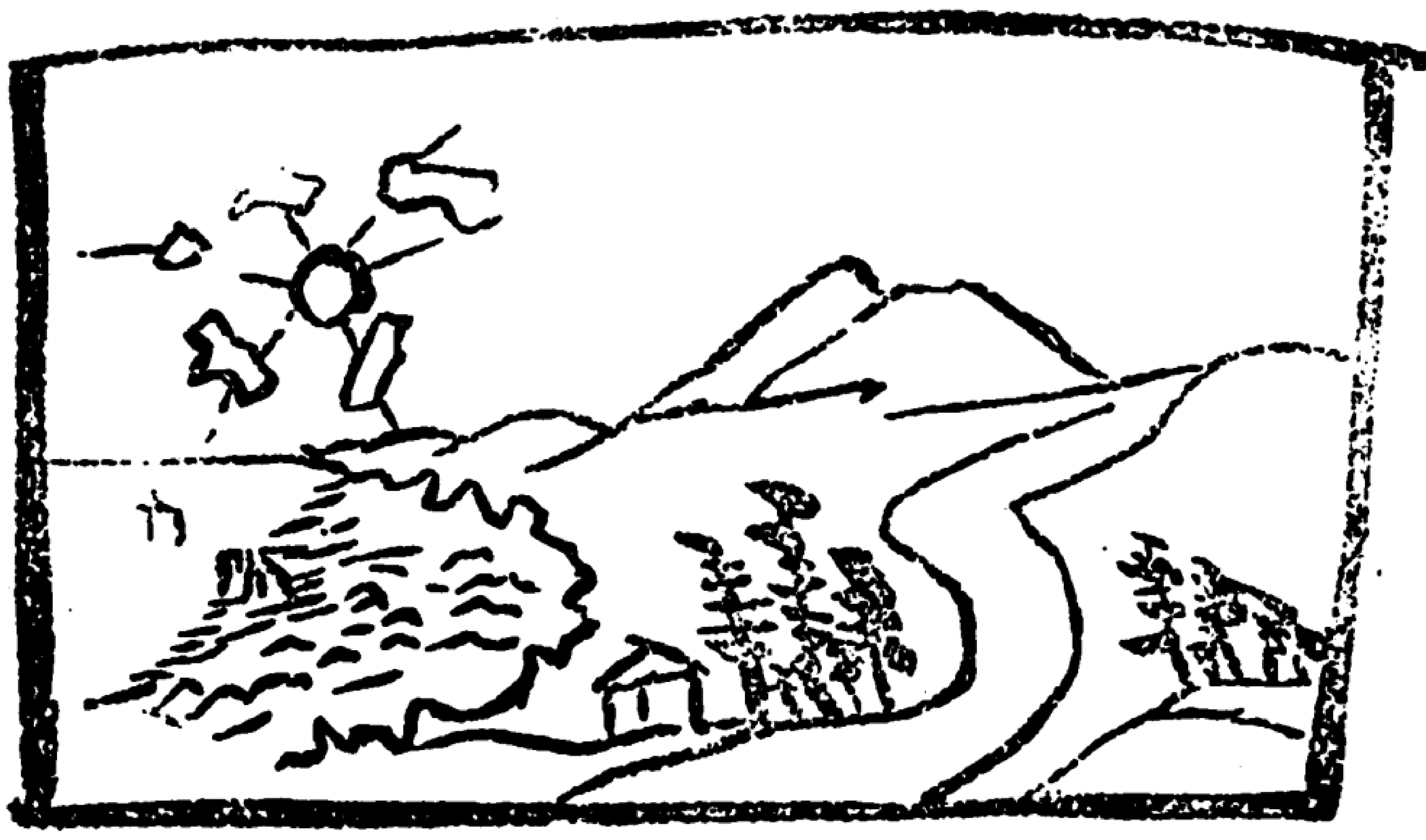
○山猿

麹町　淺井千鳥子

靈雲こもる森蔭の、
しづけきところゐりいてゝ、
宿移しけり山猿の、
肥えたる脊は圓くして。
一と日あれたる風たちて、
木の葉はゆらぎ果は落ちぬ
はげしきまゝに肩をうち
脊を打ちては悲しみぬ。
茂りし笹の小隠れに、
雛を探すと掌を、
小鳥追ひては追ひくるめ
茨のとげにやぶられぬ。

山猿と云ふ元來滑稽な動物ですから自然にをかしく歌はれるのてせ

朝凪の海　羽前　澁谷錦園



○朝の野路

下野　鈴木雪子

初夏の野をゆけば
ちいさき蜂のとびめぐる――。
茄子の花――美う香ゆれて
紺瑠璃の玉のごと
茄子の實の美しき
茄子を切るとて畑にゆく
人妻めきし友見ては
わすれともなき倖かな
病みほけし身のいたましき
（まださき
茄子もぎて
齒を染めて
おどけたる――。）
昔しの友は美しく
身づくるまでに年たけぬ
吾が想ひ胸は寂しき。

輕快の作（評者）

通有の寂しさ、茄子畑に感じたのは田園詩とも云ひませうか（評者）

○病みぬれば

牛込　秦はる子

春武藏野に雲搖れて白蝶舞はむ菜の花の、
飜れて潰す水なれば亂れ心の現なに、

環に列ねし白椿投げては沈み流るらむ。
天上の母の育くみに蘇りたる春の野は、
紅ゆる、撩亂に涙溢れて心から、
憂ひて淋し花にのみ夢は殘れど山陰の、
濕地の苔の春知らず――樞鳴すなたわゝ扉は、
羽蟲這ふ程朽ちぬれば。
袖に包める若菜籠摘みたる花は溢るれど、
夢にはつらき春の夜を幾返りする胸の血に、
鬢のほつれ毛ゆるがせて灯細き影に泣きつゝも
我に似しよと虞美人草の一ひらづゝを抱く哉。
櫻吹き捲く夕には春の旅こそ終りけめ、
霞に沈む身なれども花の行方は幻と、
風は沈默に走らずに東の草に觸れてゆく。
汚れし土に麗しの詩も生るれど病みぬれば、
雹の世を脆かりし花といはれば足らんもの。

(水に沈まば底宮の
玉の柱により添ひて
紅き眞珠の冠しつ
水城の王と呼ばましな)

才華はある、洗錬もしてあります、言葉の連續が少し變です、氣を付けておなほしなさい(醉茗)

○海邊の巖上にて

徳島　長曾我部菊子

君重子の首に手を纏きて

裳裾ひらめけ南より　巖が根退る春の浪
碧きが浪に泥みて　閃くかぢは誰が海舟ぞ
緣りの眉とすれ〳〵に　放髮遮ふ手をとりて
かきがら曝れし巖の上　眞玉手纏きて彳めば
背向て見やる八方を　青雲飛びて遙なる野
山の窪みの菜の花は　和むや黃なる風立ちて
水門に瞳を見放てば　潮に蹤く淡路島
紀伊の陸並霞濃うて　白鷗は沖に羽を翻す
渦は鳴門にとゞろかしう　かへりみすれば絹縫
五百重と浪の目耀ひて　播磨國おぼめく春日かな
あゝ朝磯掘る海女のまへ　夕船曳く網のかげ
さばかり汐に盲てられてなぞ　此子愛らし色白く
見よ我君重！葦の穗に　北泊村海に沿ふて
山明なる花隱れ　乙女と幸福と浪は祝へり。

全體に取り立てゝ印象が殘らないのは何う云ふものでせう、好いやうな處もあるが、要するに急處を捉えて居ない(醉茗)

○小宮川

奈良縣　森本あさ子

岸のせゝらぎ音もなき、
にしき織なす岸のべの、
春は色こき小みやかは、
底にかげさす桃のはな。

そよ吹くかぜの訪へば、
二ひら三ひら亂れては、
哀れ花びらいつしかに、
あへなく散るや川の面。

花咲く野邊にまひあきて、
いそがぬ水に任したる、
やがてきたれり蝶一羽、
花にあどなく眠りしよ。

さそはぬ風の花小舟、
暮れゆく春を送りては、
やさしき蝶の夢のせて、
いつ迄さめて流れ行くらん。

未だ新體詩も極く初心の方と見ましたが、いつ迄さめて流れゆくらんと結んだ手際に感じて秀逸に入れました（靜茗）

○外科室の歌

滋賀縣　永井やな子

日の光り
南の窓に映て明るく
黑鐵の床きよらに潤ひ
奇しき香放つ藥の泉
壁に湛へて晝靜也
神の御使生命の司
佛心の醫師の君は
鬼手殿に刄を執りて
從容迫らず病軀に臨めり
戀や秘めたる乙女の胸に
劍の稻妻さと閃けば
滿座の靈吐く息を噤み
咳も得せず眼を睜る
施術終るや死の大神は
「勝関」醫師の丹唇に上りて
神輿を廻らし冥府に歸り
人々の眼喜びに輝きぬ

○初夏

小石川　馬場不二子

こゝをも春の逝きしとや、
若芽の末に露しげく、
朝な／＼に葉櫻の
卯の花白くほゝゑみぬ
梢むなしき夏こだち、
散りにし花をとむらへば、
思ふ力もあぢきなく
あはれ血になく時鳥。

○水車場

京都市　島田千代

かたことゝ米搗く音の。
谷川の水堰きとめて。
慣るれば夜も熟睡しぬ。
掛樋に廻る水車。
呑ては吐ける落ち水の。
藁葺きの小屋苔つゞり。
眞白き玉と迸ばしる。
水屋を繞りてあやうかる。
倒れかゝりし薔薇垣。
やせたる桃の叉枝に。
淋しげに咲く小さき花。
掛けて乾かす古襦袢。
水車場守は唯一人。
頰かぶりして佇ずみぬ。
糠にまみれし筒袖に。
春の日影に雛の
雛うら連れてあさり行く。
山鳥の聲水の音。
かゝる谷間の山里は。
いと閑寂のけはひかな。

○昔にて

青山　後藤よし子

門の谷川むかしにて
流るゝ水にことゝへば
契りし人は影もなし
いはれに獨りむせぶなり。
門の横山むかしにて
しげるおどろにことゝへば
こりにし人のあともなし
露のみちゞに散りまどふ。
門の袖垣むかしにて
すがる忍ぶにことゝへば
むすびし友は影もなし
あさぢにきけとなびくなり。

門の櫻はむかしにて
木ずゑの花にことゝへば
眺めし春の友はなし
風に怺へずはら〳〵と。

門の山松むかしにて
しづ枝ほづ枝にことゝへば
遊びし友の聲もなし
嵐ばかりぞふきまどふ。

府下　鵜澤白菫

○輓の馬

小童荒く手なづくる、
春と覺ゆる蠻、
流石嬉しき數奬を、
耳朶に響く鈴の音を、
時は輓を強ふるなり、
怨まじとして軀を見ては、
生を我が界に神ばかり、
就れ從ふ可弱さや、
云はれど逆を思ひては、
力なき脚よろぼへば、
小屋を嵐の吹き貫くも、
立てば震ひの自から、
權力の宣命と思ふ間に、
今更ならぬ運命をば、
繰るに環の盡きもせぬ、
はからにたる掟とて、
罪に覆ひをと誰か云ふ、
鞭のゆるびよせめてあれ。

北海道　工藤すゞ子

○春の賦

五彩にけむる天地に、
七彩匂ふ雌雄の蝶
春の譜に和し舞ふて行く、
舞の座はてもあらなくに。
ゆかり色濃き佐保姫が、
世に影とめぬ讃美歌は、
空の棠字に刻まれし、
春の齢をことぶくか。
うす紅の水干に、
呪詛にたへぬ吾さへも、
溜れど淡き朧宵。
甘き栗を得しごとく、
勢に満ちて甦る、
花風わたる紫野、

霞裾にかほる花風の、
いよゝ猛くて陽炎が、
先づ上天に朝すあり、

逍遙すればむらさき野、
やがて永世にひき去りて、

備後　二子山

○落葉かく子

朝星をばいたゞきて
夕月をばになひつゝ
兄は七つか籠さげて、
ひれもす落葉かきあつむ、
はゝそばの母いづくぞや、
峰山颪さむけきに、
やすまずやや踏共に
野に行くわらは誰ならん
かへる子あはれたれならん
弟は六つかつゞれきて、
ちゝのみの父いづこぞや、
時雨の雲はひくゝおち
あの松かげにたちよりて

成田　きさえ

○ゆく春

鳥ないて泉ながれて
靜にくるゝ春の夜や
うつろひはてし櫻花

思へば辛き人の世に
薄きさだめをかこちつゝ
小唄うたひて流れゆく

あゝ美しの神の寵兒の
またこん春はあるものを
湖の面さゝ波しわめ
獨りよりゐる夕窓に
昨日の夢はいづこぞや

かれもうれひの若人か
いためる心そのまゝに

汝がゆくえはいづこぞや
汝はかへらず永久に

横濱市　錦戸彩子

○梔子花

あゝ「やまとなる、
いはてぞおもふ、
いま文月の、
くちなし花ぞ、
とはのさかえに、
胸におもひは、
露おくあした、
おごそかなるを、
小さき唇、
くちなし山のやまかつは
心ひとへに」しのぶかな
月のにほひぞ星の香ぞ
かぐはしきにぞ精神（たま）ゆきつ
入りて眠りてやすむごと
ひめ百合のあかきにませど
つゆひるま、夕べ夏雲
ながめ入りてはあくがれつ
ふるはせど、ほどけ得はせて

星のまなこに、
凪より夕に、
見入りつ、胸を、
梟の聲、夕ぐれさびし、唖々とのみ。

○森の歌

若き子の額に、
大夏なれば木の空洞に、
天鵝鳥の栖巣も見て

むらさきの靈射て曳かん、
裕櫻かざす昴りに
露ふる楡の立木蔭、
森の精の氣腕に泌む

こは朝なりや刻々と、
現し身纏ふ若芽靄
幽渺の想わが詩歌
多くを成さず想は今し
青海波、空罰る
地平の線を出づるらめ

○花の小舟

牛込　晤子

花積みのせし銀盃の、
姫の御手をそとはなれ、
姫の御袖に風たちて、
譟れて散りし奘し子の、
逝く春の日を靜々と、

○今宵の夢

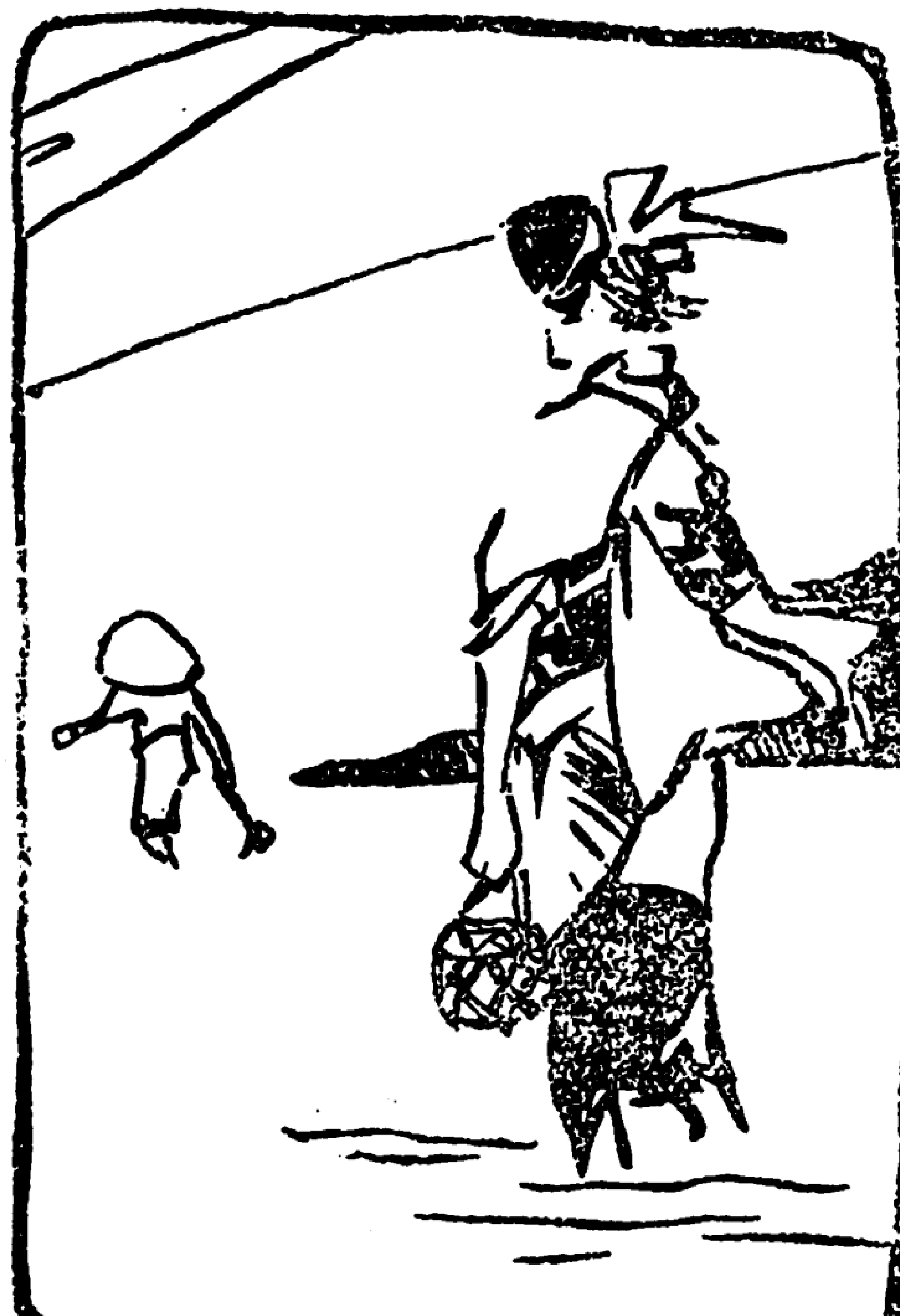
やどろ涙の、あゝ、しげき、
思ひ堪へてや蕪ふ方
おさへては、もだへの果の

佐世保市　きぬ子

聳條立たす菜のそよぎ
蛤とり

夕月さす家根に生ひ立つ、
迷蠶の往復しげく、
うら若き妻戸をくりて、
呟きつ、つと巾に入る、
ひそ〳〵と囁きあふは、
一年の世のあらがひに。

大阪　紳田こと子



紫迸るさゝ川に
波の紋のゆたかなり。
花の小舟はゆれにしが
奇しき光を先だてゝ
南の國へ流れ行く哉

麹町　大島ふゆ

さと紅染むる頬の熱
妻と呼ばるゝ身にしあれば
鏡の面を眺め入りて

○葉分けの月

夕風のあとたえぬ、
青葉々々のさゝやきに、

一入の風になびけば、
星ぞ飛ぶ故里の家。
かなしげに「明日は雨かな」
洩るゝ灯のあな靜けさよ。

この家の夫婦なるらむ、
勝ち得たる妻や黄金や。

ほこりがに都にのぼり、
若葉かげ博覧會の、
笑々しきに魂の行方を、
疑ふと今宵は夢見む。

○幼心

岩代　笑子

處女十九の祝事は
神のみ攻に逆ふとかや
吾れひとり子の愁しさに
今年十九の春の宵

人の妻とはなりにけり
結び馴れざる新髷を
鏡き面てにふさひぬと
老いたる人に笑はれて

昨日處女の吾れならで
此の熱永久に冷さじど
固き操を吾れに誓ひぬ

遠江　鷹見靜可

こりてし雲の空に浮く、
業分の月ぞ上るなる、

青葉々のさゝやきや、　巨人かこれ靜まりて、
森かげくろき丘の上、　宵をみ寺の鐘なりぬ、
月はうつりて雲に入り　鐘ぞひゞきの尾の長く
誰に夢よりさめ出てゝ、　昔をこひて泣と響くや。

○雲雀
下野　國友よし子

さもあらばあれ鶯の、　たくみの奥はつくされど、
または深山の駒鳥の、　しらべの程はうたはれど。
はるかに匂ふ菜の、　雲押し分けてうらゝにも、
揚ぐる雲雀の調べこそ、　天使の歌と聞ゆなる。
歌ふまに／＼影消えて、　妾は雲に入りながら、
調べは落つる草の上、　安臥の床や忘れざる。

○面影
久留米市　翠葉

かつてみしさびしき冬に、　わすれえぬ人の面影、
西東ゆきたがへたる、　夕やみの雨ふる野路に。
まぼろしの夢にあこがれ、　しのびしか萩枯れし宿、
たが家とわかぬもうれし、　なつかしむ昔しの幸の。
年月をいくつかかくて、　いたづらに惱み果てにし、
面影の主にまみえず、　うたかたの儚き夢と。
人戀はじ戀ふにはあられ、　身に泌みてとはに忘れず、
いと聖く胸にゑがきて、　あがめなん、命とこそは。

○逝きし母
和歌山　市村重子

思ふ想は多けれど　亡き母思ふ想こそ
想の中の想なれ　思ひ起せば早や三年
過ぬる昔たらちねの　いとしき母はひさかたの
雲井遥かに誘はれぬ　人なき室にうづくまり
流るゝ涙をおさへつゝ　仰げば高き大空に
輝き初めし星一つ　さては其星眺めつゝ
母の面かげ忍びけり

○菜花日和
福岡　藤村芳子

春の月は　うすら照り　かぎろふやうらゝかや
黄金波　香ほる波　花波の美はしう
ゆるやかに菜の花の　靄ぞまく　遠方の
野の家をめぐりては　さゆらぎて流るゝよ。
ほろびなき世の色の、　ごとくにも　咲き滿てば
目路はるか美はしう、　彩雲の　うずまきて
夢ごゝち　うつら／＼、　うらゝかの　花日和
さればこそ　野の人の、　此日頃　休ひの
喜びは　その胸に、　その眉に　あふるゝよ。
うら／＼と　日はめぐり　時はしもゆるやかに
樂しうも　流るれば　花の中　野の寺ゆ
鐘の音の　響くなれ　なよびかの日も暮れて
おぼろ波　おぼろ／＼　野の家に灯ぞともる。

○蟬の歌
相模　野島さと子

小さき丘の草むらに、　小蛇うかゞふ花蔭、
くすしき殼をぬぎすてゝ、　蟬はか弱く甦へる。
日盛り野邊は勇ましく、　光りの征矢の烈しくて、
緑りに迷ふ老鶯の、　羽ぶりものうくひるむ時。
茂り葉洩るゝ日の影に、　雛の羽袖を打ちふりて、
夏を讃ずる汝が歌は、　野にも山にもあふるなり。
夫れ塵の世の夕まぐれ、　樹陰にひとり佇めば、
調べもかなし蜩の、　いづれ變らぬ節を聞くかな。

短篇小説

廣津柳浪先生選評

三等

○葉書の繪姿

仙臺市上染師町二十一番地鳴原方　高屋ちよき

上

なつかしいやうでおそろしいやうでまたそつとだして見る。あゝどうしても姉さんだ姉さんにちがひない。ふつくりとつた前髪のおくれ毛二筋三筋ほゝに落ちて力なさそうに、ハンカチ握つた手のあたり、あゝどうしても姉さんだ、撫肩のほつそりとした被布姿あゝ別袂た姉さんにそつくりだ。

中

あゝこれはたしかに姉さんだろうか？姉さんは今頃は何處に浮世をうらんでいらつしやるだろう。

御父樣が多年御研究の血族結婚のおそるべきことを世に公になされたときには、もうとうに姉さんと賢さんの仲には美くしい戀が語られてしまつてあつた。

御母樣や姉さんや賢さんが、泣いて御父樣の御袖にすがつて御ねがひ申しても、御父樣は、遂に從兄從妹の姉さんと、賢さんに夫婦の名は許して下さらなかつた。

御父樣はまあどんなにか御苦くいらつしつたろう。失意の男賢さんは、其の失意によつて一道の光明を認めて遠くテキサスの地に……一封の書面を殘して無斷で……其の目的は知らないけれど向はれた。

失戀の女姉さんは、日頃の薄弱にも似ず、これもなが〳〵しい御手紙を殘して、何處ともなく家を去られた。御母樣は人を遣つて、跡を追はせやうとなされたけれど、これも御父樣は許して下さらなかつた。

あゝ何故御父樣は、あんなにつれなくなさるだろう。けれど、御父樣には、何か御考へが

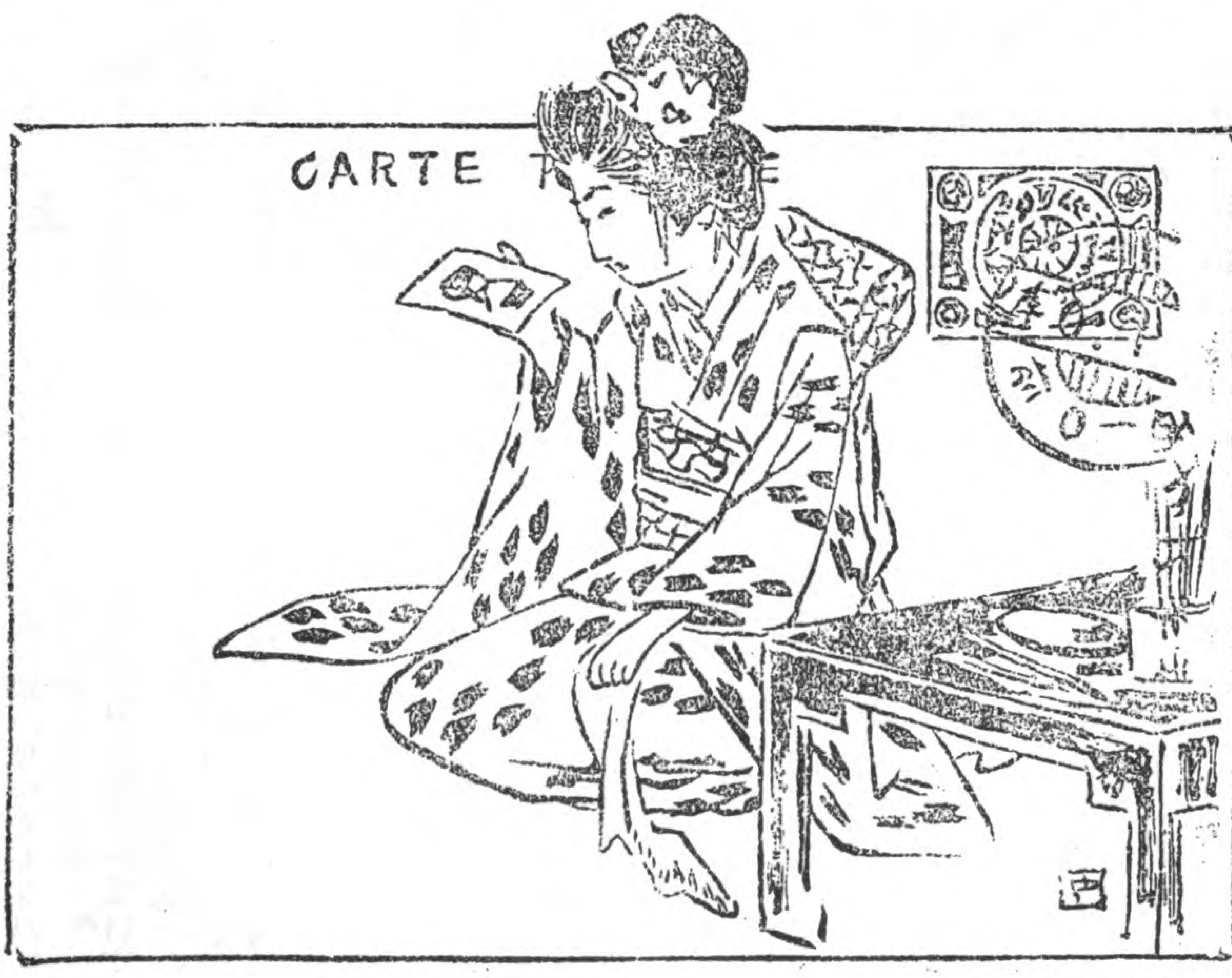
あつたらしい。

其時私は泣いて、泣いて、姉さんを慕ひ戀ひこがれた。けれどとう／＼姉さんはかへつて下さらなかつた。この時から、この私は、この藤浪家には天にも地にもたつた一人の子となつた。

賢さんの跡を慕つて走つた姉さんは、どうしてあの薄弱な意志で、それも女の單り身でうまく異國の地につけやうか？それは、秋の落葉のなほそれよりもおぼつかなひと私は思ふ。

下

あゝこの半身の立ち姿、この繪葉書はほんとに姉さんぢやあるまいか？表情のある其の目、きつと結んだ口元、あゝどうしても姉さんの目だ、口元だ。



きりつとしまつた全體に、どこかこう決斷しかねるやうなところの見えるは、あゝたしかに姉さんにちがひない、どうしても姉さんだ。姉さん！姉さん！けれどもあゝ繪葉書になどなるのはそれは賤しい女のすることぢやあるまいか？どうしてあの聖い氣高い姉さんがこんな賤しい女になんかなられやう、それはきつと／＼なられる筈がない。

あゝそうだ、他人の空似と人はよく云ふ。あゝこれが所謂他人の空似だろう。けれどもあゝあの薄弱な私の姉さんは今は：：：何處にどうして居らつしやるだろう。：：：姉さんの名は、あゝ云ふも戀ひしい幸子である。

姉の姿か、他人の空似か、意志弱き女の行方を悲しむ、情緒纒綿、一篇の傷ましい追想記、くりかへし／＼言ふ處もくどくは聞えない（選者評）

四等

○光子

麹町土手三番町二十二　山下里子

静寂にともる春の灯に照らされて、静心なくすやすやと、穢れたる世の憂さも知らぬ顔に、膝の上に埒もなう眠つてをる光子を見ると、私は何とはしらず熱い涙がはら〳〵とこぼれるのでした。

光子……光子は漸と二歳になつた許りの赤兒ですが、よく母親を慕つてくれます、自分の口から斯う申すのも可笑しうございますが、誠に大人しい子でして、他家樣の御子のやうに、ひい〳〵と消え入るやうに泣くこともなく、いつも夢みるやうに嫣然と笑つてゐるのが、天の御使かと思はれる程に、可愛いといふよりは寧ろ氣高いやうに、見えてならないのです。

實際、此の子の爲ならば命も惜しいとは思ひません、私はかう思ふ度に犇と抱きしめて、櫻の化石の如き頰に、熱い接吻をするのです。

花はちりました夏は最近になりますのに、この可愛い光子の衣服も出來ないのでは、ございませんか、勿論此頃は私が少し心配ごとのために、物うくてならないのです、光子は何ぜ可愛いのでしやう、父樣が御出なくとも、私をなぐさめてくれます、私は光子が居なかつたら、もうとうに死んでゐたでしやうよ、父や母は近くにゐながら出入も出來ず、世にこれ程なさけない身はございますまい、越し方を考へればうつとりと乱れ髪に血氣のない眼から熱い〳〵涙がこぼれます。

光子は決して泣きません、美しい眼を見張つて、私を樂にひき入れます。

光子！私の心はこの言葉でみたされてゐます、悲しみ愁さびしみ、こも〳〵に廻つて常に堪へられなく一日人に顏見られるのがはづかしく、家に籠つて泣いてばかしゐます、可愛い子を置いて父はどこに行つてるのでしやう、あゝあゝ決して恨みはしませぬ、身のたらぬは吾が罪と、幾夜を泣き明したでしやう。

出てゆけがしの御あつかひ、私がどうしてゆけましやう、光子をすてゝ——一寸もはなれるはいや、どうして〳〵放れるもんですか、石になつたつて——御里の兄樣はあゝ云ふ方故、何かしてやるからかへれつて仰しやつて下さる御言葉はうれしいが、かへりませぬ、里は意地でございます、繼母の手にどうして渡されましやう、きつと和げて御目にかけます。

さびしい〳〵此一と夜外はしと〳〵と、春雨の絲をひくやう、どれ母子二人の此家に、ありもせぬ夢でも樂しみましやう。軒がばたつと音がする、名知らぬ鳥がなくと身を切られるやうに悲しい、光子はと見ると、白百合のやうな顔に笑をもらしてすや〳〵と、あゝ私はかたへにうつ伏して泣いて〳〵涙のつきるまでなきあかしましやう。

嬰兒に對する切なる親の情を、ありふれた燒野の雉子式でなく、新派を以て寫されたのは面白かつた、愛情に今昔はないが、愛情を言ひ表はすにも時代の術がある（選者評）

五等

○磯邊

大坂　滿壽美

新さん疲れはしなくつて？洋傘を杖にすらりと立ち止まつて淑子は弟を顧みた。ナアニ大丈夫ですよ姉樣今日は久し振りの散歩で氣がせい〳〵しました、婆やどうだ案じた程でも無いだろうハ、、婆やの方が餘程疲れた樣だね杖を貸そうか。

ホ、、、と淑子は笑つた、婆やは痛み入つて、どういたしまして勿體ない、でもまあこんなに迄よくおなり遊したかと婆やは最前からお後姿を見上げまして本統に涙がこぼれる程もお嬉しいので御座ます、ハ、、、婆やは又泣きたくなつたと見えるね。惡いつては泣き快いつては泣き、僕はどうすれば可いのかねえ、姉樣そうぢやありませんか。

頃合な岩の上に三人は腰を下ろしてほつと息をついたが、淑子はしみ〳〵と弟に向つて、けれどもね新樣彼の大病がこんなに散歩をしても差つかえない迄に快くなつたのは、全く婆やの親切な介抱のおかげですよ、肉身の親兄弟でさへとても彼れだけの世話はと思ふほどよく氣をつけて、實際寢食を忘れての看護なのですもの、私はこの前見舞に歸つた時に見て、影ながら婆やを拜んで居ました、その婆やの心だけでも新樣は快くならなければならないのです、婆やはよく此所迄新樣を介抱しておくれてした、婆やが居なかつたなら今頃は新樣は死んで仕舞つて居るかも知れないと思ふと婆やは實に命の親、新樣は元より私も共に二人は決して婆やの恩は忘れはしません。アレまあ淑子樣何を仰います、新二樣のこんなにおなり遊しましたのは矢張り神樣や佛樣のおかげ、御運が強かつたので御在ます、どういたしまして私などが……。イヤ全く婆やには謝すべき言葉に苦しみます、僕は口に出して禮を言ふのは今が始めてですが、實際心では深く〳〵感謝し

て居るのです、姉樣と婆やと二人の眞心が僕の體を元の健康に戻して下すつたのです、しかし姉樣、僕がこんなになつたのを、世には喜んでくれる人ばかりでは有りませんよ。それはねえ。と淑子は悲しい目を落した、足許には油の樣な波がゆたり／＼とよせてはサラサラ／＼と白い泡を殘して引いて行く、春の夕映一しきり華やかに、ぱつと照つて赤、紫、オレンヂ樣々の雲をサッと一刷毛はいたかの樣、空も海もおなじ樣になつた、かもめが二三羽飛んで居る。

私は思ふばかりで他家へ嫁つた身は何の役にも立たないし、新樣には全く氣の毒でした、病中の母樣のなされ方もそれはようく私は知つて居ますけれども、それは今更言ひ出した所で仕方がないのですから……。それは／＼淑子樣口惜しう御座ました。婆やは思ひ出しても腹が立つといふ樣で何事をか言ふとしたが淑子は靜に止めて立ち上つた。

も少しぶら／＼歩いて見ませうね。後の松林で頻に烏がねぐらを求めて居る、むかふの森はもう夜の幕に包つ、まれて只黒ずんで見えるばかりである、潮の香高い春の夕風は袂にあはれた。

婆やが猶ほ何事をか言ふとしたのを止めたのは、技工上にも宜しかつた、しんみりとした裡に情味の籠つた、短篇としては好い一幕を捉え得た（選者評）

御飯　芝　むくら



秀逸

○今昔

神田　三浦秋野

いつか花は散つて青葉になつた、妾は工場の歸り掛け、屹度此處を通るのである、此處へ來ると總ての苦痛も煩悶も忘れて佇ずむのである。今日も日頃の通り、樂しい／＼千鳥ケ淵に掛かつて、何氣なく向ふ側を見るとはたと足が止まつた。樂し相に語り合つて行く男と女、男は、見た事も無い人、女は、小學校の同級に居た小田春子樣、私はなつかしさに二足三足駈け出して、聲を掛け樣として、ふと自分の姿を見て、はつと思つて、足を止めた。

ア、彼の立派に裝つた春子樣に此んな粧をして、如何して聲が掛けられるて有ろうか、と思ふと泣き癖の附たい目には、モー淚が一ぱいに成つて、二人の姿も、見へなくなつた。

「エ、又しても淚が」と兩手に拂つて、二人の方を見た、然れど春子樣は氣が附なかつたのか、元の通り樂し相に語り合つて行く、旋て細い白い手で品の良い帶を撫でた、其の指からは黃金の光りが、夕日に映じて一しほ輝いて見へる。

其の影の橫町に消える迄見送つて居た。

「ア丶私だつて父樣御繁昌なら、兄樣放蕩て無かつたなら、」と此處が往來て有る事も忘れて泣いた。

ア丶恥かしい、此んな往來で泣いて、人が見は仕なかつたか、と見廻すと不思議相に見返つて行く女學生二人、私は夢中て馳け出した。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

小道を入つて行くと、念佛の聲が聞へる、其れは確かに母樣の聲、立て附けの惡い格子を開けると、はたと念佛の聲は止んで薄黑い障子に、瘦せた母樣の影は映つた。

「須和かい」

「ハイ只今、遲く成りまして、ちと仕事が澤山有つた物てすから」と心にも無い僞りを云つて座ると。

「オヤ左樣だつたかい私は又どうかおしかと思つたのて」と胸のあたりを擦つて莞爾、直ぐ佛壇に向つて丁寧に御頭下をして小皿に載せた菓子を頂いて下した。

「今日は父樣の御命日なので御菓子を上げましたから御下りを御頂きなさい。」

「左樣てしたね、私も御線香を上げませう」と線香を上げ拜んで火鉢の方へ寄ると、どうやら母樣は泣いて居らつしやる樣

「母樣も一ッ御食んなさいな」と小皿を前へ出すと。

「昔しだつたらねえ」

「アラおよしなさいよ」と慌て丶母の言葉を打ち消した。

「昔は昔、今は今ですわ、まあ一ッお食んなさいましよ其の方が餘程得ですわホ丶丶丶」私にしては餘りの上出來と自分ながら思つた。

「左樣だね、云つたつて仕樣が無いから、ア丶御前まだ御飯前だろう」

「今夜はモウ何にも頂きたく有りませんの、其れよりか早く寐とう御座いますわ」

「其れては直ぐ蒲團を敷いて上げませう」と戸棚の前へ立つ。
「あら私が敷きますわ」
「何いゝよ」と云ふ中に蒲團は二人の手に敷かれた。
「私も今夜は早く寝ませう」と母樣は佛壇の燈火を消す、私は裏表の戸口を閉て二人一所に枕に附いた。
嗚呼今夜母樣は御眠られるて有らうか、私は寢られるてあらうか。

何處となく、しめやかな書きぶり、内容と相伴ふて哀を催ふさしめる、何も言はずに寢て了う處、最も悲痛を覺える　（選者評）

○其涙

牛込　曙子

「おや、兄さん」
清子は何となく胸さわぎがした。
「おゝ清ちやん、只今」と兄は莞爾に云つて、肩にかけて居た包を椽側に置いて清子に近く腰を下した。
「兄さん何うして……最う學校は御休みなの」
清子は縫さしの衣類を押しやりながら嬉しそうに覗き込んだ。兄は其には答へず。
「阿父さんは」「あのう阿母さんと町まで……買物、てしやう」「そう、御變はないだらうな」
「えゝ、御上りなさいよ」「あゝ」
見渡すと、村盡れの赤う照つた白壁の前の土橋の邊に馬を洗つて居る人の顔まで赤く見えて、安らかな鄙歌が何處からともなく聞えて來る。
「麥が成長つたな、家のは今年何を蒔いたの」
「やつぱり麥ですの」「そう、清ちやんも蒔いて」
「えゝ、阿父さんもよ」「ぢやあ、賑やかだつたろう」
「そりや面白かつたわ……兄さんは最う御休み」
「あゝ、僕の學校は少し早い方だからな、あゝ忘れてた、清ちやんお目出度う」「あら、なに……」
危ぶんで居た急所を突かれて清子はもう眞赤になつて兄を見上げたが兄は只ニコ／＼笑ひながら默つて何も言はない。で尚更清子はたまり兼ねた。
「兄さんそんな事云つちやあ嫌やよ」
「おや、僕は何も云はないぢやあないかハヽヽヽ、何時嫁く事になつた」「知らないわ」
夢中に清子は奥の方へ走つて行つた。兄は獨て微笑むて居たが、やがて之れも靴を脱いで上つて行く。
冬其まゝの長火鉢の前に清子は今茶を熬れて居る。兄が來たのに顔を上げたが、最前に變つて清子の面は冷靜であつた。

「清ちやん外の者は何うしたの」「最前迄裏口に居た樣てしたが、何處へか行つたんてしやう」「そう」

清子の態度が急に一變したのに氣が付いたか、兄は口を噤んで茶をすゝつて居る。暫時して清子は急に面を上げた。「兄さん」力ある聲で云つたが其面は益々冷やかになつた。「なに」兄は復たかと心に思たらしく只無意味に答えて居る。「妾しね」「むゝ」「あのうもらはれたの」兄は快活に「はゝ遂白狀したな、町の山岡からだらう、探偵が行きとゞいてる、御目出度う此れから奧樣と云ふ事にしやう」

兄が快活に言ふに引きかえて、清子の目は何時しか曇つた。家の中はだん／＼暗くなつて最うはつきりと相手の顏も見え難うなつたけれど、清子は立たうとも仕ない。

「兄さんは餘り呑氣過ぎるは」と言葉を詰らした。兄は清子が泣いて居るらしいので少なからず驚いた。清子はヒステリー性の女であつた、一寸とした事を、非常に喜ぶかと思へば、つまらぬ事を悲しむで泣く。兄は始終快活に／＼と誘ふて居たけれ共なほりそうにも見えなかつた。清子は嫁に行く事を悲觀したのではないだらうか。住みなれた家を出るのが嫌ぢやあないだらうか。と兄の推察は違つて居た。

清子は常々心に、兩親が健康である間はたとへ何麽事があつても嫁には行かぬと誓つてたので。そして其望が今絕えようとして居る矢先、心に力と賴んで居た兄の態度があれなので、迚も出來ない望だと知つての結果が其美しい淚であつた。

それと分明時兄は心に思つた、女もヒステリー性が少しはあつて欲しいものだと。

「女もヒステリー性が少しは在つてほしいものだ」と兄が思つたと云ふ一語あつて此小說は全篇活きる、此一語が無かつたら、つまらない作だと捨てられたかも知れぬ。僅に一語の說明も場合に依りては全篇の死活に影響する。美文や小說に說明的文態は成る可く避けたいが、斯う云ふ場合は例外て、說明あるが爲に活きた　（選者評）

○渡船場

相模　野島さと子

上

夕日が今しも雨降山の一角に其の影を半ば沈めて、空には一面に美しい美しい夕燒の雲が漂うて居る。其の夕燒の雲間から、サーチライトの樣な日の光線が、幾筋もぱつと照して、こゝ相摸川の淸い流も、渡船場の番小屋も、對岸の天神の森も、田も、畑も、凡てが紅い。

中

お老爺さん。どうぞ船を出して下さいな。
はい／＼、だが今時分どこのねいさんでがす。
骨格たくましい渡守の老爺は番小屋から出て來た。
はい、あの、じきそこの者で……。
と言葉を濁して。歳の頃は十六か七、白い大きな風呂敷包を抱へたまゝ、番小屋の前に悄然と立つた女、それはこゝから一里ばかり離れて、小さい町のはづれにたてられてある、大國紡績會社の女工である。色の白い、と云ふよりは寧ろ蒼ざめた方で、會社の容赦なき苛責の笞と、慘酷なる虐待とを受けて、つらい／＼苦しい苦しい、日を送つてをつた證據は、あり／＼と其の痩せおとろへた顏に出て居る。渡守の老爺、はつく／＼女の顏を見て。
ねいさんは會社から逃げて來たんでせう？
女は、はつと思つたが、
お老爺さん、お慈悲で渡して下さいな。


すり　紀伊　和歌波子

私にやあ渡せませんよ。ねいさんを渡したつてえ事が會社へ知れると、お役人樣に叱られますだ。
ても御座いませうが、人一人助けると思つて渡して下さいな。妾だつて一と通りの事なら隨分辛棒するつもりですが、何だつて役人があんまりひどいんですもの。先刻だつてこれこんなに……。
と云つて、細い白い、そして鮮かな血のにぢんだ左の腕を出して見せる。
お老爺さん、お慈悲で渡して下さいな。
女の眼からは、熱い／＼涙がほろほろとこぼれて居る。無言で聞いて居た老爺は、きつと決心の色を出して、ようがす、さあ、船を出しませう。
と云ひながら、腰の手拭で鉢巻して、手練の水竿を取り上げる。女はころげる樣に船に乗つた。えいやと一と突き、船はゆら／＼と岸を離れて、見る見る中流に出る。漫々たる相摸川の水面、船は一片の木の葉の樣だ。やがて對岸の大柳の根に着く。女は幾度か禮を述

べて、麥畑の細道を辿つて行く。日はもうとつぷりと暮れてしまつた。

下

其の晩渡守の老爺は、うす暗い燈火の心をかきたてて、草鞋をつくつて居た。と、表の戸を叩く者がある。

もし〳〵、船を出して呉れませんか。

はつきりとした男の聲。

もうおしめえでがす。又明日おいてなせえ。

さう云はずに渡して下さいな。船賃はいくらでも出しますから。

もうくたびれたからだめですよ。上の渡船場へ行かつせえ。

では一寸お尋ねするがね、二時間程前、こゝへ十六七の女が來ませんでしたかね？

そんな者知りましねえ。

實は逃げた者があるんだがね、ほんとの事を云つて下さいね。

知りませんたらねえ。必然上の渡船場でせうや。

さうでしたか。いやどうもおぢやまさま。

話はこれだけで途絶えた。すた〳〵と足音が上の方へ消えて行く。夜鳥が二羽、大空を鳴きながらとんで行つた。可愛さうな女工は、今頃はもう、戀しい懷しい自分の家に歸へることが出來たであらう。

平面的な描寫であるから、斯んな危機一髮の場合でも、讀者の心臟を鼓動させる度が少い、今一歩危いところを書けばよかつた。
（選者評）

○イルミネーション

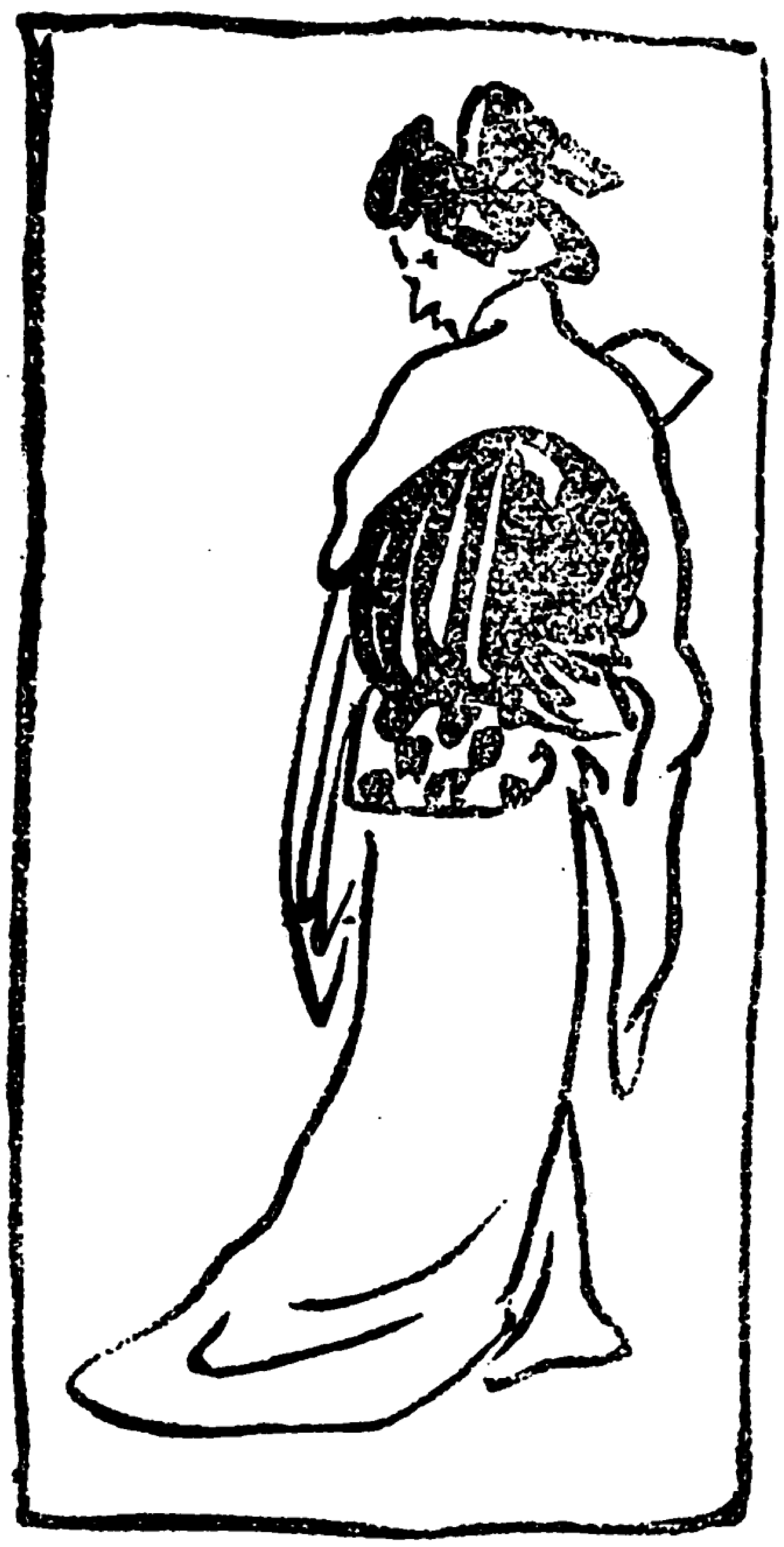
芝　葎子

晝間の大風もどこへやら、空には星が三つ四つ晃々して、うづたかく積みし荷車を小僧が大急ぎでひいて歸る。電車は忙がしげに往き復る。

お祖母樣あの電車はすいて居ます、あれに乘りませう能くおつかまり遊ばせ。あれ動きますから早く腰をおかけ遊ばせ、はい〳〵と祖母は黑紋付の被布を拂つて杖を前に置いて腰をおろす、今夜はさぞ混雜するだろうよこんな善い晩だから、さ樣でございますね、おや花電車が通ります御覽遊ばせ、まあ奇麗だ事！田舍にゐてはこんな物とても見られないよ、お祖母樣東京に限りませうといへば、さうとも〳〵。あらあちらの隅に居る人が林さんの御隱居さんに能く似ておいてになりますこと、どうだね、あらもう着きました、ゆつくりお降り遊ばせ、この混雜は何といふ事だろう、中央

を歩かないで端をまゐりませう、おやこれが賣店かい？不忍池だね！お祖母樣それ見へますよイルミネーションが、おゝ本統だね水に映つて奇麗だね！と立ち止まる。お祖母樣あれが探海燈といつて軍艦があんな樣にして敵の樣子を探るのですよ、おやそうかいとまたみとれる、おや辨天堂の方へあゝもうこつちへまはつたよ、理枝あつちを御覽！と持つて居られた杖を振りあげるはづみに、横に居た男の人の手を撲つ。あら誠にすみません老人の事ですからどうぞ御堪辨をといへば珍らしい物ですからつひとんだ失禮をと祖母もわびる、イエと言ひ殘して男は去つた。

觀月橋でも渡りませうこゝはせまうございますから少し氣を付けて急ぎませうね、お祖母樣、辨天樣に來ました、こゝは木の蔭で暗うございますから足もとを、と云へばおゝお前こそこんな老人の手までひいて、さぞ歩きにくかろうとおつしやる、いゝえ……お祖母樣おつかれでせうこの邊て少し休みませうかといへば、あゝ茶屋へでも寄りませうよ、おゝ其所にあるまあまあ休んでお呉れ。何かお食べかい？いらない？遠慮はいらないよ、とおつしやる。私はお茶をつぎながら、さぞお勞れでせうといへば、いゝえ本統に見られない物まで見てお前の親切は忘れないよ、あらお祖母樣、そんな事を、あたりまへの事ですわ、でも長生するとお德でせう、あゝそうだねいつまでも生きて居たいね、理枝お前時計お持ちだねもう何時頃だえ？私は時をみながら、九時近うございます、おやもうそんな頃かえ、てはもう歸りませう！はいては參りませう、お祖母樣お杖は？といへばあゝ然う然うつひ忘れてね、とおつしやる。本統に奇麗だね水に映つた所は、田舎の孫共に見せ度いね。と祖母は復しても孫の事ばかり。



ころもがへ

下谷　岡野豐子

車掌があぶない〳〵といふ間を拔けて、おやこれが割合にすいて居ます、といへば祖母は助けられながら乘られる。私も隣に腰おろしてほつと息をつく。まあこれて家に歸れますといへば、あゝ本統に今夜は思ひがけない物を觀て、お前の親切は忘れないよ、あれまたそんな事おつしやると、打ち消す。

電車の中はあちらこちらで舟を漕ぐ。私は祖母の身を氣遣ひながら祖母の喜んだのを嬉しく思ふのである。電車は我家の方に向つて疾風の如く。

獨りで合點して、獨りで案內して居るので。讀者があつけに取られて居るうち、オヤ〳〵疾風の如く歸つて了う（選者評）

○星月夜

福島縣　村井むら子

「御免下さい」「入らつしやい又吉御茶を持て來な」「あのうどうか是を」「鳥渡拜見エー一枚重の縮緬が一着てすな是て幾金程て」「四圓程戴き度のて」「三圓五十錢ては如何てす御氣毒樣てすがどうも其縮緬は綿類と違つてさばけが惡いんてそれに失禮てすが少し古いときてるんてす故」「宜しゆう御座います、てはどうか」「それては又吉硯水を持つて來な、エー……何番地て……左樣てすか御姓名は……ハイ御待遠さま三圓五十錢と此ふだ御渡しまうします」「左樣なら」自分は晝をもあざむく許の電燈におはれる樣な氣持がしたので急いで外へ出た戶外には嵐が吹きすさんで居る何心なくふりかへつた目に質屋と筆太に記された看板を見た時は思はず身內がぶる〳〵つと震へた嗚呼何故自分の家は質置く樣な身分になつたのだろう御父樣さへ御存生になればこんな難艱は見まいもの今質入た着物は御祖母樣の形見それを手放す御母樣の心は……此頃は目について御やせなさる、あゝ大きい兄樣の御行衛さへ知れゝば好いが小さい兄樣は御母樣を、おどす手術をよく知つてなさる、餘りおそいのでさぞ兄樣は待つて御出だろう、小づまかゝげてどれ一走おゝ何と云ふ凄い晩だろう。」

此小說の終りに以下の言葉が添えてあつたから評に代へる。
「私はせめて十五六にてもなつたら、もつとよく書かれ樣と思ひますが今ては上手にかゝれません私の家が質屋なものですから一寸かいてみましたがどうかわるいところを敎へていたゞきとう存じます。」（選者評）

和歌　佐々木信綱先生選評

三等

臺灣臺北　志波梅子

みそら高うゆらぐ緋鯉の背にのりて
亡き子來りし夢を見しかな

四等

横濱市霞町抄月短歌會　妻間秀影

ふけし灯に針もつ君のふし目がち
何とはなしに淋しらの夜よ

五等

失名

白き羽の胡蝶夏野をとぶがごと
青海原を走る白帆や

秀逸

◎下總　神田みち子

蛙鳴くさつき夕はほの白き野薔薇の香にも人戀しけり

◎中村千代

摘みとりてしをりとなしつ花菫ゆかりの色をめでのあまりに

◎露花

撞きかはす五山のかねに闇よびて京の山々いま夢に入る

◎磐城　武者雪女

美しき黄金の籠に君が聲我が聲入れて飼はむとし思ふ

◎小倉市　丸山ともえ子

過ぎさりし清き語らひ懐しみ見れば泣かるゝ雨の日の日記

◎成田　行子

ほのくらき灯かげ背にして草の屋の壁にねかよせ物おもふ秋

◎本郷　中倉富士子

破れたる琴抱きて只ひとり花散る窓による夕べかな

◎南總　松ヶ枝雪子

あけぼのゝにほひ新たなる若葉かげ小鳥が夢の香もこもるべし

◎筑前　青葉女史

牛の背にすさむ童子の笛の音の桃の林に消へて入るかな

◎筑前　みどり

青すだれしづかにゆれてうたゝねの枕に涼し磯の松風

◎伊豫　曉子

たどりゆく菜の花小道たそがれて桃咲く丘に夕日沈みぬ

◎芝　小夜子

谷がはのほそきながれをこゆる間にてふの行へを見失ひけり

◎小石川　馬塲不二子

をさなうて母が御乳に笑みし日に似たりとのみのそゞろ心や

◎淺草　渡邊とよ子

眞白なる小鳩抱きてうつら／＼遠の鐘きく葉ざくらの宿

◎　備中　白芙蓉子

弟が野より摘み來て草植ゑしこの夜しづかに春雨のふる

◎　上野　あかつき

緋牡丹のくづるゝ音に雨やみぬ南へ走る雲低うして

◎　滋賀縣　永井梁子

ほろ／＼と山吹の花ちりかゝる莚にかわく土の馬かな

◎　相摸　野島さと子

寵さめて凭るにさびしき朝の窓何のおごりぞ緋牡丹の花

◎　神戸　山崎つぼみ

佳き夢の名殘たづぬる朝庭に木蓮咲きて鳥の音清き

◎　群馬縣　河内とめ子

美はしき人はかくれぬ菜の花のつゞくかなたの葉櫻の家

◎　岡山市　橋本芳子

風かをる青葉若葉の森かげにうた思ひをれば鐘とほく鳴る

◎　上毛　關口初子

川くまの朝靄はれて通ひ船船下りくる青柳のむら

◎　仙臺市　南もり子

何となく思ひ出多き夕ぐれの花ちる岡に鐘をきくかな

◎　常陸　西野はる

花の寺若葉のあめに人絶えて寂靜かなり梵唄のこゑ

◎　和歌山　さき子

ほとゝぎす憂ある身は香爐すゑうつぶしてきく山の家かな

◎　安房　岩崎つゆ子

逸れ鞠のあかきが一つぬしや誰れにほふ菫の花園にして

◎　奈良縣　中富よしみ

雨細き窓の白藤散りそめてなき母おもふ行く春のくれ

◎　播磨　石原富子

柳かげ水の流れに浮き沈み春日迎へし綵り魚かな

◎　陸前　今泉八重子

にしひがし花の色香をあらそひて咲きこそ揃へ大和撫子

◎　駿河　大倉光代

乘せし紅梅の花色褪せて香も枯れし春の暮かな

◎　南總　たか子女史

船つくるのみの響きにきら／＼と漣よする春の磯かな

◎　土浦　佐野常代子

あさ風にゆらげど若葉おとも無くみどり色そふしづくちるなり

◎　福井市　豐姫女史

花吹雪く日なり亂髮素足して狂ひめ胸を驅けゆく思ひす

◎　但馬　早崎芳月

日は暮れてあたりしづけき冬の夜淸けき月の輝きにけり

◎　大和　栗山英子

野の花のあせゆく色ともろともに胡蝶は老ひて春はくれゆく

◎　山梨縣　矢崎とよの

花笑ひ小鳥囀づる春の日にみさほ正だしき富士の神山

◎　日本橋　有田政子

ゆきかひの人の名しらぬ山里に一りんさけり紅梅のはな

◎　柏崎町　袖村勢以子

はら〳〵と花ちるしたにたゞずめば花のみ衣もまごふかたなき

○　岩代　胡蝶女史

春の月朦朧として誰が影か呼べば答ふる花女神魂

○　岩代　宮原靜子

舟進む友は出てしよ夜な〳〵に夏虫泣くや品川の沖

○　上野　大沼楓子

春の旅なれぬ山路の迷ひがちに日暮れてつきぬ緋桃咲く宿

○　上毛　金子春月　月

むれさわぐなの花畑少女子の長き秋に黃金染出す

○　横濱　清水千秋子

岩根もる眞淸水汲みて父君にくしきひさごの酒と稱へん

○　宮城縣　すみれ　芝

朝まだき窓の戸によりながむれば曉の霞潮とながろゝ

○　滋賀縣　辰井ふみ子　匝

紺瑠璃の天の宮居の星姬が舞ますさまにすみれゆらぐよ

○　備中　芙美子　恩

あたらしう立てし御いゑの床のまに菜ぼたんいけて思ひいる人　田

○　奈良縣　中富よしみ　利

あゝ君はとはに眠れどみ魂のみ小百合となりて何想ふらん　子

○　能登　粟倉すみれ

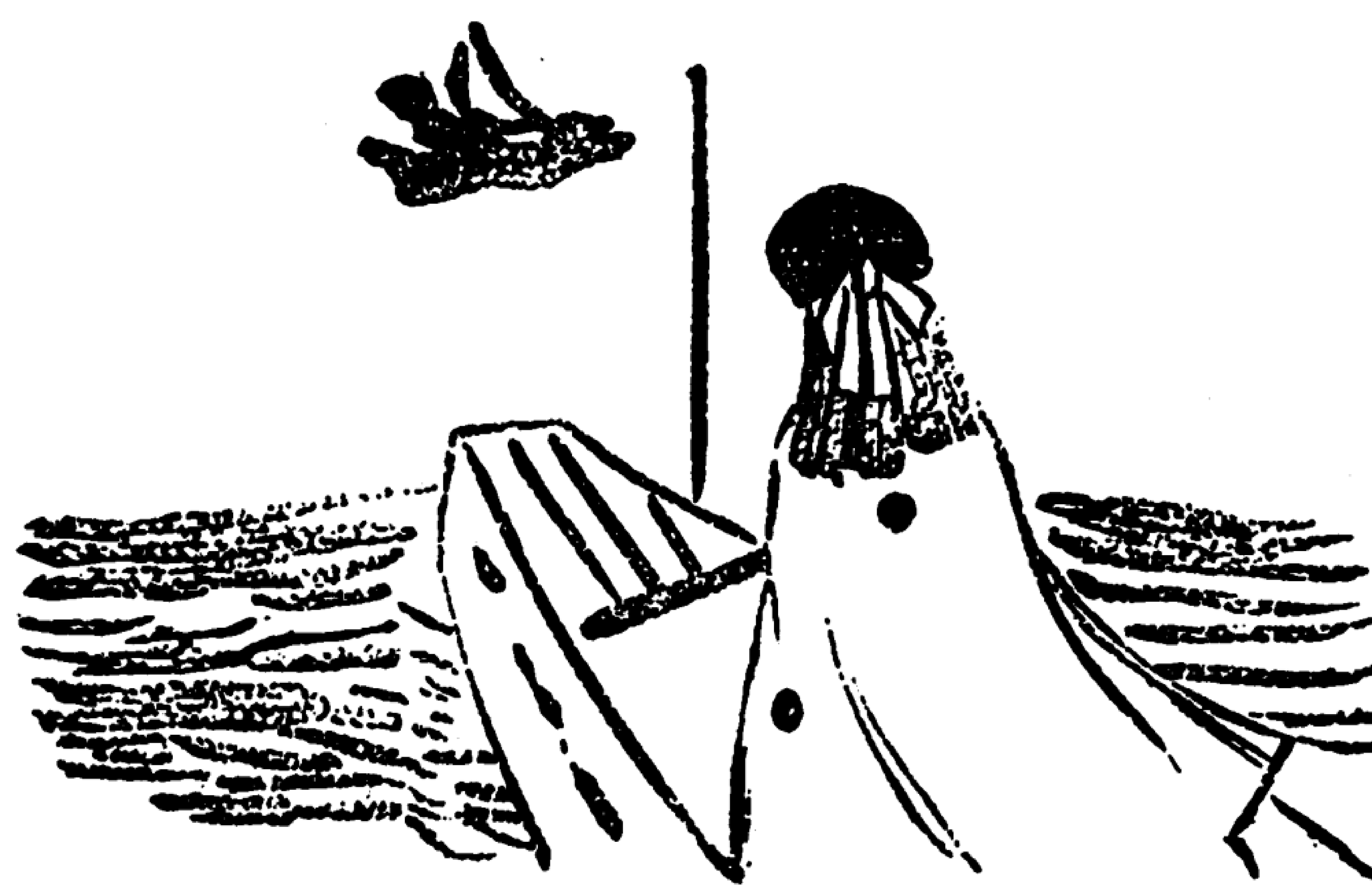
ほゝゑみて路をゆずりて見送りぬすみれ花さく春の細道

○　岐阜　白梅子

その風に小波よする我が庭の池に浮める月美しき

○　羽後　千葉光子

草萌ゆる共同墓所に梅ちりて夕べ寂しく小雨そぼふる



○　滋賀縣　永井やな子

老を鳴く鶯まれに訪づれて高野の坊のひる靜なり

○　備前　清香女史

漁りして返る夫を迎ふ妻の子守して立磯の夕暮

○　紀伊　稔子

神まつる田中の杜の卯花は苗とる袖も雪の白妙

○　伊勢　本田文子

賤の女があかきこゝろもにほふめり眞柴にそへて贈るつゝぢに

○　美濃　野村秀子

學びてもなほものたらぬまなぶみのいつをかぎりと知るよしもなし

○　牛込　沖津美森子

聲なきにまさる寂なれ雨の夜に蛙なく音を我ひとり聞く

○　熊本縣　黑肥地雪子

露にふす萩の小徑の朝明けや昨夜見し夢君ぞ戀しき

○　筑前　若林らく

妹は春衣飾りて微笑みて母の小膝を我に讓れぬ

○　京都　大井順子

溺ぐらき深山の奥の谷の間の百合にねむれる胡蝶やさしき

○　伊豫　清水かつ子

嫋しさを包みもかねし花の袖君が玉章かなりつたへて

○　弘前　福井四四美子

合歡の花いろよき空にゆら〳〵とくづるゝ夕べ妹逝きましぬ

○　茨城縣　中西菊江

今日いく日ふる五月雨に上臈の加茂の川邊に御袖ぞぬらす

○　德島縣　野董子

のどかなる日うすづきて夕ぐれの煙たゞよふ桃の花里
○　山梨　藤枝子
家づとに求めし小さき鈴を振りて神代ながらの音をきくかな
○　山田市　常磐木花子
朝あけの松原ゆけば社鵲山に鐘なり月かたぶきぬ
○　札幌　小蟠
とふ人もたえて淋しきねやの戸に嬉しうなびく青柳の糸
○　和歌山　以計榮子
なかなかに幸深かりき我れはしも戀失ひて詩の子となりぬ
○　備前　鞭木よし子
うなひらが鬼ごと遊びおもしろし花さく里の春の夕ぐれ
○　出雲　白菊子
我が庭に咲き出る花のとりどりを送りたきかな東の兄に
○　下野　鈴木雪子
葉櫻のほのかに薫り山寺の朱の塔白總むるゝ
○　小石川　高橋ふく子
息たえてなほ歌はむのそのおもよいだくにあまりめぐし鶯
○　水戸　重子
おぼろ夜の道もさながらにほふまで雲井にかほるそのゝ梅が香
○　下總　渡辺きわ子
より避けて讃謗む老と常々に笑ひしわれも斯くはなりぬる
○　大阪市　眞田芳子
父ゆいてひとり思ひの五月雨のあまだれやみて心淋しき
○　仁川　とよ子
去年ともに愛でし櫻も散り初めぬ月も朧に我袖に散る
○　岐阜縣　長沼たづ
ふさふさと咲き亂れたる藤園にうなゐとともに遊びけるかな
○　常陸　豐島默子
みせばやな外國人に山櫻やまと心の匂ふすがたを
○　大森　清香女史
花をもる檐に袖をぬらしつゝ歌人とひぬ春雨のあさ
○　下總　富士子
破れたる古琴抱きてうらぶれの胸おさへつゝ暮れの雲見る
○　山口縣　池本琴月子
蝶の戀思ひなかばに春暮れて弱き雄蝶は若葉に病みぬ
○　千葉縣　八木むらさき
戀に病む身を欄干にもたせつゝ靜かに暮るゝ夕日眺むる
○　西多摩　久野木ふさ子
亡き兄のみ靈の前にたゞずめば腸たゝる思ひぞすなる
○　南多摩　花輪靜江
冬枯野春風來なば詩歌人の胸さはがさん面影見えて
○　仁川　中川むめ
うらゝかに霞のまより影さして色づく野邊の春の曙
○　肥後　みどり子
谷川の音にもなれてふらぬ日の物はさびしき五月のころ
○　岡山市　武田初子
浦風に妻こふ千鳥こゑごゑに岩間がくれに聲遠ざかる
○　西多摩　森田なか子
若き繪師が彩色終る西椽に日は暖かく梨の花散る
○　花園守
妹の黄なるリボンの下げ髮に櫻さしやる苑の曙
○　大分縣　加納豐子
袷衣の袂を拂ふ涼風にさみどり搖るゝはつ夏の庭
○　下野　高山楊柳子
見渡せば遠杉村の末淡くむぎはた三里初夏の風
○　陸前　阿部よし枝
いとあらき小草にまじるつぼ菫濃き紫は糸になしてむ
○　越中　地崎竹子
旅ごろも幾夜かり寢の夢さめて枕にひゞく五月雨のおと
○　上毛　蓮艾女
祖母君の墓の側なる八重櫻吹かれて散るや夕暮の鐘
○　神戸市　高橋紫峯

月姫が春憧憬の夢と見し朧月夜の花の嵐吹

陸前　畠山みさと

○

美くしの花は四面をめぐれども父母なしのわが家さびしき

磐城　さゝふれ

○

吹きすさぶさよのあらしに折れぬ身の心けだかき青柳の糸

神戸市　久野柾女

○

友もなく淋しき折の夕水鶏たゝく音にもうれしかりけり

鮎川靜子

○

白妙のひとへの衣着てしよりならす扇の風ぞ涼しき

米澤　樋口夏月

○

故郷はたゞ荒れはてゝ風調り絶えず園生の松を訪ひつゝ

奈良縣　山口ふさ子

○

池邊なるまこもまじりの菖蒲かる宿にかざしつさくも月とて

尾張　長岡てつ子

○

君想ふ東の山は青葉して文よむ窓も暮れはてにけり

茨城縣　須藤武子

○

みやび男の笛の音絶へて幾千年古池すごく萩の花散る

美濃　臼井安子

○

吾が妹は今し名殘りの笑み浮かべ天津御國へ旅立たんとす

武藏　青柳彌生子

○

ゆく春や名殘のかぜを胸にとゞめ花に別れてながき夢見む

神戸市　麗雨女

○

雨止みしあしたの廣き美き庭に牡丹愛する艶なる人よ

信濃　とき子

○

子等呼びて平家を語る老僧の聲音沈づみて秋の雨降る

日向　濱砂まさよ

○

雲に遠く浮かれて山もつき嵯峨の近道覺へぬる哉

鹿兒島　貴島三日月子

○

吾がために村を追はるゝ人送りうつゝ心に鎚きく今宵

大坂市　片山忠子

○

夏風はいとやはらかに綠野の羊つれたる少女に吹きぬ

筑後　初野

○

夏姫のみどり色濃き木の葉かげこひしき春はくれにけるかな

白鷺城下　柳田白百合

○

朝戸山の雨細うして青葉若葉したゝる森や山ほとゝぎす

紀伊　美笑子

○

故里に送らむ文を書きをへて窓をあくれば雁の聲する

信濃　薄井君枝

○

彩雲の幾條ながれ羅單めぬ兄なる畫師になしへ讃ふ夕

陸中　若生なか子

○

たんぽゝにれむれる蝶の夢さめて垣の隣の薫にぞ舞ふ

亦阪　齋藤紫桂子

○

涙がほすれたるまゝのまろびねに衣かけます若き母人

後志　工藤すゑ子

○

くもまよふ瀧のいはほの御ほとけの耳をかすめてなくほとゝぎす

東京　秀子

○

夜櫻や雪かとまがふ花かげに光はなくてきら星一ッ

茨城縣　中西とう

○

蚊やり火のけぶりまとひし川ばたの柳の糸に月ぞかゝれる

日向　春子

○

春雨に夜は更けぬらし世はしづか夕べ聞き得し笛の主おもふ

陸奥　ふみ子

○

我が家のありし處は畑となり黃なる菜種に蝶は宿れり

紀伊　春園曉女

○

桃酒に母醉ひまして歌ありきそれも十年の昔なりけり

陸中　若生すみれ

○

なつかしき古郷の宿の軒の端に今や咲くらん海棠の花

群馬縣　芳山常磐子

○

雨やみて夕日かゞやく山寺の軒端のあたり群雀なく

本所　田中久子

○

春の星鐘なる空に浮びけり花と花との霞をわけて

京都　岩淵國子

花白きおぼろ月夜の木の間より笛もろともの歌聲清し
○　越後　五十嵐美波
刈りし麥を馬に負はせて歸り行く乙女の笠は森にかくれぬ
○　藤澤　泰子
夕ぐれを籬に立ちて物案ず少女美し白梅のはな
○　羽前　こん子
風すさび夕雨すぐる小山田に一しほ高く鳴くかわずかな
○　小田原　倉橋よしえ
夕立の虹の白絹さく音して稻妻遠く雷なりぬ
○　横濱　紋子
亡き姉が愛でにし花もちりはてゝ冬枯淋し庭のおもかげ
○　靜岡縣　絹むら
友まてどかげさへ見せずさてはとて思ひ沈めば牛の聲きく
○　豐後　渓月女
春風に袂吹かれて貝あさるわかきめをとの戀睦まじき
○　神戸　山崎つぼみ
れんげ咲く里の春風忍ばれてそゞろ戀しき妹が面かげ
○　伊勢　渡出君子
逝く春のみづにながるゝ笹舟のいづらのおちに迷ひゆくらん
○　若狹　長谷川英尾
色も香も心も清き梅の花我もおくぞと髮にかざしつ
○　神戸市　水野てるよ
盤田川水の烟の末きえてゆかりの色に立つ霞かな
○　下總　石越あき子
鞍壺に手綱うちかけ乘る駒のあゆみもおそし花の下かげ
○　牧　葉子
梓弓春來にけりなひさかたのあまつ御くにもかくやありなん
○　群馬　白菊子
見え初むる花間にしばし有明の月も芳野の春の曙
○　小樽　澤谷都音子
あぢさいの花色あせて雨の日を病てある身の思わびしき
○　青森縣　三浦若子
春の野のすみれの床にまろねして遠く嘶く駒のこゑきく
○　紀伊　長井漣月子
青き火の幽かにもゆる新墓の眞白き旗に秋の風吹く
○　下野　栗原くに子
花散れど木の芽生れど旅に出てし君は來まさず春行かむとす
○　陸前　可野久野
若菜洗ふ乙女の髮に散る櫻宿して走る春の玉川
○　四日市　山本汀月
なよ〳〵と長きみぢかきさま〴〵に水にあやおる青柳の糸
○　齋藤かずゑ
せめてまたいつと世をしもながらへておはさばわれはかくもなげかむ
○　下野　國子女史
なつかしき兄はいまさで母やみぬ一人さびしく夜鳥のなく
○　美濃　満・喜野
今日もまた並松越しに聞へ來る田歌のふしの面白き哉
○　函館　藤本鳥羽子
朝ぎりのはるゝ彼方に眞帆片帆走るも樂し春の海原
○　陸前　沼倉ふく
たのしさよ野邊に草つむきのふけふこてふも共に舞ひ遊びたり
○　岩手縣　伊藤宗枝子
すみれ摘みかへる夕べの村の道花を戀ひてか蝶の追ひくる
○　横濱市　小澤さだ子
月の夜に光を帶びていさぎよく散るかたかれの山ざくら花
○　伊勢　山路くに子
飛び移り緒琴鳴らせてすべりては花籠にひそむ夜半の子鼠
○　青森市　笹村玉江
靜けさや月爪暗き朧夜に霞をおつるの鐘の音かな
○　南豐　萩の屋
川添ひの十戸の村の夕闇を螢とぶなり追ふ子もあらず
○　越後　瀧澤みつ子

つま琴か神の御聲か笛の音かあらず松吹く風しきりなり
静岡縣 大庭たか子

○礒行けば白き帆の影かさなりて夕日かぎらふ沖の島山
尾張 一子

○起き出でてんこゝろゆるびて曉の夢こゝちよき春の雨かな
飛騨 千代子

○戀の歌ひくう誦しつゝ君は逝きぬ夕月淡く櫻散る宵
陸前 紫雲子

○海棠の紅き蕾に口つけて君ますかたに流しても見つ
信濃 玉桂

○惜みつゝ別れし友を見返れば小高き丘に我を見送る
羽後 伊南清子

○すみれ咲き小蝶とぶ野の朝露に世のうき思ひ洗はれてけり
淡路 照子

○春の野に遊ぶ花鳥見るにつけむかしの友やおもかげに立つ
扇城 やま川

○うらゝかう春日流るゝ桃の窓鶯よびぬくら笛ふきて
上都賀郡 古山長子

○幾千代もかはらぬ松のふかみどり人もかくあれ操正しく
大阪 鎌田春枝

○春の旅知らぬ山路もいつの程花に送られ苦も知らずして
筑前 安部富士子

○苗取る手暫し止めて眺むれば雨に消えゆく山際の村
沖縄 藤井初枝

○うら若き狂女手む花影に彩り奇しき夕雲起る
旭川 一葉子



勉學　美濃　古橋きせ

○はる霞たな引く里の櫻花うつろはむとやいろかはりゆく
呉市 美津子

○年若き賤の女かごをなげやりてしばしやすらう葉ざくらの影
伊賀 山村すみれ

○里の子等夜るも集ひて螢うつ川辺に匂ふ野茨の花
南豊 瑠璃子

○懐かしき友と別かれし此夕雨そぼふりて時鳥なく
周防 嵐子

○有明の月の光に聲添へて吹きならすらむ草刈りの笛
神戸 井崎なを子

○ういだちや鄙をあげて妹と背やなぎ鄭るうれしき日かな
上毛 山うば

○たゝなはる大山小山打越えてわらびをるこそをもしろきかな
静岡縣 森下ふぢ子

○山寺の鐘のひゞける山峰の躑躅にひゞき花は散りけり
北越 山字淡

○百尺の大瀧吾をつれ行し夢よりさめて不如歸きく
荏原郡 かれ子

○静やかに夜の黒まくたれそめてみづの流の耳にすみ行く
静岡市 羽根安子

○汽車にのり奥津が濱を眺むれば波のまに〳〵白帆が見ゆる
近江 古川紅櫻

○三年ぶり病にやせぬ詩にやせぬ神の救は夢のみにして
下谷 高田ふき子

○五年の昔別れし戀人の夢見る夜半を時鳥鳴く
越後 芳野枝

○眞帆片帆かへる釣舟かつ見えて夕日に長し磯の松影　因幡　岡野露子

○九重の雲に聳ゆる高千穗の峯より高し君の恩みは　本鄕　足利じゆん

○露つゝむ池の蓮のまくり葉に潜む蛙の悟るが如き　讃岐　藤田ぬい子

○海つゞき玉藻の浦のうがせこに花ことづてん汐の流れに　長野縣　桐原敏子

○獨わが辿る野路のあとになり先になりても行く蝴蝶かな　芝　小夜子

○露ながらかりたる草を背負ひゆく田舍乙女のうら若きかな　大和　武村芳女

○ほとゝぎす村の土橋を渡らんとすれば鳴くなる靑葉の中に　千葉縣　川奈部ゑい子

○涼風にうつらたゞずむ美き人のけだか姿に宵の月して　芝　八代やへ子

○武者一騎から詩誦する朧月夜ほがらほがらに聲かすみけり　新潟市　いはせ

○九里香の花散る窓に文よめば雌雄の小鳥の來て覗く哉　大阪　伊藤淺子

○美しき大ふり袖のそとゆれば縫の緋牡丹花散るかと見ゆ　富里村　相川ゆき子

○うらぶれの我が世の十九夢のごとなき妹思ふ雨の夜哉　丹後　鹽見千代子

○君なほも忘れず我を思ひわび泣くらん夜かや春の雨ふる　神田　三宝梅子

○美しう聲もかほる花うばら誰に送らん一ふさ摘みて　三河　白ばら子

○わが庵や庭の若竹風冴えて、おぼろにかすむ春の夜半かな　羽前　孤月生

○くもるかと見る間に山の影消えて旅路いそがす夕立の空　麴町　湖月

○椿散る夕と書きて歌かきて我れにおくりぬ春を病める君　常陸　小泉智惠子

○湖ぞひの松に夕日の影消えて暮の河原白き鳥飛ぶ　牛込　秦はる子

○五六人火を焚し衛士の篝に吹雪して散る山ざくらかな　豐後　安部富士子

○業を終へて我が家いそぐたづくりを讃美の聲か夕暮のかね　京都　松井星水

○幾度か小琴にかけて調べけん君がよみたる長恨の歌　濱田　三明ちどり子

○夕雨は物病む君がみ涙としづかに降りぬ紅梅の庭　本所　松本晴子

○汐風にゆられ／＼て行く舟の歌のゝどかに春暮れんとす　古河　卯の花女

○手折りにし此桃の花いかゞせんこひしき君は道遠くして　高知縣　桂花女史

○長閑なるすみれの床にあこがれて胡蝶追ふなる少女いぢらし　鹿兒島　小牧岩江

○父母の死なれしあとに我れ逝かばいとし弟たれにたのまん　長野縣　瀧江千鶴子

○うつりゆく春の日足を山吹の花になしとや蛙なくらん　大阪　姫ゆり

○眼はしき雨はなけれど五月雨の闇の一夜は淋しかりける　下野　猪口香葉

○文もてる乙女の袖を吹く風に藤の花ちる夕まぐれかな　越後　山中すみ子

○ちら／＼と櫻花散る下かげをみどり子のせて乳母車行く　名古屋　四脇政子

○栗の花や三とせそだちし乳母が家のあたり戀しき朧月夜かな　越後　河内米子

青桐の落葉集めて若き尼の入りにし山に鹿の啼くなり
小倉　柴田よし子
○
綠葉のかげに二人が語らひし皐月なかばのたそがれのさま
近江　古川政子
○
詩の神がみ許ありし一夜なげ胡蝶となりて花に遊びぬ
河内　陰山謐子
○
ことたがふ上とし云へ君と我いかてかかくもはかなからん
信濃　萩露女
○
散る花に欲かき添へて流しけり水のまに／＼春やいづ地へ
大阪　辻蘆子
○
冬の來て氷る霜夜に織くは今も昔しにかはらざりけり
愛知縣　永田彌鶴子
○
風たえて音なも偲ぶ春雨に濕ひわたる道の若草
岩代　逸見歷子
○
黄蝶の姿したひて追ひ行けば影失ひぬ菜畑の中
土佐　高橋白ばら
○
よき歌の主とやなりし透卅衣に花をのせゆく都への道
神田　玉川雅子
○
古さとの空を戀しみ夢に入れば君と遊びぬ菫咲く野に
大和　晴登子
○
たそがるゝ海に艪の音とだえして追分節の聲かすかなり
鳥取縣　桑本きさ子
○
田植してさをとめ歸る夕暮や代搔つ田の面に鳴く蛙かな
豐岡村　原たき子
○
くれかゝる山道を一人さまよへばあはれに聞ゆ蛙の聲
常陸　小泉智惠子
○
姉上の病みて伏します枕邊に祈りさゝぐる妹かわゆき
佐賀縣　德久よね子
○
霧立ちて駒の音のみきこゆなり山路しづかに上り行く朝
奈良縣　芳野浪子
○
情ある君が御歌に我れはしも初めて知りし我が淚哉
飛驒　樋口雪子
○
築山の一もと櫻春風にはら／＼ちるがおもしろき哉
備後　藤原子
○
月いでし野末の川に足あらひかへりゆく翁夕がほの宿
南總　原掬花女史
○
花あやめすゞしう咲きぬ池殿に夏來にけりと告げむばかりに
神戸　谷輝
○
すみれつむ少女が袖もかすみけりあはれも深き春の夕ぐれ
下谷　燕雨子
○
をり／＼は杜鵑なく聲のして靈しづかなる夏の山みち
四宮　森井勢子
○
ふた葉より朝に夕べにつちかひて嬉しとぞ見る朝顏の花
丹波　室谷ひさ子
○
大君のめぐみの露にうるほひて野にも山にも春は來にけり
土佐　大和田靜子
○
六尺の小庭さみしく雨にくれて初夏となりぬる葉櫻の宿
兵庫縣　木村菫子
○
戀ならぬ身は咲き匂ふ薫れ草野路のかたへに消えはてにけり
下野　梅澤哲子
○
戀ふる杜や黒う見えぬる有明の月に鳴くなりやまほとゝぎす
神戸　輝月女
○
風ふどち打ちたはれつゝたのしくも花さく野べに今日もくらしつ
北越　山崎澄江子
○
おぼろ夜を東に落つる姫君のみ舟隱して花吹雪哉
宮崎縣　雪水薫子
○
浪の打つ青島磯に貝拾ふ長振り袖の人美しき
下總　花翠子
○
世につらふ乙女ごゝろもかくあらん風のまゝなる青柳の糸
熊本　江副ちかつる
○
山寺や讀經の庭に椿おちて苔むす鐙に陽炎もゆる
沼津　渡辺とよを

和歌

木の間洩る月にやせたる影ふみて亡き君ににし笛の音戀ひぬ
○　香川縣　鎌田みつぎ子

蓬生のつゆふみわけて結ぶなりあとなき庭の奥の眞淸水
○　埼玉縣　大勢みち子

みどりなす柳の糸は長けれどたのしき春をつなぐよしなし
○　和歌山　市村重子

けふよりは衣の色に夏みえてたもとすゞしき白がされかな
○　京都　豐井きく

ひとしらぬ御山の奥の櫻木も春にし有れば花も咲らん
○　茨城縣　ひさ子

中垣も木々の靑葉にとざされてとなりのとほくなりにけるかな
○　茨城縣　滿津枝

君が住みし宿の月かげ見るごとにすぎし昔ぞしのばれにける
○　豐後　靈女

茂りあふ靑葉のかげに蝶一つ花なき里は淋しかるらん
○　神戸　高嶽ゆき子

琴の音の床しうもれて夕顔の花咲き初めぬ二つ三つ四つ
○　陸奥　堀口不二子

いさゝ川聞くも涼けき岸ハ邊に詩集讀むなり柳下蔭
○　南多摩　加河菊子

椎の實はしきりに散りぬ此の夕を落葉かく子に亂れなく雁
○　本郷　陵子

ながし行くかどづけの音の身にしみて哀れにも又淋しきよ春
○　京都　山名千代子

暖かき若葉のかげにねむりけりいだかれてねし昔夢見つ
○　淡路　石田よれ子

春老ひておとなふ人もあらし山苔の小路に花ぞ散りしく
○　麴町　石井あさ子

花守に孔雀の羽毛の簑つくり着せても見たき春の雨かな
○　宮城縣　二階堂松枝

袖しぼる思ひをぬらしなき人を忍ぶ涙や春雨の空
○　靜岡　坪井屋子

さらぬだにいとゞ淋しき夕暮に音さへしのぶ五月雨の空
○　大坂　滿夢美

うたゝねのさめては惜しきおもかげにまたも夢路にまよひ入るかな
○　香川縣　土田しま子

桑種さへ細道たどる順禮が笠に休らう白き蝶二羽
○　南多摩　横倉浪子

いたつきの床にふせれる友がきの風なき窓に落花まひ入る
○　信濃　藤本久枝

白と黄と一重と八重と咲きみだる小さき庭のやまぶきの花
○　桐生　かみを女

谷川の岸邊にたちて悲みぬ果敢くなりし友を思へば
○　埼玉縣　胡蝶子

八重櫻散りて流るゝ里川の流れとゝもに春は逝くらん
○　武藏　大江春柳

とゝせぶり友のおこせし玉章のなつかし筆に優しき姿
○　府下　寺澤みつ枝

桃の花咲く家々やのどやかに梭の音する春の邸路よ
○　玉村　横倉千代子

きのふまで花は梢にありと見しも今日は靑葉のしげりてし哉
○　備中　林靖子

別る時はまたの逢瀨を契れども明日たのまれぬ人の身なれば
○　大阪　糸子

君戀し春の今宵の朧月せめてしばしはゆるせ浮雲
○　筑前　芳賀若葉子

垣はやれ家かたむきしふる里にたけをくらべし岩ぞのこれる
○　遠江　白百合子

亡き姉のうつし植ゑにし白百合の初花そなふおくつきどころ
○　京都府　穴田松江

宵月を歌づかひして僧院の大木しろき初秋のかぜ
○　三河　龍城江都子

○青木の並ぶあたりや君が家君おわすかよ月は朧に　　福島市　山本美津子

○躑躅咲く谷の小川の水澄みて源あたり猿の聲する　　京　都　岸　村　と　も

○大川を隔てゝむかふ君が家の灯美し春の雨の夜　　京都府　吉田筵舟子

○また一つ朧の島の森かげにかすかに見えぬ沖のいさり火　　紀伊　室谷忠子

○わが家は青葉若葉につゝまれぬ小川の調べ前にきゝつゝ　　近江　三井つき代

○問ふ人もなき奥山の辻堂にたれ設しけむ白百合の花　　近江　西村悦子

○なつかしき我が古里にかへりきてうぐひすの聲きくぞうれしき　　阿波　犬伏ます子

○君に似し消き聲してあかつきの薔薇の園に風わたるかな　　京都　三好露子

○春や花や世は酔ゑるもの皆ゆきて青葉に醒むる夏は來りぬ　　備後　田邊節子

○戀しさにたらちれの里眺むればたゞかすみ見ゆ舟岡の山　　羽後　伊藤さき子

○鶯のなく聲きけば別れにしあゝ故郷の空ぞこひしき　　伊勢　西野のもり子

○雲雀なく春の野に出て逍遥へばおさなき時の心地せらるゝ　　釧路　北川悦子



茶の湯　　府下　中島縫子

○故郷のあれにし庭の撫子花ゆかりの色は今もなつかし　　長崎　遊江鮫月

○我希望など消ゆべき大鐘の綱引き張ればまた高う鳴る　　神戸　安達絹枝

○行春に君は佗びて倚る窓やいさゝ流るゝ白ふちのかげ　　大坂　武藤蝶子

○繪師二人あだには過ぎし奈良へ行く若芽だちたる森の下道　　大坂　西村米子

○船ごとに酒など賣りて漕ぎありく女賣子の頬にてる入日　　上毛　葉月女史

○しら梅と共にちりしに弟のなれぬたび路ないかに行くらん　　常陸　大和田濟子

○垣くづれ軒かたむきし古寺の庭なごり惜しげに百合の花咲く　　廣島　つれ子

○香りよき薔薇に小蝶の戀ひけり天なる樂の音高き朝　　三河　加藤すゑの子

○涼しさは袖にあまれり扇なもわするばかりの松の下風　　和歌山縣　まさゑ

○春すぎて夏來にけらし川中の淵に浮ぶる小舟　　長崎市　六角秋子

○春の水音なく流る川添の梅咲く村に鶯のなく　　東京府　鶴澤貞子

○亡き妹が十二の春の雛祭り金糸の縫ひの長き袂よ　　佐世保　きぬ子

黑き蛇穴にかくれて力なく夕日するなり森の細道
佐賀　りつ女

○

春の庭あり明の灯のほそうして燈籠ふりぬ雨そぼふりて
伊豆　上原雪子

○

小雨ふる花野の路を菅笠の二つ暮れ行く順禮の子等
岡山縣　松岡岩江

○

吹き上ぐる竿の緋鯉のいや高き響を祈る初幟哉
福井　久保村ひさ子

○

物思ふ日なり春雨逝隱に髮する音もうたてしと聞く
陸前　紫雲子

○

梅月夜みだれ勝なる箏の音よ奏づる人の思はるゝ哉
長崎市　櫻間わか子

○

わが父のありていさめし言のはゝなきあとにこそ思ひ知るかな
渡島　工藤土筆子

○

ねみだれの髮くしけづる朝ぼらけしぼみて落ちし花簪哉
福井縣　片山千里

○

あゝ飛かゝる聲してわが思ひ君にし告げよ別れといふ日
備後　石野子

○

秋かけて鳴き立つ蟬のうすき羽に置く露しげし衣手の杜
沖繩　比嘉まつ子

○

黃に紅に紫も濃き錦ごろもかけしやうにも夜明するかな
佐賀市　服部紫蘭

○

今日もまたはしゐがちにて眺むれどかすみのほかにいろなかりけり
成田　きさえ

○

白妙の胸ゆるやかにうまゐする夢のま中に黑き蝶とぶ
南多摩　金子信子

○

打よればすぐいさかひはおこれども互にたよるはらからのなか
淺川村　金子れん子

○

野つくれば櫻咲くなる小屋ありて媼一人が草餅を賣る
越前　池端千代子

○

春風の手枕ちかく匂ひきて窓のひまもる梅の初花
赤坂　ゆき女

○

美しき人なきぬるゝおもかげをおもひ芙蓉の雨きいてゐぬ
成田　はる子

○

闇野十里夜の香しめりて三萬の髑髏の雨に立つ鬼火かな
成田　保子

○

君とへば君はいまさずおん母にたゞごと言ひてわかれてかへる
山口縣　松永緋桃

○

春雨にぬれて斷りし封じ文今宵この胸たれに語らん
和歌山　さき子

○

朝涼し凌霄花ゆら／＼としづれてふかき杜小徑かな
京都市　堤登久子

○

幾度か運ぶ針の手そと止めて外の景色にあくがるゝかな
上毛　梅村薰子

○

梅しろき片山林日はくれてわづかに殘るうぐひすの聲
羽後　三浦霞溪子

○

象の背に黒坂笛ふく朧ろ夜を娜子のはなちる南洋の國
群馬縣　萩原きん子

○

高どのゝ箏の調べも打絶えて月にふけ行く花のいろ哉
福岡市　清水はる子

○

たびゐしてふるさとしのぶ夕ぐれになごりさびしくかへるかりがね
大阪府　寺部きみ子

○

端居して夕やみの空ながむれば木の間を縫ふてほたる飛び來る
安房　岩崎つゆ子

○

鯉はれて藻の花ゆれて醒はれてしゞまに返る山の湖
仁川　中川むめ子

○

ほの／＼と花の上より明け初めて霞たなびく春の曙
富山市　中土土盛子

○

この宿のまつのよはひを重ねきて萬代よばふ鶴のけ衣
神戸　安達絹枝

○

我がなしむ心をしらで梅の花此世の風に散りてはてにけり
下總　花井操

夕日西に燃えて紫えて雨晴れて里の小川に虹美しき　○　横須賀　茂　子

かりそめの人傳をこそなつかしみ君に泣かんの幸負へる身か　○　佐渡　小菅風香子

夢のまに三年の月日過ぎにけり錦かされし君を迎へて　○　佐渡　谷川桂月子

姫に似し紅の牡丹の妖艶に花の下行く春の水かな　○　下野　花房道子

平和ぎの風に誘はれ散る櫻雲井をさしてそもたにま見ゆらん　○　土佐　軒の玉水

あしびきの尾上の花も散りはてゝながめさびしき春のくれかな　○　本郷　朝井松子

月に倚りて虹のそり橋眺めやる病人わかし夕顔の宿　○　信濃　太田はる江子

青柳の門を出てたる蛇の目傘紅屋に入りぬ京の少女子　○　信濃　百瀬きく江

春雨に聖者下界におり立ちて法説く日かや物しめやかに　○　姫路　美葉波留子

夕霧に消えゆく船は見えずとも節おもしろき舟うたのこゑ　○　仁川　千代子

春の野や清く流るゝいさゝ川畫の月見へ八重櫻散る　○　越路　野菊

小夜ふけて一人衣縫ふまど許を友におくれてかりのなきゆく　○　京都　嘉勢琴水仙

めもはるに見渡す海路いとはれて風に從ふ帆や長閑なり　○　安房　玉葉子

水もなき谷の小川の小板橋蛇の目見る日の雨の靜けさ　○　麴町　佐　登　子

春の日や少女なればも美しき花つみ合ひて歌うたひける　○　千葉縣　三橋芳子

夕づく日煙たなびく森に消え淋しく響く山寺の鐘　○　土佐　石川一菫女

紫の小傘ふさふとさゝやきて二人並びつ菖蒲見る哉　○　印旛郡　鳥羽美代子

早苗とる乙女のころも今日もまた乾く間もなし五月雨の頃　○　秋田　みき子

身をすてゝ母のみとりに五つとせをさすが閾えの子となり終んぬ　○　近江　藤野しづ女

馬鬼きて野の邊をよぎる薄月夜馬子が謠ふの節面白き　○　會津　坂内銀鈴子

桑園の青きがなかに入日して紅ひ染むる磐梯の山　○　麴町　撫子

くれなゐのりボン蝴蝶にならせて落椿拾ふ少女愛らしき　○　遠江　芳子

紫の衣美くしき舞姫の降るに似たるふぢのはな哉　○　芝　菫野蝶子

川の邊にみだれみだるゝ山吹の花の渥吹く春の夕風　○　麴町　大島ふゆ

病みぬれば戀しき人の面影のあらはれ見ゆる夜をなつかしむ　○　美濃　華醉女史

乳母が背に無心にほゝ笑む稚子の母なきこの身知りてやあるか　○　岩代　根本松江

何となう母待つ宵の淋しさに君が名かきて歌添へて見ぬ　○　越後　美代子



春雨　紀伊　木下操

幼子の片言きこゆる春の窓に長閑くうつる鶯の影
○　上毛　關口梅子

上野や横野の里に花すみれ摘みたばれたる日戀しこの春
○　日本橋　持田とし子

谷深く嵐の音は靜まりて山松が枝に月ぞ昇れる
○　下野　濵井曉子

靜の宵に讃美歌誦し逍ひぬ花ちる里の春の朧夜
○　備後　野菊

野も山もともにかざりぬ薄衣ぬがぬ先きまで忍ばるゝかな
○　長崎市　米時子

時ならぬ雪かと見えて夏ながらあした冷たし卯の花のさかり
○　秋田　島の海女史

時鳥道の左右にうちなきて山路もうれし夏の旅かな
○　渡島　工藤のばら

歌誦して亡き君しのぶ五月雨の淋しき夜半をなくほとゝぎす
○　美濃　傍島みゆき

日あたりの水のませ置て村をさの翁七つの駒撫でゝ居る
○　奈良縣　上杉秀子

月の夕友を逍遙に引んとて川添野途獨り辿りぬ
○　麻布　秋山欽子

薄日射す遠方雲の只赤う物おもはする白桃の宿
○　滋賀縣　坂八重子

汲みあぐる車の音もはたと絕へ人靜まりて夜もふけぬらし
○　安房　青松女史

幾重だに海山越へて別るとも馴れし昔しの君ぞ懐し
○　安房　伊藤ひさ子

谷川に散りし櫻の花びらは水のまに〳〵流れ行くなり
○　下野　國友よし子

山ずみの淸き心の友なれやかけひをつたふ水の流は
○　南多摩郡　金子れん子

春の榮えありとも見せず吉野山若葉青葉に裝ひにけり
○　伊勢　新綠女

夕日あびて白帆指す暴雙に凉風かほる磯の宿かな
○　横濱市　古川ふき子

たそがれの鐘つき歸る御僧の法衣の袖に梨の花ちる
○　千葉縣　花村八千代子

いはひ部の祝詞身にしみ夜はあけてみまへの榊霧たちのぼる
○　我孫子　林きみ

亡き夫と語る夜半の夢さめてのきばに近く五月雨の音
○　遠江　三室常子

とり〳〵の花咲き匂ふ春の野は少女の聲のたへなかるらん
○　安房　みどり子

沖方さして動き出てたる大船の眞帆の白帆に朝日かゞやく
○　小石川　なでしこ

孤兒ときゝて哀れの花實が身の上になく春の夕暮
○　高岡市　北本歌子

塔に立てばむら山はてに海見えて眉に涼しき初夏の風
○　名古屋　高木米子

春彌生寶物見する奈良の寺いくつめぐりて永き日暮れぬ
○　長野縣　山田くに子

若き人がふとの追懐胸ついて眠うつ如き春の夜の鐘や
○　相模　芳子

六年ぶり妹がかいなをそと抱けば亡母にまみゆる心地するかな
○　北越　芳蘭

花賣りの歸りし跡の門の邊に殘りて獨りてふの遊べる
○　高岡市　志津壽美惠

花咲かば來ますといひし君は今はちすの花を見ておはすかな
○　下谷　伊藤楊瀨女

人しれず思ひ亂れて偲ぶかなわがふるさとの母やいかにと
○　播磨　山本ふさ江

むらさきのたなびき渡る暗にしよゐんすゞしくばらの香かほる

文藝遊戯

百人女（課題）

一等　女學生

佐賀　服部紫蘭

お父樣は村の有志の人と計つて夜學會を建て、若者どもを集めて毎晩修身の講話や讀書算術を敎へてゐられます、お母樣もまた全じ女子部に出て禮法や裁縫を授けてゐられます、私は只今私立學校に入學して禮法裁縫編物などを殊に熱心に習つてゐますそして明年三月卒業したらお母樣にお加はりして娘達を導いて風儀のよい平和な村となして一生をたのしくこの山間の地て送らうと存じます（賞品圖書切符五十錢）

二等　農女

佐賀縣西松浦郡二里村中里　德久よね子

昨日田を見に出て水を通はせて歸りますと山百合が咲いてゐた。見なれたものながらポッキリ折つて父上に上げた、四月から病まれた父上まだ見られた事はないので疲れた目をパッチリ明けて嬉しそうに見ていらしつたつけ。あゝ父上母上!!!静は一生お側に居てか弱い手て家を起します、神樣よ小さな理想を助けて下さりませ。（賞品圖書切符四十錢）

三等　女俳人

舞鶴餘部町下入丁目九六四　高柴小靜

秋色のやうな心懸けにて園女のやうな境遇にて多代女のやうに長壽にて千代のやうに名聲を揚げて智月のやうな臨終がしてみたい。（賞品圖書切符二十錢）

四等　裁縫師

大阪府豐能郡　君子

私は裁縫を能く勉强仕て立立物屋に成りたいと思て弁の彼家で仕立てさすと着心地が好いと評判に成てどしどしと何日もつかえ通してそして私の仕立てたのを奧樣や孃樣が格好能く召して入らつしやるのを見たらマア何んなに嬉しいでせう併し下手だとて誰も賴まなかつたら何う仕ませう。（賞品圖書切符二十錢）

五等　田舍女

京都　南田千代

私は田舍の極く貧家の娘で御座います學校は漸く尋常科卒へたばかり最早十六歳にもなりて居ますのにお裁縫の道すら學ばれず世間の事は何一つ存じませんから何處かへ見習ひ奉公に上り身にはつゞれを纒ひ居ても御給金は欲くありませんから裁縫と行儀と應接とを敎へて戴きて行末他家へ嫁きた時には夫子の衣物を思ふままに仕立て上げ來客のある際には赤

面せず應接の出來る樣になりたいと始終思ふて居ります此が私の唯一の希望で御座います。（賞品圖書切符十錢）

秀逸

女義太夫　駿河　大倉光代

毎日々々賓の入船や、此處今晩の大切と仕りましてなんて、眞實に下らなくつて、くさ／＼しちまうわ、是から卵を一日に三つ位づゝ飮んで聲を好くして、二三年の内に車へ乘つて、二つも三つも掛持するやうに成たいわ。

おさんどん　信濃　あをば

あれ下駄がもうこんなに減つたな來月はお小使が半年分戴かれると今度はあんな下駄は止めにして流行のにしようそれから齒みがき粉と花王がいゝ鬢はあるが櫛は借り物だから一枚舂る手拭も黒くなつたしたまにはお茶飮みもいゝから菓子を一袋あとは皆貯金か。

花賣娘　大分縣　糸柳

私は花賣娘です。今年取て十四才四季の花を町に賣りに行きます。女學生を見る度に花活はせんかしらんと。思はず聲上げて「花よ――花召せ」

田舍女　麻布　秋山欽子

博覧會へ行つて來た新屋の兵隊息子がいつたがな、白木屋つてい店にあ生きた人形があんだとよ、夫からな高い梯子のつゝ頂邊に車があつてなそれさ乘つかると天陽樣あ目の下だつていな籾すり上げて置樣出來たら、子供等引張つて行つて見べいかなあ父樣。

貴婦人　大分縣　花葉子

才學技藝備りたらんには此上なう嬉しけれど先づ第一は容姿なり。さして美人ならざるも上品にて下賤の相なく態度は鷹揚にて又能く下情に通じ人々を其才能に依り使ひ分くる技量を有し大學まで卒業せず共筆跡麗はしく交際談話に巧みにて折々のすさびに和歌文章などよくしたらんには如何に床しき限りならずや。

奥樣　京都　滿壽子

奥樣、私はづかしいが去年嫁いたばかりて奥樣になりました私は子供生むのはいやてすがもし出來るのならば男二人に女一人ほしいてすそして一人は政治家一人は文學者、女の子は音樂家にしてみんな立派に成功したならば私はそれて望は遂したそれから私好な好なヴアイオリンをたづさへて田舍に行き閑靜な自然の景色を友に靜に世を送りたい。

舞妓　攝津　勢子

品吉姉はんうまいもんやわ、今日も旦那はんと芝居見に行かはつた、妾かて姉はん見たいになつたら、旦那はんにねだつて東京やら、日光やら、諸方へ見物に連れて行つてもらうわ。

奥樣　神戸市　大谷百枝

私は何と云ふ不幸な者であらうと云ふて生活上に何う斯うのと不服を云ふべき自分じやなし召使の四人も置いて奥樣々々と尊稱されるに就て旦那樣の不身持ア、どうしたらいゝだらう……此家へ嫁てから丸五年其當時はほんとうに優しくして下すつたが……せめて小供の一人もあれば心もなぐさまるであらうに……

令孃　備中　白芙蓉子

私の理想はね、大きな牧場をもつて居られる人の御嫁さんになりたいよ。

看護婦　京都市　山口愛華

どなたでも自分の天職に滿足して働ればなりません妾はある病院の看護婦であります白い服が既に神聖を現して居ります妾は大滿足て病に惱んで居る人々を父母兄弟姉妹と思て熱心に看護して一日も早く健康にしてあげる事が妾の第一の樂しみです妾は看護婦が婦人の最高の職業と信じて居ます。

體操敎師　沼津　鈴木多歌美

器械體操もほしいしテニスコートも今一つこしらへて、ます／＼テニスを、盛んにしたいものだ、それから生徒に體操の時だけは、皆揃つて靴をはいて貰ひ度い。そして、袂の人も筒袖の人も、一樣に白の襷を掛て貰ひ度いものだ。

女髮結　伊勢　信子

これまでの髮結は只形計に意を用ひて衛生の方は一向かまひませんでしたが以後は凡て洗ひ髮て入毛を止めて益々結び方を優美にし長く日本髮の美を保ちたいと云ふのが私共の希望で御座います。

田舍商人の妻　花園守

こんな片田舍に居ては何にも出來ません、家の事は一切妾がお引き受けいたしますから良人は

横濱へてもいらしつて心置きなく働いてどうか一旗擧げて下さい、そうして外國とも「直取引」をする位の大商人になつて下さい。

子守女　美濃　臼井安子

あゝもう子守なんか嫌や〳〵一層東京へ行つてあの御殿とか殿樣とか言ふ立派な家の小間使にても使つて頂いて首尾よう御奉公を勤め上げたら乾度お傍女中位には！そうなつたらあの妹の文さんも寄びよせて!?

女寫眞師　下野　鈴木露子

花島、山水を自然の色彩そのまゝを寫し取つて水彩畫家、スケッチ畫家を驚ろかし、全世界を漫遊し、名勝舊跡風俗を寫し集めて寫眞帖をこしらひ、是非四十五年の日本大博覽會には美術館の一部に、寫眞陳列館を設けたひと思つてゐます。

花賣女　飛驒　あやめ子

私は花賣女ですが、何卒して一生涯に、一度てい丶から、あのひら〳〵と輕るそうに飛んで居る胡蝶に乘て天國へ行き、月の利鎌で、星の花を刈て來て、市に賣りたいと思うて居ます。

工女　山城　白梅子

いつか小學校の先生にあの名高い久留米がすりは一人の少女が發明したのであると聞きましたが私もこうやつて日本女子と生れたからには何でも一つ奮發して珍らしい織物を發明して日本の國產をふやしたいと思ひます。

炭燒娘　奈良縣　中富よしみ

妾はこんな淋しい山の中で暮すの大きらひよ、故郷へかへつて百姓をしたいわ、そしてなりを飾り友達と連れそうて、遠い所の立派な宮樣やお寺へ參りなどしたら、どんなに樂しいでしやう妾の望みはたゞこれだけよ。

女繪師　和歌山市　さき子

宗教の觀念を作品の上に現すのが妾の理想よだから最色の方をよして專心歷史畫を研究して居ますの妾だつて美術家の端くれですもの糊口に窮して亂するなどは斷じて致しませんわそして獨身主義は死ぬ迄斷行するわ。

小學校の女生徒　岐阜縣　華醉女史

深尾先生や、大野先生の樣に、紋付のお羽織に紫の袴、編み上げの靴を履いて大勢の先生方と一所に、毎日可愛らしい生徒に先生々々と言はれる樣になつたら、どんなに面白いたのしい事だろう、噫妾も早う其身になりたいわ。

老婆　滋賀の都　花子

妾も最うはやこう年を取るしこの頃は齒でさへ目がぼうとする、はやう伜にも嫁をもろうて可愛孫の一人もだいて見たいものだ

細君　近江　しづ子

ねえ良人！此度三越へ大變いゝからの丁度私共の年恰好のがあるのよ、此月の末にはたつた一人の妹の婚禮式があるのだしそれに來月は山尾伯爵の園遊會もあるしかた〴〵一寸奮つて頂戴な、ねえ良人！

醫師の娘　靜岡縣　芳子

昨年から本年の今日迄で　お產をなさッて死くなられた方が十六人妾の近き村に有ると聞きました故妾は女醫師となッて世の　お產に死くなられる方々をどうかして助けたいと思ッてお父樣に御願ひして女醫學校へ入學て頂く。

柴刈女　堺町　豐田とみ子

私は仲よしのお花さんと今日も衣笠山へ柴を刈にまゐりました柴を刈りながらお花さんは「妾は町の吳服屋へ嫁入りして綺物づくめて一生がおくりたい」と「妾は東京とやらへ出てハイカラさんになりたいわ」

女學生　靜岡　小石女

私は只今小學校に通て居る者ですが自分の一番好な學科は地理と歷史てあります其故に私は始終將來立派な地理及び歷史の先生になりたいと思つて居ります。

ばアや　みどり子

まだお少さい時分から、手しほにかけて、お育て申した御孃樣、今は女學校とやら云ふ立派な處へ、お通いなさるが、そこを目出度御卒業なすつて、好い御嫁さんになつて、可愛いやゝちやんが御出來なさるのが早く見たい。

娘　越後　なみだ子

兩親や兄は私しをごく〳〵平和の財產のある兩親や兄弟の居る家に嫁させたいといッていらッしやるけれど私しは兩親もない兄弟も無い財產も無い不幸者の妾になつて及ぶだけ彼を慰めたいのです。

女教師　臺北　濱月

私は女學校卒業後高等師範學校へ入學し其處を卒業したら良妻學校と云ふを組織して未來の良妻賢母になる人々に一家の經濟から家族の健全交際の圓滑育兒法衣服の撰擇及主用等をくわしく敎へて世間に有要の婦人を養成したいと思

ひます是が私の未來の理想であります。

おさんどん　備後　二子山

ほんとうに奥樣もだんな樣もいゝ方であらつしやるのに、お孃樣はなぜあんなに、おいぢが悪いのかしらんそれにぼう樣のお氣に入り過ぎにもこまるし。

田舍娘　上毛　羽衣女

私は山奥の百姓の娘で有ります、私は本人のたしかなる貧しい家に嫁つて所謂夫婦共稼論を實行したいので有ます、夫は外で働く私は家で一生懸命稼いで豫定以上貯金を得た時には夫の御膳に肴でも添へて上げたいのが私の理想で有ます

女學生　神戸　阪上やよひ

私は今の私立を卒業して高等師範を卒業し教員となつて平和な家庭を作り男子ならば陸海軍人に女子ならば馬鹿にされない樣に幼時の入費をはぶき持參金附て結婚をさせて女子の位を作りたいものと思ひます。

女學生　岡山　坂東須榮子

私は一昨年より當地の女子師範學校へ入學して居ります、私の希望は只、在學中によく勉强し業卒へて、何處へか奉職した曉は、第二の國民たる子弟を養成する職分を、天より賦與せられた考で一意專心授業に熱中しやうと思ふて居ります。

女醫　秋田　野邊の千草

私は女醫になるのですそして理想の夫と（醫學博士）醫學研究に洋行するのですそして世界のありとあらゆる病氣をなほしまして、世人から生き神といはれたいのです其時は病魔と戰ふつもりです。

令孃　静岡　環姫

僕の未來の夫は今法科大學に居るのですが外交官志望ですから僕もできるだけ話術を巧にし交際に長け、且天賦の容貌を保護して益美を發揮する事につとめ、總て、出ては羽毛の美扇を携へて交際社會の女王とよばれ入つては賢き家庭に夫を慰め勵まして外交の辣腕を振はしめん考へであります。

女學生　信濃　加納初惠子

妾は女學生で御座ひます、人は云ふ女學生は多く墮落すると、だが妾は一生懸命で勉强して心の美しい令夫人となりたい。

乳母　兵庫縣　三輪のぶ子

なる事なら、私の年が、十う程若くて、御孃樣の丸髷姿美しゆう、御こし入れの時が見て死にたいものであるが、こうからだが弱くては、どうだかしら。

洗濯女　丹波　難波あいの

よく／＼御勉强なさつた奥樣や孃樣方が清潔とか、衞生とか色々六かしい事を仰いますが、私は何も存じません、只女手が無く、汚れた着物を仕方無く召して被居る方達に、さつぱりしたお召を差し上げ度いので、「ア、氣が晴々した。」と喜んで下さるお顏を見るのが私の大きな望でございます。

海員の妻　大阪　澄子

雨につけ風につけ心はいつも海原進ふ船にあり留守多ければ人にましたる苦はあれどたま／＼事なくて航海を終へたる夫をむかふる時のうれしさ變則なる生活なれば規則的なるは望みがたくたゞ／＼神聖なる家庭たらん事をのみ。

未婚の婦人　羽後　渡部美屋子

左様甚麼な御婦人でも頭の中には屹度色んな理想を描いて居らつしやるに相違ムりません私だつて女ですもの皆樣に負けない理想をチヤンと描いてをりますわ甚麼と申して一口には申かねますが先づ第一に紳士と結婚するのです尤紳士といつても世の所謂紳士でムいません即ち地位や階級は兎に角先づ風采が優雅溫揚で德義心が强くて品性が高潔で他人に對する同情が深く婦女老幼には別して親切で憐み深い方ゝてす皆樣は如何思ひますか？

柴刈女　羽後　千葉光子

朝は星を戴きて山に柴刈り夕は山松に歸る鳥と共に山をたち牧場の牛を追ひながら小川づたひに家に歸るのは常てす春の吹雪は嬉しきも冬の吹雪には困ります終日の仕事が終れば何の心勞もないので緩々今日の御話。

おさんどん　美濃　傍島みゆき

妾は毎日ふきそうじと炊事をするのが勤めてすだから理想なんて知らないが妾の思ふ事は暑中休暇が無いようにとたゞそれつきりてす、暑中休暇が、來ると　お消／＼つて、きり／＼まひをやりませんならん、て、どうかないようにしたいのよ

下女　越後　みよ子

私は此御宅へ上りましてから最早四年になります、御家内皆々樣の御情け深いことと何處へ行

つてもこんな御宅はないと思ふと唯うれし涙に咽びます御金は四十六圓貯へてあるから來年は兵營から歸る戯雄様と……

女詩人　麻布　牧野紫江子

都は嫌ひ緑なす野邊が好きその友は星である月である花である、天地は父母山海は祖父母であるあはれの子には涙を惜します美なる方へ路は開くか。

女詩人　高岡市　北本歌子

宇宙のあらゆるものを歌ひ、言ひあらはして、新思想を與へ、闇路を照す一道の光明ならん事を妾は希望するのであります。

野菜賣女　松江　長谷川のぶ子

私は毎日朝早から籠に澤山野菜物を入れたのを負ふて街へ持つて行き「カブヤ〳〵」「ダイコヤ〳〵」と云つて賣りまはりますがひるすぎ宅へ歸つてしらべますと毎日平均五六拾錢位なものですよ。

女學生　岐阜縣　白梅子

妾は卒業後官吏の許へ嫁したいと思ふ、さて理想の夫!? 妾は財産家も望まねば美貌家も望まぬ只品行正しく手腕家で、妾を愛して下さる人ならば其當座拾圓、拾五圓の月給取りでも、大なる滿足を以つて結婚する。即ち之が妾の理想である。

工女　熊谷　和久井きん子

嗚呼つまらぬ〳〵朝の六時から晩の十時迄追い使はれて外へても出れば町の小供には糸ひきよ工女よと後指をさゝれて何となさけない事だろうけれ共又考へて見ると人には馬鹿にされても國益の主たる製糸事業だから。

小學校生徒　鹿兒島　霧萩

皆女學校〳〵つておつしやるけれど私はいや女學校は奥様になるのですものそれよか師範學校に入つて高等師範を卒業して私奥様學校の先生をしてやるわそして縣下一の教育家になるのよそしたら母様やお祖母様がどんなにお喜びだろう私ほんとに〳〵に嬉しくてよ。

交換手　京橋　今泉磯千鳥

「もし〳〵」「何番へ」「お話中」私は此の言だけ使へば宜敷んですが。今日は少し口數を出すぎましたよ、二時頃學生らしい人が電話を掛けて來ましたが相憎三ッ共話中なので「何このお多福め」と憤つたです、私も餘りしやくにさわつたので「貴方私の顔お覧なさらないでお多福だか別嬪だか分りますか?」言つて遣りましたわ。

柴刈女　茨城　武子

兄様が農學校から貰て來た海上水蜜桃毎朝御飯前に刈つた分を餘計物にして肥料とし澤山に實が成る様に成ッたら漸々とふやして終は此村の物産にしやうと思つて居ります。

田舍女　下越　ふじ子

妾は令孃様方の身の上がうらやましい、が、何にもかも神様の御定めですあきらめます、一生此の山で草刈り暮らしましよう、けれども私にも充分な希望も御座ひます、幸福な身です、人知れず相戀の富士雄様の卒業日の一日も早くと祈つて居ります。

保姆　岩代　小林茂登子

妾は此育兒院の保姆になりましてから、五年な此數多の院兒と寢食を共にして居りますが、朝夕無邪氣の其顔を見れば氣持が晴々して早く大きくなり良き人になれかしと日夜養育に勉めて未來を樂み居ります。

花賣女　陸中　山櫻花

私の父は獵人で毎日山へ母は家で機を織りそして私は毎日野山へ出て美しい花をとりそれを市に賣るを職業と致します。

學生　南豐　藤の家

私は小學校の補習二年です。明年三月が卒業期です。卒業してから直に赤十字社に身をゆだね撓まず倦まず勉勵して。看護婦を以て身を立てようと思ひます。そして他日東洋のナイチンゲールと歌はれる様になりたいのです。

女子師範生　兵庫　すみれ子

妾は只今何々女子師範の三年生で明四十一年には卒業致すのです卒業の曉には何處かの小學校へ奉職致し玉の様な坊や花の様な孃を指導して先生々々と慕ひ來るあいらしい子逹が行末は東郷大將や下田歌子先生の様な世に名ある人になられる様に致したいと今より希望して居ります

看護婦　但馬　早崎芳月

私は今或府立病院附看護婦ですが是より益々研究を積みかされて赤十字社看護婦となり今後外國と戰の起りし其時こそは戰地へ行き君國の爲めに名譽の負傷せられし人々を慰めつゝ看護して國のため萬分の一だに報ひたいとは私しの理想です。



抒情文

文學士沼波瓊音先生選評

二等　○異境の花

信濃上伊那郡中箕輪村澤　有賀まさ子

日朗々。陽炎燃ゆる野邊に山邊に、雲雀の唄も長閑けく、下萠えそめし若草の、若きわが心の駒を驅り往きては、其の昔、霞棚引く遠の高嶺に、雲歟、花歟、雪と散り來る櫻狩の、ふりはへて、彌生の樂しさ唱ひけむ日もほの匂ひ來つ。あるはまた、翠煙ぶる小川のほとり、柳絮なよらに夢を縢りて、春意普くめぐらふ池塘のかなたこなた、水黽逐ふ里の兒と打ち泥らひ、そこはかとなう根芹摘みつゝ、不圖、玲らなる音に見返れば、傍へのいと小さき可笑しく屈れる錦木の枝よりかけ、躑躅の株幾つか越え、向ひの葉がくれに藪傳ひする一羽の黃鸝、敏き容姿の頭動かしては啼く面白さに、懵乎、われを忘れて聽き惚けし、それも昨日と許り。幼き幻影の歷々と、うつら〳〵に夢見るらしきうつゝ心は、くさ〴〵に色どられし追憶の鎖の、舒びつ卷きつ、そも暫し、手繰られゆけば、懷しき慕はしき、怖しき悲しき、繪卷物のやう、一つ〳〵擴げられつ、果ては如何にわが此の弱き胸を亂さしめ刺擊せしむるかよ。

緋桃白桃、風なきに散る二瓣三瓣、籬の外には山雀のさゝ鳴く節も澄みて、柘榴影延す回椽を南に、玻硝子の障子二尺ほど押しやられたる八疊の書齋は、溫氣暑きまで蒸し騰り、回想の手の右より左より麾きて、今文机に凭れし身は、いつしかも舊き日記の半ば頃、曾て折々、紅き心の色にもみでし朱點の、所狹きまで染め替へられつる、にじみし紙の端にぞ指置かれし、堪へぬ思の迸りては幾度か血と咲きけむ跡の、人には意味もなく塗り棄てしと見らるゝが口惜しけれど…………。

* * * * * * * * * * *

九月三日（明治三十七年）　快晴

五時四十五分起床。弟の戰爭譚に朝餉のむしろ賑はし、昨日に引きかへての好日和、何

となく人の戀しう、北小河内なる伯母がり、久々なればとて(中略)家に歸れば戰地よりとの一封、名は懐しき正男樣、

披けば中には。

澪子樣。御身と音信れを斷つ茲に五旬、徒らに心のみはあせり候得共、思ふに任せざるが戰場に在る者の常と思召して、呉々も御咎め無からむ事を願ひ上げ候。去る七月十八日附の御狀當八月十四日正に拜受、嬉しき懐しき喜びは潮と湧きて、時めく胸の抑へがたなく、○○大戰を前に扣へたる貴き寸暇を裂きて、此處斷崖の下、細き篝の火影に隱ろひ、禿筆を呵しつゝ御身が此の暖きみ胸に酬ゆ、御身が懇切なる心づくしは一々肝に銘して忘れず候得ば、生のためゆめみ心をな勞し給ひそ……(中略)殊に殊に生が感興を搖がし泣かしめたるは彼の二輪の朝顔にて候ひしよ、あはれ朝顔

わが故國の朝顏！而かも御身がみ手に摘まれ、御身が限りなき情を込め、斯く海嶽萬里を隔てたる此地にまで贈り起されし難有さは、到底筆舌の克く盡す可くも候はねば、何卒々々、然るべく御推察下され度、折柄打ち集ひて愛づる面々の、故國の花朝顔と聞きて、西より東よりこの優しき言の葉も出でむ有樣に、果ては謂ふ可らざる感慨に撲たれたるもの丶如く、幾多の戰友忽ち意氣悄然、緊く默してまた語らず、沈思の淵に逍遙ひつ、互に浮び出づる遠征懐郷の情、父や母はいかにかおはさむ、妻や兒はいかにか待ちて在らむ、世に一人のみなる妹はいかにその寂しさをかこちもやせむなど案れ案れし胸の、頭を擧げて憶ひ、頭を俛れて偲ぶは、皆等しく月出づる東故郷の空にて候を、鬼や拉がむ荒くれ男の兒も、矢張り骨あり皮あり熱ある生き物、情の人間に候得ば、嬉しきは嬉しく、悲しきは悲しく、國戀し人戀しの念慮は如何に邦家を警護の武器たる身なればとて、脈管に血の通ふ間はよも忘られまじく、同じくは清き涙に泣かむ、それよせめてもの願にて候に、御身が美しく飾らず僞らざる眞情の發露に觸れて、誰かは泣かざるものの有らむ、泣きて泣きて泣きぬきては、淋しき心の何處にか潛め

だいどころ　茨城　須藤武子



る黑き醜き鬱幽懊惱の影の、痕もなく濯ひ去られ、すが／＼しき我天地の、胸中些の不安を覺えねば、身は家もなく財もなく、將た親もなく兄弟もなく、一意自己の尊き職責に對して奮勵努力すべき原動力を與へられ候、御身よ、人は金錢財寶をはなれ、功名利達をさかり、義務のために身を致す時に於てこそ、悉く天眞なる聖靈の神がみ胸に立ち歸るものにて候へ、彼の蒙味野蠻なる民の日夜殺伐殘忍の所行を敢てし、一點慈悲の何物たるかを辨へざるかの觀あり候と雖、割りて心の奥を撿しなば、そこに泉なす恩愛の惠は溢れ居り候はむ、御身よ、生は赤心を披瀝す、生は御身のためにいかに陣中の疲勞を慰められ、いかに前途に向つて多大の發奮と教訓とを提供垂示せられしか、さるにても此床しさは二輪の花朝顏にて候かな、露の干ぬ間を命とうれしむ身にしあれば、わきて云ひしらぬ感想の籠れるも理に候、やよ澪子樣、生も亦茲に幾千同胞が屍を曝して贖ひし戰場の、血汐に染み肉彈に搏たれたる草の葉草の花一二を封じて贈りまゐらせむ、遼東別に内地と異れる草は少なかれど、されども只此れ、戰場の草花!!!其後の戰況、既に新聞にて御覽の事と存じ候得ば生を中心としての概略を左に……（中略）返す／＼も御身體大切に遊ばされ、軍國後援の爲め、折角御盡瘁あられむ事を冀ひ申候。敬具

擴ぐるに連れて零れ出づる花數輪、こは蝦夷菊に似通へるもの、鴇色にして菊科植物に屬す。また出づる一莖の草、こは薄紫のゆかりの花を冠せりしいと優しの、たとへば薔薇めく曇りし曉の星光かすかに、白百合圍む泉にゆらめきつ、清き薫にえも堪へぬあえかさ。あはれゆかしの花よ、われは餘りの嬉しさと、此の詩味深く情趣に富めるなつかしき汝が面わに、不識恍惚として靈美の夢路を辿りけるよ。想へ！汝が主人！然なり汝を摘み採りつる主人は、今戰の場に奔馳して、雨と飛び交ふ矢玉犯しつゝも、斥候の職分に從ふいと／＼敬慕すべきいくさ人なるよ。一度敵と相まみゆる時こそ怒獅狂虎の如き勇敢猛邁なる振舞はあれ、胸に秘めたる琴線の聖き自然の美觀に觸れては、多感有情の子、忽ち躍る優婉麗雅の雫、流露してそが暖かき血に燃え情に燃ゆるみ手により、有りしながらの色香を罩め、慘憺悽愴の修羅場裡、猶且つ慰藉の化身となりて、天帝が普遍の惠に養育まれし汝可憐の兒よ、今汝が郷土は硝煙暗うして、幾萬鐵騎の徂交ひに、痛はしや、恐しの蹄もて蹈み躙らるゝも、つゆさら／＼根みの色だ

も見えず、常に微笑の誠を現じて正義の勇士を迎ふる健氣さよ。告ぐ、われは汝が優しく麗はしく、將た雄雄しき心根を讃へて、滿腔の感謝を捧ぐるにためらはざるを。生ひては幾多勇士が情懷を淨からしめ、摘まれては尊き紀念となりて、そゞろに異域戰場の光景を偲ばしむ。

花よ。あはれゆかしの花よ。口あらば勇士が凛々しき光榮を語れ！露含みなば勇士が纒綿たる情緒を宿せ！色な褪せそ。花な萎みそ。われは汝が愛すべく崇高きをとこしへに護らむ。

＊　＊　＊　＊　＊

日は亭午なり。われは甘き空想より醒めぬ。醒めて現實のにがきに泣きぬ。

＊　＊　＊　＊　＊

花咲き花散り、三年の星霜夢と過ぎて、華々しかりし日露の活劇は過去の頁に葬られ、人も吾れも幾歳か待ち憧れし希望多き平和の、紫電一閃、正義の劍により て暗憺たる帷を斷ち落しつ、玆に耿々たる光明臻らぬ限なく、四つの海波靜かなる大和島根の、旭日の昇天するかのさまに、隆々と世界の表に輝き、東郷提督を生み、乃木將軍を生みし前古未曾有の大戰をば表彰しぬ。見よ、胸に煌めく金鵄の光燦として、あたり映ゆう勝ち誇りたる將帥の大方は、いみじき光榮を獨り擔ひて、濶歩すれど、哀むべし、枯骨空しく雨に咽んで劫風とこしなへに吹き荒べる、萬千名もなきの微卒は、漸く華やぎし記憶を離れ曾て麗しく咲き晴々しく散りし、盡きせぬ譽の千代かけて勳功の香とぞ匂はむ葩の、すげなく泥土に委されて泣けど、復た顧る者もなく、靖國の社頭、櫻花歲々に爛漫たれ、果して誰がために飾る錦にかあるらむ、世は斯くの如く、人は斯くの如く……。

さるにても、わが小さき腦裡に鐫られてのみ、永く永く悲哀と痛恨との種子を蒔かれつる懷しの正男樣は、二十五歲を一期、槿花一期の露と消えて、有りし昔の花のみ今は果敢なき紀念と殘りつゝ、絕えず異境のおもかげをさゝやけど、痛しき哉、打てども叩けども、永劫に堅く鎖されし黑き黑金の扉深くかくれて、呼べど叫べどまたいらへもあらぬ、遠き國の冥府とやらに。想へば想へば、御親が許しゝわが未來の君にてありけるを、怨むとにはなけれど、などて父母のかくは告げたまはざりしぞ、生前只懷しき人よと許り、戰死の後日月幾つかめぐりて、始めてそれと悟りし殘り惜しさ、よし一度なりともその心もてみふみ捧げたかりしを、さりとはわが日記の餘りに單純にして、花のみ床しみ戀しみしも、元より兄樣とのみ思へばこその筆

の跡なれば……。噫言はじ思はじ……とすれど、まざ〳〵眼に映るは、それよし――陸軍騎兵軍曹勳七等功七級筒井正男之墓――

（評）名も知らぬ異域の花の、戰のにはに咲けりきと聞きては、それのみにてさへ言ふべからざる感慨あるを、まして亡き人のゆかしき紀念ぞと思へば、恨はながし、緜々の情。

（記者曰）此篇投稿規則に制限したる行數を越ゆること多大、折角選者より二等に推重ありし故、暫く寛大に見て入選せしめたれど、今後は斷じて制限を破りたる投稿は採用せず。

四等

○峠茶屋

熊本　江副ちかつる

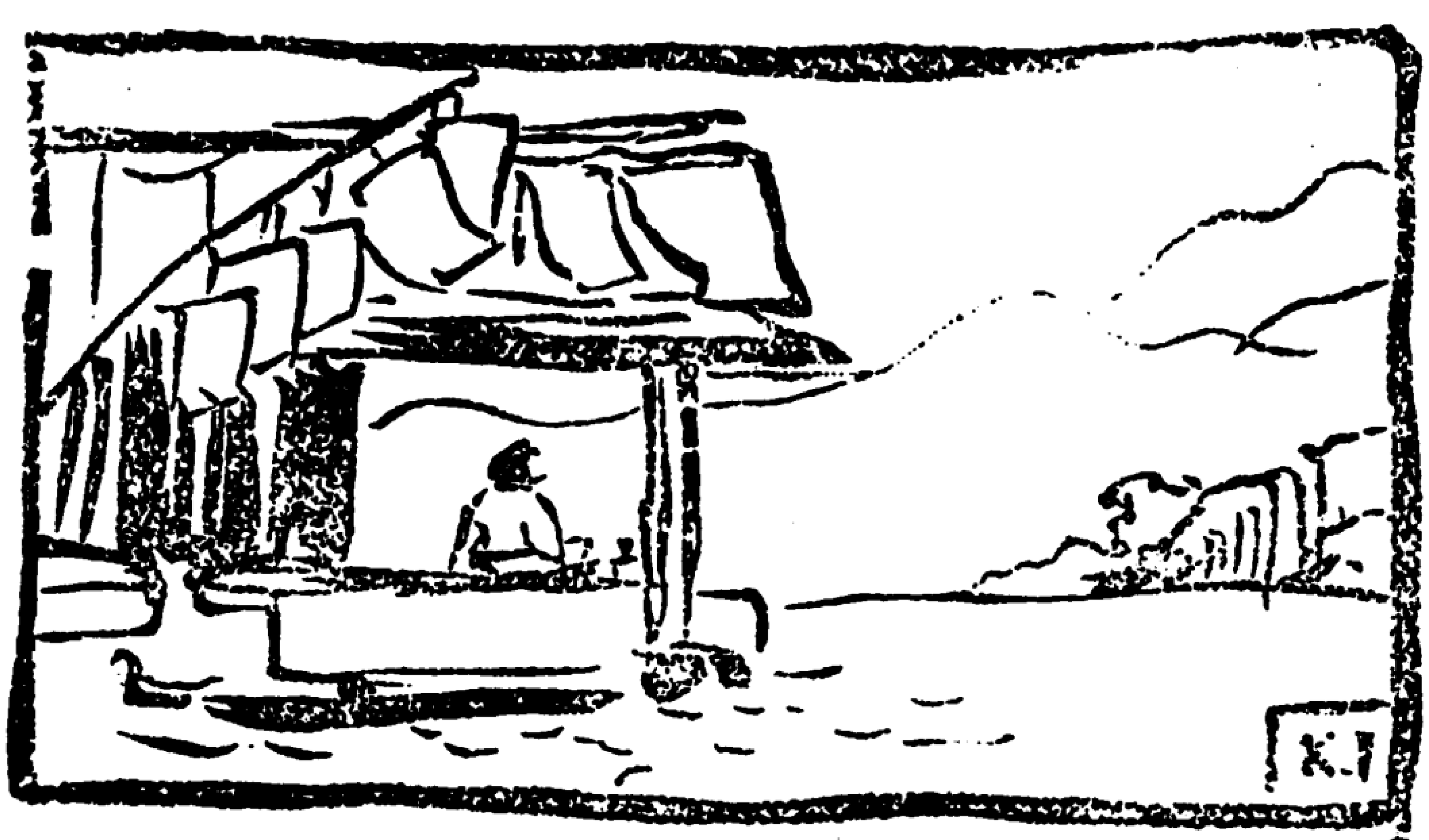
去にし三月の末、この峠路も櫻に春と浮立ちて覺ゆる頃であつた。市通ひの村人も皆歸りはてゝ弱い夕陽がもう此店の半まで影さすころ、私は父の歸りを待つて居ると來かゝつた一人の若人、近郷ではとても見られぬ洋服姿、好い天氣だねと輕く云て腰を下ろされた。よくこそと敷物進むれば應揚に敷いて、此處の櫻は特別だと晴れぬお聲、この時私は何處か見覺えのあるお顏と思つた。茶進めつゝいづれへお越し？と問へば、行く先定めた旅でもないさと淋しうも微笑んで茶を一口、この邊りに「そめ」と云ふ女が居るのをお前知らないかと優しう仰せて私の顏をつく〳〵お見なさる。そめ、と云へば私の母の昔の名だと、いつか村の爺樣が云つたから母に歸つて尋ねたら、そんな事はないと仰しやつた、さやうでござりますね、一寸この邊にはきかない名でござりますよ、さうかと御目はまだ私の顏を去らぬ、幾つ位の女でござりますの、生きてれば今年四十二だと思ふ、さやうでござりますかと何氣なく云つたものゝ、不思議では、私の母も生きてれば四十二と、爺樣が云つた言葉や見覺のあるお顏を考へて居ると、お前に父さんや母さんはあるかと仰る、はい父は居ますけども母は去年の今ごろ亡くなりました、父さんの名は何といふの、三吉と申します、何三吉？と御目をまろくして母さんの名は？かつ、と申しました、ではだめだと何か失望の御容子、いやえらく邪魔をしたねと、ポケットから白銅二枚を出して行かうとなさる、こんなに戴きましてはと呼んだが、それも聞えぬらしく、何か切りに考へながら下りて行かれた、ほんに見覺があるとは思つたけれど、生れてから村より外へ出た事のない私、あんな方を知らう筈がないと自らつとめて思ひすてゝ、敷物を片づけやうとすると下に小さい包みが一つ、これはと走り出てゝ峠を下つて見たがもうだめ、きつと後でとりに來られるだらうと其まゝ大事に母の片見の文箱の中へ納めたが……

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

今日は父が言ひつけて出た羽織を出して置かうと、簞笥から之を引き出すと、其間から落ちた一葉の寫眞、嗚呼母が最期の時私を枕べによんで、お前はどうぞ、この母とは變つて立派な女になつておくれ、と泣き乍ら泣く私の手を採りてさう云つて、そのまゝ亡き人となつた其あとて氣が付いて見ると、枕の下に一葉の寫眞があつた、それが即ち之てある。其時私はこの寫眞の主が誰てあるかを父に問うたけれども、知らぬと云ふのみか、恐ろしう腹立てたのてある、可笑しいとは思つたけれど仕方なければそのまゝこゝに納めたこれ、今見れば何だか心に覺えがある、まだ七ッ八ッのいたづら盛りなれど、清き眉、引しまつた口、たしかに見覺があるけれど、はて、はて…………

あゝ漸く私は思ひ出てた、さうである、たしかにさうてある、この春包を忘れて行かれた、さうだ／＼よく似て居る、道理であの時も何か見た樣な方だと思つたが其時は思ひ出せずと云ふた所で何故私の母はこの寫眞を死ぬる時まてはなさなかつたらう？なぜそしてそれまて私に秘してゐたらう？もしかしたら…………

納涼　下谷　伊藤楊瀬女



あの方が仰つたそめとかいふのは…………あゝ分らぬ、分らぬ、父の歸りを待ちて尋ねやうか？いや決して父は云つては呉れまい、又きつとおこるにちがひない、どうしよう、もう仕方がない、罪か知らぬが、幸ひ今日まてとりにも來られぬあの小さい包をあけたらば、何もかも分るてあらう萬一は、と立ちて文箱から取り出し、包をとけばそれには、密封して印をおし表にただ「そめどの」と記された書狀の如きものと、今一つは黒表子のうすい帳面とてあつた。そこて、封を切るのは罪深いと、まづ其帳面を開いた、中は鉛筆で澤山英語で記されてあるが、それは私には讀めぬ。が其終りの一頁には左の樣な事がかいてあつた。

「花は咲いても鳥は歌つても僕の胸の淋しさに變りはない、夫をすて子をすて、淺ましう淺ましうも車夫と走つた母否人につゆ逢ひたくは僕は思はぬ、けれども、悲慘な／＼父の臨終の際に、虫の音のやうな聲てのこされた彼の言を、傳へたいばかりに、そして又實に子として見るに忍びない慘い死をなした父の心を安んじたいばかりに、かくは其人を尋ねるのてある、が果して僕は何時其人に逢うて、かの恨み長い父の死を告ぐる事が出

來るであらうか、何時其人にかの言を傳へて父の心を安んずる事が出來やうか、思うてこゝに至れば、かうして宿る夜な〳〵も眠りかねては起き出て、父の墳墓の方を拜して、男泣きに泣く事も嗚呼今宵一夜ではないのである。」

先きはうすれて見えないが私は泣く〳〵讀み終つたのである。さてはかの君は？わが父はわが母は？あゝ私はどうしたらよからうか、今私は其そめどのとした書とこの寫眞とを抱きしめて、泣く〳〵、無情なる父のおそい歸りを、この葉櫻の峠に待ちつゝあるのです。

（評）悲絕慘絕。かくまで複雜なる事を簡潔にものしたる手腕凡ならず、敬服。

五等

○若僧

松山市本町三大本方　華子

静かな夕である。西の空美しう彩雲榮えて、頭上斜に漂ふ千切れ雲一片。其の影を落した泉水の紅に燃ゆる樣な面の其たゞ中に、かつきりと興居島山が其黑ずんだ頭を僅に浸して居る。聲低くううろ覺えの經誦しつゝ、足駄で汀の若草を踏んで私は鐘樓の階段を上つた。朱ぬりの欄干色褪せて、黑く木地の見えて居る箇所箇所には靑苔が滑らかにむして、ぎぼしに殘つた白金はそゞろ其のかみの榮華を忍ばせるのである。

私は例の樣に小手打かざして、夕映の空を黑くかぎつて居る鎭守の杜を眺めいつた。懷かしい杜――あの奥の籬落蕭條たる一茅屋――其處に私の戀しい母樣は、骨ばかりの病軀を、冷い衾の上に橫たへて居られるのである。母樣も今頃は屹度彼の落書きの戶にもたれてさぞ此方を見上げて居られる事だらう。じつと目を閉ぢると、前に浮ぶのは、痛々しうやつれ果てた懷かしい姿。「秀さん辛からうが、辛抱してお呉れな、ね、秀さん、……あゝ私が病身でさへなければ……」怪しうも耳に囁やく懷かしい聲。母さん！叫ばうとして、ふと我に返つた。あゝ、獨り寢の冷い衾の小枕に、夜な夜な通ふ戀しい面影を、寶かとすがりついては、窓打つ風にさまされて、其幻に泣いたも早幾夜。親一人子一人とは云へ、あゝ何故にかうは母樣がなつかしいのか。

欄干の上にくんだ手の上に、がつくりと腮を落して、さて涙に曇る瞳を、懶く池の面に投げると……緋鯉の一はねに興居島山の姿の碎けたのも束の間、黑い破片が集まつて、又元の靜けさに歸つて、波紋のうねりが大きく〳〵紫がかつた葦の繁みへ消え去る。「……天地にあふるゝ歡呼のひゞき光榮又なき武夫は……」。山門を勇ましく過ぎる一群。ヤア勇君！覺えず聲高に呼ばうとしたが、ふと氣が付いて、口を

おさへて、今更ながらしげ〳〵と昨日にかはる我袖を手に取り上げたのである。あゝ此の墨染の袖、この剃りたての青い頭、僕は坊さんなのだ、小僧だつた！杜にすがつて延び上り〳〵一同の影が、横町の夕闇の中に消え去る迄、見送つた。目には何時しか熱い涙！併し勇君は僕が――和尙樣は僕と云つてはいけないとおつしやるけれど、習慣だもの止められない――かうして一人寂しく泣いて居るとは夢にも知るまい、何故つて僕は勇君にはたゞ遠い所へ行くとばかり言つたきりだもの、恥かしくても構はん、勇君に丈け打明けて置いたなら折々は尋ねて來て、此寂しさを慰めて吳れるであらうに、今夜は一つ手紙を書いて、明日爺に賴まう、勇君と後の築山で別れたが月曜日？かうッと今日は土曜日か知らん。恰ど前週の今日だつたけ、歷史の時間で、折も折、恰ど牛若の鞍馬入りのお話しなので人事とは思はれず、物寂しさが、ひしと身に迫つて、放課後、一人机にもたれて泣いて居たら、不意に後から先生が肩をたゝいて「山川何を泣くんだ、義經でも秀吉でも小僧になつた事も、あるじやないか」輝やく目でジッと僕を見つめて更に「落膽しちや不可んよ」とおつしやつた。

ふと氣がつけば、黃昏の色は早樓に流れ込んで、闇は私をつゝんで居るのである。薄墨色の西の空に黒く、一はけ描いた樣な杜の上に、美しい夕づつが三ッ四ッ、然うだ〳〵大閤樣でも九郎義經でも、同じ小僧であつたのだ、僕だつてクラスきつての秀才と先生からも、望をかけられて居る身だもの、こんな草深い田舎の寺に何時迄も居るものか。今にあの山川秀太郎も昔は、道後の永正寺の小僧であつた、と世の人を驚かしてやらう、屹度々々、驚かしてやらなければ……と莞爾笑つて勢よく立ち上つた。

おゝ、杜に、小さい灯火一ッ、屹度々々母樣！鐘木とつて、小さい腕も折れよとばかり、一つき二つき三つき、邊りの寂寞を破つて、響く音は鎭守の杜も爲にゆらぐかとばかり。

あゝ母樣は鐘の音をかぞへて泣いて居られるであらう。僕も又泣いて居る。

（評）あはれなる裡に意志の强さも見え。親をおもふ心のあつきも見ゆ。

秀逸

○みすがた

甲府　そ　て　子

午後より來客あれば客間前栽ども淸め、さて床に古りし葉蘭ぬき捨てゝ、ほころび初めし紅梅の姿やさしきに活けかふ、折しも入り來たまひし父上は、この程都

の姉上より送り來されつる小形の額もち來たまひて、手づから鴨居の上にかけ給ふ。そが繪は夜ふかきゲッセマチの圖に祈りの樣も神さびたる我主エス君の御姿なり。寂寥たる園生に只一人優に氣高うはた打沈みたる御眼をあげて仰ぎませる天の一方よりかゞやく妙なる光に照されし御姿の尊さよ。

人てふ人の犯せる罪を御身一つに負はせ給ひて、張りさくる御胸に堪へつゝ、終夜えもねて聖き御心に誠をこめてさゝげし其祈、さても天父は如何にきこし給ひにし。

三年が程をかしづきて絶えず御教賜はりし御弟子等の心すらなほ迷ひの夢さめ得ざりき。

かゝる無智蒙昧の世の民をも君は捨て給はず、罪人も愚者も幼兒も一樣にあはれみ給ひぬ。

あはれ類なき友なる君よ師なる君よ、迫害多かりし短き御生涯の中に救ひの大業を終へ給ひし君が二千年前の園生の夜半靜けき木の間に苦しき御胸をたへ忍びつつ祈り給ふそが御心を思ひやれば、今更に己が心の恰も風になびく葦のごと、物に遇うては忽ちにうつるを、かくてもエスの僕なるかといとゞはづかしう、今よりは浮世心を捨てまほしと思ひせまりて見上ぐる我胸にひゞくは、

されど我心にあらず只聖旨のまゝになし給へとのさやけき御こゑ。

（評）穩かなる筆。

○花下のながれ

岩代　浮草女

日も西山に影を潜めて餘光わづかに森の梢をかすめ、遙か〳〵遠き水田の面に落ちて、かすかに黄金の波立ちさわげり、淺黄色に晴れ渡れる空、今は薄ねずみ色に變り初めて、心なき眞綿雪さへもさながら疲れし風情にて西の山の端より靜かに搖ぎ出せり、あゝ田舍ほど淸き處はよもあらじ、自然ほど美はしきものはよもあらじ。

若草萠ゆる小川の岸に佇める我れは錦の花の夕榮をみつめては幾度か吐息をもらしぬ、あはれ濁れる世の人人よ不運にも汝の心は汚れたり、汝の其身はけがれたり、疾く〳〵行きて淸き流に其身と心とを淸めよかし、假令其運命は短くとも、神聖なる天地に於て平和なる家庭に浴するを得ば、人生これより最上の快樂はあらざるなり、徒らに不義の榮華をむさぼるは決して心ある人のなすべき業にはあらざらん、見よ天女の如き花の影を、天使の如き花の姿を、彼れは右手に平和の希望を持ち、左手にあはれみの溫情を持ち、而してか

の艶なる容ぼうを清き水の鏡に寫しては、獨り誇顏にほゝゑめり、あゝ何たる愛らしさぞ、疾く急げ人々よ、汝の前途の光明は今や神の御手によりて救はれんとす、などゝ止めどもなき空想にふけりたる我れは、しばし茫然と恰も夢路を辿れるかの如く佇めり、忽ち來る一陣の風夢は一時に覺めて肌寒さを覺ゆと見れば、可憐なる彼の花は嵐に誘はれて時ならぬ雪と化しはてぬ、清き流は花もて蔽れたり、あゝ花よ、汝は實に人に例へていはんか、貧に迫れる在野の志士なり、窮して獨助くるものもなき哀れなる憂き身なり、あゝ何等慘なる境遇なるぞやあゝ何等壯なる最後ぞや、歡樂はやがて悲哀の兆なりと知りては、唯泣け人々よ花の運命の脆きとをば、今更ながら盛者必衰の世の中とは云へ、榮枯は夢か幻か、實に儘ならぬは浮世ぞかし、さはれ汝花よ散りてあへなく流るとも、よし其身は嵐の侵す處となるとも、何ぞその散り際の雄々しさや、汝に引替へて人の身は永劫に罪てふ憎惡の幕にとざされ、濁き春の天地あるを知らず、只に氷の如き心もて慾の巷にさまよへり、願くは花よ、なれが光明ある香もて罪を犯しつる人の胸をうて、少かるとも神聖なる世のあることを教へよかし。

あゝこひしき花……



大通り　KI

あゝ清き小川………我れは神聖にして而も單調なる汝等の生活を羨むの徒なり。

（評）やゝ亂れたる節あれど、冥想的にして、人をひきつくる所あり、女々しく涙もろき抒情文多きが中に、一種の特色ある文字。

○紅の薔薇

筑後　松葉萩子

思ひいづれば十とせあまり昔のある夏の夕べなりき。庭に水まかんとて、小い兄樣と二人木かげ涼しき庭におり立ち、われは朝顏、小い兄樣は盆栽よと、蓮の葉浮べる池の水を、くみてはかけ、かけてはくみ、無心に樂しみ居し折しも、小い兄樣は、「それ大夕立よ」と、後より、しとゞ水をあびせかけ給ひぬ。われは不意の事とて驚きと腹立しさにワッと泣き出しつ。折しもその聲にかけつけ給ひしは守雄樣なり。「などて

泣き給ふぞ。いかにしませしぞ。」とやさしく慰め給ふやさしくのたまへば猶ほ悲しさまして、いよ〻泣ぬ守雄樣は詮つきてや、紅のバラ一枝を我にしめして「これ進ぜんほどにとく泣き止みませよ」と、わが手にもたせ、水と涙とにぬれぬれしわが頰を拭ひ給ひぬ。いつの間にか雨も晴れて、三人してまた水まきに餘念なく遊びぬ。あゝこれも夢!!

その後守雄樣の家には、不幸のみうちつゞき一人の父君にともなはれ、はる〴〵都へと旅立ち給ひぬ。その時の悲しさ幼な心にしみ〴〵と、今思ひいでゝだに猶ほ悲し。

げに月日に關守りなく、十年前の牛乳配達新聞賣子、あらゆる辛酸を嘗めつくし給ひしかの守雄樣は、遂に今の陸軍大尉となり給ひぬ。

思へば村はづれの土橋のもと、ゆく水の面も淋しき柳かげにて別れまつりて以來、花咲くあした月すむ夕べ、一と日だに君のこと忘るゝ間とてなく、夢に思ひ現に慕ふせつなきわがむねをあはれなづかしきかの君よ!君戀ふるわが心知るや知らずや。

(評)戀しさには、かゝるはかなき事さへ思出さるゝが常也。

○萩の雫

あやめ子

空には輝く月、地にはすだく淸き虫の音、夜は寂として更けゆくを妾はたへ難き苦しさにそと庭におり立ちつ、手にせし一本の文がら、噫君いくとせの胸……秘事の熱き情に綴り給ひしこの千束の文、吁吾れは罪深き子にて侍るよされどされど許しませ君。吾れは已に定まりし夫ある身なるを。

萩咲く根元に立ちよりて、ふるふ手先にパッとマッチをすれば、あはれ薄墨のにじめる跡もあり〳〵とうつりて、はら〳〵と盡ぬ恨みをのせて、もえては空高く舞ひ上る文がら、吁、得たへじな吾は遂に萩の根元に打ちふしぬ。

冷かに頸を打つ雫にふと仰げば、月は雲に入りて燒き盡されし文がらのみ、ほの白う、折しも渡るそよ風に萩の白露はら〳〵と滴りぬ。

涙はらひて灰かき集めて宅に入りつ、白紙に包みて「萩の雫」とのみ、あなあはれかくて君の望は遂に一片の灰と化し終りぬ、君よ許しませ……と、只泣きぬ、泣きて涙の泉も咽れよとばかり、夜やいたく更ぬらし外には虫の音いよ〻さえて雁の一連悲しげに鳴きて過ぎぬ。

吁悲しき秋、吁淋しき秋なるよ。

(評)文の主が今宵の夢やいかに。

俳句

巖谷小波先生選評

二等

螢皆消えて草吹く嵐かな　大和國櫻井町大字櫻井福田屋方　霞女史

（評）下九字、即ち凡手の及ばざる所。

三等

薫風や竹を活けたる大書院　安房國佐久間村　水星子

（評）中七、此句を活かし得て力あり。

四等

涼しさや茂の中の下り坂　北總　河井さく子

（評）下五、初めて此句を新にす。

五等

河ほねや古事多き城の濠　高知市升形五十二番　高橋龜壽

（評）中七、佳。

秀逸

下京や節面白き金魚うり　高岡市　芳賀喜美代

秋を栖む京の澁谷の落し水　若狹　津田汐汀

せむだんに斧打てば風薫りけり　淺草　倉橋よしゑ

しめなほす二十五絃や更衣　武藏　青柳彌生子

柴賣りの京の紅買ふ彌生かな　千葉縣　三橋愛子

暑き日を厚化粧する醜女かな　伊賀　山村りやう

一つ來て傾く舟や初螢　大和　武村芳女

一樹にて古刹賑はす櫻かな　下總　塔雨女史

鍋洗ふ水のうれりや朧月　近江　田中紅雨子

花揺れて蝶々吐きだす牡丹かな　備中　菅森定子

卯の花の門やゆかしき女文字　下野　栗原くに子

影淡き絹行燈や春の雨　海南　芳枝

短夜や牛渡りし夢の橋　上總　能城美代子

笠敷いて木蔭に休む清水かな　神奈川　高梨うた子

切株やそれにも一つかたつぶり　大阪　武藤愛子

若葉して舍人の家もかくれけり　愛媛縣　きよ女

渡し場の道長うして日傘かな　下野　遠井曉子

ゆられゆく七所詣でや春の風　土佐　高橋白ばら

手土産や乳母なつかしき蓬餅　長崎市　天ヶ瀬さだ子

白萩に月みだれ入る露の庭　德島縣　犬伏ゆきゑ

よく見れば男なりけり盆踊り　千葉縣　市原はる子

草餅に嬉しき母の便りかな　越後　藤原かず子

植ゑ上げて田面見わたす夕かな　八王子　乙幡もん子

高樓の影をうつすや春の水　呉市　美津子

きゝやすき里は名もなし時鳥　香川縣　山地鶯

雛祭雛に似かよう御容かな　出雲　白菊子
菜の花や腰辨當の小役人　下總　長谷川しん子
年號もよめぬ鳥居や苔の花　伊賀　森永あさ子
風光る堂の欄間や九品佛　北總　山崎澄江子
美くしき日の暮際や雉子の聲　伊賀　西岡安子
夕涼み橋のたもとに二三人　茨城縣　石川ひさ子
妹の墓所あたりや不如歸　岐阜縣　加藤久子
桃の村春の祭りの太皷かな　上野　茂水子
梅かほる軒にかゝぐる國旗哉　下總　渡邊かつ枝子
瀧の音も靜かなりけり春の水　熊本　豐子
風鈴ややり水近き椽の上　京都　嘉勢琴水仙
花菱や水あれば螢低ふ飛ぶ　北總　酒井はな子
行々子猶鳴く宵の月夜かな　千葉縣　川奈部ゑい子
朝ばれのして雲行くや風光る　越後　雪子
梅が香や花ぬす人の影おぼろ　宮城　蓬子
鮎落つる早瀨の音や夜の雨　安房　みどり子
酒くさき人にからまる胡蝶哉　下總　北總湖岸
夕立や酒屋の門に繫ぎ馬　京都　吉田靜枝
夏木立下に文讀む乙女かな　長門　伊藤秋江
村遠近馬上に見ゆる夏野哉　豐後　村崎よし女
船の灯の水にゆらぐや夏の月　下野　溪泉子
朝顏や小家がちなる京はづれ　灘海　峡芳子
露踏みて菜の花三里戻りけり　日向　濱砂まさよ
渡守る唄の遠音や朧月　信濃　とき子
囀りや嶽越し見ゆる寺一字　京都　桂園子
一つ二つ蝶を追ひ出す霞かな　筑後　千葉みつ子
炎天や松葉牡丹の燃えんとす　匿名女史
山吹や靜かにまわる水車　長野縣　桐原梅子
鶯鳴いて益靜かなり桃の村　豐前　中村直子
朝顏の明日咲く花を數へけり　北總　文井武子
香水の瓶にさしたる菫かな　京都市　河本たつ子
燈籠々片裏町の紋遣哉　大坂　武藤蝶子
春の山寫眞器さげて越しにけり　相模　芳江
稻妻や二荒山の神の杉　牛込　鋒立月代
寫生終てパレット洗ふ春の水　鶴見　岩田たか子
紫陽花に風呂の捨水流しけり　近江　藤野しづ子

流行あつて流行なし

いつの程にかあらけむ、四卷の歌仙有り、春秋は失せぬ、夏冬は殘りぬ、一人請て木に刻まんと云ふ、一人制して曰く、此の歌仙ありて、やゝ年月を經たり、恐らくは流行におくれたらん、余笑て曰く、夫れ俳諧の活達なるや、實に流行あつて實に流行なし、たとはゞ一圓郭に添て人を追ふて走るごとし、先んずるもの却て後れたるものを追ふに似たり、流行の先後何を以てわかつべけんや、たゞ日々におのれが胸懷をうつし出て、けふはけふの俳諧にして翌は又翌の俳諧なり、題してももずもと云へ、廻り讀めどもはしなし、是れ此集の大意なり。

『俳諧桃李序』　蕪村

書簡文

文學士沼波瓊音先生選評

三等　○帝都なる父に

上總君津郡豊岡村　掬花女史

お歸りになる〳〵て何時お歸りなるんですね、北に空飛ぶ雲を見ては父君の上を思ひ、門に郵便と聲すれば父上よりのかと驚かれるのです、昨夜も縁起でもないが父上が危篤の狀を夢にみました、今朝まだ寐醒が惡うございますが、何も御變りもありませんか、妹の靜も宜敷申しましたよ。

（評）夢は逆夢とやら、父君は必ず御壯健でせう。

四等　○都の友に

土佐吾南諸木村　高橋白ばら

御上京後再度の御文忝なく拜し參らせ候、御許樣には道中御ぶじ、殊に御首尾よく御入學の由、何より御目出度存じ參らせ候、村一人の女秀才、一向御成功をのみ祈り參らせ候、げにこの程の里のいそがしさ、養蠶家事農事に目もまはる位に候、今日もまだきに桑をつみ、八つさがり迄門の小田にてれんげを刈り申し候、たま〳〵の雨天にても、例の稻田こしらへや、みの笠のつくろひやらに追はれて、定めし夜の讀書時間迄度々おかされ申し候、とにかく仕立そめて今日九日の袷羽織にまだ衿つかぬびんなさ、御察し下さるべく候、御返事おくれしもたゞこの故、必ず〳〵惡しう思し給はざれ、申さずともの事ながら、くれ〳〵も御身御大切に御勉學あそばし、一日も早く錦をこの里にかざり給はん事のみいのり候。とり急ぎ候まゝこれにてかしこ。

（評）田舍の初夏の忙しさ想ひやらる。

五等　○奉職後友の許に

軒の玉水

雲かとばかり咲き亂れたる尾上の花もいつしか過ぎつ、早くも青葉がくれにほとゝぎすの聲なつかしき折柄、御許樣にはいよゝなほ御健やかに、朝夕文の林たどらせ給ふとや、此上なく御悅ばしう存じ上げ候、諸先生には御恙もおはせてや、憚り乍らよき折見計らひ給ひてよ

しなにと、ねぎ上げ候、扨とや私事御別れ申候ひし翌日いよ〳〵此地を去るべく思ひ定め、今ぞ荒れにし我家あとにと思ひし時よ、おゝ其時!!ちさき胸のあやしくせまりて賤が伏屋のいよ〳〵なつかしう「身躰いとひてよ」とのたらちねが言の葉扨も苦しう候ひし哉、こゝ四月やがてま見ゆる我が家！我が居間！我が母！などかくも心殘りのせらるゝぞと、我と我が心叱りても、今迄心に描きし豫想のさま〳〵、希望のいろ〳〵、何處にか姿をかくして只故里こひしの思ひむら〳〵と、ややうやく車に打のり申候、かくて數時間の後夢心地の中にいつしか車は進み〳〵て、遂に目的地に着き申候、聞きしに勝る鄙地にて、ゆきかふ人もいと稀に、誠や八重葎しげれる野末の伏屋を、我は第二の故鄕と相定め申候、四日五日は只東の空のこひしくて音しめやかの春雨、小夜更けてなく小田の蛙の聲、見るものきくものひし〳〵と身にしみて敎案作らんとてとりし筆のいつしかにおかれ、あはれなつかしき故里の友は今如何にと、心も心ならず候ひしが、廿日と過ぎ一月とたち、二月を經し今日此頃は、もはや人情風俗などもよくわきまへ得る樣相成申候。實に今の世に薄きは吉野紙に何とやら申候へども、此地にてはなか〳〵左樣の事つゆばかりも無之、先生と申候へば此上なく尊びて、道通りては知らぬ者迄小腰をかゞめ、事あらば先生へとてむづかしき文字などたゞされ、げに今更漢文の修業足らざりしよと、後悔致し居り申候、今の私が身の上外にたとへんものなく、さながら鳥なき里の蝙蝠とや、さるからに、うすき智能の只退歩するのみにて、いと本意なき事に候、されど〳〵利に走り慾にまよひ義理人情を辨へぬ塵の巷の風潮にそまんよりは、一點の邪氣なき天使と共に、質素純潔なる田舍人と交り、汚なき自然と親まんが私のかねてよりの望に候へば、いよ〳〵身をつゝしみ行をたゞし力の限り身のかぎり、ひたすら敎育事業につくして此地に淸き歷史を殘したく、延いては友の爲母校の爲女學校卒業生の價を今少しと思ひ居り申候、さはれ〳〵知らせ給ふ通りの數ならぬ身、若し一歩を誤またばと心痛め居り申候、敎授上の不都合は元より、未だ何の經驗もなき者に候まゝ、時々あれもこれもと胸にひゞき候へども、日數積れば自ら消え行くならんと存じ居り申候、なほかにかくときこえあげまほしきふし〳〵あまたなれどあまり足引の山鳥の尾と相成り申候まゝ今宵は是にて惜しき筆とめ申候折柄後の山に友をやよぶらんましらのこゑおゝ獸にても友はこひしきものに候はんを、かしこ。

（評）純朴なる田舍人と交りて、邪なき敎へ子相手に送る月日の如何に樂からん。

秀逸

○久しく缺席せる友の許へ

宇治　田舎娘

木の葉落ちつくして虫の聲々いとあはれに相成、此雨三日は殊の外寒さきびしく覺え候處、御許様には如何遊ばされ候や、常々の御勉强家にも似合せられず、久しき御缺席、其上雁のお便りさへ御座なく候へば、吾等友と打ち寄りては御病氣か將たよぎなき用事のおはします爲か、それにつけても御珍らしき事よ不思議の事よと、とり〳〵に御噂さ申し居り候ひしが、今日或人より承り候へば、御許様には御病氣にてもおはしまさず、されば御家の御都合にてかと存じ候へば然る御噂さもなく、只何かと惡評のみ承り候、賢明なる御方になどてさる事のおはすべき、そは世間の人の兎角此頃の學生とし申し候へば風儀惡しきもののやうに誤解なし居り候へば、御許様のかく久しき御缺席に若しやと疑ひての風評にて、よもかゝる御行狀のおはし候はずなしと信じ居り候、あゝ親しき君よ、されど若し君の世に汚名を流し給ひ候はゞ、一人御身の恥のみか、學校の名譽にもかゝはり候ひなん、若し君晴天白日の御身に候はゞ速かに樂しき此學び屋に來たらせ給へ、友ば皆喜びて御身をむかひ候はん、さて御快活に御勉學遊ばされ候て、才は優に校中一とたゝへられ給はん事を祈り上候、先は右過言申上げ候ひしが妾が心をお汲下され候て御免し下され度候、あら〳〵かしこ。

（評）情、理ともに盡せり。

投書家　長岡市　土田りた



○あやめ草

芝　大木無果花

をやみなく降る五月雨の空、うす墨の如くかきくもりて、いつ晴れぬべきけはひも見えず、うみては落つる梅の實の音さへ淋しく、さらぬだに、此頃の長雨にいぶせき家のうち、朝より夕暮の心地して、やぶかのみ多くなりますれば、焚物をさへくゆらしつゝ、心の八重葎しげさまさりて、しめりがちなるに、そこはかとなく、ひねもす文机に凭りて、いにしへの物語りなどとう出てゝも慰めかねる折から、はる〳〵と、めのわらはの御使ひにて、殊に色こきあやめぐさ賜はり、山の井の淺き心には、何といひ出てん言の葉もなう、誠に

時鳥の一聲にも、まさりてうれしく眺め入り候、此の程は、御あるじ樣も御るすの由、日をふる梅雨に道もぬかりて御困じとは存じ候へど、何卒々々御光來願ひ度、まげて望ませたまはらば、軒のあやめぐさゝきつとなのる山時鳥も、つれなく過ぐまじと存じ上げ候を、よろづは御めもじの上、申上ぐべくなんかしこ。

（評）流暢、誦すべし。

○嫂の出産を兄に知らす

長門　孤菫女史

兄さん生れましたよ赤ちやんが、けさ明方にね安々と、私嬉しくて〳〵ならないんですよ、兄さん男か女かあてゝ御覽なさい、とてもあたりますまい、赤ちやんはね兄さん、望んでゐらした男でした、それは〳〵か愛くて、バッチリと、大きな眼のあたりが兄さんにそつくりだつて母さんも仰つてよ、もうみんな大悅びで母さんなどにこ〳〵と夫れは大さわぎして入らつしやるのよ、そしてね姉さんも大變に肥立ちがいゝんですつて、今よく寐んで入らつしやいます、赤ちやんもね、側に寐てるんてす、可愛くて〳〵くひ付きたい程ですよ、兄さんに早くお目に懸けたいわ、名は前から云つておこしの通りにしましようね、健ちやんていゝ名ですわね、オヤ起きた樣だ、私抱きたいからもう是て御めん被りましよう、餘は又後便にね。

取急ぎ一寸御報まで、めで度かしこ。

（評）嬉しさの情狀に躍如たるをみる。

○入營中の弟に

讃岐　藤田ぬい

昨日の手紙を見て泣きましたよ、お前もおともだちが親もとからお金送つて貰へるのに、去年入營してから半年も立つのに、一度も送つて貰へず、夫が爲に人並の交際も出來ぬから、人には賤まれるし、上官からも少しの事でも容赦もなく叱られるし、殘念で夜もろく〳〵寢られぬと云へば、嘸苦しいてあらう、つらいてあらう、けれど、姉さんの身も少しは考へておくれ、お前が一人前の人間になつてお嫁でも取る迄、家の火を消してはならぬと思つて、此年になつてもお嫁にも行かず、お前が内に居つた時にかはらず、近所の仕事の手傳ひや、麥藁眞田を組んだりして、其日々々を送つて居るが、此頃は組賃もやすし、他に仕事もなし、三度の食事を二度ですます事が度々ありますよ。六疊一間の家じやから、お前の手紙は、あの世にござる父さんや母さんが、見もし聞きもして妾よりは一層かなしんで居らつしやるであらう、もう是からはあんな事云ふておこしてくれな、妾や、胸がはりさく樣て、此世に居たくなくなるわ、けれど姉さんは不考へな事

はなんぼにもせぬ、お前が滿期になつて歸る迄は壯健て先祖のお祭をするから、お前も、何んぼつらいかなしいとて、不考な事してくれなよ、又如何に困つても人の物に手を出したり、拾ひ物を藏したりして、罪人と笑はれな、君のお爲、御國の爲じやと思つたら、如何なる苦勞も苦勞じやあるまい、三年と云へば永いやうじやけれど、すぐにくる、お前と一夜泣き明かしたのもつい此頃のやうに思ふけれど、はや半年も立つたじやないか、少しの間じや、何事も忍耐おしな、又笑ふ時もあらう程に。

次の日曜日に春子さんのお供で琴平參詣するかもしれぬ、參つたら其時お目にかゝるから下宿て居て下さい、姉さんは其日を指折つて每日數へて居るのよ。

（許）弟おもひの姉の情は、よく顯はれたれど、入營以後一錢の貯なき一兵卒が、下宿に居るは不屑せり。

○弟の許に

韓國　ど　よ　子

燒き付く樣な此暑さにも、重い荷を負ひて、得意廻りとは、さぞ、辛い事てせう、御察し致しますよ、けれど武夫さんは、日本男子てす、勇氣を出してお勵みなさい、皆んな自分の爲めになるのです、妾は常に御許の健全と、耐忍と、辛抱と、さうして後日の成功とを、祈て居るのです。

常々も云ふ通り、御身は、〇〇家の杖とも、柱とも、云ふべき人、妾の賴むのも、又御身ばかりです、人と生れた以上は何人も、おそかれ、早かれ、此、浮世の、荒浪の中で、もまれねば、ならぬものですよ、又もまれてこそ、眞の、人間となるのです、決して他の兒が、親のもとに居つて、每日學校へも行つて樂しく遊んで居るのを見て、落膽など、せぬ樣御願です、母さんは此暑さにも、をいとひ無く、例の、內職をして、居られますから、御安心下さい。

是れはほんの、少してすけれど、お小使に、して下さい、又入用の、物が、有つたら遠慮無く、云ふてよこしなさい。

重々御身、御大切になさい、さやうなら。

（許）敎訓もあり、慰藉もあり、女々しからざるは殊によし。

○姉の許に

大阪府　君　子

お姉樣先立て入學の際には色々御世話に成りまして誠に有難う御座います、此處へ來る迄はもう何日すれば學校へ行くのだと其日の來るのが待遠しくて明日と云ふ日の夜は寢られませんでしたよ、嬉しくて、學校へ行て始めて先生が私の名を呼んで下さいました時などは、希望の光に目もくらむ斗り、言ふに云へぬ心地が仕ました、併し姉樣此事は內所に仕て置て頂戴、若し友達に聞えると笑はれますから、誰の心も同じ事と思ひ升けれど、其んな顏もせず皆澄ましていらつしやい

ますから、と云ふて居る自今も人前は何とも無い顔仕てますの、入舍も濟んで姉樣はお歸り成さるし、私は初めて大勢の中で一所に晝飯を頂き、日の暮れる迄は荷物を片付けたり何か仕て過して仕舞ましたが、扨て夜に入つて四方が靜かに成りますと、お父樣やお姉樣の事が思はれて、譯無く涙が湧いて出て、一目も眠れませんでした、私の隣の方も眠れぬと見え、寢返り斗り仕て入らつしやいましたよ。

昨日御文を戴きました時などは、何だか胸が迫つて隣の方で一人泣きました、私等に來る郵便物は皆舍監室の机の上に並べて有るのを貰ひに行くのてす、其時の嬉しさつたら、一度から言ふ身に成つた人で無いと是ばかりは分らぬでせう、わけて始めての者は一倍てす、前から居る方のお話に、皆があまり手紙を戀しがるものてすから、中には惡戯をされて空喜び仕た方も澤山有つたさうてす、今日も此から九十何日すれば暑中休暇に成ると、皆さんと指折つて居るのを、舍監の先生に見られて、そんなに歸りたいてすかと笑はれました、併し先生は誠に御優さしい方て、お友達も皆好い方斗りてすし、私も健全て勉强仕て居り升から、憚り乍ら御喜び下さいまし、此ばら始めての造花て誠に不細工てすが御目に掛けますから御笑覽下さいまし、お話仕たい事がいくらも有りますが、とても拙い筆には書き盡せませんから、休暇に歸つて何かと御物語り致します、お父樣へ何うか宜敷く御傳へ下さいませ願ひ升、左樣なら。

（評）寄宿舍生活をした者は誰しも一度は經驗した事です。

○出産を祝ふ文

宮城縣　松枝女史

かれて今月と承り一同御案じ居候折りから、只今御便にて御文拜し奉れば、今朝とく、いと安らかな玉の如き男子の君をあげさせ給ひし由、鶯の初音にもまさりて嬉しう覺えまゐらせ候、まこと、あらたまの年立ちかへりて、たかき、千代に八千代にと、君が代を祝ふ日の朝日の輝きと共に、うませ給ひしは御運の程もいとかしこく、千代の榮の頼母しさも一入と存ぜられ候、まして、御兩親樣の御よろこびは如何ばかりに候はん、初孫の笑顔に氣も若やぎ給ふらんと被察候て、御舘のうちの御賑ひ目に見る如くに御座候、早速參りて御祝詞申上げ松子樣の御姿をも伺ひはべるべくと存じ候へどもとりあへず御祝の印として此眞砂染粗末の品には候へども、たゞ其の名の目出度きをめでて御目にかけまゐらせ候かしこ。

○夫を失ひし友の許に

徳島縣　若槻淑子

常無きを世のさがとは兼て思ひ知りながらもこは餘りなるはかなさにこそ候へ、夫の君には日頃いたづきの床に沈み給ひし御容子もさらに〳〵伺ひ參らせざりしに、たゞ僅かに一週りが程の御惱みにて昨夜遂に歸らぬ旅に赴かせられ候由、夢かとばかり驚き入り候、御家内樣の御愁傷御許樣のお力落し、御あと〳〵の御心配如何ばかりとお察し申すだに胸痛く、何とも御いたみの申上樣も御座なく候、さりながら一たび無情の風に誘はれて空しく歸り給ひし御身は如何程御歎きなされ候ても歸り給はねば、何事も〳〵皆天命と御諦め遊ばさるべく候、殊に忘れ形見の撫子も在しまし候事故、御生ひ先きを力草に御心强く思召し、御身御大切に遊ばされて、お年老られし母君にます〳〵御孝養御つくしなされ候こ

そ亡き君にもこよなき御供養と存じ候、御歎きに御看護の御勞れさへ加はり、もし御病氣に罹り給ふ事も在しまさずやと深く〳〵御案じ申上候、何卒々々さる事のあらせられぬやうお心丈夫にお持ちなされん事呉々も念じ上參らせ候、今朝參上致し及ばずながら何角お手傳ひ申さんと存じ居候處あやにく他出致難き急用差起りよんどころなく御無沙汰致し代理遣はし候段惡しからず御ゆるし下され度候、何の御役にも立ち申すまじく候へども何卒御遠慮なく相當の御用御命じくだされたく候、萬づはいづれ御まのあたりにと、先はあら〳〵御いたみなのみ、かしこ。

○奉公先より　福井市　山崎松枝

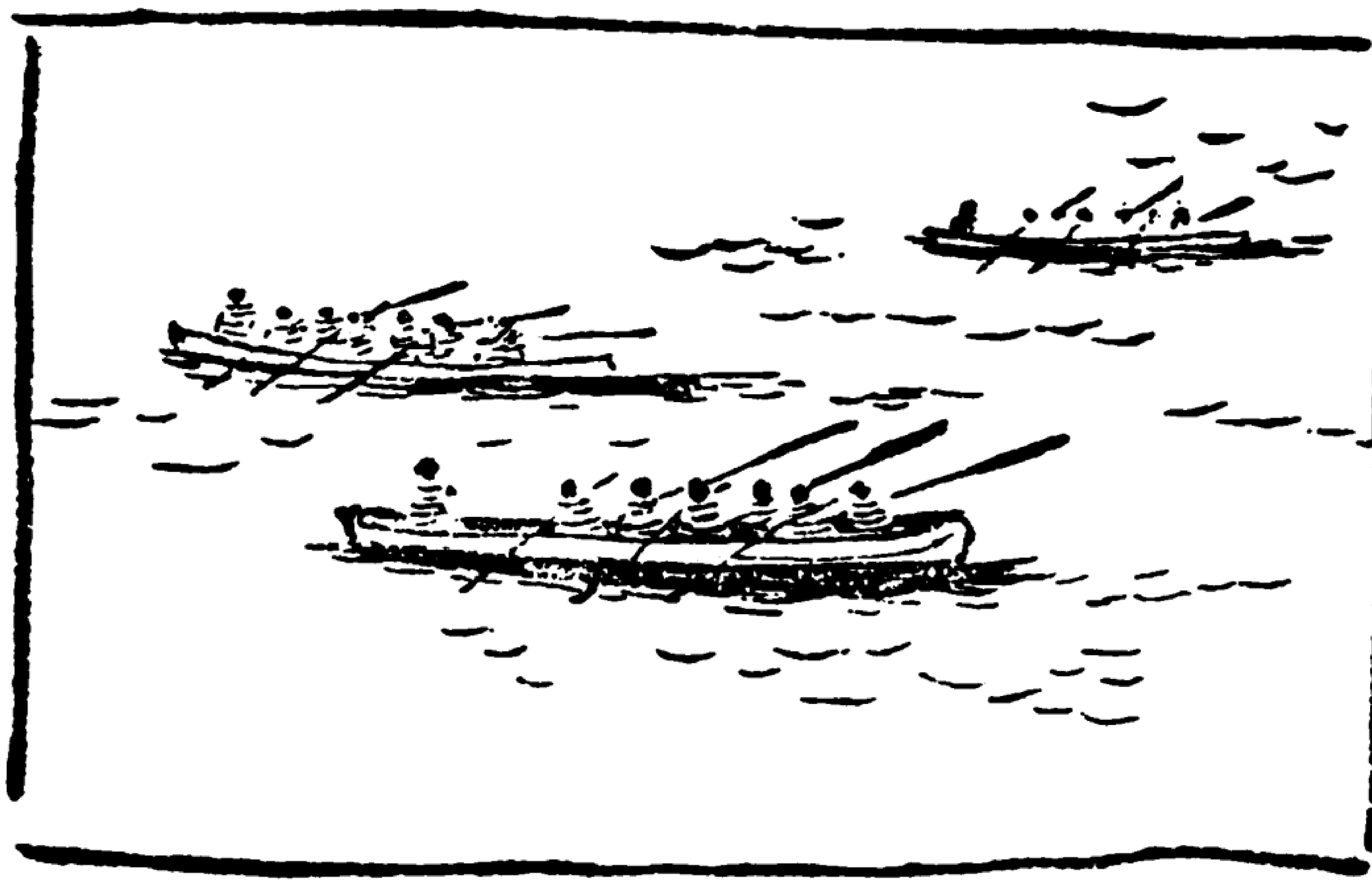
姉さん、最早里は田植も終つてホツと御安心なさる頃でせうね。姉さんと村端れの一本松の處で、お別れしたのはほんの昨日の樣に思うてゐるけれど、もう一箇月の上になりますね。お母さんも兄さんも御無事で居らつしやいますか。初奉公は辛いとか苦いとか能く聞ひてゐましたが、御當家は御主人樣お二人きりで、揃ひ揃うてお優いお方でありますから私はほんとに仕合せでございます。此頃でも朝は六時までに起きれば好いとの事でありますから、私は五時三十分位には屹度起きて朝御飯の仕度をするので御座います、其れて一日の中でも旦那樣が朝御出勤なさるまでと、午後お歸りになりました時が、最も忙しいのでありますが、お留守の間は、奧樣のおそばて裁縫を敎はるのであります。

夜は九時に寢ますので、それまでは雜誌など讀んで、相も變らず女子文壇には投書して居ます。

此樣なお優しい御主人樣に御奉公致しますので、里に居るよりは餘程仕合て御座いますが、何うしてか夕暮に雨戸を閉めに出ましては西の空を眺めて知らずホロリとなります事も、又夜更けて床の中で耳を澄して聞いて居ますと、泉水の水が河へ流れる音が、あの里の前を流れる谷川の音と聞えて、何れも、鄕戀しやの涙の種となつて、熱き露の頰を傳はるのが毎夜でございます、私自分ながらも罰が當られば好いがとさへ思うて居るのであります。

まだ書き度い事もありますが、今鳴つたのは九時ですから之で筆を止めます、御母さんにも兄さんにも宜敷く　、追々暑さが加りますから姉さんも御身を御大切にして下さいれさよなら。

ボート競手　遠江　宮地梅子



○無沙汰見舞　沼津　鈴木多歌美

春さん其後は大そう御無沙汰致しました。何時も御變りなくて結構れ先日は叔母樣がお目出たう御座いました、春さん嬉しいでせう、四人の姉さんにおなりですれ、露子が羨しがつてれ、姉さん早く赤さんを産んで頂戴つて、それは〳〵なかしな注文が出ますの。どうか叔母樣に、くれ〳〵もよろしくお傳へ下さいれ、露子からもよろしく申しました。

○故鄕の友へ　韓國　角田やすゑ

こちらも此間の雨で桃の花はすつかりちつてしまひました、けれども柳は色が濃くなつて、長くなつて、今迄の美しかつた花の世界は、あつさりと清らかな綠の天地になりました。

美ちやんですか、え丶、此年から學校へ上つて居ます、此頃遊戯を敎はつたそうで、夜は其おけいこで大さわぎです、弟も此頃はめつきり大きくなつて漸く口がきけるのに、韓人に惡口ばかり云つて仕方がありません、韓語をと力んで居た私は、まだ人から惡口云はれても審られた位に思つて、よろこんで居ます。

新歌謠

編輯局選評

二等

月を慕ふて力のかぎり海の男神は潮をます

奈良縣吉野郡賀名生村　中富よしみ

超越

三等

沖の小島に菫があれば千鳥の羽根に蝶乘せて

神戸市下山手七ノ三七四　大谷百枝

技工千錬

四等

咲いた櫻が流れにうつる染めて置たい裾模樣

上總　美代子

流れと裾、好對

五等

つゞみ打つたび觀世の袖に花がちります能舞臺

小田原　倉橋よしえ

諧調の妙

秀逸

○　下野　鈴木雪子

藤は母樣花菖蒲は姉よ妾しや深山の百合の花

○　遠江　比良湖芳子

聞かせましょうゾヱ御笑ひ草にわしが在所の茶摘みうた

○　印旛郡　ふじ子

花も散ります蝶々もくるう卯月なかばは浮かれ時

○　越後　日下きよの子

越後名物蒲原獅子は足が二本で飛びあるく

○　麹町　淺井千鳥子

白の牡丹に一筆染めて呼んであげたい姫胡蝶

○　若狹　澤田あい子

若狹名物小濱の小鯛生で上げたや東京へ

○　滋賀　梅香

ほんに春だよいづこを見ても木々の青葉が皆若い

○　筑前　春野

七つ並んだ米倉開けて風に吹かする春日和

○　紀伊　田中文子

月のお姫をよせる事出來りゃ詩の秘傳をきこうもの

○　西宮　森井せい子

色が白いとじまんの娘つらや田植で日にやける

○　上毛　小暮たつ子

妾の思を蝶々の羽子に書いてやりたい菜の花へ

○ 岡の名物河原の螢星が動くと出てはやす　但馬　早崎芳月

○ 天津乙女の琴糸切れて降つてくるのか春の雨　神戸　麗雨女天

○ 八十八夜の名殘の霜に宇治の茶の芽は皆焦げた　奈良縣　上杉秀子

○ わしの住居は津輕の海べみるはお山と海許り　陸中　若生すみれ

○ 裏の田畝に蛙がないて麥は穗となる春の暮　駿河　松永しげ子

○ 淺間颪の涼しい風を汽車で送りたい東京へ　上毛　關口むめ子

○ 時計洋傘はしのぢやないがたまにや紙上で名を見たい　北多摩　野菊

○ 家は大宮氷川の田甫蚊帳の中から螢見る　小石川　山崎房子

○ 走る電車が故郷迄あれば乘つて見たいよ日暮に　京橋　今泉磯千鳥

○ 美人三千一朶の雲に乘せて吹き行く花の風　北海道　工藤すゑ子

○ 生れ出てから今日今迄のあるか歩いた足の跡　靜岡縣　絹むら

○ 晴れよ朝ぎりなびけよ雲よ故郷見返る鞍の上　下野　栗原くに子

○ 濡れしつばさを干すかや空に露の芝生を立つ雲雀　神戸　栗池絹子

○ 蝶よ花よと育てた此の子せめて女學校丈けなりと　美濃　華醉女史

○ 厭のうき世はいやだと百合はひとりみ山に咲いて居る　秋田縣　佐々木貞子

○ 詩の女神の乳房を漏れて花を養ふ春の水　神田　ひで子

○ 燕二羽して何歌うたふ私が苗取る田の畔で　越後　瀧澤視都子

○ 蝶は舞いだす雲雀は唄う女神やゑいます春雨に　飛驒　あやめ子

○ 春と夏との追分節を小田の畦の中になく　長門　梅田糸子

○ 開け行く世は電車よ汽車よ龍の都は花車　大和　栗山英

○ 甲州山家と笑はゞ笑へ今じや汽車ある電氣つく　甲斐　矢崎弱路子

○ 朝は明星夕は月を踐んで仰いで畑稼ぎ　羽前　杉葉女史

○ 立てよ据れとほめはやさるゝ髷の姿がはづかしい　信濃　佐々木まさゑ

○ 四條五條の夕風ぬるう橋の下ゆく化粧の水　豊後　さゞなみ野

○ 東京よいとこ行きたいけれど姉と連れても三百里　日向　濱砂まさよ

○ 今宵お池の月舟の上のつて行きたい天國へ　鹿兒島　朝野むら

○ 私しや楢橋炭坑のほとり馬車は通れどまだ乘らぬ　筑前　山茶花

○ 宇治に生れて今日此日和一日つみたやお茶の芽を　熊本　桑原香美女

○ 朧月夜のふとさすらひに拾ひ上げたる蒔繪ぐし　京都　武田つゝじ

評論文

文學士沼波瓊音先生選評

三等

○奮闘

長野縣北安曇郡七貴村下押野　下里翠波女

孑々として立ち蠢爾として樂む、天地は無窮無邊にして身は僅かに五尺に過ぎず、宇宙の齡は千億無量劫にして盡きずと雖も、吾人の命は僅かに五十年を出でず、禍と云ひ、福と云ひ、達と云ひ、屈と云ひ、吉凶と云ひ、成敗と云ひ、貴賤と云ひ、貧富と云ふ、これ畢竟何等の意義かある、吾人は唯孑々たるのみ、蠢爾たるのみ。

且つ夫れ上に雷霆あり、下に地震あり、風雨寒暑水害は時を選ばずして來り、疾病禍害、突如として迫る。況んや哀別離苦の涙、人情纏綿の桎梏、間斷なく襲ひ來るにあらずや。人生素と朝露の如くにして、且つ風波甚だ繁し。僅かに五尺の肉塊、何を以て此間に立たんとする乎。

他なし奮闘是れなり、吾人の一生は不休の奮闘ならざるべからず、吾人は晏逸ならんが爲に此世に生を稟けたる者にあらず、實に働かんが爲に遣はされたる者なり。吾人は自己一人の幸福安全を計るべく來らしめられたるものにあらず、實に宇宙の發達、人類の進歩の爲につくす所あらしめんが爲に送られたるものなり、吾人生涯の意義は唯苦闘のみ、健闘のみ、奮闘のみ、血をすゝりては渇を癒し、涙を呑んでは聲を張り、倒れては立ち、立ちては戰ひ、奮闘また奮闘、敢て間斷あるべからず、此間斷なき奮闘に打ち勝ちて始めて人生の眞意義を解するを得るなり、然れども我意に基ける奮闘は私闘のみ、これ無價値にして其力は久しきに堪ふべからず。わが所謂る奮闘は宗教的安心の上に立てる奮闘を意味す、即ち絶對の大威力を藉りて神の大御心に基くものならざるべからず。かくてこそ吾人の奮闘は大威力を生じ來る、至大至剛の元氣は必ずやこゝに胚胎し來らんなり。

悦樂や、慰安や、これ人生奮闘場裡に於る天來の福音なり。されば吾人は恣に此悅樂を受け、

此慰安に浴することと斷じて叶ふべからず、唯奮闘苦闘これを買ふに足るのみ、故に大悦樂を享け大慰安に觸れ、又人生究竟の滿悦極樂を味ふことを得るは斷えざる奮闘によりて始めて享け得らるゝものなりとす、夫れ奮闘は原因なり、悦樂は結果なり、其原因に於て力むることをなさずして、ひとり結果を握らんと欲するも、豈夫れ得べけんや。

（評）今日の青年士女に於て最も缺如たるは奮闘的精神なり、曰はずや、進めよ然らば遂する所あらん、開けよさらば大いなる光明に接せんと、因循軟弱にして進歩向上の勇氣を缺き運命の車の轍にかけらるゝの人は宜しく省みる所あるべき也。



海岸　紀伊　玉井空々子

四等

○賞罰論

山形縣西置賜郡南小國村足水中里　七三子

小善も必ず賞し、小惡も必ず罰し、小是も必ず褒し、小非も必ず貶し、是非善惡に對して褒貶賞罰必ず其當を得しむ、これをこそ眞の公平といふべきなれ。さるを功あるも必ずしも賞せられず、罪あるも幸にして罰をまぬがるゝものなきにあらず、善惡應報の必ずしも當らざることかくの如きを見て天道是か將た非か、世なか〳〵に不公平なりと絶叫するものあり。されど眞の公平といふこと果してよくし得べきか。もし小善小惡細大漏す事なくこと〳〵に皆當を得しめんとせば、はては國の人民を扱ふこと恰も囚徒を扱ふが如く、一人乃至數人ごとに目附といふものを附し、常にそが一擧一動を監して、一善一是一惡一非こと〳〵くこれを報ぜしめ、これによりて賞罰を行はざるべからず。これ人々の自由を奪ひてことごとく奴隷となすものといふべし。かゝることは豈人の堪ふるところならんや。そも〳〵賞罰は必ずしも當らずとはいへ、曾て小惡をも犯しゝことなく、常に善を樂しみ善を行ふものに罰をうくべきはずなし。曾て小善をも行ひしことなく、常に惡を樂しみ惡を行ふも

のに賞せらるべき等なく、將た忠孝節義のあらはれざることなく、大惡無道の終に刑せられざるなきを見れば、賞罰は必ずしも當らずと雖蓋し遠からぬものなるべし。されば其賞せらるゝは賞せらるべき事實あり、罰せらるゝは罰せらるべき事實あればなり。その賞せられしを見て善に進み、罰せられしを見て惡を犯さゞらんとするは人の常事また止むを得ざるなり。たとへば猶大中小の學校に於ける試驗の如くなるべし。甲は乙よりも其學力まさりたりと雖たま〳〵不得意の問題にあひて落第となり乙はたま〳〵得意の問題なりしかば佳良の成績を得、丙は丁よりもまされども其の成績丁の下にあるなどの奇觀なきにあらず。かゝる奇觀あれば試驗は學生の實力を正當にあらはすに足らずとせば、いかなる方法もて之を試むべきか。もし眞正の實力を試みんとせば、あらゆる科目を片は しより ことごとく試み、そをもて其實力の量を計らざるべからず。これ言ふべくして行はるべきことにあらず。蓋し試驗には僥倖もあらん、不幸もあらん、されどももし其試驗せらるべきあらゆる事柄は片はしよりこと〳〵くよく悟り知れるものならばいかなることを問はるとも皆正しく答へらるべく、隨て不幸などいふべきふしもなかるべし。これに反してその科目のあらゆる事に對して一切無知ならば、いかなることを問はるゝも答ふることならじ、隨ひてまた僥倖といふこともなかるべし。されば僥倖といひ不幸といふことは或ることは知り或ることは知らずといふものにありてのことにてそあれ。上の上と下の下とにはなきことなれば試驗も亦必ずしも正當に其の實力を知り難しと雖蓋し當らずと雖遠からぬものと云べし。そも〳〵賞罰は善を勸め惡を懲さん方便なり。學生等が試驗のために勉强し、世人の賞を得んがために善を行ひ罰を恐れて惡をなさゞる如きは、方便として施すものと見て唯一の目的とおもへるものにして、これ中人以下凡庸人の事なり。若し夫れ大人君子に至りては善のなすべきこと惡のなすべからざることを知りて、戰々兢々薄氷をふむがごとき心得もて、造次顚沛にも至善に止まらんとし、賞罰毀譽褒貶などいふことに心を注がざるべし。もし世の人人皆かくの如くならば、世は理想的道德社會となりて賞罰といふもの不用となりぬべし。世の青年たるもの毀譽褒貶賞罰などいふことに頓着なく、人世の目的のために善を行ひ、學問の爲に勉强し、方便を見て唯一の目的とおもふことなくば、蓋しその正鵠を誤らざるものといふべからんかし。

（評）筆路暢達にして澁滯窘束の弊なし。

五等

○快樂

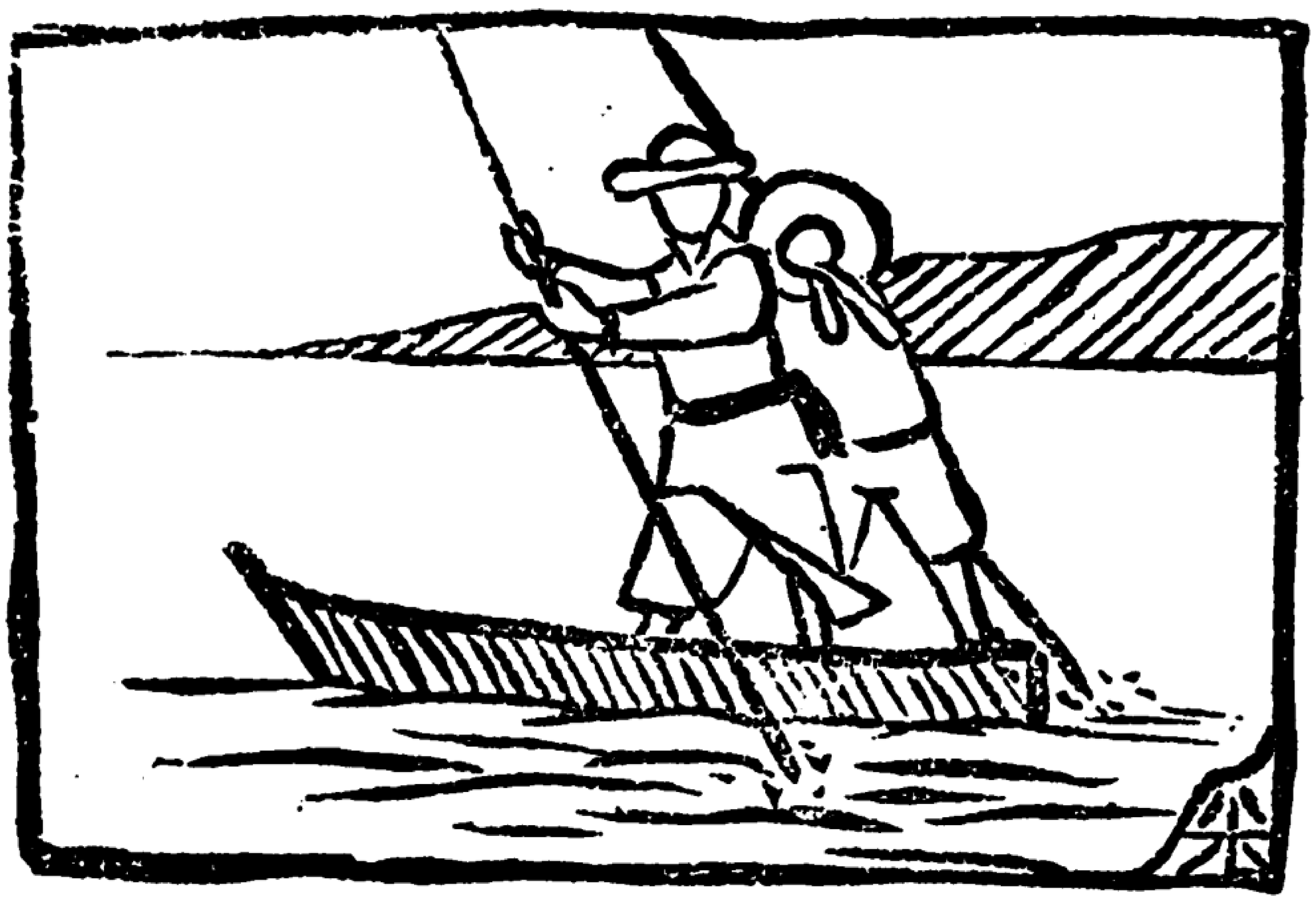
上毛山田　黄水子

吾人は希望無かるべからず、希望は吾人の生命なればとは古來よく人口に膾炙せられたる語なり。然して人の希望する所は何ぞ、そは千種萬別、擧ぐるにいとまあるなし、さあれ畢竟快樂の二字に外ならず。吾人の希望果して快樂にありとせば、吾人は如何なる快樂を求めんとする。

抑も快樂とは何ぞ、妾は此の問に對し一言にて盡す能はず、乞ふ此處に數行を與へん事を。快、そは心地よく感ずる事なり。樂、そはたのしと感ずる事なり。字義は必ずしも廣からず、されど事實に於ては實に一定の摸型あるなく、千緒萬端の階級あり。即ち快樂は人によりて異り我の快樂とする所は必しも彼の快樂とする所に非ず、昨我が快樂とせし所は必ずしも今我が快樂とする所に非ざるなり。功名富貴は人の樂む所のものなりと雖も、樂む所の者必ずしも之を以て滿足せざるなり。吾人は何故に月に對して感じ、花に向ひて樂み、父母の慈愛に泣き、知己の友愛を喜ぶか、是吾人に情有ればなり、已に吾人は情を有す、故に樂む所の物必しも功名富貴のみに非ざるなり。若し夫れ吾人の樂しむ所の物單に名譽富貴のみなりとせば是等を得ざる幾多の人は、實に憐れむべき者にして殊に基督、孔子、ソクラテス、楠公等は世界最薄倖の者といひて可ならん。されど天は決して富める者、貴き者のみに快樂を與へたまふ事なく、只君國の爲め、四海同胞のために勞力する者に向つて大に配慮したまふものなり。

されば金殿玉樓の内に居住し、佳材珍寶の内に坐臥する者必しも多幸の人に非らず、茅屋の内に草鞋を造りて働く者も、亦分に應じて夫々幸なきに非らざるべし。請ふ見よ、夕顔棚の下に荒莚をしきて、破れ茶碗に鈌け土瓶を並べ、骨あらはの團扇を持つて涼風を煽りつゝ、月の出づるを待てる田舍漢は如何に樂しきか。若し極樂を現世に求めなばそは金殿玉樓に非らずして、却て軒傾き柱歪む月もる茅屋の下に

舟遊　　熊本縣　米倉いち



あるに非ずや。

然りと雖、吾人否妾は漫に肉體上の快樂を排斥する者にあらず、倩ら考ふるに、凡そ人、此世に生を保つ以上は必ず先づ生活の途を求めざる可からず。されば顔回は簞食瓢飲を以て生きぬ、故に心靈上の快樂と共に肉體上の快樂も得ざるべからず。

されど非常の場合に至りては、心靈上の快樂を得んが爲めには、肉體上の快樂は之を犧牲たらしめざる可からず、かの基督の十字架、ソクラテスの毒杯、楠公の戰死等蓋し此類ならんか。

今や世人多くは名奔利走の爲に忙殺せられ、衣食の計に俗了せられ、小利害の爲めに衝突してはては終生の敵を作り、分寸の差は遂に血を流すに至る、思想の小差、感情の小異、境遇の小異は以て終天の敵となるが如き珍しき事に有らず、吾人はかゝる人が快樂とせる事は果して何なるかを知るに苦しむなり。

吾人は世を罵るに有らずして、只、如今の女學生否すべての世人が希望即ち快樂とする所の卑俗に傾けるを慨歎するのみ。

（評）能く時弊に中れるものなりと雖、論旨のやゝ朦朧たるを疵とす。

秀逸

○柔和と成功

廣島市　つゆ子

吾人にして成功を望むものは先づ柔和てふ德を養はざる可らず。

柔和とは吾人の情常に均一にしてその宜しきを失はざる謂にして成功の要素たる勤勉眞面目忍耐の德は之れより出づ。

それ家庭にありてその主婦たるものこの德を備へ以て重大なる任務にあたらば孝養貞節其の宜しきを得て靄靄たる樂園は形成せられん、玆に至り始めて理想的家庭の目的は達せられたるものなり。

國家にても亦斯の如し、一國の君主若しその情の宜しきを得て民草を靡かさば四海の波穩かにして吹く風も峯の松が枝を鳴らさず、天下泰平、理想的國家は形成せらるゝなり。

されば吾人は勉め勵みて聖語の「柔和なるものは幸なり」との語にもとらず人生の大々的目的を成就せざる可らず。

（評）現代の婦女子に於て殊に柔和の德の必要なるをみる。

短文

編輯局選評

一等　○敦賀の濱

越前敦賀松榮町　宮田はる子

昔敦賀の海岸は五百石、千石、二千石などの出船入船繁くして冬季なぞは東は天筒山の山裾から西は松原の終迄、大船小船漁船の浮圍ひ揚圍ひて濱一杯になりましたそうでございます、あゝ北海を鎭めさせ給ふ氣比の宮樣、航海を守らせ給ふ常宮樣、昔の濱の面影を現じさせたまへ。

蜃氣樓。

二等　○養蠶

和歌山市附近岡崎村寺内岡崎楠太郎方　さき子

お父樣とお母さまは飼れる方、妾と妹は桑摘む役、お祖母樣に武ちやんは鼠の番と、こう御仕事をきめて毎日嬉しう樂しうお蠶を飼ふて居ますの、やがて青嵐が吹きだして山に閑古鳥の聲する頃は、妾方の御座敷一面に銀の樣な美くしい繭がうづ高くつまれるでしやう。

生活を美化す。

三等　○五つの辨當

日向兒湯郡上穗北村　濱砂まさよ

辨當の數が毎朝五つ、御父さんは役所に兄さんと姉さんは會社に行かれる、私と美ちやんは學校に參ります、一番大きいのは御父さんので陶器の辨當の白いのは兄上さん青いのは姉さん、赤い袋の握飯は私と美ちやん。

正午の生命。

四等　○鳥の巣

上野新田郡太田町入町　大沼微音子

烏は鎭守杜の松の樹に、百舌鳥は賤が家の竹藪に、巣を造ります、そして深い梅林の奥に樹の叉ぶりを撰んで巣をつくるのは鶯で、田の中に稻の葉をよせて巣を作るのは水鷄です。

人間の巣は?。

五等　○花集め

京都西三本木丸太町上ル　堤登久子

嵯峨野の奧で摘て來た野菊雲雀飛ぶ野で摘て來た優しい菫、嵐山、御室の櫻、梅の谷の白梅、長岡の躑躅、高雄の峯の美しい紅葉、私は旅行する毎に一花、一葉宛持つて歸つて其を押して此上ない樂しみに仕て居ります。

理想的採集。

秀逸

○梨の花つみ　宮城縣　千葉さわ子

私の村は梨の名産地、一月頃から夏の半ばまでと云ふ物は（棚ゆい）（花つみ）（虫取り）（袋掛け）とそれはそれは急がしいのよ、今が丁度花つみなので、一家總出て、はたらいてますが、一ばんつみ方も上手、聲もいいのは中の姉さんよ。

食べる事はどなたが上手。

○鰯の集　陸中　若生すみれ

昨日の夕方海岸を散歩して居ますと、向ふの海面に青黒い物が高さ一尺位長さ四五間許り現はれ、其の上に澤山の鴎が集つたかと思ふと忽ちとび上り、又元に直りますから、餘り不思議と思ひ、漁夫に問ひますと、あれは沖の方から、鰯が鯨に追れて逃て來たのだと申ました。

弱肉强食

○花びら　岩代　根本松江

一杯滿ちた手桶の水に、浮て在た花片一ッ捨てるには惜しい、と思て、其儘水と一しよに湯沸しに入れて、火鉢に掛けた、はて、什麽味ひのお湯が沸くて在ろ。

才女の面影あり。

○會議　廣島縣　今西初野

あの都會では井戸端會議と云ふのがあるのねえ。私らの田舍では井戸はめい〳〵あるのですから、いつも風呂で一時間も二時間も太郎作は嫁と、りゑんしたの、となりの姑は嫁をなげたのつて體のひえたのも忘れて會議するのよ、ほんとうに何處でも會議はあるのね。

處かはれば品かはる。

○目方　あけぼの女

宅で、此間薪を澤山買ひ込みました時、序に皆かんかんにかゝつて見ましたのよ、そしたら如何でしよう、一番がお父樣、次は母樣より兄樣より私が重う御座いましたの、私本當に顔から火が出ましたわ。

十六貫目以上？。

○ぬひこみ　駿河　薔薇子

三人の小間使にやる着物を稽古の爲銘々に縫はせると一人は布巾の廣すぎる處をかいて手際よく縫ひました一人は其欠き落しを貰つて自今のと合はせて襷を一筋拵へました、一人はぬひ出す時の用心にと厚ぼつたいのを構はずかゝずに仕立ました、どの子を一ばん目をかけませう。

下女檢定試驗。

○貯金の通

丹後　鹽見千代子

古本の澤山、積め込むである、長持の中を、掃除して居ると、噫十二年前に、亡くなられた父上が、私と、弟のために、してをいて下さつた、未だお金の出してない、貯金の通が、二つ出ました。

利子積つて幾百圓。

○雀のおどし

播磨　兼子

緣先に寒洒しを干しました、すると雀が澤山に群れ來て荒します、で柱と垣に繩を結へて所々に紙をさげました、それが風の爲めにちら〳〵と動く者ですからさすがの雀もちつとも來ない樣になりました。

寒ざらしは東京の白玉粉。



暑い日　大阪　橋本賀壽尾

○桑畑

土佐　高橋白ばら

春蠶は目下二齡のはじめてす小籠をもつてわけゆく道の右左目もはるかにつゞく桑園の、しつとりと夜露を含んだ新葉にあたゝかき朝日のさし添ふた其瞬間の美觀快感、實に筆にも言葉にもつくされないのて†。

日本は養蠶國。

○除蟲菊と苺

大阪市　室谷ひさ

母樣は御丹誠の除蟲菊に蕾が芽んだので大喜びて毎日樂んて居られます、私は卒業の御褒美に御父樣から戴いた大切の〳〵西洋苺の花が咲きましたの、しかも八つ迄、まだ蕾も澤山有ますのよ、私嬉しくつて嬉しくつて母樣と自慢仕合ふては御父樣に笑はれてゐますのよ。

趣味と實際。

○お蠶

仙臺　文子

私の家ではお母樣と姉樣と私と三人で働いて毎年少しづゝ蠶を致しますがとつた絲では、いつも姉樣の着物

ばかり拵へて私には少とも拵へて下さらないので、あまり働き度はなかつたけど去年の暮姉様がお嫁に行つたので今年からは私の着物ができるのよ。

頓て嫁入支度。

○四枚の板戸　伊勢　田中信子

私は毎朝臺所の四枚の板戸をふくのですが、例も此れが鏡の樣になればよいと思ひます。此頃は大分滑つこく光つて、顔が少し寫る樣になつて來ました。

自分の姿に見とれてはいけません。

○衣服　福島縣　むら子

兄さんは洋服姿がよいとお、母さんは、ふり袖に緋綾の帯を立矢の字に結んだふり袖姿がよいと、云ひますが私はどちらに賛成したらいゝでしよう、だつてどつちも好いんですもの。

お顔と御相談の上。

○夕立のあと　淺草　とみ子

凄まじかつた夕立も跡なく晴れて空はもう眞青。土に俯して居る萩は、恐ろしさに震へて居る少女のやう。風がゆさ〳〵と渡つて、青桐を離れたおゝ淸い月。

小萩　群生す。

○市中の夏　大阪　牧山久子

水蒔車が通つたから、之で一時安心して道も行ると思ふ間に雪崩の樣に人やら俥、荷車、自動車や、兵隊さんやらで、土地は再び乾き上り一陣の風に散りみだるるは花ならぬ砂の吹雪‥‥‥而して行人、歸る人皆頭から足先まで眞白、吁是都の夏。

紅塵萬丈。

○梅の實　長崎市　樺山美子

私方の梅木は、ほんの人丈け位なのに、毎年、屹度、百以上なります。今年も此の前の日曜に數へて見たら丁度百十五なつてゐました。人々が、小さいのにまあ澤山な事と褒めて下さいますので、私が、其數を申しますと、皆喫驚なさいます。

花三千、實百。

○時鳥　三河　ばら子

空は青々と晴れて日光滿地、見渡せば昨日まで黄金のむしろの樣であつた菜の花はいつか苅取られて見ゆる限りの若みどりに、あゝ春も往つたかと思ふと何だか悲しい樣、折柄どこからともなくかすかに聞ゆる杜鵑の一聲私は生れてから初めて聞いた。

文に聲あり。

○桃の宵　薄あづさ

あのね、美しい白いのや紅い桃が咲いてね、お月様がほんのり霞んでお出ましになつてね、ほんとにい丶晩に坊やがね、武坊が生れたの。

月から生れた武坊や。

○五月雨　韓國　角田やすゑ

お天氣のよい時に、裏の小川で洗濯して、桃の花の下て奇麗に張て置た着物五枚、此五月雨の霽れる迄にはと思つて、お裁縫を初めてから恰度今日で十五日、着物はすつかり出來上つたのに、五月雨は未だはれそうもない。

からなでしこ、雨に悩む。

○新聞の三面を見て　函館　藤本鳥羽子

私は毎日新聞の三面を讀むと實に悲しく情なくなります、夫は大切な〱命を自ら捨る人の多い事で、彼等は何故大切な命を捨るのでせう、其原因は種々ですが、つまり彼等には安心立命と云ふ立派な心の礎がないからで、死ぬ程の覺悟があればどんな立派な仕事も出來ます。

誰しも氣の附く事。

○若菜の精　下總　神田みち子

朝努めて早起して庭へ下りると、瑞々しい青柳の枝が露に包まれてしつとりと垂れて居る。其先端から奇麗な奇麗な雫が音もなく落ちて、スーと地へ浸みて終ふ。妾は夫を若葉の精かと思ひます。

幽靜。

○蝶　信濃　木下壽惠子

十日許り前黒い大きな蝶が柚子の木の廻りを舞ッて居りました。今朝見たら嫌な虫が十二、人がそばへ行くと赤い角を出します、私はあの蝶が生んだのだと思ッたら恐く有りました。

恐いですよ。

○父母のお年　日向　春子

妾のお父様のお年は五十五で最ふ五年たてば六十になられますそしたらお頭りはしらがに化しませふ。母様は去年迄は三十九でしたが今年は四十です三十九から四十は一ッしかちがひませんが四十と言ふ字はよほどお年よられた樣な思ひがして心細くてなりません。

親おもひ。

○失望　長門　孤菫女史

けさ見える筈の姉様が、晝迄待つても入らつしやらない失望して午後からお花の稽古に行つたら師匠が急病でお稽古もならず、歸りに友達の所へ寄つたら留守、

腹立まぎれ最後に望を屬した書肆へかけ込んで、本月の女子文壇はと云つたら、まだ參りませぬ。
惡日。

○風の色　愛知　紫雲女

春の野に菫つむ時そよ〳〵とびんの毛二三本戰ぐ暖い風は紫色、ゆあみして椽先に出たをり新綠の茂れる中を颯と吹き來る青い風は涼しい、そしてゴー〳〵吹き荒たあげく北窓の戸を打つて障子の破目からピユーと鳴込てくる冷い風は白いことよ。
滿洲の風は黃。

○雨の街　麴町　山下里子

偉大なる自然に憧憬るゝ身に取つて、雨の日の寂寥程勝れて可懷しいものはあるまい、殊に曙の雨が蕭條として降る中に滿街悉く眠つてゐる光景などは、其まゝ意味の深い詩です。
朝寢坊此詩を知らず。

○鶯塚　長野縣　山田くに子

彼所の會此所の宴と、春を善き譜に唄つて鳴て、天晴其天職を全ふした私の鶯が、逝く春の今日花々しく、殉死をとげたので御座います、それて冷く成つた死體をば、散れた花片の香の泌て居る、梅の根本に埋てやりました。
天才の果。

○薔薇のお家　本所　田中久子

毎年薔薇の花をお取替して戴くお家、知らないのですけれど小母樣も善い方、姉樣もいゝ方。昨日お目に掛つたら、もう咲て居ますよつておつ仰つた、けど私今お取替に持て行く花を考へてゐる所なのですもの、眞紅な罌芥子がいゝかしらと思つて。

○寢起の一瞬　麴町　淺井千鳥子

雨あがりの水溜りに小雀が顏洗つてゐる、乙女椿が錆色して一輪水に落ちて碎けた、隣家の引窓から煙が渦捲いて空にあがる、昨夜買つて來たペンナーが四つ咲きかけて來た。

○小實業家　埼玉　哲子

美代ちやんは何處へ行たのかしら、……庭園の、青葉の陰に、眞紅のりボンが動いて居る、ピス（犬の名）の尾を振て、ゐるのも見える、驚おして傍へ行て見ると、六匹の蠶を菓子折へ入れて、櫻の葉を錆小刀て刻むて、飼育して居りますから、美代ちやん……妹は振向きさま、姉樣いやよー――。

○花み堂　陸前　紫雲子

紅白とり交ぜのつゝじや小田卷て屋根をふき、やさしい紫すみれて奇麗にあたりをかこひ、入口の柱は淡紅色の小松櫻を以て見事につゝんでおります。此の床しい花み堂の中でお釋迦樣は、產聲高くお生れになつたのでございます。

○屋根がへ　東濃　野村秀子

先々月の大地震で大層屋根があしくなつたので昨日屋根がへを仕樣と思つて瓦をはれて見ると蝙蝠の子が三匹……あまり愛らしいのでそつとオモチヤ箱へ入れて物置の一隅へ轉居をさしてやりました。

○花くらべ　兵庫　ゆき子

父さまは蘭、母さまは菊、兄さんは櫻、姉さんはぼたん、そして私は、ばらがすき、お祖母さまは、私に賛成、妹は父さまのが一番きらい、次に母さま。
竹やにお前何がおすきつて聞きますとすみれと中々氣取つて居ます。

○我が畑　周防　嵐　子

和蘭苺の隣りに少しあき畑があるので、母上の殘りの萵苣とふだん草とを、五六本づゝ挿んで置いて、朝な夕な培ひ可愛がつた甲斐あつて、今は大變太り、家内三人で食べあまる程になりました。

○隣の琴　西多摩　森田喜代子

私は青梅の小な寺でありますが昨年お隣りへ井伊樣の御別莊が出來ました此頃美麗なお孃樣がお越になつたと云ふ噂其後月のさえた晩でした垣根越に幽しいお琴の音が聞えました故私は好な／＼笛を近所命賀に合奏して居りますと名月の光を射る樣な時鳥の一聲すると琴の音は止みました。

○朝の樂み　神戸市　久野柾子

夜もろく／＼れないで世話した甲斐あつて、此ごろでは、白い／＼、それは／＼美くしい、まゆをしかけました、朝起きて、今日は幾つに、なつて居るか、明日は幾つになるかと思て、見るのが何よりの樂みです。

○夕涼み　南多摩　大石あさひ子

日暮に錨降らした雨はけそりと晴れて、稍圓らの月は松の下梢に懸つて晝の暑は何處へやら。
蝋臺を椽に持ち出して一家擧つての夕涼み、颯と吹き來る風に「涼しいことね」と襃むれば燈しを消して得意顔、影法師が五つ座敷の方に寫つて居る。

○高尚な娯樂　白鷺城　柳田白百合


おとゞひ　小國畝子

諸孃樣妾此頃謠の敎授を受けてますのよまあつてお笑遊してだつて妾大好きなんですものみな樣もお習ひ遊ばしちや如何本統に高尚でよう御座います事よ毎日之を口にして畑いぢりしますの態度におもしろいでせう大得意の「熊野」諸孃樣のお耳に入れたい事。

○兄さんの釣　石狩　横尾なみ子

妾の家の前には石狩川がドゥ／＼と流れて居ります兄さんは學校から歸つて何時も此川邊に行つて釣をします妾は其傍であみ物をしながら兄さんの釣を見て居ります。

○休み日　伊豆　上原雪子

今年の三月卒業されて歸家した弟、姉さんもう暑中休みが來ましたね、姉そうてす近くなりました弟休みに入つたら姉さんと海水浴の保養に行きませうね。
姉田舍には暑中休みも寒中休みもないが、たゞ雨の降る日がやすみ日であります。

○我が里　神奈川縣　木村はる子

私の里は田舍てすけれど年中客人學生が來て居ります中にも來客てにぎやかになる時は春金澤のぼたん見物夏は金澤八景見物かた／＼海水浴に遊ぶ人それは／＼澤山來ます。

○茶摘時　鹿兒島市　露萩

八十八夜が來てどこもかしこも茶摘が初まつた。見渡す限り緑の中に白い手拭や赤いたすきがちら／＼見える、可愛い茶摘歌や、樂しそうな笑聲が絶えず聞ゆる、ゆろう吹きくる春風に新茶の香が鼻をつく、眞に田舍の茶摘時は詩的てすよ。

○肉食　麹町　山岡ふみ子

私如何しても牛と鳥とが食べられないのよですから皆樣に身体や心は文明でもまだ食物が文明でないつていつも／＼笑はれますの如何かしてす

きになりたいわそうするとみんな文明になつてしまふんだわ。

○妾が希望　長崎　睦子

妾は外に何も望みは御座いませんが、只小説家に成る事です、お恥しいが餘程前より、小説に趣味を持つ者ですから、母に本を取上られた事も數へられぬ程ですけれど、妾如何しても思切れないのですから、最少し勉强させて下さい、と何度お賴み申しても、女のと許して下さらないの妾母ア樣、餘り無理だと思ひますわ子諸嬢さん。

○お朔日　神田　筑紫ふみ子

私の大好きな赤い御飯、一番樂しみな故郷からの書留と小包み、まだ其にこ〳〵が終らない内に大の仲好の女子文壇が今月の新らしい衣を着て新らしい思想とを持つて來て呉れる。

○養蠶　福島市　山本美津子

此間、在の伯母樣から少しの蠶種を戴いて來ました、四五日過ぎますと卵から黑い小さな蠶が生れましたのよ、其後は毎日お庭の二本の桑の木から柔かい葉を摘んで喰べさせましたら只今は餘程成長して體も白くなりました、何時頃の樣な繭を見る事が出來ませう。

○茶摘　京都　山名千代子

今年も早や茶摘時となりました私は一年中で一番茶摘がすきです皆樣が愛して飲んで下さると思へば何とのうれしい心地が致します今年は去年より一そう勉强して摘みませう。

○朝顔　攝津　森井勢子

私は朝顔の花が大層好きて、可愛らしい二葉の頃からせわをして居ますこれから毎日せわをして、大きな美しい花を咲かしたいと、樂しんで居ます。

○二つ繭　下野　梅澤哲子

寢ろも起ろも食するも同席にそを共に爲ながら、見交す眼さへまゝならぬを無情の世よとかたみに嘆きし女夫の蠶兒は今や白玉櫃中にむくろ相抱いて微笑めるらし戀の成功者とは斯かるを云ふなる歟。

○夏草　常陸　小泉智惠子

庭の面に生茂りたる夏草のいとみぐるしきに、明日は隣の老翁を賴みて刈取らせばやと思ひつゝ、夕暮れ庭前に立出て居りしに、かの茂みより出でし螢の二ッ三ッとびかふさまの涼しくも亦、面白きに今は刈らずに螢の宿となしぬ。

○白い蝶　名古屋　西脇政子

妾が夜、勉强して居まして、フッと臺ランプを見ましたら、ホヤと丸傘との間に一匹の白い蝶が入つて、出たそうにして居ました、妾は此の蝶には親も子も有るで有らうに可愛想で有ると思つて、丸傘を取つて出して逃がしてやりました。

○五月雨晴　牛込　秦はる子

咲き遅れた八重櫻が散て〳〵、鯉のぼりが赤い腹を青葉に波うたせる、鶯の羽のやうな若楓は金緑色に眩しくその影は紫に地に落て山吹の黄が草苺の白い花の上に翻れる八汐花が一ぱい火焰のやう虻がぶん〳〵障子に突當ると居人爺が叫えた。

○新川　筑前　青葉女史

遠賀川から黑崎の内海へ掘り切りたる新川の黑田公の御工事とかで昔は筑前名所の一へに數へられて居りました近年は諸方の炭坑から掘り出したる石炭をひらた船にて若松港に運送する筑前第一の有益な川であります。

○五月雨　北總　塔月女史

はるかの田の面簑笠きたる男女の苗植うるもゆかしく暫し眺むる折しも一しきり吹き來る風に聞ゆる田歌の細うやさしきは女の歌ふなるべし。「雨は天から横には降らぬ風の機嫌で横に降る」あゝさてもしほらしきかな。

○寢像　信濃　桐原梅香子

妹花子十七歳になりますが毎晩々々枕をはづしますが癖でして折角買つて頂いた櫛やピンなど見事に折つてしまひます私も心配しまして或晩首に紐で確と結び付けてやりました明朝大丈夫だろうと見ますと、俯ぶしに寢て居りましたので枕はちやんと頭上にありました。

○登校の路　芝　小夜子

私の先日卒業した學校は、芝公園の向ふです。毎朝山門の邊で眼鏡をか

けた書生にあひます。芝園橋の邊て廂髮の女學生にあひます。此人逹に其邊てあへば遲刻しませんの私は卒業しましたが其人等は。

○戀しき我が家　盛岡　白桃

妾は今都の女學校を卒へて五年ぶりて故鄕へ歸て來た右手に埀た袋には兼て妹の望てあつた薔薇の簪に巾廣のりボン弓手の風呂敷包には弟への土產にと繪葉書貼と硯箱扨年老の父母君へは恙なくて歸りし妾が顏を土產に、と見れば早も妾が家の門內には優き妹の聲。

○電車の中で　芝　大橋操子

私し此の間電車へ乘て居たときたしか京橋あたりてした子供をおぶッた方が御乘りになりましたのてすから席を讓ッて上ようと思つて座を立ちましたすると私しのすぐ近くに居た方が平氣な面をして座を取て居ました私しこんなにくやしいことは今迄ないのよ。

○さくら　三浦　小永井みね子

愛宕山の一重櫻が咲いた惜い哉今日の嵐て皆散つてしまつた。山下に寄する波間々々に一ひら二ひら。

○學友會　名古屋市　淺野友子

此間の學友會の時に私、英語の朗讀をしましたの、する數時間前の胸の中たら、本當に大地震のよう、すましたあとの心持ちは大嵐のあとのようてした。

○妾の望　羽後　千葉みつ子

また小使ひがほしいのかつて母に言はれつゝ願ふのもあまり嬉しくないもう學校も出來たし當年からは一生懸命に裁縫を稽古してよその裁縫もしてやらう。そすれば裁縫も上手になろし小使ひも少し位はとれます、アヽ妾の願ひはたゞこれなのです。

○學校の道　新潟市　いはせ

何地を向いても菜の花畑て何處に端があるやら解らない中を覺え通りに花を分けて行きますと學校てあります、朝は冷しい風が花の香りと一しよに送つてくれますし晚方は蝶々が御出迎してくれます。

○この牡丹　高岡市　北本歌子

最愛の牡丹が咲いた、佐保姬の口べにに〻似たろ、燃ゆるが如き紅、少しの暇をぬすんて世話した甲斐ありて、その花の大きい事、その色の美くしい事、おゝ此の牡丹、いつまでも散らずに妾の成功の日を待つて居るてあらうか。

○學費　安房　三瓶さん子

兄は師範學校に妾は女學校に弟は中學校に每月費る金は實に三人て五拾圓若し三人家に在つて家業を励んて居れば此五十圓の金はまるて殘るのてある。
人間修養の爲めに費ふ金も亦決して少くはない。

○女食ひ　鳥取市　上山千重子

しと〱と春の雨が靑柳の糸を傳ひて埀するしめつぽい宵、折柄飴の音陰に籠つて紅梅屋敷（俗に云ふ）のお新造樣の柩がゆら〱と窓の下を通つた、之れてあの家には三度目、女食ひの噂が高い。

○妾の望み　奈良縣　中富よしみ

世の進步と共に種々便利な器械は發明され、輕氣球や潜航艇なども此上なき完全なものが出來て、遂には天國の月姬樣と龍宮の乙姬樣とが、親しい交りを結ぶ樣にもなるてしやう。妾はどうかして其頃まて生きて居たいとばかり思ひます。

○友のいろ〱　飛驒　千代子

千鶴子さんは無邪氣て櫻のよう、田鶴子さんは高尙て白梅のよう、房江さんはあでやかて牡丹のよう、愛子さんは優しくつてすみれのよう、そして私一人は枯野に咲ける名なし小草。

○初蚊帳　越後　瀧澤視都子

夜の業を早く止めて母と二人今夜初めて新らしい蚊帳をつッて寢たら涼しい風も送られて何となく心うれしかつた。

○卯の花　駿河　大倉光代

妾の家の横を小さな川が流れて居ますが、此川上には卯の花が夫は〱澤山に咲亂れてますから、風に散つた花片は浮つ沈みつ流れて來ます、愛ちやんは其を掬て來て、飯事をして遊ぶのです。

○花の夢　神戶　白菊

静かなる宵、うつら〳〵と月姫が夢見ておはすか朧夜の盛りの花のときめきに、何れよりか音する花摺りの微妙なる響して美しき二人の精出てぬ、何づれも春憧憬の舞の袖に今やはじまる歡樂の平和を歌ふ花の興、興の子二人はいつか快樂の曲盡きてひらりと花をくゞれば影消えて、あとには花の亂れ散る。

○雨の記　信濃　節子

讀みあきた書を兩手に、茫然と雨細き若葉の庭を眺めて居ると隔家のお祖父樣のれむそふな謠の聲と、お隣の靜子樣のお琴の音とが、かすかに牡丹の香に包まれて、夢のやうに流れて來る。

○我が母　南葛飾　紫葉

私は母樣が外へいらつしやると淋しくてならないのよ、少しお歸りが遲いと何かなすつたのか知らと心配て、一時間待のが十日も待た樣な、心もちがするのですもの母樣が私を思つて下さる事はどんなでしようか。

○御所り　大阪　片山忠子

高い杉の木の間を通つて、鎭守の宮に來ますと、冷たい夜風が襟元から髮の毛を吹いて、淋しい葉摺の音がします、思はず走り出して、御宮の前に額付いて一心不亂に母の病を祈つて、頭をもたげますと、ボーとした燈明は母樣を守る樣にともつて居りました。

○胡蝶　武藏　露花

いぬる日、野邊の逍歩にて、ふと、彩羽損へる胡蝶を見出てゝ、哀れと袖に救ひ來しが、甲斐なくて、妾が文机の薔薇の上、金色の蕋を枕して身罷りぬ、さりとて土に入るゝは惜し、長に此花と共に妾が歌守らせむか。

○三人ながら　下谷　鈴木百合

私の御父樣は學校先生兄樣は新聞の主幹で姉樣は小説家三人ながら色々の本を著作されますしかし私はなんてもありません。

○愛の露　淺草　渡邊とよ子

三年も逢はぬ姉樣の所から今日も美しい葉書で、「昨夜は其地に地震があつたとやら新聞で知りました、大嫌な花ちやんが如何お爲かと心配して居ます。」と、あゝ何事も遷り易い世の中に、姉樣が私に注ぐ愛の露は此樣にして、幾千年經つても盡きる時はないのです。

○小鳥　水戸　重子

私の兄は小鳥が大好きて、鶯が二羽、駒鳥、るり鳥、目白が三羽、子のように可愛がつてなりました、其れて、日露戰爭の時、姉と留守番をする事となりました、間もなく、鳥の母親が、病氣て亡くなりましたので可愛そうてした、父は、滿洲に、母は遠い所に、其れからすぐ一羽の鶯も跡を追ひました。

○梅　青森縣　木枝子

人跡稀なる此山里にも春のみは優しう音信てくれたので小さい時から大事に育てた庭の梅も今年は初めて美しい花が咲きました、まあ其潔白で高尙な事といつたら。私嬉しくつて〳〵。毎日の樣に眺めて居ます、否、死んでも此梅の下に葬られる覺悟です。

○雨後の海　龜井戸　鵜澤白菫

雷も止み、雨も止み、山なす波も靜まりて青海原は無邪氣の夢を結べる如く、南の島より北の嶼へかけられたる錦のやうな橋を羽風凉しそうに渡り行くは何鳥か。

○菫　佐世保　いちじく

日頃愛して居つた鉢植の白菫水をやる事を忘れた爲め枯れてしまつたので脊戸の桃木の根に捨てゝしまつた、菫は何と思つて居るだろうか妾を恨むで居る事だらう、今日何思はずそこへ行つて見ると毎日々々訪れて居つた一羽の白蝶がその上に翼を休めて居た。

○書ハガキの爺さん　大阪　武藤蝶子

山水が壹錢花鳥が二錢人物も武者も美人も五錢ですと禿筆でなぐり書きする五十許りの爺さん是れも人の子。

○行水　三河　ゆり子

夕月淡く松が枝にかゝる頃、脊戸に盥を持ち出して行水を使ふ。何たる心地のよい事でしよう、誠に心の塵も身體の垢と共に去つてしまつて、私はまるて別人にてもなつたやうな思ひ。

○私の家庭　三河　加藤すゑの子

家内は三人て、お父さんは百姓の先生てお母さんは裁縫の先生て私に生徒て、毎日の田畑の鍬の入方や、そして着物の作り方を敎てくだされま

すので、先日小猫の首ひもを作つてやりました。

○夕ぐれ

周防　谷美津子

陽はとつぷりと暮れかゝつて、僅に靉靆く餘光に、川の面はやつと淡明く小漣が立つた。青々と萌へる樣な、翠滴る松林の彼方に夕煙の立つ百姓家、夕どきつぐろ、鐘の聲かすかに、日は、閴寂としづんだ。

○屑織

香川縣　土田しま子

私は女學校在學中から一寸以上の絹糸の屑をあつめてゐましたが卒業後三年の今日までに大きなつくりが二つてきましたそこで紫の瓦斯糸をたてにくづを織つて帶を拵へましたなかなか奇麗で朱珍でもなければ博多でもなく卅錢の最新流行の屑織だと母に笑はれました。

○犬芝居

芝　穂積いつ子

一日犬芝居を見る、高い山から谷底見れば、三味と太皷の音に合せて、前足を上げヒヨツコリ〳〵、柔順に熱心に藝終れば即ち堅パン半分を頂戴す、一日の勞働に僅かの日給を得る人のごとし。

○麥笛

府下　寺澤瑞枝

眞靑な麥の莖に隣の春子さんが子供を抱いて居た。正夫さんは寢起だとて元氣がない。あやしたけれど尙澁い顏。春子樣の拵へた麥笛を私が鳴らして與へたら、ヒーと吹いた。あれお上手と二人笑へば、忽深い靨てニコ〳〵。

○放鳥

群馬　をり子

墓は山の中腹にて極見晴しのよい處やがて埋棺の式も終り籠の口をあけますと白黑の鳩が七八羽空中を我ものにしてさも嬉しそうに飛び出しましたア、此禮儀に篤い鳩よ一時も早く親里へ歸してやりたいと思ます。



○製糸場の夕暮

鳥取縣　桑本きさ子

ヒューと長うお終ひの汽笛が鳴つた、やがて、ひさしや銀杏返しの工女の群がぞろ〳〵門を出て西に東に歸つて行く、あとは淋として屋根の瓦が夕燒に光つてゐる。

○お宿がへ

古河　篠原うめ子

今日は暖つたかそうといつになく早く起きました丁度日曜なので裏の木陰のもとに、ハンモツクの上で女子文壇を讀んで居りましたら而も本の上に毛虫が落ちたの私は驚いて本ごと捨てゝしまひましたごゝはこわいからお宿がへしようと思ひます。

Y　I

○池

佐渡　谷川桂月子

或る麗らかな日でありました、私は裏の畑へ出て居ると、一羽の鳶が池の上に輪をゑがきながら舞ふて居りましたが、ツと飛び下りて、池の中へとび込んで、一匹の鯉を採つて松林の方へ行きました。

○小猫とひなどり

岩手縣　吉田とし子

私の可愛小猫が、この頃むいた眞白な愛くるしい、ひなどりをとつて食べました、母どりは毎日コヽヽと我が子を尋ねて泣て居りますいぢらしさ、あゝ私はこの小猫を何していましめこの母どりを、何してなぐさめていゝやら……。

○我弟

河内　介以子

今年十三になつた弟は、去る四月より某中學校に入學しました、末子の事とて母上の愛情一しほにて毎日如何して居るかと云つて升と去日初めて手紙が來ました嬉しくつて開いて見ると、只飯のさいのまづいには閉口しますとありました。



二等

○新調の衣服　　神戸市下山手七ノ三七四　大谷百枝子

「貴女明日櫻見に行かうじやありませんか」「ハイお供しませう」「それじや間違のないやうに」「然し貴女が今度新調のお袷を着ていらつしやるなら私見合してよ」「あれを着て行けない位なら別段明日行かなくつてもよくつてよ」

三等

○老人　　陸奥　ふみ子

或る田舍の老人切符を渡さずに改札口を通らうとすると、改札係「あなた切符をお出しなさい」と云ふと、老人「とほうもない事を云ひなさるな、これは今買つたばかりだい。」

五等

○こつんこ　　丹後加佐郡河守新町　鹽見千代子

子「母ちやん、武ちやんと、こつんこしたアー」母「お前だけ泣くといふ事がありますか」子「ても僕だけいたかつたわッ」

○例年の通り　　三重縣　いせ子

宿の亭主いつもとまる客に向い「あなたの住所姓名は例年の通りてよろしう御座いますか」客「それてよろしい」亭主「お年は」客「年も例年の通り」

○亞米利加　　豐橋　いち子

甲「亞米利加へは西からも東からも行けると云ふが一躰どちらにあるの、」乙「西と東のまん中にあるさ。」

○總クロース　　紀伊　長井漣月子

田舍出のハイカラ女學生、友人の書を見て「加藤さん、此本は總クロース金文字入だつて聞きましたが總アオースじやありませんか。」

○電氣燈　　靜岡縣　絹村茂朗

田舍者「是れかへ電氣燈は。」都會人「そうてす明るいでしよう。」田舍者「どんなにあかるくても駄目だい。」都會人「ナゼ子。」田舍者「なぜッて石油が多くいるからサ。」

○取つてあげる　　京都府　吉田篠舟子

妹「姉さん白い大きな蝶が來ましたから取つて頂戴。」姉「ドレ持つておいて取つて上げるから」

○螢　　遠江　宮城蝶々子

母「其の螢籠に霧を吹いておやり。」小供「お母さんいやよ消てしまうから。」

○感化　　佐世保　いちじく

母「何んてす竹ちやんはお行儀の惡いお父樣へ申し上げますよ」子「宜いよお父樣へ言つたつて叱られやしないよ」母「おや何故てす」子「だつてお父樣も此間誰も居ない所て鐵瓶の口からお湯を呑んで居たんてすもの」

○電氣燈　　伊賀　森永ゆき子

妻君「今夜は遲いからもう寢なさい」下女「電氣はどうしても消されないのてす」妻君「おまへどうしたの」下女「私團扇てあふりました」

○子供　　能登　張間花枝子

母「お玉おまへなんだつてそんなに人形をむちやくちやにするの」子「だつて母樣此子私の言ふ事ちつともきかないんだもの」

○わざと落第　　南葛飾　紫葉子

父「となりの次郎さんは高等科になつたのになんだお前は落第なんぞして」小供「うゝん來年一等賞をもらふのにあんまりむづかしいからわざと落第したのだア」

○親切　　花園守

父「コラ貴樣葉書へ親展と書く馬鹿がどこにある」子「でも父さん手紙なら見られませんけれど葉書は他人に見られると云ふおそれがありますからね」

○見違ひ　　大和　武村芳女

「貴女は何日もお若い顏をして入らしやいますね、二十年前も同じ事てすわ、恰度貴女が貴女のお娘さんのやうてすよ」「ハイあの私はその娘なので……」

○二十四時　　濵田　三明ちどり子

母「坊や何時かれ」坊「二十四時てすよ」母「二十四時といふ時はないてすよ」坊「ても長いも短いも十二時の處にあるのよ」

○お刺身　　群馬縣　鈴木くら子

松「竹さん貴君お刺身を食べた事がありますか」竹「ありますともれ、私だつて刺身位たべましたよ」松「ては何にして食べましたれ」竹「私あの燒いて食べました」

○父と子　　麴町　山岡ふみ子

父「居眠りなんかして居ないて勉强てもしろ」子供本を持て來て、子「そんなら此の」字何んていふ字」父「うるさい眠っちまへ〳〵」

讀友倶樂部

こゝろえ

記者より

◎讀友倶樂部には本誌の讀者ならばどなたても投稿は出來るのてす。
◎文章は手短かに書いて下さい。
◎皆さんが同じやうな文句をお使ひになりますが成るべく此處の文句も氣を付けて好くお書きなさい、文章が上手であると眼について、早く好い友達が出來ますよ。
◎讀友倶樂部は皆さんの遊び場所てすから、何ても彼ても思ふ事、爲したい事は遠慮なく自由に投稿して下さい、假りに項目は分けてありますけれど、項目以外の事ても載せます。
◎文學顧問もどし〳〵お尋ね下さい。

文學顧問

問　御地て學費なくして勉强する方法はありませんか、何卒記者樣の御惠みて御紹介の勞を取つて下さい（すみれ子）

答　ありさへしましたら紹介の勞は吝みませんが、實際苦學に適當な場所はないのてす、此種の質問には記者も屡出會しますが、第一、女子て苦學なさらうと云ふのは間違ひてはなからうかと存じます、堂々たる六尺の男子ても苦學て成功したものは實に千百人に一人二人てす、大抵は學よりも苦の方に降參してしまひます。學費が充分ても女子の遊學には誘惑はつきまとふものてすのに、況してそれが不充分てあつたら、其弱點につけこまれて精神も身體も脆弱な女子には堪へられない迫害を被るのは有り勝ちの事てす。てすから出來ることなら苦學などなさらずに、外に地方に居ても自活の方法は立つてせうから、思ひ止まられる方が先づ安全てせう。

問　廣津柳浪先生の住所をお敎へ下さい（名古屋松操生）

答　麻布霞町二十二番地。

問　東京に寫眞學校はありますまいか（舞鶴、薫女史）

答　果して御注文のやうな學校か何うかは知りませんが、牛込區東五軒町に寫眞學校と云ふのがあるやうてす。

問　明治文壇上に於て傑作と稱する小說を紹介下さい（備前、紫舟女史）

答　時代の進歩につれて十年前の傑作、必ずしも今日の傑作てはありませんけれど、比較的生命の永いものが傑作と云ふわけになります。譬へば紅葉山人の諸作、露伴、逍遙、鷗外諸氏の作、いつまて經ても傑作に相違ありません、本誌本年の新年號（出世作一覽）にあつたのは皆當時の傑作てす。

問　煩悶とは何んな事てす（よし女）

答　お分りにならない方が幸福てす。

問　本誌の何號かのはがき文の批評て親の光りは七光りと承りましたが何と何が揃つて七つ光るのてすか（靜岡縣竹泉女）

答　七光りとは、はツきり何と何の光りが七つあると言ふのてはなく、只、親の愛情の光は何處までも身に添ふて强く光ると云ふ事てす、單に親の光りと云つてもよいのを、强く言ふ爲に七光りと云ふので、凡てものゝ多い時などには七、八の數を用ゐます、七重八重、八百潮、八百屋、八重雲など例は、澤山あります。

問　短文は是非口語體て書かねばなりますまいか（福岡、村雨）

答　是非口語體と限つたわけてはありません、普通文體ても宜しいのてす、何れにしても、意味が清新て、內容が充實して居れば、上の短文と云ふ事が出來るのてす。

問　私は學校を中途て止めたので造花がうまく出來ません造花の本て一番分りやすいのを敎へて下さい（香川、山地常子）

答　五月一日發行の本誌に廣告してあつた「造花術新書」ては如何てす。

問　あの食ぱんやそのほかいろ〳〵のお菓子の製法のくはしくそしてよく解るように書いてある本を敎へてください、そして御面倒てす

けどその定價や發行所もお教へ下さい（鳥取縣桑本きさ子）

答　「パン類製造のおけいこ」二十八錢寳永舘發兌、「歐米新式菓子製造法」定價六十錢青木嵩山堂、「和洋菓子製造のおけいこ」定價二十八錢寳永館、「西洋菓子のこしらへかた」定價二十五錢服部書店發兌。

諸嬢と記者

○記者先生に御たづね申ます投書は字がよくかけてゐなければ誌上へだしていたゞけないのですかあたしは字が下手で御恥かしいのです（徳島市大字出來島町長川宗與子）（記者曰、字の上手、下手よりも、文の上手、下手で出たり、出なかつたりするのです、字は下手でも能く分るやうにお書き下されば宜し、上手でも分らないのは御免を蒙ります）○記者樣妾小學校を了へたのみてすが分りもしないくせに作文や新聞雜誌が好きてすのよお恥かしいけれど初てまれの樣なのを投書致しましたが沒書になつてもかまいません勉强してやはり投書する考へてす（廣島縣安藝郡海田驛夫りよ）（記者曰、何うぞいつ迄も續きますやうに）○記者樣私は本月の誌上にて「羽仁もと子さん」の愛の記事を拜讀致しまして誠に我が身にも錠が下りた樣な思ひが致しました何卒此の後もあんなのを記載して下さい願ひます（小牧岩江）（記者曰、羽仁さんの記事て精神の修養になりましたならば、羽仁さんは勿論、記者も滿足てす）○記者樣初めて投書しましたのに御のせ下さいましてなんと御禮の申樣も御座いませぬ此の後は一層勉强しまして投書しますから好く出來たら又御のせ下さいませ賴みますよ（大分縣直入郡竹田町鬼ケ城木下きみ子）（記者曰、好く出來たら御載せ申します、初めての投稿が出たのはお仕合せてした）○私は田舍の無學者てすが御社の女子文壇は當地の小賣店で買て居ります、實に他に稀なる好雜誌と深く記者樣方の御厚意を感謝します、私は此清き女子文壇の永久に榮えん事を切望してやまないのてす女壇を見る事それは／＼熱心てすのよ、それ故出來もしないにつひ作つて見たくなり別紙描きもの恥かしながら御目にかける次第てす（北海道石狩國樺戸郡浦臼村字黄臼內小西婦美子）（記者曰、御熱心ありがたう熱心の餘りお作の出來たのは猶ほ結構てす）○記者さま私の寫眞を送りますから御願ひ申ます送る時には切手をいれておきますから御返し下さいな（秋田縣能代大町西村品子）（記者曰、承知いたしました、只、寫眞の裏に乞返送と三字を忘れないやうに書いて下さい）○記者樣御機嫌よう私も誌友になれてほんとうに嬉しいのよ一生懸命勉强しますわ投書すれば何時か出るやうになります子それから府下船堀村の中島きく子さんは私の親友よ誌友になる時も種々相談して遂に女子文壇がよいと言ふので今年の三月から愛讀者になつたのよ私は文壇の發行が待ち遠くてしやうがないわ末ながら記者樣御からだ御大切に（神田南甲賀町吉田たつ子）（記者曰、誌友にも御相談對手があるとようございますれ）○記者さんよ、貴社が募集しつゝある寫眞を上げますから御掲載あらん事を願ひます（羽後の片田舍にて佐藤繁子）（記者曰、何うか送り下さい、自然紙上て他の諸嬢とお顏を合せて御交際が出來る次第てす）○記者樣私等兩人は最も親しい友てあります日曜日には必ず會合して文章詩歌を作つて利子さんの父さんに見て貰つてゐますまずいものてすが初めて投書致します今後とも宜しく（若葉と本名竹子）（記者曰、御嚴父の判斷の上て投書下さるのなら猶更よい御作が來るてせう、但しお父樣たる方に成るべく新しい思想を持つて頂く事を願ひます）○一寸記者さん御伺ひ申します、わたしのような新愛讀者ても投書は出來ますか、又店て買つて讀んでも投書は出來ますか、（兵庫縣加古郡母里村ノ內下草谷村井澤ひでの）（記者曰、何處てお求めになつても投書は御隨意、新舊讀者に區別もなく、本誌は極めて開放主義てす、但しお尋ねになつたやうな事は是非忘れないで、一々書いて下さい）○私の病院は先日の大火に類燒致しました患者も家內も一同無事に立退ました女子文壇は誠にしあわせよ一册も燒ませんてした（札幌區南二條西三ノ角山田鈴子）（記者曰、女子文壇火難を免れたのは近來の奇蹟、御家內の無事と共に萬歲）○記者樣妾も諸姉樣の作文の面白さに引出され高等小學校卒業したばかり拙なく御恥かしう御座いますが投書致しました（賀茂郡時子）（記者曰、それは好く引出されました）○記者樣妾は十五の少女てす此度始めて投書致します（福岡縣福岡市博多行町中村峯子）（記者曰、お尋の事は一句づゝてす）○妾は九州邊の田舍娘てすが兩親の御寫眞を持て居り升次第に消失しますから殘念てたまりません記者樣御願ひで御座い升誌友面影の欄に寫して下さいませんか御禮は何程にても致し升から紙上にて御返事を願升（九州しづの女）（記者曰、寫眞

版に取る事でせうが、社では混雜して紛失するといけませんから、大抵、地方の印刷所で聞いて御覽なさい、地方でも寫眞版に出來るのですから）○妾は字も文もまづくてはづかしいが投書致しました、もう何年ぐらゐ修業したら賞が取れましよう（靜岡縣．岡村博子）（記者曰、何うも何年たてば賞が取れるか何うかお答は出來ませんが、御勉强次第で來月にも取れるかも知れません、又御力を入れなかつたら永遠に取れる時が來ないかも知れません）○記者樣に御尋ね致します、私は投書するが初めてゞ御座いますから一向不案内ですが、あの歌や文などは投書する時と同じ季節を含んで居るものでなくてはいけませんですか（名古屋市小杉女史）（記者曰、強ち季節が合はなくても、差支えないのです）○松住町のあけぼのさん、御地祭禮の寫眞版繪へがき及び其詳細なる記事、詳しく拜見、面白く存じました（記者）○淺草のなゝ女さん、福島の君子さんに忠告のお言葉は記者も同感、全文長いので載せるわけには行きませんけれど御厚意は御結構でした、なほ文學顧問で記者の意見も一寸發表して置きました（記者）○神戸、遠藤くめ代さんに答へますが文題は一定して居りません御自由でよろしい（記者）○淡路、速水長平樣御娘ごの事についての御尋ね、社務多忙につき詳細御返答は出來かねますが實は御上京あつて親しくお調べになるのが最も好い方法でせう（記者）○本誌六月の紙上秋田縣角間川町北島きく女の誌友倶樂部の記事は間違ひにつき取消す（記者）○山形、糸柳さん「過去及び今」と題する趣味ある御身の上話、拜承いたしました紙上に載せるも宜しいのですが態と差控えました（記者）○岩代、濱井女、讃岐、紫子、麻布、牧野紫江子、長崎、愛香子、横濱、平田くに、群馬縣、津久井、徳島市、久津ひさ子、嘗永きくゑ、福井縣、くれ香、仁川港、菜、横濱、廣田やゑ子、中島郡、大隈慶子、三重縣、福島はつ子、荏原郡、かれ子、土佐、宮田政子、呉市、大藤俊子、土佐、長崎てるい、下野、翠陵、名古屋、政子、近江、西村悦子、京都、芳香、名古屋、野菊、備中、千代子、伊賀、森永雪子、信濃、桐原梅香子、京都府、吉田笹舟子、岩代、馬場きの子、寺部君子、白梅子、紅子、和歌山縣、福本かをる子、ＥＮ生、長野縣、高山さなへ、臺灣、うかゞひたい女、東美子、中鹽愛子、文子、讃岐、姉妹、阿波、清子、古登子、麻布、久保文子、秋山澄子、飲子、我孫子町、林坤子、大隅、小野しか、滿留かさ、つれ、しづ、麴町、田原瑠璃、牧野くに子、山形縣、秋子、淡路、國分みつ子、和賀の里、すみれ、雪子、樟茂子、筑前、從部富子、青森縣、從森猛子、いちじく、北信、清子、くれなゐ、山形縣、鈴木杉葉、入千子、ぎん子、さき子、すみ子、近藤抱月、松本みどり、以上の皆さんが御申越になりました事は大抵よろしうございます、一々お答は致しませんけれど惡しからず、投稿に就いてお尋ねの事が主ですが卷末裏表紙の規則を御覽下さると分ります（記者）

圖書換讀

○誌友の御姉さんの內で不如歸と面白い小說と御交換下さる人は御座りませんか倚ほ寫眞の御交換を御願ひ致します（和泉國泉北郡南池田村字萬町高橋輝子）○皆樣妾しの處に左の書籍が不用になつて居ります、肘突や栞を送つて下さつた御方に差上ます舞姫、二十五弦、白羊宮、花守、草わかば、才媛文集、女學生訓、女子の友、結婚難、愛の犧牲、女學世界、婦人世界、失戀など倚其上先着者三十名迄、太田の名跡一部づゝ差上ます（群馬縣新田郡太田町女學會にて山川かづ子）○諸姉樣に、「スケッチブック」「サイカーオザウエークヒルド」「ツワイストールドテールス」お持ちあらば私の書籍と交換して下さいませんか（秋田縣平鹿郡角間川町、黑丸湖青子）○私は佐佐木先生の選んだ玉川集と心の華十一ノ一とすみれ集と去年の秀才文壇が澤山ありますが皆樣の內で歌集か又は小說で金色夜叉の後編か乳姉妹、濱子、夏子、血の淚、己が罪、嫁が淵かて御取替を下さる方はありますまいか（上毛碓氷郡東横野村大字下間仁田七八關口梅子）○皆樣の內不如歸、伯爵夫人、己が罪、金色夜叉、乳姉妹、雛子、等小說を御ゆずり下さるお方は御一報下さい願ひます（周防大島郡蒲野村谷瑞子）○妾の手許に、小品論文、百字文選、美文集等、當代名家小品文、詩的小品文集、小品書翰文、美文スケッチ、などありますが皆樣方の中にて新小說、文藝倶樂部、又は唾玉集、雛のしづくなどと交換下さいませんか（備前兒島郡粒江村難波木よし子）○諸嬢樣の內で紅葉全集中の金色夜叉か伯爵夫人かを御持の方は私の百六拾版の言海か明治少年館用博文館發兌か大和田建樹著の作文寶典全館發兌と交換して呉ませんか其外詩集天風寃帆山上湖上バイロンの海賊（木村譯）か美文斷片現今二十八大家模範文集か中學作文要訣か

俳句入門など種々ありますが相當の書籍と交換してくれませんか（下野足利郡山前村大字大前舟入定形久子）○和歌入門（蕭園）、素人藥物學、算術問題解法指南、管絃、結婚後一の十年、湖畔の戀歌、等お不用の諸姉は私の七ッ星、心中おさよ新七（白星）近世美學、天人論、近松淨瑠璃、日本歌學全書、日本女子百傑、エネルギー不滅論、化粧かゞみ、等と交換を願ひます（東京府八王子町八幡九、西川方秋月美榮子）○愛讀家の中に中央新聞週報ホーム二三四五六七十十一十三より三十まで時事新報文藝週報一號より四十七號まで五十一號より六十號まで右二冊送つて下さる人はありませんか御禮には句誌を送る（三重縣桑名郡野代村大字大鳥居佐野葉花）○私事絲葉集美文作法など持つて居りますが何か面白い本と御取替へ下さいな（栃木縣下都賀郡藤岡町九九酒井淸波子芳子）○もし〳〵諸姉の中にて土井晩翠先生著の天地有情をお持の方は私の持ち居る大町桂月先生著の黃菊白菊と交換して下さい（千葉縣君津郡駒山村高濱はつ子）○皆様の中孝女白菊の歌か不如歸の歌と諧ふ御持の方は御惠み下さい枝折か國旗入の襟巻にて御禮致ます（山形縣西置賜郡荒砥局下沼澤濟子）○漢文讀本二三四五、初等代數學新撰日本字典中等敎育新算術、全例題詳解中學漢文敎程四、六不用になつています御不用の言海、美文資料、和歌作法書類、水彩畫手引、食道樂などと御交換下さいまし（播磨揖保郡熊見村井貫ふさ子）○皆様私も御なかま入を願ます手もとに紀事文範人世界女學世界（共に數卷）思出の記町の仙女などありますが皆様のうち金色夜叉伯爵夫人女夫波瀾子夏子秀才文壇などと御とりかへ下さる方ありますなら御通知下さい（周防國室津松前方くに子）○私に左の不用書があるの望みの方は現世の小說と交換して下さい、日用百科寶典作文自在通俗書簡文等外澤山あります（茨城縣高濱町大水霞子）○黑風後編、まだ見ぬ親、戀か夢か、ひだり繩、朝晴れ、明治才媛文集、不用になつて居ります、破戒、無果花、其他の小說類と換へて下さい、それから新小說、文藝倶樂部、趣味、中央公論、ホトヽギス、新舊にかゝわらず送つて下さいませんか書籍雜誌て御返しします（岩代須賀川本町服部貞子）○下記の書所持す御希望の方は面白き小說と交換致しましよう吾輩は猫である、陸奧宗光文藝倶樂部女學世界等（岐阜縣海津郡高須町高浦靜江）○私の手許に女子文壇其他の雜誌勇少年冒險譚新不如歸小說等あれば皆様方の青春、女夫波、子濱、良人の自白、思出の記、無果花、女波男波、心の波、血の泪、小華族、小公子、朝晴と御交換下さいまし（香川縣多度津東濱町香川政子）○皆様の內て筝曲集御持ちの方は御惠み下さいませんか御禮はきつと致します（島根縣江見濱田町佐野榮子）○皆様の中に御不用なる書物、良人の自白（全部）濱子、天うつ浪、はつ姿、緣子、にせ紫、藤村詩集、不如歸の歌、金色夜叉の歌、花守、魔風戀風等を御送り下すつた方には綴しなり二つにエハガキ二枚づゝ添えて御返禮申します男子の方はお斷り申します（米澤市屋代町上ノ丁千坂方はる子）○バイブルの不用少しあります、御入用の方に、何かと御交換願ひ度う御座います（近江國甲賀郡三雲鄕井上つゆ子）○紅葉全集、露伴叢書、魔風戀風御不用の諸姉上様より私に御惠送下さい、相當の御禮に當地特色上等繪葉書をそゑて御送り致し升（和歌山縣海草郡安原村字松原木下美榮子）○妾手許に舞姬、朝晴、不如歸、塔影、思ひ出の記、天うつ浪、があります諸姉様の中に濱子、夏子、魔風戀風、伯爵婦人、お持ちの方は御交換を願ひます、男の方は堅くお斷り（茨城縣那珂郡村松村大字豐岡川上朝次方靜江）○誌友の皆様の內に小野鵞堂先生のおかきなすつた習字帳なお持ちの方は私の持つてる矢谷房子先生の習字帳とかへて下さる方はありませんかかへて下すつてもいゝ方は誌上てお知らせ下さいまし（遠江秀子）○皆様御手紙有難ふ先着の御孃方へは御約束通り順序に送本いたしました御氣毒なのは後着の御方なのです併し一々御返事は差上げた積りです不惡此度は「寒菊、情の人、思ひ出の記、戀と戀、懺悔、忘れがたみ」が不用に成つて居りますから先着の方から但し絹製の栞、未使用の美麗な繪葉書、其の他て文通も御願ひいたします（佐賀縣杵島郡朝日村渡邊敏枝）○妾の手許に歷史地理、國文學等の不用雜誌がありますから繪葉書か或は栞等と交換を願ひます（伊勢四日市在阿倉川山本龍砧方操子）○皆様、玉蟲、思ひ出の記、銀鈴、舞姬、お持ち合せでしたら古くてもよいですお送り下さいな、御返禮には伯爵夫人前編、影法師、青春、女學生訓、新體詩指南、詩美幽韻、俳句指南、女學世界、女子文壇、少女界の內お好みのをお送り申します（常陸土浦町田宿、稲葉方稲葉靜子）○不用書類澤山あります、繪葉書を以て申込あれ（靜岡市追手町四ヨシノヤ杉

出ぅさみ）〇諸孃さま妾の手許に、新小說、少女界、少年、文藝俱樂部等、凡て二十七册持つて居ますから皆さんの、想夫憐、金色夜叉、みだれ髮、女夫波、五月發行の女子文壇、等御不用の方ありましたら、どうぞ、御好みのものを差上げますから（埼玉縣北葛飾郡吉川村本吉川戶張郡女子）〇私は音樂が好きでありますが面白いのを送つて下さいませんか私も送ります尙寫眞繪はがきも交換を（岐阜縣大垣田町平井誠一方坂東子）〇妾は金剛山下水淸き吉野川畔に住んで女子文壇を無二の友としてゐる不束者てす妾の手許に左の不用の書籍ありますから愛讀者に限りお上げしたいのですお望みの方は美しい畫葉書て、料理の手引、婦女の務、和歌の栞、呪れたる女、俳句講話（大和宇智郡五條町大字新町三ッ目橋四岡崎執遜子）〇妾は下野の一寒村の花野に自然を友として居るものですが厭く書籍の交換を願ます、私は女子文壇を初め中學文壇（三十八年より四十年五月一日迄揃へ）秀才文壇（三十九年一月より同九月迄揃へ）婦人消息文、婦人寶鑑など合せて百册餘皆不用ですから、貴孃様の中て言海、譬つき、栞（古きものにてもよし）と交換を願ひます、又寫眞を添て下された方には、妾のみにくい寫眞を、繪葉書を下された方には、烏山の名所の繪葉書を添て御禮申ます（下野那須郡荒川村森田須藤さい子）〇皆様の御中に琵琶歌か藤村詩集か小說母の紀念御持ちの方は私の近世樂典敎科書か女子文のはやしか裁縫獨稽古全或は女學講義又は女學世界女鑑と御交換下さいな又御寫眞送つて下さつた姉様達には繪葉書か寫眞掛（但編物）かを屹度御禮に差上ます（三河濱郡町今井初子）〇私の許に大奥の女中（上中下）女心の解剖、女子と社交、鐵道小說（漁軍の友）滑稽百笑話、懸賞文集、才媛文集、新編女子記事文、日本辭林等あります皆さまの內て金色夜叉全部おもちの方がありましたら右の內て御好みの本六册とおかえ下さいませんかもしおかえ下さるてしたら本欄て御住所御姓名を承りたうございます（鳩子）〇私手許に縮刷言海、家庭辭書、作文新辭林、作文獨習書、乙女の生涯、敍事文作法、書簡文作法などの不用書があります、諸孃の中に鶉紀龍、行文集、草枕、武藏野、獨步集、湯島詣、多情多恨をお持の方は交換して下さいませんか（備前國赤磐郡周匝村堤美子）〇左の不用書あります美人繪葉書（但し未使の）かしなりリボンて申込まれば早速送本します「中學文壇十五册」「秀才文壇同」「俳句手引草」「新釋俳句集」「作詩術」「日本文學全書三卷」「當世交際社會」等、（和歌山縣海草郡四和佐村池見倉子）〇諸姉様の中て薰園様の和歌入門が御不用の御方は何卒送つて下さいませんか御禮は天に契つて着次第送りますから（神田淡路町二ノ七川岡様方三室うめ子）〇皆様の內に花守、塔影、無弦弓、白羊宮、二十五弦など御持の方はいづれなりとも御送り下ださい、返禮として妾の新體詩歌自在、玉蟲、夏廟、風月萬象、神來の內御好みの書に編物か刺繡を添へて差し上げます（越後見附上町高野機業店內雪子）〇皆様の中にて秀才文壇の（五月十五日）不用なのがあつたら送つて下さい。妾も雜誌の不用なのを送ります斯ふ云ふと何んだか慾深の様ですが、皆様達の中て小說なり雜誌なり不用なのがあつたら惠んで下さい。妾は貧家の事故買ふ事の出來ない境遇てす（愛知縣碧海郡矢作町橋目永田舞鶴子）〇麗子夫人、筆のゆきかひ、女子書翰文、女子文壇懸賞文集、持つてゐますから天うつ波、澄子、血薔薇、自然自樂と交換して下さい御持ちの方は次號て御知らせ下さい御好みの物差上げますさよなら（北國に住む連月女）〇諸姉様の內に婦人世界（如何に古くもよし）御不用の方は御送り下さいませんか御禮はいたしますから又女子文壇二卷一號より今日迄のを皆持つて居りますから差上てもよろしうございます（信濃國松本在入山邊村桐原撫子）〇皆様の內て、脊春（夏の卷）蹄音錄、天うつ波、女子懸賞文集、家庭十二ヶ月、寬風戀風、桐一葉、等不用の方は下名迄御惠送下さい、相當の書物又は御望により宿根草花を進呈致します（日向西臼杵郡三ヶ所村戶河甲斐きす子）〇皆さまのうちて金色夜叉の歌、無弦弓、作文字典、聖書、一葉全集、お不用の方は妾の女波男波、星、王冠、其他小說と交換下されませんか（群馬縣利根郡尾品村土出村廿七星野みれ子）〇諸姉様方、小公子、乳姉妹、朝ばれ、ほとゝぎす、等御不用のが御座いましたら私の、懸賞文集、女子の美文、新體詩歌春風秋水、帝國婦女用文、裁縫案內、脚本春日局等と交換して下さい、不相當の本ならば相當の切手をおくります。又、女學世界十五册と本年分の本誌とが御座いますから、未使用の紀念スタンプ附繪はがきを下さるお方へさしあげます（相摸三浦郡浦賀町大津五二三長塚よし）〇私方に、白羊宮、春鳥集、二十八宿、花守、花守日記、暮笛集、新體詩歌作法、和歌入門、萩の家歌

集、凌霄花、夢の華、行く螢、霓風戀風(小說)、俳句入門、其他雜誌澤山あります。交換御希みの方は、相當の書籍を送つて下さい、御望みの物を早速送りますから(香川縣綾歌郡川西村大字西乙、藤井逸次方旬取信子)○諸孃樣の中で日本葉書會發行ハガキ文學增刊靜想熟語及び中學世界一月より五月迄お持の方は一冊づゝでも御送り下さいませんか新刊雜誌ておかへししします(山城國綴喜郡田邊町天神森藤江千賀子)○大和田建樹作の鐵道唱歌壹冊、又は忠勇唱歌の實公が御持て御座いましたら肉筆の水彩畫と御交換下さいませんか、畫は神戸附近の景色てす三枚以上送ります(神戸市二宮町四丁目德永みれ)○敬愛する、諸孃樣の中にて紅葉全集の二、金色夜叉の歌、眞人の自白、己が罪、本年の、嫁人畫報等御不用なる御方は不束なる、私の所にある女夫波金色夜叉乳姉妹霓風戀風、あしわけ舟不如歸の歌、黄菊白菊等と御交換を願ますどうぞ下名へ御送りのほど(茨城縣下妻町上丁恣澤紅梅)○韓國にお在のなつかしの諸姉君逹のうちにて御地發行の新聞と妾の讀賣新聞とを永久に交換なし給はる友情あつきたゞ一人の姉君はましまさずや(栃木縣河內郡姿川村雀田荒川芳枝)○親愛なる諸孃の中で讀賣新聞切拔なる霓風戀風、天うつ浪、青春(何れも插畫附に限る)何れにても御不用の方は至急御讓り下さい尙不如歸、全歌、伯爵夫人、我輩は猫である上卷どなたに、ても上げます澤山御申越なら抽籤に致します(岐阜縣大野郡高山花里三尾靜子)○私の手許に左の不用の書籍がありますから お孃さんたちのおもちになります 不用の書物ニ「伽羅枕、眉山氏の青春怨、鏡花氏の湯島詣、德田氏の おのが縛、柳川氏のやどり木」、がありますなら私の思出の記、小野霞堂の新撰消翰の上、はいから令孃綴共、蘆花氏の青山白雲、長澤氏の數學字書、土手の道哲、明治書翰文、西國立志編、の何れにても交換致したうございます。貴い紙上をお借りになりましてお答下さい(千葉縣今井直子)○皆樣御願てすから各地方の新聞御送り下さいね妾は東京の新聞で屹度御返し致します(東京府下蒲田四一六石川久子)○皆樣の御手下に、獨歩集、運命、うづら籠、金色夜叉第一編、青春夏の卷、秋の卷、霓風戀風中編、後編、ホトトギス、草枕、旅すがた、水車、琵琶歌、嫁ケ淵、不知火、などのうち御不用のものがありましたら御ゆづり下さい、一應御一報を願います(東京市牛込區中町卅八番地船越靜江)○皆樣私の手許に不如歸、思出の記、己が罪等不用になつて居升から諸姉樣の中に眞人の自白、うもれ木、錦子、浪子等と御交換下さる方が御座いますなら何卒下名へ(東京府下北豐島郡王子村新道千二百○西岸竹次郎樣方久保貞子)○私に左の不用書あり殆ど同價の類歌集と御交換をたのみます藤村詩集、白玉姬、ふところ硯、吾輩は猫である上編、中編、不如歸(英譯)、春駒、青海波、寫生文、明治秀才文集一より六まで、黄菊白菊當世名家小品文集、早稻田文學數冊、希望者は紙上にて御名を(香川縣丸龜一女史)○私は一書翰文辭書ニ「花紅葉」「聚寶盆」「女學世界八冊」不用に付き換讀を乞願くば「言泉」「國語辭林」に類するもの(能登輪島町字河井本町鈴木方宮本みどり子)○諸孃樣よ妾のもとに血の涙と不如歸があります給はがきて申込なさい送て上ます、また寫眞編物御とりかへ下さい(宮城縣栗原郡金田村澁野齋藤惠津子)。

寫眞編物交換

○諸孃方の内に絹製寫眞掛お持の方は籐製寫眞掛と交換して下さい御願みよ、又、永久に名所寫眞も交換して下さい(河內國南河內郡長野村大字西代與田芳江)○誌友の諸孃樣の中で美しいハート形式か花形の絹シオリに三錢切手を入れて御送り下されば家庭の友を二冊づゝ御送り致します(本所區松井町三の十二井谷田瀧子)○誌友皆樣方と寫眞葉書の交換を願ひます又小說の交換も(三重縣伊勢國鈴鹿郡龜山字東町尾崎錦子)○誌友の諸姉上樣方よおうつしゑどうぞお送り下さいな妾十八枚だけ用意してあります尙ほ先着五名へは應募の近江八景の畫繪をそへてお送りします(茨城縣那珂郡村松村大字豐岡川上朝次方靜江)○諸孃よ妾の寫眞と絹製の栞名所ハガキ五枚壹組を差上ますから未使用繪葉書を封入し御申込下さい(佐賀縣杵島郡北方村松林靜子)○皆樣どふぞ妾も寫眞及繪葉書交換の仲間え入れて被下まし寫眞先着十番迄は鐵道五千哩スタンプ付のエハガキと妾の寫眞を添えて御返し致します(名古屋市東主税町太田つま方秀子)○お優しい諸姉上樣繪葉書編物の交換を願ます先着五名には地獄にて染めました絞りのハンカチを添へて御返し致します(豐後速見郡御越町四四六梶原楢子)○誌友の諸孃よ妾は甚だ交際が好きてありますが永久に御交際して下さる方には妾の寫眞を差上ます但し先着七名(越後國新潟縣中蒲原郡早通村字下早通り

小林とり子）○諸姉さまの内て寫眞掛 造花おもちの方は御惠み下さい 御禮としては當地の新聞三ヶ月だけ 御送いたします（德島市大字出來島町長川掌築子）○おなつかしの諸孃樣美しき繪葉書を有難うございました、そして今度はシチリ、ヒシツキの 交換を願います（山口縣玖珂郡灘村第五百六十七 番屋敷河本春子）○皆樣文藝倶樂部か上等の 繪葉書と私のレース糸離形ハート袋三ツと 栞がありますから交換して下さい（水戸市下市九 丁目小田野しげ子）○拾萬有餘の諸姉樣よ懸なる 私に御教導を願ひます、寫眞送られたる 御方には先着十名へ私しの寫眞と北海道カモイコタン 寫眞を添附致します（北海道石狩國樺戸 郡浦臼村小西樣方野田まさ子）○皆樣何卒繪葉書寫眞編 物の交換して頂戴（淡路洲本鈴木女學校內 汾みつ子）

繪葉書交換

○誌友の諸姉樣私は俳句が大好きてすから奇麗なる繪葉書に俳句二句以下を書て御送り下さい、私も俳句を以て御返禮申ます（伊勢國四日市市大字濱田南部字三郎方南部秀子）○誌上の皆樣長しへに繪葉書て文通願上升（和歌山縣海草郡宇原村字松原木下笑笑子）○私ことは三月前友を訪ひ文壇を拜見致しその趣味の深きを覺えてよりの愛讀者にてまこと數ならぬ身に候へ共今よりながく御交際下されたく候また私事は特に繪葉書手許に集めしもの澤山有之候間御交換の程新上候（京都市東堀河下立賣北入永田儀方奥本寶美枝）○繪はがきの交換を願います（神戸市元町五丁目三十一番地船井藥店內市田蕗子）○諸方のお姉樣 又末永く繪はがきの交換を願います但し先着御三名には拙いのですけれど寫眞をお贈りいたしますよ（神戸市兆田町壹丁目卅五番地松下樣方山本文子）○皆さん繪葉書、しなり編物の交換を致しましよ私は右の品を澤山用意して居りますから屹度お返し致しますよ先着五名には私の寫眞を添えてあげます（長崎縣南高來郡安中村谷口月尾）○繪端書交換が此の上もなき大好きて近邊の諸孃樣方と常に交際して居りますが未だ壇友の皆樣とは初めてであります先着十名樣には美麗な繪端書を差上升又寫眞を御送附の御方には繪端書と共に私の寫眞を添えて屹度御禮を致し升（上總國長生郡一松村東諏訪井利方紫窓女史）○皆樣、上等の繪端書送つて下さいな私、御返事には女子雜誌、エハがき、編物などお望みの品を送ります（名古屋市東外堀町三〇淺野友子）○親愛なる皆樣から繪葉書玉章等有難頂戴いたしました多數の中なれば御禮洩の方が御座いましたら何とぞ許して頂戴な今後とも御文通を願ひます（和歌山縣海草郡安原村字松原稻本保子）○自筆の繪端書や御手紙を、御惠み下さいませ、必らず御返事を差し上げますから（千葉縣上總國長生郡一松村寺之內井桁方靜枝）○皆樣私が三の八號で繪葉書へ歌か句かを書いて送つて下さいと申しましたら早速諸姉さまからたくさん繪葉書下さいましてありがたう御座いますなほ願ひます（神田淡路町二ノ七川岡樣方三室うめ子）○何卒繪葉書や編物の交換を、妾は北越及び長岡名勝の繪葉書を副へて差上ます（越後古志郡福道遠山藤吉樣方きよの子）○自作の和歌俳句の交換を願います但し繪端書に一首乃至二首認めて下さい餘り粗惡なものはお斷りです（千葉縣印旛郡中郷村海老川秋山花磬）○妾は淋しき片田舍に居る者ですが繪はがきや玉章で永久交際を願います（岐阜縣羽島郡八劍村高見秀子）○妾は淋しい田舍に住んで居る不束物ですが何卒繪ハガキの御交換なして頂戴よ（常陸新治郡牛渡村兵庫峯小泉智惠子）○繪葉書や玉章の交換も願ます御贈附の節はかならず繪はがきを以て御返事致しますよ（岩代若松市中六日町一六〇渡部柳子）○御情け深き皆樣よどんなのでもよろしいから繪葉書交換を願ます歌ても俳句ても御自作のが書いてあれば尙よろしいてす（丹後國竹野郡中濱瀧松本みどり）○誌友諸姉君よ何卒はくらいの繪葉書交換を願ひ升和製ても美いのならよろしう御座います當地にはあまりよいのがありませんからあはれんで御送り下さい（千葉縣佐倉町上町西宅方幾子）○誌友の姉上樣私しは病氣の爲めに女學校を中途にして當地に居るものです何卒御地の名所の繪はがきを送り下され必ず岡山公園の紀念スタンプ付繪はがきと私しのふつゝかな寫眞とを呈します（岡山市內山下四二ノ二五相澤淑子）○皆さんの中に七ツ星、西詩愛吟集、行く春、天人論、呪はれたる女、男女之研究、婦人論、男女と天才等不用の方がありましたら私の日本文學史、動物學上下、スミス氏代數學とお取換へ下さいませんか（栃木縣芳賀郡益子町日下部柳治方櫻子）○繪葉書に俳句又は和歌を書いて送つて下さいよ妾好きてすから（京都府相樂郡東和束村字門前堀昌平方堀星子）○諸姉皆々樣よりの繪ハがき有がたく返事差上ない御方に實に〳〵失禮てすが本誌上にて御禮申上

ます（秋田縣横手町鍛町三ツ梨健市郎様內山田たけ子）○繪葉書交換をお願申ましたら四十七名の御方から頂ました尙ほ他の皆様にも御交際を願ひます必ず御返事はいたします（岡山縣御津郡今村大字上中野五三、榎原美喜子）○記者様の御影で皆様に御言葉する事ができてほんとに嬉しいわ私若松の町はづれに淋しく春を送る淺學な者ですから繪葉書御寫眞等御惠下さい御禮はつまらぬものですが致します（筑前若松土井町熊本內捨小舟）○誌友の姉さま繪はがきの交換をして頂戴すぐ御返しいたしますから（鴨綠江畔支那安東縣市場二區草苅商行內草苅百合）○諸孃様に紀念スタンプ繪はがき未使用のもの封筒に入れて字など書かずに交換を望む又滑稽新聞發行の繪葉書世界の繪葉書五枚以上送つて下さる人はありませんか御禮はしますよ（三重縣桑名郡多度村大字戸津佐藤富子）○皆々様澤山美はしき繪はがきを御送り下さいまして誠に有がとう存じます、今後もこんな田舍の不束者を御見捨てなう御交換を願ひます（播磨宍粟郡千種村石原富子）○私も繪葉書交換の御仲間に入れて下さいな、品は撰びませんから御送り下さいなたしかに、御返事を、上げますわ（長野縣東筑摩郡島立村大字南栗吉江みさ）○誌上の皆様繪はがきを集めてせめてもの心の慰藉として居ります白衣人てすどうぞお見捨てなくお交際お交換を願ます（大阪府堺市竹村病院內野居蘇子）○御面倒の事御願み致し失禮てすが私も將來永遠に壇友と相成度く候間此段繪葉書交換を願度く候間御紹介被下れば有難と存じ候（京都府相樂郡祝園村大字新屋敷奥村峯子）○繪はがきの交換として相互ひに美術心をたかめ誌上の友の交りを一さう温めたいと思ひます（福井縣福井郡御油田多田吳香）○先達の本誌に繪葉書の御交換を御願致しましてから宅を變りましたものですから始めて誌友になつたのですのに一枚も參りませんの……てあはれと思召してら何うかよいのを御送り下さい御返事には有ります丈けは寫眞（私の）を差上げますから（神戸市磯邊通三丁目石田倉庫前高橋ゆき子）○誌友の皆さん繪葉書の交換をして下さいお禮としては例の通り孝女白菊の歌先着十五名限り差上げます（靜岡縣濱松田町四十七番地中村ゆき）○詩友の諸姉上様御自筆の繪葉書御惠下さい返禮には皆様の御好になる優美繪葉書を差上ます（神戸市山本通一ノ三六堅山端枝）○親愛なる姉様方私も本誌愛讀者の一人でございますから不束なものですが何うか末永く繪葉がきの御交換を幾重にもお願ひ申上ます（秋田縣平鹿郡盛田町片柳とし子）○何卒繪葉書交換や御交際を願ひます最初の三人に寫眞の交換を致します（山口縣玖珂郡藤河村五四二善本冬子）○お手紙下すつた方先着十名へは博覽會の繪葉書差し上ます（千葉縣流山町流山高等小學校內堀切きみ）○皆様繪葉書の御交換を願ひます（廣島縣神石郡來見村若林友代）○誌友の御姉様方妾は淋しき〱片田舍に住むものですがあはれと思召し是より繪葉書の交換を願ひます（山口縣美禰郡大嶺村四七高橋千代子）○私は地方の組になつた端書を集めたいと思ひますそれには親愛なる姉君達の手紙をかるより外ありません、どうぞ御送り下さい私も福井と三國海岸のと、何れにても送ります（福井縣坂井郡本莊村立高等小學校內津田こつろ）○私も繪ハガキ交換を永久致したいてすがお仲間入を願ひます（北海道函館東濱町三七平塚きやう）○妾は年來の愛讀者てすが繪端書が非常にすきて面白いのが百枚集りました故皆様に配與したいが多くの諸友に惠與する事が出來ませんから秀逸の繪端書て先着順五枚宛廿人迄配與します（名古屋市清水町甲廿入池山清子）○諸姉上様四錢以上の繪葉書又は玉章の交換をお願ひ申しますよ（岩代國安達郡本宮町字下町六二橋本せん子）○誌友の諸姉様よ何卒末永く繪葉書や玉章の御交換をお願ひ申します（岩代國安達郡本宮町字仲條二十番地菅野うの子）○諸嬢様私は片田舍者てす繪葉書や御寫眞の御交換を願ひます（宮城縣柴田郡大河原尾形町五一鈴木きく）○皆さん繪はがき及び寫眞の交換をして下さいな（神戸市橘通り四丁目九七東川艶子）○何卒繪はがきの御交換末長くお頼み申します私は名所か紀念スタンプ付繪葉書を望みます（神戸市京町八拾一番、クーン及コモンへ商會方中尾りう）○繪端書の御交際を御願ひ申します御自作の繪や和歌なども御書き下さい（宮城縣柴田郡大河原町尾形方後藤春子）○妾は大變繪葉書が好きて是まては友人と度々交換して居りましたが今月より皆様のお仲間入りをして頂きます（大阪市東區本町四丁目淨照坊にて宇野艶子）○皆様御自筆の繪葉書誠に有がとう御ざいました一寸まちがつて居りました爲何かまちがひの起りました方は御ざいませんか（長野市大門町前島きみ子）○私も繪ハガキ交換を初めます（京都四條寺町角、赤井又七方、吉

村愛子)〇幾久しく繪ハガキの交換を願上ぐ(芝公園地三ノ二德永靜子)〇私はクリスチャンてす、繪ハガキを送られた方には私の寫眞及び雜誌を添えてお送りいたします(千葉縣香取郡多古町平山政子)

諸孃の交際

〇今日此頃內地は嘸かし櫻花も眞盛りてしようさてこれまで數知れぬ繪葉書や玉章の交換をしましたが二回又は三回位の者が多く親しく交際するお姉樣方が今は六七人なのてす信と實とを以て永久に御交際下さる方はありませむか(滿洲大連關東都督府郵便電信局官舍第四號稲永方稲永高子)〇今年より御仲間入りしましたから以後宜しく御交り繪葉書玉章の交換もれ(岩代國安達郡本宮町字仲條四七鈴木ちよ)〇貴き記者樣の御惠にて四方の貴孃樣と御交の出來ますようになりましたどうか以後もどし〳〵と玉章やお寫眞の交換を願ます(神戶市相生町二ノ一三秋原英代子)〇友愛の情に富ませ給ふ誌友の皆さま、以後給はがきや玉章にて親しき御交際を願ひます私は神かけて御厚志には叛かぬ決心てす(東京府下瀧野川村一八〇三月岡家別莊內波井てる子)〇誌友の諸姉上樣よ私は女學校も中途て退學致し今は淋しい海岸に暮して居る者てすが何卒長しへに御交り下さる方が有りましたら御玉章頂戴必らず御返書は致します(三河國蒲郡海岸通り今井波津子)〇諸所に在せるなつかしい皆樣方よ妾は田舍て淋しくつて玉章の交換をよろこぶのてすよ(千葉縣印旛郡佐倉山ノ崎一四七番本桂花子)〇誌友御諸孃樣妾は極く淺學な且つ不束な者てありますが何卒空吹く風と思はずに玉章なり繪端書なり送り下さい(岩代國安積郡郡山町東町吉川孝次方鳴田よし)〇どうぞエハガキ玉章寫眞等送つて下さい右三品揃へて送つて下された御方には先着十名へエハガキ一組葉編物と妾の寫眞を添へて必ず差上ます(讃岐三豐郡和田村一一七十河花子)〇あゝ世に妾の樣な薄命な女はありませうか親も持れば同胞も持たず木から落ちた猿も同樣の孤兒て當年十六才になりますが人樣の爲き情て口糊だけは安穩に凌いて行けます皆樣よお手紙を下さいましたら有りがたう存じます(富山縣中新川郡音杉村字河原田山崎常三方松井みよ)〇妾は今度初めて誌友の一人に成りましたから繪ハガキ又は御玉章の交換を願ひます(神戶市北野町三ノ二六山片久子)〇皆樣どうぞ手紙繪葉書の交換して下さい(能登輪島鳳至檳町張間花枝)〇マイディヤ、ミツスよ、何卒永久に御交際を願ひとうムいます(秋田縣平鹿郡角間川町字東中上、黒丸富太郎方いちじゆく)〇どうか御玉章や美はしい繪葉書を下さいませ御返事はキツトいたします(大分縣直入郡玉來町阿南古すわふ)〇誌友の諸姉樣妾しは此頃出京した田舍者てすから御友達が少くて淋しいのよ何卒エハガキや御手紙て御交際を願ひます御返事は直ちに差上げます又御寫眞を御送り下された方には私しの寫眞とエハガキを差上げます(芝區神明町二十五、高崎方石橋田鶴子)〇誌友の皆樣方よ私は東北の片田舍にすむ無學者てありますがどうぞ御交際をれがひます又美しいエハガキや御手紙もおきつと御返事は致します(岩手縣盛岡市央服町廿八番戶石井みつ)〇誌友の諸孃樣御達者て御勉强てせう御玉章やしなり繪端書などの御交換を願ひます(長門瀧部局區內上大田大庭口伊藤よし子)〇本誌の愛讀者御姉樣不束者てすから親切に御指導して御交際を願ひます(千葉縣長生郡豐岡村萱場鈴木かれ子)〇私も末席に加はりました以後は御交際を願ます(北海道石狩國樺戶郡浦臼村黃臼內松本しげ子)〇左記の片田舍に轉居致しましたドウカ御見捨なく繪葉書や玉章の交換を幾久しく願ひます(肥前口ノ津港字東方長野樣內小笹繁子)〇私は靜かな田園に讚美歌を謠ひつゝ聖書や女子文壇をこよなき友としてをる一少女てありますが愛讀姉妹の中て眞心もて永遠に御交際下さる御方はありませんか(越後西蒲原郡松野尾村小出彌生)〇家事の都合に依り妾は浪華の地を跡に、生れ故鄕へと歸つたのでした、誌友の諸孃樣以後左記へ御文通下さいます樣お願ひ申します(大阪府中河內郡衣摺村中村醫院內同いち子)〇親しき姉さまがた妾四月のすゑつがたより故鄕へ養生に歸つてゐまして先日歸宅して見ますると御免して頂戴よ知らぬことながら廿七人の姉さまより玉章を頂戴してゐましたのさぞかし御腹だらてございましたろふいつまてもいつまても御返事いたしませぬてどうぞ〳〵許してください以後も御見すてなく御交りください(支那國安東縣市場第二區天ノ二草刈商行內草刈ゆり子)〇博學俊才なる誌友のお姉樣末の松山かけて御交りを願ひ升(常陸國筑波郡不動坂橋豐島院子)〇賢明の諸姉樣よどうか私とも幾久しく御交際をれがひます繪はがき玉づさの交かんもいがひます御返事は心ずいたします(岐阜縣關町加藤裁縫舍內餘島みゆき)

○記者樣大分暑くなりましたな 何方樣も御變りは有りませんか 妾も無事で勤務して居り升六月の誌友俱樂部で 皆樣に御引合せ下さいまして有難う御かげ樣で親しい御友達が六人と 繪葉書玉章の交換者が四十名程できました 皆文壇の御蔭と悅んで居り升 五月廿九日から本月十日迄に着したのは 總計百二十通であります 中に住所の不明の御方十一名樣尙は誌友皆樣に 上等繪はがきの交換を願つて下さい（京都四條寺町 郵便局にて上田しづ子）○親愛なる諸姉樣よ妾しは片田舍の小學校に教鞭を取て居る者ですが 何卒見捨なく繪葉書や御玉章の交換を賴みますよ （京都府加佐郡由良町三四三番地中西しげ子）○諸姉上樣にも親しき御交際を願ひます （兵庫縣揖保郡龍野町原田敬子） ○誌友諸姉上樣よ以後は永久に御交際を願ひます 又名所繪葉書の交換もして下さい（紀伊那賀郡長田村矢牟田學子）○親愛なる諸姉樣よ 繪葉書玉章ありがとうございます以後とても永久に御願ひいたします （和泉泉北郡上神谷豐田小谷彌榮子） ○妾は片田舍の不束者てすが何卒末長く御交際下さい 又地方新聞や繪はがき雜誌の交換して頂戴 失禮てすが一時的ならば御ことはり申ます御返しは神かけて （讃岐高松市外瓦町柏原病院內橫井謠子） ○親愛なる諸姉上樣よ 妾は丹後の山奧に住む不束者てすが此度本欄愛讀の一人となりましたから どうか一時的でなく 永久に繪葉書や御手紙の交換を願ひます私よりは 自筆の美麗なるものを差上ます（丹後國加佐郡神崎村八七番地橋本よし枝）○誌友の姉上樣よ 妾は高等女學校を出たばかりの不束者てすが 何卒々々永久御交際を願ひます尙繪葉書寫眞玉章の交換を願ひ上ます （東京市麴町區飯田町五ノ三小森方今井貞） ○本月の二日が丁度私のうまれた日てす つきまして紀念のため先着の十七名（私の年てす）だけに 醜きものてすが寫眞さしあげますから 編物又は書籍など何でもかまひませんから 相添へて申込んで頂戴よ（豐橋市鍛冶井桁屋方いち子）○お粗末な手製の菜花りボンですけれど 御交際の初めとして優美なる繪葉書にて 御申込みの先着九名のお方へ差上ます（美濃國山縣郡谷合臼井安子）○御なつかしき諸姉樣よ 私は當年高等女學校を卒業致して只今は家事の手傳をして居る 不束者てありますから何卒繪葉書や 御寫眞の御交換を願ひ上げます （山形縣東村山郡天童町老之森丸本內ゆう子） ○妾は淋しき山里に住む不幸者てす 慰て呉れるのは此の文壇と 御姉樣達の下さる御手紙とてす此の後も繪葉書や御玉章や 新聞諸雜誌などを下さつた方には地方の繪葉書や 妾の好きな小說で必ず御返事仕ります 又御寫眞の交換も末永くれえ、私も必ず差上ますから （靜岡縣駿河國安倍郡南藁科村深谷五十九、岩崎げん子）○誌友の諸姉樣、何卒永久にお交り下さい 繪葉書や玉章の交換も願ひます 甚だ申兼ますが諸姉樣の內にムラサキの雜誌お持の方は 是非お惠下さいませんか相當の返禮は必ず致します （滋賀縣甲賀郡柏木村大字北脇川島嶺子） ○皆さん私まへづから本誌を愛讀してましたのよ どうか永久的御交際遊して下さい （鳥取縣西海郡米子尾高町今井康子） ○皆樣私は南信の片田舍に住むふつつか者てすが 御見捨てなく永久に御交際を願ひます 又小說雜誌類も多少もつて居りますから御交換下さいな（信濃飯田八幡町佐々木まさ子）○妾等が集つて會を立てました。會費などはありません。文學を研究する積りてす。どし／＼加入して下さい（筑後久留米市裏町姉川方蓮花會）○妾は不束ものてすが 栞玉章又繪葉書の交換を願ひます （下總國印旛郡內鄕村高座木千十二番地栁花女史） ○御變りなく永久に御見捨てなく御まじはりを御願ひ申します （越前柴田郡大河原町阿部よし枝） ○妾は永く工業地に住む至て野暮な田舍娘てすから誌友の諸姉上樣よ、何卒ふびんと思召して御救ひ被下る樣一時てなく 永くエハガキや玉章の御交換を願ひます 拙いながら必ず御返事はいたします （上毛桐生町新宿一四二番地神尾あや子） ○誌友の姉上樣方私は人跡まれな此の山里にすんで居る 何も知らないものでございますがどうかご交際を願ひます （青森縣木枝子） ○誌友諸嬢方の內にて新體詩又は和歌御嗜みの方には 普通の紙を色紙短册形に切りて夫れに御秀詠を認め 御送り下され度妾よりも同樣にして御返しを呈します （京都市兩替町丸太町下高橋方島田千代） ○皆樣御交りして下さい永久に妾松の翠の歌もつて居りますから 美しい繪葉書で申込て下さい御送り致します （埼玉北葛飾郡吉川村大字吉川戶張とめ子） ○親愛なる諸姉樣方よ 妾は不束ながら片田舍の小學校に教鞭を取つてゐるのですが 以後お見捨なくレターや寫眞の交換をねがひます 尙はエハガキやしをりもですよ（山口縣大島郡油田村椰部光惠）○情も深い皆樣方よ 私は浪華に居る者です何卒永久的に御交り下さいまし繪葉書なり玉章なりを御めぐみ下さい御返事は早速出します （大阪市南區瓦屋町二番丁三十六番地中島石吉內あい子）

○玉章給葉書の御交換を願ます御返事に云はずとも(本所區外手町五我妻樣方宇都木蕉雨子)○折角皆樣から菊子に澤山給葉書御送り下さいましたが只今病氣の爲め御返事する事が出來ませんから暫時御待ち下さい全快次第屹度御返事させますから……(相模國湯本矢野菊子從兄堅浪)○誌友の姉樣方私は父もなく母もなく妹もなく唯一人の兄樣と一人の義理の姉樣とを父上とも母上とも賴にして極淋しい生活をしてる者て御座いますが給葉書なり玉章なり寫眞なり送つて下さい、屹度御返事は差上ます、私は男女の別は決して厭いませむ、唯眞情こめられた御手紙ならば喜んで頂き返事を上げます(京都市本町七條上ル東側吉田醫院内齋藤 吉田靜枝)○私は本誌愛讀の諸嬢によつて、種々なる幸福を得ましたこゝにあつく御禮申上ます(湖畔つゆ子)○妾は誠に悲慘なる境遇に立つものです博學多才なる諸姉達よ妾を可憐と思ひ召されるならば文通にて慰めて頂戴よ(大和吉野郡大塔村大字阪本三十六番地泉井弘子)○おゝ懐しき諸姉樣よ妾は下毛渡良瀬川の畔に住む賤の少女ですが何卒御見捨なく御交際被下ませ御玉章にて(下野足利郡山前村染宮邦子)○私は北海道の片田舍に淋しく日を送つてゐる者です諸姉樣方よ永久に御文通を御願ひ致します(北海道後志國壽都郡町開進町定廣蕗子)○秋香亭安田崎子樣の御紹介により女子文壇愛讀者となりましたから何卒永久に御交際を願ひます(富山縣中新川郡上市町酒井春子荒木芳子松尾乙枝子)○孤島に住みてゐますふつゝかな娘ですけど末永く御交際を願ます(對馬國宮谷町一〇二民守むすび)○誌上にて御芳名承つて給葉書手紙抔お送りしても如何した事やら一寸も御返し下さる方がありませんのよてすから私此頃は先に送つて下さる方とばかし交はりして自分から出す事は止め樣と思ひ升(埼玉正直女史)○誌友諸氏よ御自作の詩歌文章小説を送り給へかし、用紙は半紙規則は女子文壇投稿規則に依る。秀逸には必ずゝ賞品を呈します(美濃稻葉郡造加那村小野綠葉)○親愛なる諸姉樣妾は高等女學校に通學して居る者てすが可成十六七歳にて同御在學中の皆樣と末長く御交際あらん事を(鳥取市二階町四丁目十八番地松田千代子)○私は小學校を卒へたのみて本誌を愛讀いたして居りますが皆樣御交際の程を願ひます(駿河國駿東郡清水村徳倉四十一番地鈴木芳子)

懸賞品發送報告

第六號の誌上に發表した下名の當選諸嬢には六月五日附にてそれゞ賞品をお送りしました。

○石神喜惠子○島田たけ子○敏子○長井蓮月子○高橋白げら○小倉秋風子○中島縫子○江副ちかつる○小谷秀子○野島さと子○服部水仙子○桑原露子○橘いは子○林洗耳○峰岸眞佐子○岩谷綠子○内藤てつ子○大倉京子○小永井郁子○山田くに子○平谷たつゑ○永野吉子○小川蝶子○平田つみ子○森井せい子○北りん子○加藤芳子○鈴木雪江子○矢野靜子○山口京子○江副ちかつる○よし子○奥西ゑい子○清水發美子

▲別稱○大倉京子○なでしこ○太田樂子

▲發送未濟○八代、杉野みどり○若代、鈴女史

二號は至急住所姓名を御報知下さい。

剽竊詩文の注意

▲第八號の分　○札幌、杉山萩枝。評論文四等「愛」は本誌一卷十二號鹿兒島波江野紫子の「愛」を　○宮城縣、御園松子。書簡文四等「郭公を聞きに」は三十五年六月發行女學世界臨時增刊『ほとゝぎす』中青木京子の作を　○千葉縣、綾梅女史。和歌五等「よへ伐りし」は少年界五卷十一號山田喜三郎氏の作を、剽竊。

▲第六號の分　○奈良、藤田小百合子。俳句三等「春風や」は秀才文壇掲載中　内蝶二氏の作を　○伊勢、紅女。女子新聞中の「演藝だより」は本年二月中の『萬朝報』時文小品伊藤銀湖氏の「春野座の音樂會」を　○美作、春陽子。叙事文秀逸「夕食の團欒」は『中學文壇』百三十七號加藤淡浪氏の「夕食の團欒」を、何れも剽竊したり。

◎今回注意を與へられたる諸嬢は○天眼女○神戸、桃水○若狹、津田汐汀○安藝、賓岡萩村○上總、柴崎美村女○天の弊○河内、注意子○西村花楊女○靜岡縣、菊子、牛込、忠告女○和歌山、城北女○臺北、愛讀者、北總、花郷子。

新出版

▲『婦人論』此婦人論は所謂婦人論者が空想から割り出したものと違ひ一々事實を根據とした極く眞面目の著作です社會學、生理學、人類學、歷史等の上から婦人の本性を論究したものです暗黑時代から今日まで婦人の歷史的地位を述べ生理上には月經妊娠等を詳論し婦人の本務將來を論じ附錄として色情衛生論を添へてあります(定價五十錢神田表神保町光風館書店發兌)

文藝遊戲　涼み會　（懸賞課題）

土は乾き草の葉しほれて、人間の息も炎になりさうな熱暑九月の頃、本誌上て涼み會を催ふさうと思ひます、夕風そよぐ軒端に出てゝ、紙上の涼み會を開き、皆さんが一日の暑さを忘られるやうなら記者もありがたいのです、其方法は左の通り、何ぅぞ浴衣がけの手輕な身支度（即ち輕快な文章）て入らつしやい。

方法

涼み會には諸孃何れも御勝手に出て、演說、談語、朗讀などして頂きたい、面白さうな事なら何ても結構てすけれど、記者は假りに項目を左の通り定めました。

▲開會の辭（涼み會の、御挨拶を簡單に面白く述べて頂きたい。原稿は十行以內、以下凡て二十一字詰）

▲十行演說（有益なるもの、愛嬌あるもの、文學談、家庭談　通俗學藝談など何にても十行分ほどの演說）

▲お伽噺（皆さんの新作に限ります、成るべく二十行乃至三十行の間て）

▲朗讀（朗讀するに足るやうな唱歌、和歌、新體詩を涼み會のために新作して頂くのです）

▲幻燈（是れは新しく幻燈らしい繪を描いて頂くのてす、大きさ一寸五分四方。）

▲滑稽談（淸新なる一口噺、旅行中の失策談、奇談、怪談、何てもをかしいこと、十行以內）

▲福引（題と品物をお考へ下さい、其の中の秀逸なものを早速涼み會投稿の懸賞に應用して、五人に差上ます）

▲閉會の辭（四五行て極く手みじかに、會の終ることを告げて頂きたい）

以上、讀者諸孃が本紙を舞臺として自由に涼み會が開かれる仕組てす、何うか御贊成の諸孃方はどし〳〵山のやうに原稿をお送り下さい、此れを選拔する記者こそ餘り涼しくはないのですけれど、うまく出來ましたら澤山お褒めを願ひます（原稿〆切七月二十日）

注意、原稿の端に必ず「涼み會原稿」と書くこと。

新出版

▲『回光錄』　曩に『病間錄』を著はして其宗敎的信念の篤い事を天下に示された綱島梁川氏の文集て、『病間錄』の愛讀者は勿論、未だ梁川氏の熱誠なる思想に觸れざる者は、急いで本書を讀んで御覽なさい（定價一圓二十錢）

▲『俳諧一口噺』　高濱虛子君の作、紀行文、俳話、感想、寫生文など何れにも此れにも趣味があつて、讀みかけると捨てられない小册子です（定價五十錢）

▲『五十三次草鞋日記』　伊藤銀月君が親しく東海道の舊五十三次を旅行したその日記て、十三時間で行かれる道をわざ〳〵觀察の爲に歩いたのですから用意のかゝつた書物です（定價五十錢）

▲『靈か肉か』　木下尙江君の小說、宗敎家として文學者として一見地ある人の作、無意味に描かれた小說とは違ひます（定價四十錢）以上四種京橋區五郎兵衛町金尾文淵堂發兌）

▲『折れ櫛』　正岡秋子女史の短篇『明滅』以下數種を集めたもの、女流作家の力を窺ふ爲に一讀すべきものでせう（定價四十五錢　京橋區木挽町四也奈義書房發兌）

▲『男の聲』　生田葵山君の小說は何處か眼の着け處が他と異つた處があつて、新進とは言へない迄も、嘱望すべき作家です、此册子には近作數種を蒐む（定價六十五錢　京橋區中橋和泉町昭文社發兌）

▲『富と愛』　以前に紹介した『富と愛』の後篇て、作者は柳川春葉氏（定價七十錢同所發兌）

▲『島の秘密』　此れも以前に紹介した德田秋聲君の『黃金窟』の後篇てす（定價四十五錢牛込市ヶ谷田町吾妻書房發兌）

▲『草ぶち』　濱口白羊君の美文集て、家庭小品と題してあるだけに、皆優しい、美くしい、淸い文章ばかりて、女子諸君の敎科書以外、家に在りての讀物としては最もよろしい、美本（定價七十錢　麻布飯倉益世堂書店發兌）

雜報

▲立敎女學校の祝賀會　女學校として最も古い歷史のある築地明石町の同校では先月三日其創立三十年の盛大な紀念祝賀會があつた、餘興には生徒の英語劇「夢姬」歌劇「絃上」何れも巧みに演ぜられ、活人畫及外國婦人の唱歌は大喝采であつたら、當日殊に感じたのは此學校第一回の卒業生と云ふ四十格好の婦人達が生徒の仲に交つて愉快氣に語り合つて居たことである、猶當日の紀念撮影は本誌の口繪に揭げてあります。

▲南江堂樂器部　昨年の本誌上に小森松風氏と共に唱歌の樂譜を寄稿された高井鳳南氏は今回湯島切通しの上の南江堂樂器部に入つて精巧なる樂器の製作販賣に從事されるさうてす。

▲本年の氣候　未だ豫言は出來ませんが梅雨期に入りても氣候適順、麥作養蠶共に豐饒て、此分てゆけば今年も豐年てせう。

new for us.

すね。

A: It is a very new thing in Japan, but in Europe and America, for years summer conferences of this kind are held in many different parts and they are a great source of power and activity among women schools and colleges.

甲：日本では新しいものですが，歐米では，此宗教夏期講習會なるものは，永年間諸國に開設されて，女子の諸學校に於ては活動の大原力になつて居ります。

B: Is this the first time in Japan?

乙：日本は今年が第一回なのですか？

A: No, last year was the first time.

甲：否，昨年が初めてゞした。

B: Where is it to be held?

乙：何處に開會されますか？

A: In the Aoyama Girls School.

甲：東京青山學院內です。

B: Did many come last year?

乙：昨日は來會者が大勢でしたか？

A: About two hundred teachers and girls were there representing over thirty schools.

甲：二百人斗教員や學生の方々が御出席になり，三十以上の學校が代表されて居ました。

B: Were they all from Tokyo?

乙：皆東京からでしたか？

A: Not at all. We had deligates from Aomori to Nagasaki.

甲：決してそうではありません．青森から長崎までの代表者がありました。

B: When does it begin this year?

乙：何日開會ですか？

A: From the 12th to the 18th of July. We are hoping to have it vey successful.

甲：七月の十二日から十八日までゞす。何卒して大成功させ度いものと希望して居ります

B: Can one board in the school during the conference?

乙：會期中其學校に滯在が出來ますか？

A: Yes, the dormitory can accommodate about hundred fifty.

甲：ハイ，寄宿舍には百五十人計も這入られます。

the room where a visitor and a teacher are talking in an audible whisper. I must change my seat in order to work better and to concentrate my attention on what I read.

にも立てぬ.
到底其處もよい場所ぢやない, 最と勉强の出來そうな處に行き, 今讀んで居る者に心を注がなくてはならぬとて, 席を代へる.

Before I find a quiet nook, the morning papers and bright-colored magazines tempt me to refresh my dull spirits. Then, good-bye to my Psychology and Grammar, and I am beautifully entertained by "The Jogaku Sekai," "The Student," and "The Ladies Home Journal." The next place I find myself in, is a class-room with the timid expression of "unprepared" written on my penitent face.

靜な隅が見付かぬ中に, 新聞や, 表紙の綺麗な雜誌が. サー鈍い頭を少し休ませとよ誘惑する. 其處迄になると, 日科には最も告別して, 女學世界, 英文新誌, 貴女の友等で山々に面白く遊ばせて貰らつて居る. 次に自身は何處に居るかと云ふと, 實に後悔した顏に〔不準備〕と云ふ慚愧な記章を表はして, 敎室に在るのである。

Conference

講習會

A: Miss Ito, don't you like to attend the summer conference of the Young Women's Christian Association this year?

甲: 伊藤さん, 基督敎女子青年會の夏期講習會に, 今年は御出席になりませんか?

B: I do not know what it is.

乙: 何だか私は其を一向に存じません。

A: It is a conference where women teachers and students come together to study religion, and to strengthen the friendship between different schools.

甲: 其は諸學校の女敎員女子學生等が集合して, 宗敎を研究し, 且つ御互の友誼を增進せしむる爲に設けられたものです。

B: It must be something very

乙: 新らしく計企されたもので

And for tuneful voices fled,
And for Love, whose heart hath fled,
Ever, willow, willow!
(F. Hemans)

消えし美しの　　聲のため,
心砕きし　　　　情のため

柳よ柳,何時迄も。

The School Library

I do not see how one can manage to study in the crowded library. Every day I go there with firm determination not to waste my precious hour, but each time I fail. In the first place, the noise of the coming and going between classes in the library takes up at least twenty minutes, making the room the noisest place in the school. Naturally I can not work until the place is hushed once more to its peace and silence. As soon as I begin to settle to study, a scratchy pen of my neighbor annoys me; a hand stretched to take away the inkstand I am using, or a smothered laugh which shakes the whole length of my table disturb my easily distracted mind. Even the chapter on "Attention" in the Psychology has no effect on me, when my quick ear catches a masculine voice at the corner of

學校の讀書室

あの人込のする讀書室で，如何して勉強が出來るものかしら．毎日自分は貴重な時間を冗にしない様にと，大決心をして讀書室に出るが，毎度駄目になる．第一,級と級とのかわる時,讀書室に出入の混雜が．廿分は續く時は,何ども,彼の室が校中一番八ケ間敷塲所かと思ふ．自然と其處が又靜になる迄は，勉强も出來ない次第で，漸く落付いて，サー是から熱心に仕様と思ふと，隣席の者が引掻く様なペンの音が氣になる，自分が使つて居る共用インキ入を突然引たくる長い手や，誰かゞ笑を殺さうとして，却て卓中に及ぼす震動が，氣の散り易い處を尙更邪魔をする．參觀人と敎師とが，部室の一隅で，良く聞こゆる程な低音で,談話をされて居ると,心理學の「注意專心」の章も何の役

英文（七）

津田梅子閲　河井道子述

Willow Song

Willow! in thy breezy moan
I can hear a deeper tone;
Through thy leaves
comes whispering low
Faint sweet sounds of long ago—
Willow, sighing willow!

Many a mournful tale of old
Heart-sick love to thee hath told,
Gathering from thy golden
bough
Leaves to cool his burning
brow—
Willow, sighing willow!

Many a swan-like song* to thee
Hath been sung, thou gentle
tree;
Many a lute its last lament
Down thy moonlight stream
hath sent—
Willow, sighing wellow!

Therefore, wave and murmur on,
Sigh for sweet affections gone,

*Swan song. 傳說に鵠は死に臨んで美音に歌を歌ふと云ふ. 故に Swan song は死を意味す.

柳

柳！輕き吐息の　其中に
深き思を　我きゝぬ.
なが葉傳ひの　さゝやきは
昔を偲ぶ　美音なり,
柳よ歎く青柳よ。

燃ゆる愛情の　哀れさを
汝に告るは　幾度ぞ,
綠の糸を　手繰りて
熱き額に　押あてつ,
柳よ歎く青柳よ。

死出の歌をば　數知れず
なれや聞きけん　糸柳,
死別の琵琶の音　幾そ度
月澄む水に　流れけん,
柳よ歎く青柳よ。

然らば,靡きて談り,歎きませ,一
逝きし優しき　愛のため,

投書家並に愛讀諸君は此社告を見落す勿れ

[illegible]

選評大家（文學士沼波瓊音先生、廣津柳浪先生、河井醉茗先生 佐々木信綱先生、巖谷小波先生、山中古洞先生）

甲種

㊀敍事文 ㊁抒情文 ㊂評論文（各半紙廿四字三十行以内）

㊃短篇小說（半紙麁かな付廿四字六十行內） ㊄新體詩（半紙かな付十句以內）

乙種

㊅書翰文（半紙廿四字詰） 郵便用文 ㊆和歌（半紙一首） ㊇俳句 ㊈新歌謠（全上）

㊉短文（半紙かな付廿四字五行） ㊀新笑話（半紙半分十六字詰） ㊁圖畫（一寸の二寸風俗景色）（但日本紙の薄きもの）

別種

㊂文藝遊戲（半紙十六字詰）

㊃誌友倶樂部（半紙二十一字詰に認めらるべし）

「賞品は甲乙種以外のものを呈す」

▲都て各項とも標題は隨意▼

↓（每月十五日投稿〆切）↑

獎學懸賞品

（品目改正す）

甲種	第一等 貴金屬品類	價格金拾圓
	第二等 與服物類	價格金參圓
	第三等 小間物類	價格金八拾錢
	第四等 便利の圖書切符	金五拾錢
	第五等 同	金三拾錢
乙種	第一等 絹張洋傘	價格金五圓
	第二等 帶止、半襟類	價格金壹圓
	第三等 文房具類	價格金五拾錢
	第四等 便利の圖書切符	金貳拾錢
	第五等 同	金拾錢

○賞品は發表翌月五日に故障なき當選者へ懸賞品贈呈すべし、右當選者は賞品に差支へざる樣前以て住所氏名を明細に通知ありたし

▲嚴守すべき投書規定必一讀を要す

○投書は各欄とも決して政治的時事論に涉るべからず○投書は題の下に必ず住所姓名を記し假名は平假名を用ひ明瞭なるを要す○各種の投書は別に認むべし○封筒は『原稿在中』の文字を記し中には他の用事の文句を記すべからず○投書に圈點は一切施すを禁ず○投書は他人の作物を剽竊するを禁ず之を犯したる當選文は無効たるべし○投書は一切返附せず○投書は不足、未納税は一切受取らざるべし

定價

女子文壇（每月一回（一日發行）定期增刊年四回 二月、五月、八月、十一月の十五日發行）

一冊（大判百頁餘）	前金拾錢	郵税共前金拾壹錢
八冊（半年分定期增刊共）	前金七拾六錢	同 前金八拾四錢
十二冊（一年分定期增刊除）	前金壹圓八錢	同 前金壹圓廿錢
十六冊（一年分增刊共）	前金壹圓四拾四錢	同 前金壹圓六十錢

郵券代用は必ず壹割增

輕便の送金法

女子文壇社の郵便振替貯金口座は壹七貳九番です

○爲換料、通信料、書留料其他一文も入らず安全の送金法此の「拂込用紙」は何處の郵便局でも申出あれば何度でも無代で呉れます

明治四十年六月廿八日印刷
明治四十年七月一日發行

不許複製

無北海價 金拾錢

編輯兼發行者 東京市京橋區大鋸町十一番地 野口竹次郎

印刷者 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 石川金太郎

印刷所 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 合資會社 秀英舍

發行所 東京市京橋區大鋸町十、十一番地 電話〔本局六〇七番〕 女子文壇社

特約賣捌元○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、良明堂

廣告料金

特等	一等	普通
一頁三十圓	一頁廿五圓	一頁廿三圓
半頁……	半頁十三圓	半頁十二圓
一行……	一行……	一行四拾錢

〆切 每號十五日限

（坪內製本）

明治三十七年十一月十九日第三種郵便物認可

女子文壇最廉無比